

2001 年度卒業論文添付資料

「トルコ書簡集」全文訳

8596080

紺野 文

目次

ヨーロッパの旅（往路）

1. マー夫人へ（1716年8月3日/ロッテルダム）・・・1
2. ジェーン・スミス様（1716年8月5日/ハーグ）・・・2
3. サラ・チスウェル様（1716年8月13日/ナイメーヘン）・・・3
4. リッチ夫人へ（1716年8月16日/ケルン）・・・4
5. ブリストル夫人へ（1716年8月22日/ニュルンベルグ）・・・5
6. アン・ティスレスウェイト様（1716年8月30日/レーンブルグ）・・・6
7. マー夫人へ（1716年9月8日/ウィーン）・・・8
8. アレクサンダー・ポープ様（1716年9月14日/ウィーン）・・・10
9. マー夫人へ（1716年9月14日/ウィーン）・・・12
10. リッチ夫人へ（1716年9月20日/ウィーン）・・・15
11. . . 様（1716年9月26日/ウィーン）・・・17
12. . . 夫人へ（1716年10月1日/ウィーン）・・・19
- 13. . . 氏へ（1716年10月10日/ウィーン）・・・21**
14. マー夫人へ（1716年11月7日/プラハ）・・・23
15. マー夫人へ（1716年11月21日/ライプチヒ）・・・24
16. . . 夫人へ（1716年11月23日/ブランズウィック）・・・26
17. ブリストル夫人へ（1716年11月25日/ハノーヴァー）・・・27
18. リッチ夫人へ（1716年12月1日/ハノーヴァー）・・・28
19. マー夫人へ（1716年12月17日/ブランケンブルグ）・・・29
20. . . 夫人へ（1717年1月1日/ウィーン）・・・31
21. マー夫人へ（1717年1月16日/ウィーン）・・・32
22. アレクサンダー・ポープ様（1717年1月16日/ウィーン）・・・34
23. マー夫人へ（1717年1月30日/ペーテルヴァラド）・・・35
24. アレクサンダー・ポープ様（1717年2月12日/ベオグラード）・・・40

参考文献一覧

「『トルコ書簡集』」とその著者メアリーに関して

Jack Malcolm, *Lady Mary Wortley Montagu: The Turkish Embassy Letters*, London: William Pickering, 1993.

Dervla Murphy, *Embassy to Constantinople: The Travels of Lady Mary Wortley Montagu*. New York: New Amsterdam, 1988.

Richard Halsband, *The Complete Letters of Mary Wortley Montagu*, volume 1-3, Oxford: Oxford University Press, 1965-67.

Isobel Grundy, *Lady Mary Wortley Montagu: Selected Letters*, England: Penguin Books, 1997.

歴史・文化に関して

相島倫嘉 『イギリス文学の流れ』 南雲堂出版、1994年。

今井宏編 『世界歴史大系：イギリス史2』、山川出版社、1990。

三橋富治男 『オスマン・トルコ史論』 吉川弘文館、1966年。

新井政美 『トルコ近現代史』 みすず書房、2001年。

鈴木堇 『オスマン帝国』 講談社新書、1992年。

アレヴ・リトル・クルーティエ、篠原勝訳 『ハーレム：ヴェールに隠された世界』 河出書房新社、1991年。

中西久枝 『イスラムとヴェール』 晃洋書房、1996年。

山本達也 『トルコの民家』 丸善、1991年。

鈴木堇 『食はイスタンブルにあり』 NTT出版、1995年

杉田正明 『浴場から見たイスラーム文化』 山川出版社、1999年。

八尾師誠 『銭湯へ行こう・イスラム編』 TOTO出版、1993年。

Leslie P. Pierce, *The Imperial Harem*, New York: Oxford University Press, 1993.

Jennifer Scarce, *Women's Costume of the Near and Middle East*, London: Unwin Hyman, 1987.

Suraiya Faroqhi, *Subjects of the Sultan*, New York: I.B.Tauris Publisher, 2000.

Pars Tuğlacı, *Türkiye'de Kadın*, İstanbul: Cem Yayınevi, 1985.

İslam Ansiklopedisi, İstanbul: Milli Eğitim Basımevi, 1977.

İstanbul Ansiklopedisi, İstanbul: Türkiye Ekonomik ve Toplumsal vakfı, 1993.

地図・絵

図1, 3 - 12 : *Türkiye'de Kadın*

図2 : *Embassy to Constantinople: The Travels of Lady Mary Wortley Montagu*

1. マー夫人¹へ

1716年8月3日 ロッテルダムにて

大事な私の妹よ、私はすっかり得意になっています。なぜって、私たちが嵐という不運にもめげず、無事に海を渡りきったことをこうしてあなたに伝えることができるのですから。私たちの船の船長は、風のない時に船を出しましよと言ひ、海を渡ることなんてなんでもないかのように振舞っていました。が、二日間ゆっくりと航海をしているうちに、風がとても激しく吹いてきて船が揺れ、船員たちさえ立っていられないほどになってしまったのです。日曜日の夜には、もちろん私たちも皆ひどくゆさぶられたことは、言うまでもありません。

それにしても、私はあの船長ほど怯えきった男の人を、これまでに見たことがなかったと思います。私はといえば、全然怖くはなかったし、船酔いもしませんでした。でも、陸に上がるのが待ちきれなくて、ロッテルダムに着くまで船でじっと座っていられなかったのを白状しなければなりませんね。私は Helvoetsluy という小さな町行きの小さなボートに乗り込み、そこからブリエールまで馬車を雇ったのです。この小さなブリエールの街のきれいさに、私はとりこになってしまったけれど、ロッテルダムに着くと、全く新しい楽しい光景が私の目の前に現れました。道という道は、すべて幅の広い石で舗装されていて、本当にきれいに整えられていたのです。(それに比べたら、色とりどりの大理石の扉なんて、取るに足らないものだと言えるのではないのでしょうか?) きのう私は、上履きのまま、お忍びで街中を歩き回りましたが、驚くべきことに一箇所も泥がついていませんでした。オランダの女中たちは、私たちの女中が寢室を掃除するのよりももっと手をかけて、歩道を磨きたてているかのようです。この街は、活気のある、忙しそうなお様子の人々で溢れています。特別な市か何かがあるとは思えませんし、きっと毎日がこんな雰囲気なのでしょうね。でも、商売をするために、ここほど向いている場所がありえないのは確かだと思います。ロッテルダムには、7つの大きな運河があって、品物を運ぶ船が、家々の入り口までやってきます。お店や倉庫といったものはものすごく大きく、莫大な量の素晴らしい品物でいっぱいです。しかも、私たちがイギリスで見るとおおかたのものよりもはるかに安く、私は、まだ滞在期間もあるのだから焦って買うことはない、と自分自身に言い聞かせようとしています。ロッテルダムには、道に泥もなければ、物乞いも見かけられません。そういえば、ロンドンでは、あの嫌な手足の萎えた人たちがあまりにありふれていて、いちいち驚く人もいませんね。そして、だらしのない生活を送っている、売春婦や、仲間の男たちにたかられている人たちだっています。ここでは、普通の召使や、店で働く女性たちさえ、私たちイギリスの貴婦人たちよりもずっと美しくしています。さまざまな種類の美しい衣装を見ることも、また街の楽しみの1つでは

¹ 妹フランセス(Frances, Countess of Mar, 1690-1761)、マー伯爵(John Erskine, 1675-1732)の妻。マー伯はハノーヴァー派に反旗を翻しており、1715年には決起するが、失敗し、その後妻のフランセス共々大陸とイギリスを行ったり来たり生活を余儀なくされた。

ないでしょうか？（どの人も、自分の服装に合わせた髪形をしているのです。）

お分かりように、今のところ私は全然旅の苦情など言っていないですね。これからはこの調子で旅を続けられたなら、きっと私はこの旅の計画を悔やんだりはしないでしょう。この先もこうして、あなたに楽しんでもらえるような手紙を送れたなら、私のほうもまた嬉しく思うことでしょう。でも、私はもう1つ、こんな提案をしたいのです。あなたにわかりやすく生き生きとロッテルダムの様子を伝えるそのかわりに、あなたからロンドン中の便りを期待しているのです。きっとあなたは、私がずる賢い取引に持っていこうとしている、と思うでしょうね。でも、私があなただけの手紙を待っているのは、私がおならぬあなたの、愛情深い姉だからなのですよ…。

2. ジェーン・スミス² 様

1716年8月5日 ハーグにて

あなたにお伝えすることがあって、大急ぎで筆をとっています。あれほどあなたにおどかさされたのにもかかわらず、今のところ私はこの旅に大いに満足しているのです。私たちは、毎日のように短い距離を区切って移動するように気を配っているのです。長旅をしているというよりむしろ、楽しいパーティーに出席しているような気さえするのです。本当に、オランダを旅すること以上の楽しいことはありません。この国は、全体がまるで1つの大きな、美しい庭のようなのです。道はすべてきれいに舗装され、両側の薔薇がそこに美しい陰影を作り出し、行ったり来たりする船でいっぱい広い運河が、区画をなしています。街を何歩かあるいただけでも、まるで別荘にいるような気がするでしょうし、どの時間であっても驚くほど美しく、きっとあなたもこの町に魅了されてしまうでしょうね。今私のいる場所は、きっと世界中で最も素晴らしい町のうちの1つだと思います。ここには精巧に作られたいくつもの広場があって、（私が特に美しいと思うものは）うっそうと茂る高い木々が立っています。ハーグの中でも、ヴォルフト公園はまるでハイド・パークとセント・ジェームス公園を併せ持ったような場所で、上流階級の人々が、歩いたり馬車に乗ったりして、その雰囲気を楽しんでいます。もちろん、冷たい飲み物や、お菓子のお店なども並んでいて…。私は最も有名ないくつもの公園を見に出かけましたが、こうしてあなたには全部正直にありのままを伝えているのです。

きっと私の手紙は、もう十分に長くなりましたね。でも、最後に私は次のことをお伝えして、私のこの長い手紙を締めくくらなければいけません。あなたが私のために注文してくださったレースを送るといふ、あなたの親切なお言葉ですが、それには同意しかねます。きっと、私はあなたがロンドンで買ってくださるといふレースほど素敵なものを、きっと見つけられないと思いますけれど。もしあなたが何か東洋の品物をお求めなら、ロッテルダムはそんなちょっ

² Jane Smith (? -1730) メアリーの子供時代からの友人。後にウェールズ皇太子妃（後のジョージ2世妃）に仕える。

としたものを探すには打ってつけですし、私は心から喜んで、大事なあなたのお言いつけ通りにしたいと思っていますのですから…。

3. サラ・チスウェル³様

1716年8月13日 ナイメーヘンにて

私の大事なサラ、私は今でもとても残念に思っているのです。あなたが面倒な交渉ごとを嫌い、また体のことや安全のことを不安がるあまりに、私はあなたと一緒に楽しい旅ができず、またこの面白い旅をあなたが体験できなかったことを。私は、目新しい景色を見たり、どんな楽しい未来の希望を抱いても、そのたびごとに、あなたが不運にもこの機会をもてなかったことをふと思い、また心から悔やんでいるのです。もしあなたが私と一緒にこの街にいるのなら、あなたはきっと、ノッティンガムの友達のところを訪れているように感じるかもしれませんね。これほど似ている二つの街も他にありません。ここを流れるのはトレント川ではなくてマース川ですが、二つの街には、全く異なった様子はないのです。家々は、ノッティンガムの家と同じように、上に重なるように立ち並び、同じような形の木々や庭と混ざりあっています。人々がジュリアス・シーザーと呼ぶ塔は、ノッティンガム城と全く同じような様子なので、懐かしいノッティンガム城やら、なじみのあるトレント平原や、アポールトンなどを眺めていると思わざるを得ません。1つ違うのは、砦の様子です。戦争の技術に詳しい人なら誰でも、この砦をほめたたえます。私はといえば、そんな詳しいことは何一つ知りませんが、この城壁を散歩するのはとても楽しいのです。そこには Belvedere と呼ばれる塔があって、そこで人々はコーヒーやお茶を飲みながら、世界で最も素晴らしい眺めを楽しむことができます。散歩道はそれほど美しくはないのですが、木々が濃い陰をおとしています。それから、忘れずに、橋のことについても触れましょう。なぜかという、この橋を見て私はとても驚いたからです。その橋は、何百もの人が、馬や馬車に乗って通っても全く平気なのです。川の反対側にわたるのには、イギリスの2ペンス分が必要です。車も人々もとても静かな様子で渡る、それほどの数が1度に通っているようには見えません。

昨日私はフランスの教会へ行きましたが、そこで彼らの礼拝の様子をじっくりと観察してきました。私が見ていると、まず、1人の男の人が、幅広のつばのついた帽子をひょいとかぶるのです。これはまるであの喜劇「聖バルトロマイ⁴祭」のような雰囲気でした。それから、その人は何だかこっけいな動作を繰り返し、一方で皆にいろいろなことを話し、説教を続けていたのです。ところが、会衆は皆、非常に尊敬を持った様子でその人の話を聞いているので、その様子から、私は、彼がとても名声のある人物だということを知りました。

³ Sara Chiswell (? -1726) メアリーの子供時代からの友人。メアリーは、今回の旅行に同行してくれるように説得していたが、同意が得られなかった。

⁴ St.Bartholomew, 12使徒の1人。

おそらくはあなたは、私のこの人の説教に対する表現にうんざりしてきた頃でしょうね。でも牧師であるあなたのお兄さんが、イギリスの教会に味方してくれて、この脱線を許してくれると思います。ご存知のように、カルビン教徒に対して尊敬を欠いた話し方をするとすることは、教会について敬意を持って語ることに他なりませんからね。

さよなら、私の大事なサラ。私のことをいつも心にとめていてくださいね。もちろん私は決してあなたのことを忘れてたりしませんから。

4．リッチ夫人⁵へ

1716年8月16日 ケルンにて

さて、あなたがここ数日の私の疲れを思いやってくださるなら、私がこうして座って手紙を書くことの価値を、きっとわかっていただけるのではないかと思います。

私たちはナイメーヘンからここへ来るのには馬を雇いましたが、早馬ではなかったの、最初の晩はリーンプルグのととてもひどいところで泊まることになってしまいました。しかし、昨日私が疲れたというのは、実はこのことではありません。私たちがきっとケルンへ着けると思っているところ、ちょうどあと3時間ほどの場所にあるスタメルという小さな町で、馬が疲れたのか動けなくなり、私はまるであばら家のような場所で、着のみ着のまま一晩を過ごす羽目になってしまいました。寝床こそ確保したものの、あれほどあちこちから隙間風の入るような場所で、着替えをしようとは全く思えませんでした。私たちはこのひどい宿を夜明けとともに出発し、朝の6時にケルンへ着いたのです。着くや否や私はすぐに寝床へもぐりこみ、3時間ほどよく眠ると、街の珍しいものでも見に出かけようか、という気持ちをようやく取り戻すことが出来ました。この町の珍しいものとは、すなわち教会のことです。なぜって、ケルンの街はとても広いにもかかわらず、ほとんどの建物は古く、教会以外にあまり見る価値のあるものは見当たらないようですから。

その中で、とても丁寧に感じよく建てられている、イエズス会の教会が、一番素晴らしいように思われました。そこでは、若く美しいイエズス会士が、私が誰であるかも知らずに、気ままにお世辞を言ったり冗談を言ったりして、私を楽しませてくれました。ここのような教会を今まで見たことがなかったものですから、私はその祭壇や、聖人たちの像（どれもみな立派な銀です。）聖遺物の並べてあるガラスの箱などを眺めて大変感心しました。もっとも、汚らしい布や、汚れた歯の飾りとして、豊かなルビーやダイヤ、真珠が豊富に散りばめられているのには、心の中で文句を言わざるを得ませんでした。確かに、私が図々しくも聖ウルスラの真珠の首飾りが欲しい、などと思ったことは認めますが、もしかしたらそれは欲張りでも何でもないかもしれなせんね。それど

⁵ Elizabeth Griffin(1692-1773) Robert Rich 卿の妻で、時の宮廷でウェールズ皇太子妃(後のジョージ2世妃)について位の高い女性と言われていた。

ころか、私は彼女が飾り皿になった姿を想像し、あの聖クリストファーさえも大きな箱の中に陳列されている、そんな様子を思い浮かべていたのです。もちろん、11万もの乙女の頭蓋骨が、我が国の名誉として積み上げられているのを見て大いに満足しましたが、私の宗教に関する考え方はこのようなものなのです。私はかなり重要度の高い、何百もの聖遺物を見ましたが、旅行者の常のように、いちいち名前を書き付けていくのはやめにしましょう。きっとあごの骨だの、虫食いの板だのに1つ1つつけられた名前には、ご興味がないでしょうから。

さて、そろそろ私は夕食に行かねばなりません。そして、素晴らしいロレーヌワインでも飲んであなたの健康を祝福しましょう。このロレーヌワインというのは、きっとロンドンでブルゴーニュワインと呼んでいるものと全く同じであると思います。

5. ブリストル夫人⁶へ

1716年8月22日 ニュルンベルグにて

大急ぎで5日間旅を続けてきて、こうして他にもない大切なブリストル夫人へお手紙を書いているのは、旅の様子を知らせるように、というあなたのお優しい心遣いのためなのです。

私たちはすでに、この広い神聖ローマ帝国をほとんど旅してきました。私はケルンやフランクフルト、ウェルツブルグ、そしてここニュルンベルグでも素晴らしいたくさんものを見てきましたが、その中で、自治区と神聖ローマの小さな公国のように絶対君主に治められている町との違いに気づかざるを得ませんでした。前者では、商売や豊かさの雰囲気は漂っています。道はきれいに舗装されて人々が歩き回り、その人々といったら皆身綺麗にしていますし、お店はたくさんの品物でいっぱい、社会全体がきれいで陽気な感じがするのです。もう一方では、卑しい感じのはでな服装の人々がおり、整えられていない狭い道は人通りが多くなく、民衆の半分は施しを求めています。私には、一方がまるで美しいオランダ人の妻の姿に思われました。そして、もう一方はといえば、貧しさと不道徳の中で生きているかのようです。例えば、よれた髪飾りをつけてお化粧を施し、にぶい色のレースの靴と、ぼろぼろの下着を身につけた、あの町女のような感じなのです。

この町には贅沢取締法があって、人々の階級を衣服の色でわけ、他の町をすっかりだめにしてしまった過剰な贅沢を防いでいます。そのため、よそ者から見ると、私たちの衣服よりも、ずっと好ましく見えます。カンブライ大司教がこの法律を発布したあとのことを考えると、正直に告白しますと、この法律が世界の他の場所でも適用されたらなあと思うのです。多くの場合、豪華な服装の価値を公平に考えてみると、その服がもたらす楽しさというのは、周りからのねたみやため息であるのは言うまでもありません。(着ている側にとっては、しばしばこれが一番魅力的なものとなりますね。)また、友達を喜ばしたり、ラ

⁶ Elizabeth Felton(1676-1741) ブリストル伯爵 (John Hervey) の2人目の妻。

イバルを悔しがらせたりする誘惑を抑えるためには、たぐい稀な分別が必要だと言わねばなりません。その誘惑に負け、若い人たちが愚かな過ちをしてしまうのはごく自然なことですし、そのうちに、他の多くの場合に必要となるお金が足らなくなってしまうのです。どれほど多くの人々が皆に不幸をもたらすような贅沢を好み、どうしてもまかない切れぬ負債を背負い、しまいには名誉を失ってしまうほどの無駄な投資をしながらも、世界に君臨してきたことでしょうか！特別な色だとか、布の形などを決めた法律によって、人々が尊敬を払う対象が決められるとしたら、とうていそんなことは起こらなかったでしょうに。ここにいると、こんなとても沈んだ思いが、次から次へと私に浮かんでくるのです。

さて、ニュルンベルグの街でローマカトリックの教会で聖遺物を見て楽しんだことでも書いて、早くさっきの悲しげな話をあなたの頭から追い払いましょう。ルター派の者たちは、このローマカトリックの愚かさにも多少なりともとりつかれています。こちらの主だった教会のいくつかで見学しましたが、美しい宝石で飾られた十字架が置かれ、人々が厳かに語ってくれたところによると、その檜の先端は、我々の救世主を貫いたのと同じものであるということでした。でも、私は、このあたりでまだ許されているある小さなローマカトリック式の教会で、一番楽しい時を過ごしました。このあたりの聖職者たちはあまり裕福ではないため、他のところほど飾りつけることができないようでしたが、派手な飾りはないものの、祭壇にある救世主の銅像を、とてもきれいにかつらで飾りつけ、美しく見せていたのです。きっとあなたはこのくだりを読んで、はたして本当なのかとお疑いになることでしょうね。私の言葉では伝えきれないことも多く、まだこの旅行記は十分とは言えないのです。私はこの手紙をすべて心から、私の大事なプリストル夫人、あなたのために、書いているのです……。

6. アン・ティスレスウェイト⁷様

1716年8月30日 レーンブルグ⁸にて

私がちょうどロンドンを発つ1日前、あなたにお会いできたのは、本当に大きな喜びでした。その時にあなたから頂いたお言葉や、ためになるご忠告の数々に、本当に感謝しています。そのおかげもあって、今のところ大きな問題もなく、こうして順調に旅を進めていると言えるのですから。実は、私はこの町で、風邪をひいて数日滞在することになったのですが、それは全く問題ではありません。そのおかげで、私はこの町の珍しいものを見て歩く時間が持てましたし、貴婦人たちと知り合いになる機会も得られました。彼女たちは皆、ご丁寧にもお見舞いにいらしてくれましたが、中でもハノーヴァーからの国王の外交官夫人であるリスベルグ夫人は殊更良い方でした。彼女は私をあちこちの集まりに連れて行ってくれ、街中で一番素晴らしいとも言えるご自宅で、私を大いに

⁷ Anne Thistlethwayte (1669-?) ウェストディーンに住む、メアリーの友人。

⁸ Ratisbon, 神聖ローマ帝国議会の置かれた場所。

もてなしてくださったのです。ご存知のように、ここにいる貴族たちは皆、違った州からの外交官たちです。ここには本当に数多くの外交官がいますが、あれほど礼儀作法にやかましくなかったなら、一緒にもっと楽しい時を過ごしていたことでしょう。出来る限りのこの町を楽しく、快適にする計画に参加したり、この小さな社会を改革していこうとしたりするかわりに、外交官たちは果てしない口論を楽しんでいるように見えます。議論を後任にそのまま残し、まるでそうした口論を永久に続かせようと気を遣っているかのようです。レーンブルグへ来ている外交官は、この仕事の特権と同時に、常に半ダースもの言い争いをも受け取っているようなものでしょう。

残念ながら、こんなひどい不調和から女性たちも逃れることはできないようです。この大変な仲たがいのために、街は家族の数ほどにたくさんの党派に分かれてしまっていますし、人々は、ちょっとうぬぼれを抑えて仲良く付き合うよりも、集まりの晩に1人淋しく腰掛けて、屈辱を味わうほうがましだと思っているかのようです。私は、ここに来てまだ1週間くらいです。しかし、それにもかかわらず、私はどの人々からも、隣人に対する苦情や、その隣人たちがどれほど間違っているかという話を聞かされました。人々は、こうして私を自分の側に引き入れようとしているのでしょうか。私には、中立の立場をとるのが、最も分別のある行為であるように思われます。もちろん、個々の人々の中にいたら、そう長くはもたないでしょうが。きっと人々の言い争いはどんどん勢いを増して、自分の敵を訪問するような者に対して親切になんてしなくなるでしょうね。この永久に続きそうな議論のよりどころは、全く称号をもらえるかどうかであり、それはまたとても難しいところなのですが、誰にも与えられないことでしょう。私はといえば、皆のためにといて誰にでも称号が与えられるように、と忠告することには耐えられそうにありません。そんなことをしたら、誰もが伯爵などと呼ばれるようになってしまおうでしょうし。ところが、まさにそのような話をしたところ、大変な怒りを持って迎えられたのです。そうして私は、自分は意地悪だったと思いました。他にほとんどそれほどおもしろい娯楽、楽しみがないこの小さな街で、議論の楽しみを人々から奪おうとしたのですから。この平和的な性分のせいで、私自身ひどい立場に置かれているのは十分承知です。私が高慢ちきなずうずうしい女として人々の間でささやかれていることや、まるで、議論するに値する人なんて誰もいないかのように、生意気にも誰にでも礼儀正しく振舞ってきたことなど、いろいろ噂されているのです。もし私が数日のうちに旅をすすめるつもりがないのなら、私は自分の振る舞いを変えざるを得なくなるでしょう。

私はここでもいろいろな教会を見に出かけ、聖遺物に手を触れるお許しもいただきました。このようなお許しは、外国では、これまで得たことのないものでした。この特権のおかげで、私は聖遺物や、像のまわりを取り囲んでいるルビーやエメラルドのほとんどが偽物だということを、見て取る機会をもてたのです。きっと他の教会でもこうなのだ、と私は信じて疑っていません。しかし、教会にいる人々は、この石で飾られた聖母マリアや、その他数多くの十字架が、

皇帝や身分の高い王たちからの贈り物であったと言います。私も、その宝石が一級品の価値ある品物だったとは思いますが、でもおそらく素晴らしき先人たちが、もともとういていた本物の宝石を他に使ったほうがいいと判断したのでしょう。そして今や、人々はガラスのかけらで十分に満足しているのです。この聖遺物のうち、人々は私に金で飾られた巨大なつめを見せてくれました。人々はそれをグリフィン⁹のつめだと言っています。私はつめを見せてくれた僧侶に、グリフィンは聖者なのかどうか尋ねざるを得ませんでした。この質問をすると、僧侶のまじめな態度が崩れそうでしたが、ただ物珍しさからこのつめを保管しているのだと答えました。それはそうと、私は巨大な銀でできた三位一体の像には大いにあきれました。その像では、天のお父さまはひざまである長いひげをたくわえ、三重の冠を頂いた汚い老いぼれの姿で、腕には十字架を背負ったイエス・キリストを抱き、聖霊はといえば、その上を舞っている鳩の姿なのです。

さて、今リスベルグ夫人が会合に私を呼びにやってきました。そうして、とても唐突に、あなたにこう伝えるようにと言っています。私からどうぞよろしく、と。

7. マー夫人へ

1716年9月8日 ウィーンにて

大事な妹よ、私は今無事にウィーンへ着きました。運良く、疲労からくる体調不良に悩まされることもなく、さらに有難いことに私の子供も元気です。私たちはレーンブルグからとても快適に川を旅し、人々が「木の家」と呼ぶあの小さな船に乗ってドナウ川を下りました。その船には宮殿や、寝室の暖房、台所など便利なものが全部あるのです。船をこぐのは12人の男たちで、信じられないほど速く進んで行きます。そのため、広大な眺めを楽しんでいるかと思うと、数時間のうちに、今度は豪華なお屋敷とロマンチックな郊外の風景を併せ持つ、人のたくさんいる街を見て楽しむようになるのです。商業の中心からは少し離れており、ちょうどドナウ川の川岸に位置していて、ぶどうの木々やとうもろこしの畑、山々や昔のお城の遺跡などさまざまなものにとり囲まれて、本当に魅力的な郊外の風景なのです。私は、ウィーンが包囲された際¹⁰に宮廷が退却してきたことで有名な、パッサウとリンツを見ることもできました。

ウィーンは、カール6世¹¹の住む場所として崇められていますが、期待にはずれて、私の想像と相容れるものではありませんでした。通りはとても細く、あまりにも狭いために美しい建物の入り口を見ることさえできやしません。実のところ、この美しい建物は見るに値するもので、本当に素晴らしく、すべてがきれいな白い石で作られており、非常に高さがあるのですが。町は、そこに

⁹ 頭と羽が鷲で、体がライオンの怪物。

¹⁰ 1683年、オスマン帝国による2度目のウィーン包囲。

¹¹ Charles (1685-1740)神聖ローマ帝国皇帝。

住みたいと思う人々の数に対してあまりに小さいものですから、建築家たちはこの不運を何とかしようと、町を積み重ねるが如く慌てて作ったようで、ほとんどの家は5階建てで、中には6階建てのものさえあります。ご想像通り、とても通りが狭いために、上のほうの部屋は非常に暗くなります。そして、私には何よりも我慢できないことですが、5、6家族一緒に住んでいない家というのがほとんどないのです。貴婦人たちのアパートや州の長官の住むところでさえ、仕立屋だか靴屋だかの壁で仕切られています。2フロア以上を持っていて、そのうち1つを自分たち用に、もうひとつを召使用に、としている人なんて、私はここで見たことがありません。自分たちの家を持っている人は、誰にでも貸し出してしまうので、このようにすべてが石造りの美しい場所も、通りと同じように外側はたいてい汚れてしまうのです。しかし、あなたがもしウィーンへやってきたなら、きっとアパートの中ほど素晴らしく豪華なものはないと思うことでしょうし、またそれも事実です。アパートは普通8部屋から10部屋の大きな部屋からなり、扉や窓は金で豊かな彫り物が施され、そこにある家具といえば、他の国なら王様の宮殿でさえめったに見られないような、素晴らしいものです。例えば、ブリュッセル産の最高級の織物や、銀の枠の非常に大きな姿見、中国製の机に椅子、寝台、天蓋。そして窓にかかるカーテンは最高級のジェノバ産ダマスク織やベルベットで、しかも全部に金のレースがついていて、はでに絵で刺繍がなされているのです。他にも、陶器の花瓶などがあり、ほとんどの部屋は大きなクリスタルシャンデリアがぶら下がっています。

もうすでに、私はウィーンの上流階級の人々から、お食事の誘いをいただくという栄誉を受けました。公平に言っても、私は、お食事の素晴らしさとその人の家具の素晴らしさは引き合うと思うのです。私は何度も、銀食器で出される50皿の肉料理でのおもてなしを受けました。もちろんその後にはそれに見合ったデザートが、最高級の陶器で出てきます。しかしそれ以上に、このワインの豊富さこそ、最も驚くべきものです。お客のナプキンの横にあるお皿に、いつもリストが出されるので、私は何度か数えてみましたが、およそ18もの違った種類の、どれも申し分ない立派なワインでした。

私は昨日シェーンボルン伯爵¹²のところへお食事に招かれました。正直に言って、このウィーン宮廷の建築群ほど完璧に素晴らしい場所を見たことがありません。とても広く、美しい数々の宮殿からなり、もし皇帝がウィーンの建物全部をこれほど美しくするお許しを下さるのなら、きっと皇帝はヨーロッパ1の、大きくて美しい町を支配していることになるでしょう。シェーンボルン伯爵のお屋敷は、中でも一番豪華です。家具はすべて豊かな織物で装飾が施され、これ以上ないほど豪華で素晴らしく、珊瑚や真珠などの珍しいもので溢れた回廊など、言うまでもありません。さらに、金や彫刻、絵画、石膏や象牙などで作られた最上の像や陶磁器、金の鉢に植え付けられたオレンジやレモンの木などが、家中にところ狭しと溢れています。お食事は完璧なお味と順序で出され、

¹² Count von Shonborn (Friederich Karl, 1674-1746)

何よりも、伯爵のユーモアのある様子で食卓はいつそう楽しいものとなりました。私はまだ宮殿へ目どおりしていませんが、それは私の正装用ドレスの出来上がりを待っているためなのです。むろん、そのドレスなしでは王妃¹³を訪問するわけにはいきません。でも、私は、数々の国でその美しさに誉れの高い王妃にお会いするのが待ちきれないのです。本当に、大事な妹のあなたへ、私の本当の気持ちを伝えるのは、私の特別な喜びなのですよ。

8 . アレクサンダー・ポープ¹⁴ 様

1716年9月14日 ウィーンにて

私に対するこれまでの数々のお気遣いに対して、心から感謝いたします、などと厳粛な様子で申し上げたら、きっとあなたはお笑いになるでしょうね。でも、私はあなたがおっしゃってくれた数々を、親しみをこめた冗談やからかいの類だと受け取っていますし、おそらくそれがあなたの真意でしょうね。今まで、これほどあなたとの友情を信じようと強く思ったことはないのです(今の気持ちの半分も、思ったことがないほどです。) 友情を不可能にするはずの距離さえも、私があなたを信じるのに一役買っています。どうやら私は、どんな局面においても(おそらく他の私の本能と同様に)強く奇跡を信じる傾向があるのだな、ということ最近発見いたしました。でも、決して、私がこのあたりのローマカトリックの国に強く影響されているなんて、思わないでくださいね。

実は、先週の日曜は、オペラに行くのに、イギリス教会とはまるで違ったところへ出かけたのですが。そのオペラというのは、ファヴォリテン庭園で演じられたのです。私はオペラを大変楽しみましたので、行ったのを全然悔やんではいません。これほど壮大なものは他にはありませんし、この装飾と衣装のため皇帝は 30 万ポンドを投じたと言う話も、とても信憑性があると思います。舞台はとても大きくて、広い運河の上に作られています。さらに、第二幕ではその運河が二つの部分に分かれて水が現れ、すぐに水上の他の場所から、海軍の戦いを表現している、黄金の二つの船団が登場したのです。この光景の美しさは想像を絶するものだ、と私は大変感心したのですが、他のどの場面をとっても完璧な素晴らしさの舞台でした。このオペラの筋はアルシナの誘惑物語¹⁵です。この物語には本当にたくさんの種類の道具が必要で、場面も良く変わるので、すべて驚くべき速さで行われています。劇場は非常に大きいので、隅から隅まで目を行き届かせ、最大で 108 の数にのぼる豪華な衣装を見るのは、かなり大変なことだと思います。これほどの豪華な装飾のある舞台は他にないでしょうが、実は、屋外の劇場に座っているすべての貴婦人たちにとって、大変

¹³ Elisabeth Christine (1691-1750) Duke of Brunswick Wölffenbittel の娘で、1708 年カール 6 世と結婚。

¹⁴ Alexander Pope(1688-1744) 風刺詩人。『人間論』(An Essay on Man, 1733-34) 『愚者列伝』(The Dunciad, 1728-43) などで、世間に対する大変鋭い風刺を行った、理性派文学の完成者。古代ローマの作品の翻訳にも力を尽くす。幼い頃に大病をし、生涯不具と病弱に悩んだという。

¹⁵ Johann Josef Fux(1660-1741) 作、 Angelica Vincitrice di Alcina.

不都合なことがありました。そこには皇帝の家族用にたった一つの天蓋しかないのですが、舞台の最初の夜、突然の雨が降り出しました。当然オペラは打ち切られました。人々の群れは大混乱で押し合いへし合い、私などもう少しで押しつぶされて死にそうなほどだったのです。

この国のオペラは非常に素晴らしいものではありませんが、それに対して喜劇のほうはというと、私はあまり期待していませんでした。ウィーンにはたった一つしか劇場がありません。私は、ほんの気まぐれで、ある日そこへ喜劇を見に行くことにしたのです。行ってみると、その日の演目がアムビトリオン¹⁶の物語だとわかり、私は大変嬉しく思いました。この物語は既にラテン、フランス、イギリスの詩人に取り上げられている主題なので¹⁷、オーストリアの人々がこれをどう料理するのか、とても興味が湧いたからです。私は物語の大筋が把握できる程度には、この国の言葉を知っていますし、その上、一つ一つの言葉を丁寧にご説明してくれるご夫人と一緒にしました。しっかりと見るためには、4人分のボックス席を、自分たち用にとっておきます。ボックス席の定価は、ダカット金貨一枚です。私は席が少々暗くて狭いと思いましたが、この喜劇の出来はその欠陥を補ってあまりあるものだったと言わねばなりません。私は、これほど笑ったことがありません！この物語はゼウスが雲の隙間からのぞき見をして、アルクメネに恋するところから始まっています。終わりはヘラクレスの誕生の場面です。一番楽しいところと言えば、ゼウスが己の姿を変えていくところでした。本来はゼウスがアムビトリオンの姿になって、まっすぐアルクメネのところへ飛んでいくのですが、ドライデン氏ときたら余計なことをして、まずはゼウスをアムビトリオンの仕立屋のところへ向かわせます。そこで飾りつきのコートを騙し取り、さらに金貨しからはお金を、ユダヤ人からはダイヤモンドの指輪を盗み取ります。最後には、アムビトリオンの名前で豪華な食事の予約までしてしまうのです。この喜劇の面白さは、最後に哀れなアンビトリオンが皆から責められるところにあります。実はメルクリウス(マーキュリー)が使いの者を同じように使っています。しかし、私はこの詩人が劇にきちんとしていない言葉を散りばめただけでなく、普段は詐欺師からさえも受けられないような下品な言葉を使っていることは、ちょっとどうかと思います。また2人の使いの者が、我々上流階級の座っている席のまん前でも、同じようにズボンを下げて見せたのですが、それはお楽しみと受け取られたようでしたし、どうやら有名な場面であるのでしょね。でも、私は、ちょうどコリエール氏¹⁸の真面目な考察と結びつけて、終わろうと思います。さよならの美辞麗句はここでは申し上げません。訪問がこれほど長くなった時には、部屋を去る

¹⁶ ゼウスとの間にヘラクレスを産んだ女性アルクメネ (Alcmene) の本当の夫(Amphitruon)。

¹⁷ ギリシャ時代の詩人、Maccus Plaatas (BC254-184) が取り上げ、この頃には 1688 年モリエール(Molière, 本名 Jean Batiste Poquelin, 1622-73) フランスの喜劇作家・俳優)、1691 年にはドライデン (John Dryden, 1631-1700, イギリスの詩人・劇作家・批評家) が物語化した。この日は、ドライデンの物語にもとづいて演じられたと思われる。

¹⁸ Jeremy Collier(1650-1726) 復古劇に対する厳しい批評を行っていたカトリックの僧侶。

ときの言葉が無礼であっても礼儀正しくあっても、きっとたいして変わりはないのですから。

9. マー夫人へ

1716年9月14日 ウィーンにて

ついこの前ずいぶん長い手紙を書いて、あなたをうんざりさせたばかりですが、お約束通り、私が初めて宮廷に上がった時の様子をお知らせします。ある儀式に出席するために、私は窮屈な正装用のドレスを着て、ヴェールや、さらにその他の装飾品を身に着けました。こちらのドレスは非常に動きにくいものなのですが、確かに肩や首の線を美しく見せてくれるのです。ここで、ウィーンの流行について、少しお話ししましょう。全く、ここの流行は、あなたの想像をはるかに越えて、ものの道理や常識に反したぞっとするようなものです。人々は頭に1ヤードくらいの紗の織物を3、4回ぐるぐると巻きつけていて、それをさらに何ヤードものリボンで補強しています。芯になるのは、皆が「ブール」と呼ぶもので、イギリスで乳搾りの娘たちが、バケツを固定するのに使うような形をしています。その4倍くらい大きいのです。こんなもので皆髪を覆っているのだから、頭はばかばかしく巨大になります。この髪型をさらに見栄え良く見せようと、数多くの飾りがつけられ、さらにたくさんのダイヤや真珠、他の緑や黄色の石のついたヘアピンが飾られます。(そのヘアピンというのがまた巨大で、髪から2、3インチははみ出して突き刺さっているのです。)きっと、この髪型をまっすぐ支えるのには、五月祭に花輪をつけて踊る時のように、たいへんな技術や芸術性が要求されるのでしょね。ここで用いられている鯨の骨のペチコートは、私たちのものよりも幅が数ヤード広く、数エーカーにわたって床を覆っています。この愚かな衣装のせいで、全能の神が誰にも与えた人間本来の醜さが、いっそう強調されているのです。その様子は、おそらく容易に想像できるでしょう？お美しい王妃すら、いくらかこのばかげた流行に従っているかのようです。たぶん、人々は永遠にこの衣装を着るのをやめようとはしないでしょ。

私は儀式の前に、特別に30分間の謁見を許されました。その後、他の方たちが入ることになっていたのです。王妃と顔を合わせ、私は完全に目を奪われてしまいました。王妃の姿形が整っていてどれほどお美しいか、到底言い表すことができません。王妃の目は大きくはないものの優しい輝きに満ちていますし、誰よりも整った顔立ちで、形のよいお鼻と額をお持ちです。また、口元と云ったら、心を動かされるほど、それこそ他の部分の1万倍も魅力的なのです。王妃が微笑むと、人に崇拜の念を起こさせるような美しさと優しさが現れます。髪の毛もまたとても豊かで美しいのですが、それ以上に、王妃の人となりと云ったら！あなたに分かりやすいように、正しく落ち着いて、そして詩的に話すように努めましょう。詩人たちは皆、女神ユノのようだとか、ビーナスの雰囲気を持っているとか、そんな風に言いましたが、そうではありません。まるで、美の3女神が王妃においてひとつに調和しているかのようなのです。メデ

イチ家の有名な銅像においてでさえ、あれほど繊細な美の融合は見られません。また、王妃の手や首の美しさには、手を加える必要がないほどなのです。私はこれまで、世の中に完璧なものなどないと固く信じていました。が、そうではないのです。私は、自分の身分が低く、王妃の手にキスしては失礼にあたると思ったのですが、王妃に謁見をする人は皆、入る時と帰る際に、敬意を表すのに、その手にキスをしているのでした。他の女性たちが入ってくると、王妃はトランプ遊びをするのに、腰をおろされました。私は、そのゲームを一度も見たことがなかったため、遊び方が分からなかったのですが、王妃は私を右隣に座らせ、非常に自然な優雅さで、私にいろいろとお話をしてくださいました。私は、そのうち男性が謁見しに入ってくるのではと思っていたのですが、この客間は、イギリスのとはまるで違うのです。男性はここに入ることができません。ただ年老いた宮内長官が入ってきては、「王様がいらっしゃいます」などということをお王妃に告げるのみです。皇帝陛下は、非常にご親切に私とお話してくださいましたが、他の女性たちとはお話をせず、とても格式ばった真面目で厳格な雰囲気をお漂わせていました。前皇帝¹⁹の妻であるアメリカ妃²⁰も、またこの晩王妃に挨拶するためにお出ましになりました。アメリカ妃は、娘である、とてもかわいらしい2人の皇女を従えていました。両陛下は、立ち上がって扉のところでアメリカ妃を迎えられ、その後アメリカ妃は王妃の横の、肘掛付きの椅子に座られたのです。お夕食の際も同様で、その後男性たちが謁見にみえました。2人の皇女といえば、後ろのほうで、普通の椅子に座って控えていました。お夕食は完璧なもので、どのお料理も、王妃に仕えている、身分の高い12人の若い官女がお給仕をしました。官女たちというのは、お給料はもらっていないのですが、宮廷の中に部屋を与えられ、ほとんどその中だけで生活しています。官女たちが町で公の場に姿を現すことは、まずありません。ただ、王妃が官女仲間の結婚式にご出席なさる際の、付き添いを務める場合だけは別です。たいてい、王妃は結婚する官女に、ダイヤモンドで飾られたご自身の絵を贈るのです。官女の中でも高い位の3人は「鍵係」と呼ばれ、金色の鍵を身につけています。いろいろな習慣の中で、私が最も気に入ったのは、彼女たちが王妃のもとを離れても、生きている限りは、一年に一度の王妃のお誕生日には、何か贈り物をしなければならないというものでした。他に、王妃には、独身の女性で、いわゆる「大奥様」と呼ばれる女性が仕えています。そのお役目にあたるのは、実はたいてい上流階級の年老いた未亡人で、同時に御寝所係りであり、若い官女たちの母親役をも引き受けています。衣装係はと言えば、イギリス宮廷におけるものとはずいぶん違った形で、直属の御寝所係以上に敬われているのです。

翌日、私は皇太后²¹に謁見を許されました。皇太后様はとても素晴らしい方な

¹⁹ ヨーゼフ 1 世 (Emperor Joseph, 1678 - 1711)

²⁰ Wilhelmine Amalie (1673 - 1742) 1699 年ヨセフ 1 世と結婚。

²¹ カール 6 世の母、皇太后 Eleonore Magdalene (1655-1720)

のですが、お亡くなりになった方々のために、全く報いられないような苦行を絶えずなさっており、それをご自分で非常に誇りに思っているようでした。皇太后様にも王妃と同じ数だけの官女がいて、官女たちは色とりどりの衣装を着ることが許されています。ところが、皇太后ご自身は絶えず黒を着て嘆いているのです。でも、たとえご自身の子供のためであっても、こんなに嘆いたらひどく憂鬱になってしまうことでしょう。ご自身の衣装に麻の布地は見られず、そのかわりいたるところ黒の布で、お耳やお顔の横は、同じような黒い布で覆われています。その黒い布の陰からちらりと見える表情はといえば、まるでさらし首にかけられているかのような様子なのです。ここで未亡人たちというものはこのような衣服を身に付けるものらしく、真っ黒な布で額を覆い、厳粛な様子の喪服を着たまま、ためらうことなく公の場にお出かけになるのです。

さらに次の日、私はアメリア妃にお会いすることになっていて、町から半マイルほど離れたアメリア妃のお屋敷に向かいました。そこで私は、全く新しい光景に出くわしたのです。(実際は、こちらの宮廷ではごく普通に行われる娯楽だったようですが。)妃は、お庭の小道の奥に作られた小さな玉座に座られていました。その横には、2人の若い皇女を先頭に、美しく着飾った若い女性たちが二手に分かれて立っています。皆手に手に小さな美しい銃を持ち、彼女たちからいくらか離れたところに、射撃の的となる卵型の3つの絵が置かれていました。一つ目は、ブルゴーニュワインの祝杯を捧げ持っているキューピッドで、‘この場で勇敢になるのはとても簡単’と銘打ってありました。二つ目は、運命の女神が花輪を手に持っていて、銘は‘運命を好む女性へ’というもの。3つめといえば、先に月桂樹の冠かかっている剣で、‘征服することは恥なのではない’と銘打たれていました。王妃の傍には、金のトロフィーと色とりどりの花を小さな針金でとめたような冠がありました。他の賞品としては、素晴らしいトルコ製のハンカチやケープ、リボン、レースなどがぶら下げられていたのです。王妃は、ご自身も賞をもらわれたのですが、それは金のかぎたばこの箱に入った、ダイヤモンドの散りばめである美しいルビーの指輪でした。次に、さまざまな宝石で飾られた小さなキューピッドがあり、同様に素晴らしい陶器の花瓶、一級品の中国製陶器が金の箱に入ったもの、などがありました。ウィーン中の上流階級の男性たちが見物に来ていたのですが、競技に参加するのが許されるのは、女性のみなのです。結果、娘の皇女が、一等賞をもらわれました。私はといえば、この遊びを大変に楽しく見物していたのです。もし私がヴェルギリウス²²ほど上手に表現できるとしたら、きっとあの冒険物語の中で賞をかけて射撃をする場面のように、この場面を描けたかもしれません。こうした娯楽は、どうやら皇帝のお気に入りらしく、遊びや祝宴のない1週間というのは、ほとんどないようです。この遊びのおかげで、若い女性たちが要塞を守

²² [羅]Vergilius Maro Publius [英]Virgil (AD 70-19)ローマ第一の詩人。田園風景の情景の美しさと、その抒情の巧みさは、ラテン文学第一と言われる。メアリーはポーブと共同で、詩を翻訳したこともあった。

る技術を身につけられるとかで、私が恐る恐る銃を扱う様子を見て、皆大いに笑っていました。

私の大事な妹よ、ここで突然手紙を終わらせるのをどうか許してくださいね。私にはわかるのです。あなたは私の手紙が終わらないのではないかと心配し始めた頃でしょうから。

10. リッチ夫人へ

1716年9月20日 ウィーンにて

あなたが送ってくださった長い、お優しいお手紙を受け取って、私は大変嬉しく思っています。宮廷の中にあっても、遠く離れている友人を気遣ってくれ、見返りなど期待せず、親切にしてくださるあなたですものね。きっと私と会わない日々でも、私のことを思い出し、私を愛してくれていることと思います。

あなたが手紙の仲でおっしゃっていたような、私たちの友人に降りかかった屈辱に対して、同情の念に耐えません。私は彼女に非常に同情しています。というのは、きっとそのような災難は、私たちの国の野蛮な習慣によって、引き起こされたものであると思うからなのです。もし彼女がこの国で生活していたなら、ちょっと若すぎる以外に、彼女の罪は何もないでしょうに。たとえ7年後の彼女をウィーンへ連れてきたとしても、その若く美しい姿を称えられたでしょうに。いえ、むしろしわや、曲がった背中、灰色になりつつある髪の毛こそが、彼女の新しい魅力となり得るのです。25歳くらいの若い男性が、例えばサフォーク伯爵夫人²³に色目を使ったり、例えばオペラの席などでオックスフォード伯爵夫人²⁴に手を貸したりする様子など、そう簡単にはご想像できないでしょうね。でも、私は今、このような光景を毎日見ているのです。私以外に、このことに驚く人はいないようです。ここでは、まだ35歳にならない女性は、未熟だと見なされていて、40歳になるまでは世間に向かって堂々と意見することなどできません。あなたがこのような風習を、どうお考えになるかは分かりませんが、私は、年をとった女性たちにとって、これほど良い場所はないと考えています。そして、私は現在ここでは未熟な立場にあるわけですが、私が他の場所にふさわしくなくなった時、つまり年をとったときには、再びウィーンへ戻ってこようとたくらんでいるのです。

私は、多くの年をとったイギリスの貴婦人たちが、ずいぶん長いこと引きこもって暮らしている、哀れな状態について嘆かざるを得ません。もし運命が彼女たちをウィーンへ連れてきたならば、きっと一流の美しさを誇ることができたでしょうに。ウィーンでの評判というものは、ロンドンとはずいぶん違ったもののようです。恋人を得ることは、評判を落とすところが、逆に評判を良くするのです。女性たちは、夫の身分以上に、愛人の身分によって位がつけら

²³ Mrs. Henrietta Howard (1688-1763) ウェールズ皇太子妃の愛人であった。

²⁴ Mrs. Henrietta Covendish (1694-1855) ニューカッスル公爵の娘で、メアリーの子供時代からの友達。

れ、より尊敬を集めるようになります。

きっとあなたは、私たちの国中に溢れ返る、まったく反対の種類的女性が、ここに全くいないので、とても不思議に思うでしょうね。ここには、男好きの女性も妙に上品ぶる女性もいないのです。つまり、同時に2人の恋人を持つほどの浮気っぽい女性はいませんが、夫だけに貞節を誓うような女性もいないのです。この国の夫たちはといえば、おそらく世界中で最も良い性質のように思われます。まるで仕事の面倒な部分を代わりにやってくれる代理人か何かのように、妻の恋人たちを好意的かつ尊敬を持って眺めているのです。もっとも、本当に夫を助けてくれるかと言えば、そうではないのですが、ある部分では、夫と同じような役割を果たしています。簡単にご説明すると、ウィーンではどの女性も2人の夫を持つのが、確立された習慣であるようなのです。夫の1人は名前のため、1人は夫としての努めを果たさせるためなのでしょう。この習慣は、大変広く普及しています。ですから、上流階級的女性を食事に招く際に、夫と愛人を同時に招かなかつたら、かなり失礼にあたるのです。女性たちは、夫と愛人の間に、威厳をもって鎮座します。この愛人関係はたいてい20数年続き、時には女性はこの哀れな愛人に土地を請求したりします。さらには、その関係を結ぶのに全然乗り気ではない、彼の家族にまで要求したりするので。しかし、愛人関係において、夫側の意思は重要ではなく、女性側は結婚するとすぐに、まるで花嫁としての義務であるかのように、恋人を探し始めます。ある意味、恋人なしでは、上流社会の一員として認められないからです。愛人関係に必要な、第一条項は、女性に対する年金についてです。もちろん、恋人というものは、しばしば気まぐれなものです。この年金が科せられる点で、数多くの素晴らしい忠誠の事例があるのだ、と私は認識しています。私は、毎年の賃貸料と同じくらいの年金をもらっている、上流階級的女性たちを知っているのです。誰もが、この額を妥当と見ています。逆に、女性たちが何ももらわずに愛人となっているとしたら、彼女たちの分別が疑問視されてしまうでしょう。女性たちの対抗心の大部分は、誰が一番多く得ているか、という点につきまします。そうして、全く愛人の話がないということは、全く不名誉なのです。昨日、私のとても親しい友人である女性が、私にこんなふうに言いました。「あなたは私に感謝しなくてはね。あなたの話が出たので、あなたの行動を弁護しておいたのよ。」と。いったいどんな話かといえば、皆は、私はウィーンにもう2週間以上もいるというのに、全く愛人を持つとしようとする様子もなくちょっと常識に欠けているのではないか、という話をしていたのでした。私の友人は、私の滞在期間のめどが立たないからだ、というふうに言い訳したそうです。友人自身も、私が愛人を持たないでいるのはそのためと思っていますし、私の行動を正当化するための他の理由は到底思いつかなかつたようでした。

これに関係した、とても楽しかった経験といえば、昨日の晩のことでした。きっとあなたにも、優雅な恋愛沙汰がこの国でどのように行われているか、お分かりいただけるのではないのでしょうか。昨晚、私は某伯爵夫人のところの集まりにいました。そうすると、若い某伯爵が私を下へ呼び、どのくらい滞在す

る予定かと尋ねるのです。私は、滞在期間は皇帝次第で私の力ではどうにも決められない、というふうに答えました。「そうですが、マダム、」と伯爵は言いました。「あなたのこちらでの滞在期間が長くても短くても、いずれにしても楽しくお過ごしになるべきですよ。どうでしょう、お心を動かすような恋を見つけは。」そこで私は、「私の心は」と、大変重々しい調子で答えました。「簡単には動かないのです。それに、そんな自分の心を手放すわけにもいかないのです。」「そうですか。」と、伯爵は私が恋愛沙汰を望んでいないのを知って、残念そうなため息をつきました。「あなたにすっかり魅了された私にとって、それはとても残念なことです。でも、私はそれでも、あなたにお仕えしたいと思っております。もしも私に、あなたを楽しませるだけの価値を見出せないのであれば、そうおっしゃってください。私たちの中で誰が一番お気に入ったかを。そうしたら私は、きっとご満足のいくように取り計らいますから。」このような言葉はお世辞と受け取るべき、とあなたはおっしゃるかもしれませんがね。イギリスではそうですが、私はここでのやり方にすっかり慣れてしまいました。つまり、伯爵は全くの親切心から、私にこのようにおっしゃられているのです。そこで私は、丁寧にお辞儀をして伯爵のご親切に感謝し、そのようなつもりはない、ということを繰り返したのでした。

このように、恋愛事情や上品な礼儀作法というものは、ちょうど宗教や道徳と同じで、違った場所では、全く違ったものとなるのです。それなら、誰が一番正しい意見をもっているのでしょうか？もちろん、最後の審判の日になるまで分かりませんね。さあ、そろそろあなたもこの長い手紙に我慢ができなくなってきた頃でしょうね……。

11 . . . 様²⁵

1716年9月26日 ウィーンにて

あなたからのお優しいお手紙、これほど嬉しく思ったことはありませんでした！そんなふうに言うなんて、何か変な感じがするかもしれませんね。もしも私のあなたへの愛情があとちょっとでも少なかったなら、お手紙を嬉しく思うどころかつらくなるでしょうから。私は、書くのが嫌になり、新たな文通相手からの手紙を恐ろしく感じ始めています。そして、ロンドンの友人たちからの便りを受け取りたくないといって、皆の希望に背いているのです。もちろん、皆が私に面白い手紙を送ろうと努力しているのは承知の上です。でも、皆を喜ばせるのに愚かな手紙を書くよりは、いくつかの面白い手紙を読む楽しみを放棄してもいい、とすら考え始めています。そんなふうに考えている中で、あなたからの友情に溢れたお手紙は本当に嬉しかったのです。こんな文通がずっと続けば、と心から思います。同時に、この長く退屈な私の手紙で、あなたがうんざりしないかと不安でもあるのですが。

²⁵ R.Halsband による匿名化。おそらく前出のアン・ティスレスウェイトに宛てたものだと推測される。

人は、オーストリアからは活気に溢れた手紙など書けないでしょう。というのは、この国はどこか冷淡なところがあり、私も既にその空気に侵され始めています。人々の恋愛や議論などがどれほど熱を帯びてきても、生き生きとしているのとは違って、格式ばって固いのです。その一例になるようなお話をしましょう。まだ最近のことです。夜に、2台の馬車が狭い通りでぶつかってしまいました。ところが、乗っている貴婦人たちは、後ろに戻る礼儀をお持ちではなかったのでしょうか。何と日付が変わって夜中の2時になるまで、同じ場所にずっと留まっていたのです。お互いに、その重要な場所を譲るよりは、そこで死んだ方がましだとでもいう様子です。もし皇帝が警備の者を送って、この事態を何とかしなかったら、この通りにはいつまでも貴婦人が倒れていることとなったでしょう。それでも、貴婦人たちはお互いが同時に馬車から出されるようにするまで、その場所を動かないと言い張ったのです。いろいろもめた後、その問題は、強情さにかけては貴婦人たちに全く劣らない、2人の御者たちが解決することになったようでした。このような気持ちは、ウィーンの女性たちの胸を支配している感情だと思います。女性たちは、夫が死ぬ時はいつでも、自分も胸をかき切って死ぬ覚悟ができています。ウィーンでは、夫の最後の瞬間こそ身分の終わりで、未亡人で地位を保っている人などどこにもいないのです。

男性たちは、女性たちほどこの考えに取り付かれていませんが、結婚を軽蔑するだけでなく、自分よりも身分的に劣った女性を愛人にしようとするようです。男性たちにとっては、愛人の顔つきや格好などよりも家系のほうがずっと重要なのでしょう。ということは、帝国中に散らばる祖先を持つ女性は、何と不幸せなことでしょう！お金や美しさは、恋人や夫を得るためには何の意味もないのですから。お金に関して言えば、結婚する際、男性たちには何の得もありません。オーストリアの法律では、女性の財産を2000フロリン金貨（イギリスでいうところの200ポンドくらいです。）に制限していますが、蓄えておいたものに関しては、どれほどでも女性のものとなるのです。そのため、ウィーンには夫よりもお金を持っている女性もたくさんいます。夫とはいえば、その人となりや行動によって、いくらかお小遣いをもらって喜んでいるのです。このかなりの特権は、女性たちが他の場合にもしっかりと行使していると思われれます。

この話題に関して私はこれまで大変無知でしたが、このような格式ばった社会の中で私がもがいていることを知ったら、きっとあなたも哀れと思ってくださいでしょうね。その反面、私はこの街を妬んでもいるのです。町独特のやり方や、習慣が確立されているという点において。ところが、人々は大使に対する尊敬の念を表すと同時に、哀れな各国使節たちに仕返しをしていますので、私は自分たちもそうされないかと不安でいっぱいです。儀式の日には一般の人々は宮廷に上がれないので、他の日に通りで見かけた使節の後を、気づかれるまでいやにのろのろと歩いたりしているのです。儀式については、かなりたくさん書くことができますが、私はあまりに長々と書きすぎてしまったようですね。でも、本当に人々はこんなことに日々いそしんでいるのです。おそらく、私にと

ってウィーンでは時間がどれほどの早さで流れていくか、申し上げる必要もないでしょうね。あなたは私のことをとてもよく知っていますし・・・。

12・・・夫人へ²⁶

1716年10月1日 ウィーンにて

以前私に、ウィーンの街の様子や、習慣などについて書き送ってくださいね、とおっしゃっていましたね。もちろん、私はいつでも喜んであなたのご要望にお答えするつもりでおりますが、なかなかどうしてすべてを書き送るのは難しいのです。そんな私の気持ちを、汲み取っていただければと思います。もしも、私たちのものとは異なっていることすべてを申し上げるとしたら、私はこれまで読まれてきた、もしくは書かれたものの、人々に読まれることすらなかったあのつまらない写本の数々を、まるごと繰り返して書かねばならないほどになるでしょう。

こちらで人々が着ている衣服は、ペチコートを身につけるという点を除くと、イギリスやフランスの流行とは全く相容れません。ここには、数多くの独自の決まりがあるようです。一例として、未亡人が緑や薔薇色を身につけるのは適切でないという決まり事がありますが、その他の派手な色に関しては好きなようにして良い、といったものです。皆が集まるのがここでの唯一の楽しみで、オペラは何か特別な時に、たいていは宮廷で行われます。ラブティン伯爵夫人²⁷はほぼ毎晩のように、会合を催しています。また、他の女性たちも、自分たちの家の素晴らしさを示したい時や、聖者の日に敬意を表すなどの理由で、だれそれ伯爵および伯爵夫人の名誉においての会合を開く、とを宣言するのです。こういった日は、ガーラ、つまり祝祭日と呼ばれます。聖者の日であれば、その聖者に関わる人や親戚は皆、一番上等の服と宝石を身につけなければいけません。たいていの場合、もてなす側は、特別誰のことも気にかけませんし、誰かの訪問にいちいち挨拶に出てくることもありませんから。楽しみたい人は誰でも、正式の招待状なしに出かけることができるのです。たいてい、夏でも冬でもアイスクリームがふるまわれます。その後、人々はトランプ遊びをする組や、会話を楽しむ組に分かれていくのです。ちなみに、サイコロとばくのような類の遊びは、すべて禁止されています。先日私は、皇帝のお気に入りの、アルサン伯爵²⁸宅で開かれた集まりに出席しました。そして、これまで見たことがないほど、趣味の悪い衣装の数々を見たのです。最上の金で刺繍をして、非常に高価な衣服に仕上げているのですが、人々の趣味の悪さが実に良く表れていました。普通の日には、人々はだいたい上にショールをはおり、下には何でも好きなものを身につけています。

さて、ウィーンについてお話しているのですから、おそらく修道院について

²⁶ 宛先匿名。誰に宛てたかは不明。

²⁷ Madame Rabutin(Dorothea Elisabeth,1645-1725)ホルスタイン公爵の娘。

²⁸ Count of Althann (Michael Johann 世,1679-1722)

の話をご期待されていることでしょうか。ここにはさまざまな大きさの修道院がありますが、私が一番素晴らしいと思ったのは聖ローレンス²⁹修道院です。（修道女たちがそこで暮らしている、簡素できちんとした様子は、不満や悲慘さをともなう永続的な苦行や厳しい規律より、ずっと啓発的であるように思われます。修道女たちは、皆とても優秀です。たぶん、50人程いるのでしょうか。一人一人がとても清潔な個室を持っていて、壁は位に応じてそれぞれ絵で飾られています。その個室は、お手本とすべき修道女たちの絵が貼られている白くて長い廊下に沿っています。礼拝堂はといえば、非常に清潔で、美しく装飾が施されています。ところが、私はあることに思わず笑ってしまいました。修道女たちが私に、木でできた救世主の頭部を見せてくれた時のことです。なんと、その頭部は、ウィーン包囲攻撃のときに口をきいたというのです。その証拠として、それ以来口が開いたままなのだ、修道女たちは口元を指し示しながら、私に言うのでした。また、ここの修道女たちほど、場に適したふさわしい衣服を身に着けている者はいません。きれいな白い山羊の毛でできていて、袖は白いキャラコで折り返され、後ろへ垂れ下がる飾り気のない黒いヴェールをつけています。修道女たちにはそれぞれ、寝室係として仕える、もっと下の位の修道女たちがいるようです。そうして、ここの修道女たちは、常に多くの女性たちからの訪問を受け、尼僧院長からの許可が出れば、寝室でトランプ遊びをすることもあります。（たいていの場合、その許可は簡単に得られるようです。）私はある1人の修道女と個人的に話しましたが、彼女はこの上なく素晴らしい女性でした。もう40歳近いと思いますが、衰えというのは全く見られず、とても生き生きとして明るいのです。私がまるで彼女の娘であるかのように優しく迎え入れてくれた上、自分で作ったかわいらしい小物や、砂糖菓子をたくさんくださいました。修道院の格子もまた、それほど頑丈でしっかりしたものではありません。首をつっこむことは特別難しいことではありませんし、男の人でも、普通よりちょっと細いくらいの人なら、すり抜けることができるかもしれないと思います。ちょうど私がそこにいた時、若いサルム伯爵³⁰がやってきて、尼僧院長が格子の隙間から差し出した手に、キスをしていました。

ところが、私はこの修道院の中で、ウィーン—美しい若い女性を見かけて、とても驚きました。彼女は美しいだけではなく、賢くて優しく、しかも町でも尊敬されるような上流家庭の出であったのです。私は、彼女のような尼僧に会った驚きを隠せませんでした。彼女は私に優しい言葉をかけてくれ、これからも訪ねてくれるようにと言いました。「あなたのご訪問は、私にとってとても大きな喜びとなるでしょうから。」と、彼女はため息をもらし、続けました。「でも、私は以前の知り合いに会うのを、細心の注意を払って避けているのです。知っている人がこの修道院に来た時には、私は自分の個室に閉じこもっています。」私は彼女の目にたまる涙を見て、大いに心が動かされました。そうして、

²⁹ 955年、レッチフィールドにおけるハンガリーとの戦いで、国を勝利に導いた聖者。

³⁰ Count of Salm (Franz Wilhelm, 1672-1734)

私も同じように優しい、同情を抱いた調子で彼女に話し掛けたのです。彼女は、尼僧になったことにあまり満足していない、そんな様子でした。そこで私は彼女が出家した本当の理由を、知ろうと試みましたが、だめでした。どうやら彼女は、誰に何も説明もせずに出家したので、人々はとても驚き、また誰もその理由がわからなかったようなのです。その後、私は数回彼女に会いました。そのたびに、私はとても憂鬱になったのです。あれほど若くて素晴らしい人が、生きながら埋められているような気がしたものですから。それに、若い女性たちの中には、時々激しい情熱にかられて出家をするということだって、ありえるのです。もっと他の運命があったように思われる、そんな尼僧たちに対しては、自然と哀れみが沸き起こります。控えめにいっても、私はこれまでローマカトリックにたいして、ほとんど同胞愛を感じたことなどありません。それは、たびたび多くの女性たちに起こる、出家によって起こる不幸のためなのです！そうして、一般の人々に広がるあの嫌な迷信、ほとんどすべての通りに備え付けてある木の置物に、昼に夜にろうそくを備える習慣、私がよく見かける嫌な行列は、中国の金貨と同じくらいに常識に反するもので、またとても不快な眺めです。私の中に働く女性特有の矛盾した気持ちのため、こんなふうにしたのかもかもしれませんが、以前はこれほどローマカトリックに対抗する気持ちというのはありませんでした……。

13. . . 氏へ³¹

1716年10月10日 ウィーンにて

さて、私はあなたのなされた非難のすべてを受けるとは、値しないと思うのです。たとえ私がしばらくの間、あなたのお手紙に返事を出さなかったとしても、私があなたに感謝の念を持っていない、などということではありません。もちろん、あなたからのお手紙以上の気晴らしを選ぶような、そんな愚かなことをするつもりでもないのです。でも、あなたがお手紙でそんなふうにおっしゃられた後で、これ以上お返事を遅らせることができなくなりました。あなたから誤解されたままになってしまおうでしょうから。本当にあなたが私の手紙を楽しみに待っているとすると、あなたが私からの（つまらない）手紙を見てがっかりしているのではないかと想像しては、とても悲しく思うのです。もちろん、私はあなたに書いて伝えるほどの価値あるものを、見つけようとは日々努めているのです。

私は目に映るものすべてを、なみなみならぬ好奇心でもって眺めています。ここには、リヒテンシュタイン公³²の宮殿を始めとする、数多くの美しいお屋敷があります。でも、彫像はすべて近代のもので、絵画もまた一級品ではありません。でも、皇帝がすばらしいものをいくつかお持ちだ、というのは本当です。

³¹ Dervla Murphy, *Embassy to Constantinople: The Travels of Lady Mary Wortley Montagu*, New York: New Amsterdam, 1988. には不掲載。宛先匿名。

³² Liechtenstein (Johann Adam, 1656-1712) オーストリアの陸軍司令官。

昨日、私はその博物館を見に行きました。それは皇帝の宝物庫と言われていて、品物を選び抜くというよりは、むしろ価値のありそうなものをいろいろと寄せ集めたような場所でした。私は5時間以上も見学しましたが、そこには私の目にとまるような、長いこと考えさせるようなものはほとんどなかったのです。収集品の数は非常に多く、両側が品物で埋め尽くされた長い廊下が続き、大きな5つの部屋がありました。絵画も多くかけられていて、特にすぐれた細密画（ミニアチュール）もいくつか見られました。でも、中でも一番素晴らしく、価値があるのは、ファヴォリテンに滞在していたティツィアーノー派の画家、コレジオ³³の作品であったと思います。

宝石の飾り棚は、想像していたのよりもちゃちで、私の目にはあまり素晴らしく映りませんでした。私は、大きさがティーカップの受け皿くらいの、完璧なエメラルドのついた、杯を見せてもらいましたが、皆その杯に大変な敬意を払っていて、皇帝だけがそれに触る権利があるとのことでした。他にも、珍しい刺繍で飾られた棚もありました。でも、その飾りの中で、価値があるな、と私が思ったのはたった一つでした。それは海老をかたどったもので、とても自然にできているため、本物と見分けるのが難しいくらいでした。また、めのうを集めた棚もありました。いくつかは本当に美しく、またかなり大きかったのを覚えています。他に、ラピスラズリの入ったびんもいくつか目にしました。私は、勲章の棚が、あまりにきちんと飾られていないので驚きました。どれが価値あるものなのかはわかりませんが、どれも皆ずいぶん乱雑に並べられていたのです。古美術品はといえば、その名前ほどの価値はありません。私に言わせると、それは全部近代のもので、ですから、私を案内してくれた学識のある古物研究者から、この品物はとても古いと聞いて、思わず笑ってしまいました。彼に言わせると、40年もここにあるのだから、十分に古いというのです。でも、勲章の次の棚はいくぶんか私を楽しませてくれました。それは、ちょうど5歳の子供に贈ったらぴったりの、象牙色をした一組のろう人形とおもちゃだったのです。5つの部屋のうち、2つは、宝石で飾られた、ありとあらゆる聖遺物でいっぱいでした。そこで、私は特にある十字架を見るようにと言われました。その十字架は、大変賢くもレオポルド皇帝に意見したことがある、と言うのです。これからさらにこのガラクタ類の目録をあげて、あなたにご面倒をおかけするつもりはありません。でも、天然磁石についてだけは、忘れずに申し上げておきましょう。この磁石は、持ち上がらないほど重たい鋼で支えられていました。宝物全部の中で、私が一番興味をもったのが、この磁石なのです。他にも、古代の彫像の頭部が数個ありますが、そのうちの一部は、近代に手を加えられたせいで、すっかり外観を損なっていました。

おそらく、あなたは私の手紙にほとんどご満足できないでしょうね。この退屈な話題を、冗長さを黙って受け取ってください、と申し上げることはできませんし、まして私の愚かさをお許しください、などとは実にお願ひしいくの

³³ Tiziano Vecelli(1478-1576)、Corregio (Antonio Allegri,1497-1534) イタリアの画家。

ですが・・・。

14. マー夫人へ

1716年11月7日 プラハにて

私の大事な妹よ、「姉としての愛情を示す証拠を見せてください」などとあなたが言い出さなければいいが、と思います。でも、もしそう言われたなら、きっと今あなたに手紙を書くことほど、私の愛情を示すことはできないと思うのです。なぜって、3日間、いえ、正しく言えば3日3晩大急ぎで旅をしてすぐに、あなたにこうして書いているのですから。ボヘミア公国は、私が神聖ローマで見た中で、一番荒れ果てています。村は貧しく、馬もとても惨めな様子で、良い藁や水は、たまにしか得られない、神様のお恵みのようなものです。もちろん、まともな寝床など望めそうにありません。私は自分の寝床を運んでもらっていますが、それでも、時にはその寝床をこしらえる場所を見つけられないのです。私はこのあたりの暖房のそばで暖を取るよりむしろ、毛皮にくるまって一晩中旅を続けるほうがまだいいと思います。このへんの暖房というのが、いろいろな異臭を混ぜ合わせたような、本当にひどい匂いがするのです。

プラハはかつてボヘミア地方の王様たちにとっての中心地でしたし、今でも公国の首都として機能しています。神聖ローマでは最も大きい町の一つで、まだ以前の壮麗さを示すようなものも残されています。しかし、大部分は昔に作られたもので、人口も今となってはまばらです。このためか家がとても安く、ウィーンでの出費に耐えられない上流階級の人々は、こちらに住むほうを選ぶようです。プラハにも、宮廷を除けば、ある程度集まりや音楽などの娯楽は見つかりますし、ここの野鳥料理は、私がこれまで味わったことのないほど、おいしいものですから。私は既に、ウィーンで知り合った方々の関係筋の、しかるべき貴婦人たちの訪問を受けました。こちらの貴婦人たちは、ちょうどエクスターの人々がロンドンの真似をするように、ウィーンの流行を追いかけたような服装をしています。つまり、その真似事の衣装は、元のウィーンのものよりも過度なのです。どれほど変な様子であるか、説明するのは、たやすいことではありません。まるで、服を着ている本人は、髪飾りとペチコートの間うずもれてしまったかのように見えるのです。例えば、旅行者へこの地方を紹介する時に、女性たちの背中に「これは女性です」といつも書いておかなければ分からないほどなのです。ちょうど、かつてのある先進的画家が「これは熊です」と、いつも書かなければならなかった³⁴のと同じような調子です。

さて、またドレスデンとライプチヒからお手紙を書く約束しましょう。私はあなたの好奇心を満足させたいと思っていますし、私の心の平穩にもつながるのです・・・。

³⁴ スティール(Richard Steele, 1672-1729, イギリスの作家)の発行している大衆紙、*tatler* に1709年5月21日付で掲載された物語より。

15. マー夫人へ

1716年11月21日 ライプチヒにて

私のかわいい妹よ、約束を守って、ドレスデンから手紙を出せなかったことを許してくださるでしょうね。私はプラハからドレスデンまで、全く馬車の外に出ることすらできなかったのです。24時間もの間、眠ったり、休憩したりすること無しに大急ぎで旅を続けて、私がどれほどくたびれてしまったか、想像できるでしょう？（どれほど疲れていても、私は乗り物の中で眠ることができないたちなのです。）私たちは、夜、月の明かりをたよりに、ちょうどエルベ川の下流、ボヘミアとザクセン地方を隔てている、あの恐ろしい崖を通り過ぎました。私は、溺れてしまう、などという心配は全くしていませんでした。なぜなら、馬車が転落したとしたら、川のほうへ落ちていくまで生きているなんて、まずありえませんか。最初、いくつかの場所では道がとても細くなっていて、実は車輪と崖の間がわずか1インチほどだったことに、私は気付くことができませんでした。もちろん、私は良い奥さんぶりを発揮して、眠っている夫を起こして、道が怖いと訴えたりもしていなかったのです。というよりも、私が気付く頃には、もう危険は避けられないもののようでした。月明かりの中、すごいスピードでギャロップをする馬の背で、先頭左側の御者がこっくりと居眠りをしているのが見えたのです。そこで私は、通りすぎている場所を見てもらおうと思い、声を上げました。私の声で夫は目を覚まし、私以上にその状況にびっくりしました。夫は、アルプスを5回ほどいろいろな場所から越えたけれども、これほど危険な道はなかったと言うのです。私も、エルベ川であがった旅行者の死体の話は幾度ともなく聞いていました。しかし、神様のおかげか、私たちの運命はそうではありませんでした。私たちはその後何とか無事に、疲れきってドレスデンまでやってきましたが、とても手紙を書ける状態ではなかったのです。このような恐ろしい崖を通り過ぎた後では、エルベ川の土手に広がるこのドレスデンの町は、私にとって、とても快適な気持ちの良い場所に思えました。私は大喜びで、まる一日を休息のために費やしたのです。

この町は、神聖ローマ帝国中で一番きちんとしたところです。ほとんどの家は新しく建てられたようで、選帝侯の宮殿もとても美しい様子です。宮殿と一緒に宝物庫もあり、たくさんの珍しい品々や、高い評価を受けている勲章のコレクションがあります。私たちの国からの大使、ヴァーノン氏³⁵が私を訪ねてきてくださいました。それから、私がロンドンで知り合いになっていたローム夫人³⁶も私に会いにきてくださったのです。ローム夫人のご主人は、以前ロンドンへ、ザクセンから王への使節として滞在されていました。夫人はできる限り私をもてなそうとなさって、いろいろな貴婦人たちを連れてきては、私に紹介してくれたのです。ザクセン地方の女性たちは、ちょうど中国人がロンドン

³⁵ Richard Vernon (1678-1725) イギリスの駐ザクセン大使。

³⁶ Madame de Lorme, Charles Pierre de Lorme (1710-14年、駐ロンドンのザクセン大使)の妻。

の人に似ていないのと同じで、オーストリアの女性たちには全く似ていません。女性たちはフランスやイギリスの流行に従って、上品に衣装を着こなして、多くの人は美しい顔立ちです。しかし、過度に重々しい感じがします。ごく普通の礼儀作法で話したり動いたりすると、育ちのよさに反すると受け取られるからなのです。女性たちには、皆ちょっとした言葉のもつれがあり、総じてぱたぱたと小幅に歩きます。でも、そうした女性らしい欠点も、彼女たちがよそ者にも親切で礼儀正しいという美德がありますから、たいしたことではないでしょう。私も、彼女たちには、大いにほめるべきところのほうが多いと思っているのです。

さて、コッセル伯爵夫人³⁷から伺った話をしましょう。私の手紙が束になってしまうのを承知の上で、私にはとても不思議に思われた話を長々と書きたいと思います。コッセル夫人は、ここから数十マイル離れた、陰鬱なお城の中に閉じこもって暮らしています。コッセル夫人は現在、ザクセン選帝侯の寵妃となり、宮廷で、他のどの女性も持たないほどの大きな権力を誇っていました。王が、最初にした愛の告白の物語は、今も語り継がれています。ある日、王は片手にたくさんの王冠の入った袋を、もう片手に蹄鉄を持ってコッセル夫人を訪ねてきました。そして、夫人の目の前で、蹄鉄を王冠にぶつけてばらばらにし、私はこうして強さと寛大さを示したのだから、そこから夫人なりの結論をみちびきだすようにと言ったのです。これがコッセル夫人の心を捉えたのかどうかは、私にはわかりません。でも、いずれにせよ夫人は王に従って夫のもとを離れ、正式に離婚しました。ここでの法律によると、離婚した兩人とも再婚できるということです。この時だったか、他のどこかの時期だったかはわかりませんが、どうやら、王は、コッセル夫人と結婚の手続きをしたのだそうです。そこで、夫人はとても喜んで、会う人すべてにこの話をしては、自分は王妃という名誉を得たのだと触れ回ったのでした。もちろん、だからといって、正式な王妃が活着ている間は、何の意味もなかったのですが。

世の男性たちは、恋をしている時は、すべてを忘れてしまうようです。でも、長いことたって激しい愛がさめた時、王は結婚の契約書をコッセル夫人の手に残してしまったのはまずかったと考えました。そうして、契約書を自分に返すようにとお望みになったのです。ところが、夫人は、すぐに契約書を渡さずに、王のひどいお怒りに耐えました。国中で最も裕福で、また同時に貪欲な女性の一人であるにもかかわらず、たくさんの年金や夫人が集めた巨額の資金はそのままにしてやるから、とにかく契約書を返すように、という王の命を拒否しました。そこで、怒った王はコッセル夫人を閉じ込めてしまったのです。今も、夫人は窮屈な監禁の恐怖に耐え、脅かしやなだめの言葉にも、反応せずじっと留まっています。世間では、夫人の激しい情熱のせいでこんなことになったのだと思われていて、間もなく夫人の生涯は終わりを迎えてしまうのではないかとささやかれているのです。私は、コッセル夫人のように名誉のために苦しむ

³⁷ Countess of Cossel (Anna Constanze von Brockdorf, 1680-1765)

女性に、同情せざるを得ません。特に、名誉に関わる問題が、女性たちの間ではあまり見られない国においては、余計に同情してしまうのです。

私は、夫の任務がドレスデンにもっと滞在するのを許してくれたら、と思います。たぶん私は、プロテスタント地域を公言しているこの町を、大いに気に入っているのです。それ以外にも、他の場所では感じたことのないような、ある種の礼儀正しい雰囲気、すべてにおいて感じられました。私が今いるライプチヒは、ものの売り買いには大変適した場所のようです。そこで、私はこの機会に、自分や、他の人のための衣装、金細工を買うことにしました。こういった品物は、ウィーンでは少なくとも2倍の値段がするのです。おそらくは着飾る習慣のため、おそらくは人々が本物をほしがるところからでしょう。それに、ウィーンでは、この種のもは作られていませんし。そのため、貴婦人たちは、靴さえザクセン地方から取り寄せなければならないのです。ドレスデンにあるものは、神聖ローマ帝国の中でも一番しっかりした良い品物です。商人だけでなく、上流階級の人たちにとっても、良い場所だと思います。実は、ライプチヒは要塞に囲まれた町でもあるのです。私はこの要塞について、どのように説明したらいいのかわからなくて、意識的に要塞について書かずにきました。私が無知なだけでなく、きっとあなたも、快く私のこの省略を許してくれると思うのです。なぜって、たとえば私が旅の途中で見た三角形の砦や、普通の要塞の様子を正確に書いたところで、きっとあなたは私にこう尋ねるでしょうね。「その三角の砦って、いったい何のことなの?」「そもそも要塞とは、どんなものでしょうね?」それでは、またお手紙を書きますね。

16 . . . 伯爵夫人へ³⁸

1716年11月23日 ブランズウィックにて

私はたった今ブランズウィックに到着しました。ここはとても古い町ですが、ウォルフエンビュッテル公爵の支配の中心地であります。このご一家は、その古くからの名誉はいうまでもなく、イングランドの玉座へもその若い枝を伸ばすという輝かしい業績を持ち、神聖ローマ帝国へも王妃を送っています³⁹。もちろん、私はここの地ビールであなたの健康を祈って祝杯をあげました。私には、このビールは、世界で一番だという評判に十分値する、すばらしいものと思われま

す。この手紙は旅行中あなたに宛てた3度目のものです。さて、私はここで次のように宣言したいと思います。もしもあなたが、私にロンドンの知り合いに起きた変化や、新しい便りをすぐに書き送ってくれないならば、私はハノーヴァーの様子をお知らせしないつもりなのです。そう、私は今晚ハノーヴァーに着くことになっているのです。そして、もちろん、あなたが他のどの場所よりも

³⁸ R.Halsbandによる匿名化。おそらく妹のマー伯爵夫人に宛てたものと推測される。Murphy, *op.cit.* には不掲載。

³⁹ 前出のカール6世と、King George1世(1714-1727)のもとへ娘が嫁いでいる。

ハノーヴァーの様子を知りたがっているのは、私だって百も承知なのですがね。

17. ブリストル夫人へ

1716年11月25日 ハノーヴァーにて

あなたのお手紙を、ちょうどウィーンを発つ一日前に受け取りました。本来ならもっと早くに受け取っているべきだったのですが、神聖ローマの大部分の場所では、郵便制度はあまりきちんと管理されていないのです。プラハでの荷物は、私の馬車の後ろに結び付けられて、無事ドレスデンまで運ばれました。もしも、荷物がいったいどうやって運ばれているのかに興味を持ったりしたら、それは国中の秘密の半分くらいを、自分のものにしてしまおうという行為に他ならないのです。さて、私はあなたへの感謝の手紙を、長々と遅らせるつもりはありませんでした。ところが、ハノーヴァーには私の知り合いが数多くいて、また宮廷に上がらねばならず、そのため全く自由になる時間が見つからないのです。私は、全くお世辞やえこひいきを抜きにして、私たちの若い王子⁴⁰についてお話できるのを、大変嬉しく思っています。王子は、その年齢で必要な要素をすべてお持ちで、快活であると同時に考え深いご様子です。そして、振る舞いもとても穏やかで魅力的なので、ご身分をたてにして立派さをことさら主張する必要もありません。昨夜、ちょうど王様がいらっしゃる前に、私は王子と長いことお話する名誉を得ました。お付きの長官は、わざと席を外しました。(「故意に席を外したのです」と後から王子が私に説明してくださいました。)そこで私は、王子が気兼ねなくお話する様子を見ながら、王子の能力を少し見極められるかもしれないと思ったのです。まもなく、私は王子が話す際の反応の早さと、礼儀正しさに驚かされました。相手にふさわしいやり方で対応し、王子らしい優雅な雰囲気を持っていたのです。

この町自体は、特別大きくもなく、美しくもありません。でも、宮殿だけはセント・ジェームズ宮殿よりも大きく、陛下はご親切にも、その一部を私たちの宿としてあてがってくれたほどでした。そうでなければ、私たちは大変ひどいところに寝泊りせざるを得なかったでしょう。というのは、街にはものすごい数のイギリス人たちがいて、汚い宿屋に一部屋見つけるだけでも、幸運と思わなければいけないのです。今日私はポルトガルの大使⁴¹と一緒にお食事をしましたが、大使などは、みずばらしい宿屋に二部屋を押さえたので、私は幸運でしたよ、などとおっしゃっていました。

これまで、私は神聖ローマ帝国を一回りしてきました。その中で、イギリスを旅する時とのかなりの違いに、気付かされました。ここには、私たちにとってはごく普通にある、貴族のための特別な席というのはありません。いろいろな公共施設がきちんと用意されているにもかかわらず、私たちの国にはあちこちにある、貴族用施設がないのです。すべての人民は、完全に、それぞれの独

⁴⁰ Frederick Louis(1707-51), ウェールズ皇太子(後のジョージ2世)の長子。

⁴¹ Dom Louis da Cunha(1662-1740) ポルトガルの駐ロンドン大使(1697-1710, 1715-18)。

立した自治体に分かれて暮らしています。裕福な人たちはすべて宮廷へ、商人たちはニュルンベルグやフランクフルトなど、貿易に適した街に住んでいるのです。

毎晩、ここでは陛下のお知りあいであるフランスの喜劇俳優たちが、舞台を演じています。皆たいへんきれいに着飾っていますし、何人かはなかなか上手な役者です。陛下は、たいいてい公の場でお食事をされます。宮殿は広く、陛下はとても人当たりの良い素晴らしい方なので、ハノーヴァー宮殿は世界で最も気持ちのよい場所の一つとなっているのです・・・。

18. リッチ夫人へ

1716年12月1日 ハノーヴァーにて

私の大切なリッチ夫人、あなたが私のイングランド帰郷の話にとっても喜んでくださったこと、私も嬉しく思います。でも、これは他の多くの話のように、今のところ全くその根拠がないのです。私に関する噂話はずいぶんあるでしょうが、きっとあなたは私を良く知っているので、本当の私の様子を汲み取ってくださるでしょうね。距離に関して言えば、数週間前よりも、ロンドンの近くにいるというのは事実です。でも、帰郷については、私にはどうなることや全く分かりません。私は、あなたにお会いする時の喜びを思ったりしますし、私のことをわかってくれる他の友人たちに会いたいのです。しかし、夫がこの任務についている以上、私も彼に従わねばなりません。私はこのところ、自分自身の運命で頭がいっぱいです。きっと、私も皆が自分について書くときのように、とてもつまらない調子でお手紙を書いているのでしょうか。そんな退屈な話題、早く変えてしまいましょう。そう、私は今、世界中で最も美しい地域にいます。ここの女性たちは、(文字通り)薔薇色の頬、雪のように白い額と胸、真っ黒のまゆと赤い唇をしています。そして、たいいてい炭のように黒い髪の毛を持っています。彼女たちは、死ぬまでこのような完璧な美しさを保っているのです。特に、ろうそくの光のもとでは、非常に美しく見えます。でも、私は、もう少しそれぞれの美しさが違う様子であれば、と思うのです。彼女たちは、お互いに、まるであのサーモン夫人のろう細工人形⁴²のように似通っているのです。きっと、あまりにも火の近くにいると、溶けてしまう恐れがあるのでしょうか。彼女たちは、注意深く火のそばによるのを避けているかのようです。今はこれほど寒い時期ですから、彼女たちが火の側によれずに内心つらい思いをしているのではないかと私は勘ぐっています。既にとても雪が深く、人々はそりすべりを始めました。これは、このあたりで大変人気のある遊びです。乗り手を支える装置をそりに取り付け、一頭の馬がそれを引っ張っています。男性はそりを走らせることができ、そりは非常になめらかに走ります。乗っている貴婦人、馬、そしてそりがとても美しく、また多くの人と一緒に乗っていると、見ていても相当楽しいものです。ウィーンでは、すべてのものが過

⁴² Mrs. Salmon, ロンドンのフリート・ストリートでろう細工展を開いた。

度で、そりが5、600ポンドもすることがあります。今、そのウィーン宮廷に、ウォルヘンビュッテル公爵がいらっしゃっています。公爵は、陛下の近い親戚ですし、私が地上で最も美しいと思っている王妃その人の、叔父上にあたるのです。王妃は今、叔父上と一緒に過ごされています。きっと、王子を亡くしたばかり宮廷にとっては⁴³、とても大きな慰めとなっていることでしょう。ウィーンを発つ前の日、私は王妃に暇乞いをしました。その際、王妃は、幼い王子を失った悲しみでいっぱいのご様子で、私にお話なさいました。私も、涙をこらえるのが大変でした。あなたも知っているように、私はその称号だけで人を好むような人間ではありません。でも、親しみを込めた表現を使っているのなら、私はこの魅力的な王妃を愛しているのです。他の言い方をすれば、私は一人息子の悲劇的な死に、大変心を動かされました。ずいぶん長いこと望まれて生まれてきて、冬の初めにその母から引き離され、十分な愛を受ける間もなくあの世に旅立ってしまったのです。

そろそろお別れを言いましょう。どうぞまた私に手紙を下さい。あなたがずっと私を思ってくださいることを信じて・・・。

19. マー夫人へ

1716年12月17日 ブランケンブルグにて

大事な妹よ、ちょうどハノーヴァーを発つ日に、あなたからの手紙を受け取りました。その際とても急いでいて、お返事を書けなかったというのは、容易に想像できるでしょうね。でも、私はこうして一番早い機会に、あなたに書いているのです。私は15日のとても夜遅くに、ここブランケンブルグに着きました。どれほど運の悪い旅行者でも出会ったことがないくらいの、最悪の道とお天気で、ずいぶんとひどい旅でした。私は、このブランケンブルグに来るにあたっての、このような苦勞を、王妃のせいにしてしまうなどは少しも思いません。というのは、実は、私は王妃のお母様のブランケンブルグ公爵夫人に、王妃からのおことづけを頂いてやってきたのです。王妃のお母様は、大变身分もある、名高いお方で、今でもとても美しい方と言われていました。私たちが到着したのはかなり夜遅くでしたので、私は公爵夫妻のもとへ参るのにはふさわしくないと考えたのです。そこで、私たちはずいぶんとみすばらしい宿屋に泊まることにしました。ところが、私が両陛下に到着を知らせるやいなや、お二人はすぐに、6頭立てのご自分たちの馬車を送ってくださいました。そうして、その馬車が、私たちをお城の建つ、小高い丘の上まで運んでいったのです。公爵夫人は私にとっても親切にしてくださり、この小さな宮廷でもまた、楽しい時間が過ごされています。公爵は、毎晩のようにトランプ遊びをなさいます。それに、公爵夫人は私と一緒に時間を過ごすのが大変に楽しいとおっしゃるものですから、もし夫人が教会に行っていなかったら、書く時間を見つけるのはとても無理だったでしょう。こちらの言葉で礼拝を捧げるほど、私の語学力が十

⁴³ 同年11月4日、ハプスブルグ家の王子レオポルトがわずか7ヶ月で死去した。

分ではないため、教会へはお供することができないのです。

ブランケンブルグの話に加えて、何かハノーヴァーの話をしなかったら、きっとあなたは私を許してくれないでしょうね。私には、この町が特別大きいとも、素晴らしいとも言えません。でも、オペラハウス⁴⁴は、ウィーンのものよりもずっときれいです。お天気が悪くて、ヘルンハウゼン⁴⁵の完璧な美しさを見ることができなくて残念です。しかし、雪にもかかわらず、私はそのお庭が大変きれいだと思います。そして、イギリスで見たものよりもずっと背の高い、数多くのオレンジの木には驚かされました。むしろ、ハノーヴァーのほうが寒い気候であるのに、と。しかし、その晩宮廷の晩餐で、私はもっと不思議な出来事に会いました。この国の、とある紳士からだといって、王に二つの大きな籠が届けられたのですが、その中身はというと、見たことのないような、いろいろな種類のオレンジやレモンがぎっしりと詰まっていたのです。その中で、私が一番価値があると思ったのは、二つのよく熟れたパイナップルでした。私には、とてもおいしい果物のように思われました。ご存知のように、パイナップルはブラジルで育つものです。私は、どうやってはるばるここまでやってきたのか、想像できませんでした。まるで魔法でやってきたかのように思われたのです。私が尋ねてみると、ハノーヴァーでは、育てるのに暖房設備を使っているとのことでした。人工の設備によって、夏のような気候を可能な限り長くし、本来太陽から得る程度の光や熱を、植物に与えているのでした。その効果はてきめんです。これほど便利な発明品を、私たちがイギリスで使っていないのは驚くべきことです。私は、つつい私たちイギリス人の頑固さについて思いを馳せました。私たちはこの暖房設備を使わずに、一年のうち半分を寒さで震えて過ごしているのです。このような暖房は、おそらく生活の中では最も便利なものでしょうし、きれいに飾りつけをすれば、お部屋の外観を損ねるものでもありません。ウィーンやドレスデンでは、こうした暖房に色をつけたりめっきをしたりして、まるで中国製のびんや彫像、棚のような自然な形に作り上げていましたので、それとわかることもありませんでした。もし私が国へ帰ったら、イギリスの流行に対抗して、私の寝室にもウィーン式のものを一つ置いてみたいと思うのですが・・・。

大事なあなたへまたお手紙を書こうと思います。でも、どうかお願い、あなたのお手紙に、もうちょっと細かいことを書いてください。きっと、私が40マイルくらいのところにいるかのように思っているのですが、これほど長いこと国から離れてしまうと、ちょっとしたほのめかしなどでは、私はそちらの様子がさっぱりわからないのです。

⁴⁴ 先の選帝候である Ernest August 1 世 (1629-98) が建てた、宮殿の中にあるオペラハウス (1689-99 建設)

⁴⁵ Hernhausen, 1660 年にできた荘園。

1717年1月1日 ウィーンにて

私はここウィーンで、ハノーヴァー経由で送られてきた、私のイングランド帰郷についてのあなたのお言葉を受け取りました。ご存知のように、自信をもって断言されていることのすべてが、必ずしも本当になるとは限りません。だから、あなたは、帰郷の予定が周知の事実であるときに、それを謎めかすなんて、と私に怒ってらっしゃいますが、私としては、まだどうなるか分かっていないのです。ぜひ、そのように世間にお伝えください。私はこの時期にウィーンにいるのを、とても幸運だと思っています。今、ウィーンではちょうどカーニバルが始まったところで、ずっと娯楽が続いています。あの仮面をつける習慣だけは、オスマン帝国との戦争中には決して許されなかったことでした。公の場では、舞踏会が開かれています。そこで、男性はドゥカット金貨一枚を払わねばなりません、女性は無料です。どうやら、こうした場所では、一晩で1000枚以上のドゥカット金貨が出回るようです。会場は、とても素晴らしく飾り付けてあります。音楽はといえば、あの耳をつんざくような角笛を加えたりする嫌な習慣さえなければ、十分ひびきの良い音楽がかかっています。ところが、ウィーンの人々にはその角笛の音が大変好ましいものらしく、音楽には必ず加えられているようでした。たいてい、舞踏会の最後は、30組から40組の人々が、イギリス風の踊りを踊って締めくくります。ところが、あまりにもひどい踊りなので、見ていても全く楽しくありません。人々はその踊りを半分もきちんと踊れないのに、50年もの間繰り返し踊ってきたのです。私は、人々に喜んで新しい踊りを教えたいと思いました。でも、おそらく覚えてもらうには、数ヶ月を要して、大変なことになるだろうとも思ったのです。

昨夜、宮廷でイタリアの喜劇が演じられました。舞台はとてもきれいに作られていましたが、その喜劇自体は、面白みもなく、ずいぶん程度の低いお芝居でした。宮廷の人々が、4時間もじっと座っていたことに、驚いてしまったほどです。舞台上で演じる女性はおらず、女性の役をやった男性たちも、とても恐ろしい様子でしたので、舞台がよけいにひどくなったようでした。さらに、非常に寒い晩でしたので、私などは死んでしまうのではと思いました。今ウィーンは、冬の真っ最中なのです。ドナウ川は完璧に凍りつき、暖房や毛皮なしではいられない季節です。しかし、空気がとてもきれいなので、皆元気になっています。イングランドほど、風邪を引く人もいません。人々に言わせると、ウィーンほど空気のきれいなところはない、とのこと。確かに、私がこれまでいたどの場所よりも、ウィーンでは冬への備えがしっかりしていて、優れています。冬にバランスの良い食卓を整えるのも、それほどお金がかからないのです。ウィーンの市場を巡り歩くのは、とても楽しいものです。市場では、毎日のようにハンガリーやボヘミアから運ばれてくる、野鳥の肉や鹿の肉などの珍しいものを、たくさん見ることができます。人々は特に貝を好むようです。

⁴⁶ R.Halsband による匿名化。おそらくリッチ夫人に宛てたものと推測される。

ベネチアから送らせている牡蠣は特に好きなようで、臭いがしてもしなくても、かまわずに喜んで食べています。

さて、あなたのご指示通り、ウィーンの町の様子をお知らせしたつもりです。もしかして、ご満足のいけるものではなかったかもしれませんが。きっと、私をもっとさくさんの珍しいものを見たり、面白い話を聞いたりしていると思われるでしょうし、それをどうして説明しないのか、とお小言を頂戴するかもしれませんが。でも、誓って、私はただ真実をお伝えしているのです。確かに、他の旅人が、読み手を楽しませようとして使うような数多くのばかげた作り話は、書いていないのですが。その代わりに、通り過ぎる町で、何か面白いことを見つけたり、ローマカトリックの奇跡を長々と語ったりは、できるかもしれませんが。でも、僧侶が嘘をつき、民衆がそれを信じ、世界には終わりがある、ということ、それ以外にあなたに伝えるような新しいことは、今何も思いつかないのです。それから、あなたがとても知りたがっている噂話に関していえば、これがどうして面白いでしょう？あなたのご存知ない、誰それ公爵が某伯爵夫人を見捨てた、だの、何々公爵が何々伯爵夫人に恋をした、とか？それとも、あなたは私があのおとぎ話のような空想小説⁴⁷を書くのをお望みでしょうか？私は、それよりも全くの事実をお話するほうがましだと思うのです……。

21. マー夫人へ

1717年1月16日 ウィーンにて

かわいい妹よ、私はしばらくの間、あなたに暇乞いをし、ウィーンに永久にお別れを言おうとしています。このひどい寒さと、深い雪にもかかわらず、ハンガリーのほうへ向けて、明日から旅を進める予定でいるのです。あまりに雪が深いので、勇気がくじけそうにはなりません。私は常に受身で、運命がいつも私を運んでいくのです。私は、お別れをいうために、王妃たちに謁見をしました。私が王妃にお会いする際、陛下もご出席くださいました。そうして、長いこと優しいお言葉をかけてくれ、両陛下とも、帰りにまたウィーンに立ち寄るように、とお招きくださいました。でも、残念ながら私には、来る時と同じような大変な思いをまた繰り返そうとは、とても思えないのです。

私は、王妃に、ブランケンブルグ公爵夫人からのお手紙を届けました。王妃は、私に宮廷に長くとどまるようにとおっしゃったのですが、私はわずか数日間しか滞在しませんでした。お別れする時に、王妃は「手紙を書き送ってくれるように」と私におっしゃってくれました。ところで、あなたにも、ウィーンからたびたび長い手紙を送ったのです。あなたはそのことを何も言ってはこなかったけれど、届いているといいのですが。その中で、たぶん私は、神聖ローマ帝国の宮廷中の至る所で見られる一つの不思議なことについて、書くのを忘れていたと思うのです。人々は皆、お気に入りの人形を持っているということ。

⁴⁷ おとぎ話作家 D'Aulnoy (1650-1705) を引き合いに出している。スペイン旅行記 *Marie Catherine Le Jumel de Barneville* を著した。

両陛下も、こうした二つの小さな小人をお持ちですが、特に女のほうは、まるで悪魔のように醜いものです。それなのに、ダイヤモンドで飾りたてられ、あらゆる公共の場で、王妃のひじの下に置かれています。ウォルヘンビュッテル夫人も、一つお持ちです。そして、ブランケンブルグ公爵夫人も、持ち歩いてはいませんが、私が見た中では一番まともなものを一つお持ちです。聞いたところによると、デンマークの国王⁴⁸は流行を少し自分流に変えて、人形を一番の大臣に似せたということです。私には、どうして人々がこんな不恰好なものが好きなのか、さっぱりわかりません。でも、王子たちの意見によれば、「宮廷において、語り合うのに値する人間を見つけられず、人間ではないものの中から仲間を探さざるを得なくなった時、この生き物たちだけが、宮廷の中で王妃たちと対等に口を利ける可能性がある」ということなのではのでしょうか？

私は今、のどが痛くて寝室にこもって過ごしています。これは、私の大好きな人たちに会わなくてすむ、とてもよい口実となっています。なぜって、私がウィーンを離れるとって、永久のお別れを言ったらとても悲しむでしょうから。オーストリア人は、それほど礼儀正しい人種でもなければ、とても快活であるというわけではありません。でも、ウィーンにはさまざまな国の人々が住んでいて、私は自分にあつた小さな社会を作り上げてきました。もちろん、友人の数は少ないにせよ、私は他の場所で、これほど素晴らしく、分別のある人々を見つけられないと思うのです。私は、友人たちと多くの時間を一緒に過ごしました。ご存知のように、私は楽しい会話こそ、人生で一番大きな幸せであると思っていますのです。ウィーンには、スペイン人たちもいて、皆スペインに昔から伝わっているような快活さと、感情の豊かさを併せ持っています。きっと、国全体が彼らのように陽気で、感情を豊かに表現するのだと思います。私は、そんなスペインのようなところで自分の人生を終わらせられたら、他は何も望まないでしょう。

私の知り合いの貴婦人たちは、皆優しく、私が旅を続けると決めて以来、私に会うと必ず涙を流します。もちろん、私もこれから大変な思いをするであろうことを思うと、あまり穏やかではいられません。会う人は皆、これから先の困難を語っては、私を怖がらせるのです。ユージーン王子⁴⁹は、ご親切にも、ドナウ川の氷が溶けるまでここにいるようにと説得するのに、ありとあらゆることをおっしゃいました。雪が解けて、水上を旅するほうが良い、だとか、ハンガリーの家は冬向けにできていないので、ブダとエセックの間などでは、休むところも見つけられずに3,4日旅を続けるはめになるかもしれない、だとか。そして、平原は一面雪で、寒さがとてもひどく、たくさんの旅人が死んでしまうというのです。こうした恐怖は、私の心にずいぶん大きな影響を残しました。

⁴⁸ Frederick 6 世, 1671-1730.

⁴⁹ Prince Eugene of Savoy(1663-1736) ペーテルヴァラドの戦いにおけるオーストリア総司令官。

おそらく王子は私に本当のことを話してくださったのでしょうし、もっとよく知っている人など他にいないでしょうから。

私がこんなに素晴らしい人の名前を出したら、きっと王子にちよくちよく会うことができたとか、そういう特別なことを言うのではと思われるでしょうね。でも実際、私は王子についてはあまり話したくないのです。ちょうど、ヘラクレスがオンファリーの宮廷について語りたくないのと同じです⁵⁰。他の人々が、偉大な人の弱さを思う時に、どれほど慰めを得ているのか私にはわかりません。おそらく、人々は、その偉大な人が自分たちと近い程度に、思えるからなのでしょう。でも私にとっては、完璧な人などいないと思うことは、大変残念なことなのです。さて、若いポルトガル王子⁵¹は、国中の尊敬を集めています。王子は美しく大変に陽気で、また礼儀正しい人なのです。兵士たちは、皆、先の戦争においての、王子の勇敢さ、素晴らしさについて語っています。王子は今、ふさわしい名誉を与えられ、宮廷に滞在しています。

さあ、さよなら妹よ、これは私がウィーンから出す最後のお手紙となるでしょう。私がこの旅を生き抜いたら、また私からの手紙を受け取るかと思います。他の人の言葉を借りて言えば、本当に、私はずっと自分自身を無の存在のように抑えることを学んできました⁵²。でも、私の小さな坊やが苦しむことを思ったら、私の目には母の優しさが、心には穏やかな愛情があふれてくるのです。

P.S 私はリッチ夫人に手紙を書いたのですが、あの冷たい反応からすると、どうやら手紙がお気に召さなかったようです。おそらく、何もしないほうがよかったのでしょうが、私も夫人のばかげた質問や想像に、あからさまに機嫌を悪くしてしまいました。確かに、悪気はなかったのですが、自分だけのものにしておきたい珍しい出来事が、たくさんあったのです。リッチ夫人は、私が他の旅行者のように嘘をつかないので、怒っているのです。きっと、夫人は私に、人食い人種の話や、頭が肩の下にあるような人々の話でもしてほしかったのだと思います。いずれにせよ、どうぞ夫人をなだめてあげてください。

22. アレクサンダー・ポープ 様

1717年1月16日 ウィーンにて

私は大急ぎで旅支度をしていて、あなたへお返事する時間がありません。が、あたかも山の裂け目に登ろうとしている人のごとく、厳粛な調子で、友人たちに別れを告げるべきなのだと思います。ここで人々がする、ありとあらゆる恐ろしい話を信じるのなら、きっとそうすべきなのです。実際、今のお天気はといえば、出かけられるようなものではありません。同時に、私は凍え死んで、雪の中にうずもれるのを恐れています。そして、私がこれから通るハンガリー

⁵⁰ ヘラクレスはリディアの女王オンファオリーの宮殿で奴隷となっていた。

⁵¹ Dom Manuel of Branganca(1697-1736), ペーテルヴァラドの戦いにおける戦士。

⁵² Nicholas Rowe(1674-1718) の言葉。

を略奪している、タートル人たちに連れ去られるのを。もちろん私たちはかなりの護衛をつけていますから、戦闘の只中にあっても、物珍しい光景を見て楽しむことができるかもしれません。私の旅がどのように進むのか、全く神のみぞ知ることです。これをこっけいに言うと、こんな具合です。あなたは天の神々から、私についての啓示を受けることでしょう。

どうかウィリアム・コングリーヴ氏⁵³に、手紙が着いたとお伝えください。そうして、私からさよならを伝えて、もし私が生きていたら、お手紙を書きます、と。どうぞ同じことをリッチ夫人にもお伝えくださいね。

23. マー夫人へ

1717年1月30日 ペーテルヴァラドにて

かわいい妹よ、私たち家族は、この冬の厳しさにもかかわらず、無事にペーテルヴァラドに到着することができました。(私たちは、寒さに対して十分な毛皮をあてがわれていたのです。)それに、前もって調べておくことによって、私たちはまあまあ宿を確保することもできたのです。私は、この旅について散々聞かされていた恐ろしい話を思い出すと、笑わずにはられません。それは皆、ウィーンの優しい友人たちが、私をなんとか冬の間に引きとめようとした、その結果の話にすぎなかったのです。たぶん、私の旅行記を簡単にお話しても面白いかもかもしれませんね。なんといいても、あなたには全く未知の土地ですから。それに、普段ドナウ川を下るほうを好むハンガリー人たち自身にとっても、ほとんど通ったことのない道すじであるのです。私たちは、幸運にも平年のこのあたりの気候よりは良いお天気の中、旅をすることができました。そうはいっても、雪がとても深かったので、私たちは馬車をそりの上に固定して進まねばなりません。こうすると、とても滑らかに簡単に道を進められるので、急ぎで旅をする時の最良の方法であると思います。

私たちは、1月の17日、ウィーンを発って2日後に、ラーブという場所へやってきました。夫が私たちの到着を知事に知らせると、すぐに一番良い家が用意され、武器を持った駐屯兵たちがやってきました。私たちのいるところの門には警備がおかれ、非常に敬意のこもった取り扱いを受けたのです。知事や、他の役員たちも、すぐに夫のもとへきては、お伺いを立てました。テメシヴァルの司教⁵⁴も大変に礼儀正しく私たちのもとを訪れ、翌日の食事に招待してくださいました。私たちは旅を続けなければならないので、それを断りますと、冬の果物がたくさん入った籠をいくつかと、新鮮な若い雌鹿の肉やさまざまな種類のハンガリーワインが届けられたのです。これは、この国の高位聖職者の力、またはこの王国で何世代も続いている、歴史あるナダスディ家⁵⁵(独立運動等した、有名な一族)の力であると思います。司教はとてもきちんとした、

⁵³ William Congreve(1670-1729) 復古劇の最も優れた作家で、風俗喜劇の完成者。

⁵⁴ ルーマニア人 Timisoara Count Nadasdy (?-1730)。

⁵⁵ Nadasdy 家。独立運動等で活躍した、有名な一族。

陽気で快活な老人でした。ハンガリーの習慣に従い、腰帯に届くほどの白い立派なあごひげをたくわえていました。

ラーブは強大な町で、駐屯兵や要塞によって守られています。また、長いことオスマン帝国と神聖ローマ帝国間の国境地帯でした。ちょうどドナウ川とラーブ川が合流する地点にあり、ラーブ川から名前を町の名をとっています。非常に開けた平原の国です。この地は、まず 1594 年、ムラット 3 世⁵⁶の時代、シナン・パシャ⁵⁷に導かれたトルコ軍によって、押さえられました。裏切り者の名を着せられた当時の知事は、後ほど皇帝の命で打ち首にされたといえます。1598 年、シヴェルツェンベルク伯爵とニコラウス伯爵の 2 人⁵⁸が、奇襲によりこの地を取り戻しました。その時以来、今度は神聖ローマ帝国領となりました。しかし、トルコ人は 1642 年、策略によって（農民の格好で兵士の隠れている手押し車を引いて、侵入しようとしたのだそうです。）もう一度この地を取り戻そうとしたのです。大聖堂はとても大きく、素晴らしい建物ですが、私がこの町で見た特筆すべきものといったら、この大聖堂だけでした。

私たちはラーブ川の反対側にあるコモラの町を出て、18 日には Nosmuhl という小さな町に入りました。そこは、本当に狭い町でしたが、ここでも何とかある程度の宿を確保することができました。その後二日間、このコモラとブダの間にある、世界で最もきれいな平原を旅しつづけました。この平原は、まるで舗装でもされたかのように平らで、とても肥沃なのです。ところが、その大部分は、オスマン帝国軍と皇帝軍との長い戦いのせいで、ひどく荒れ果てていました。この荒廃は、またレオポルト皇帝による、あの残酷なプロテスタント迫害によって引き起こされた、市民戦争⁵⁹のせいでもあります。あの皇帝は、どこかに敬虔さというものを忘れてきたようなお人でした。本来は、とても情け深い性格だったのです。ところが、自分の良心をイエズス会に預けると、哀れな被征服民のハンガリー人たちに対しては、トルコ人がキリスト教徒たちに対したのよりももっと、残酷でひどい行為をしました。戴冠の誓いや信仰をためらいもなく捨てると、数多くの条約に屈したのです。本当に、ハンガリーを旅するほど、気が滅入ることはありません。なぜって、以前は栄えていた帝国について考えてみたり、素晴らしい場所が見捨てられているのを見たりするからです。

これはまた、今のブダの状況についても当てはまります。以前は王家の居住地であったブダへ、私たちは 22 日の朝早く到着しました。当時最も美しい建物であったと言われる王宮は、いまや完全に破壊されていました。先の包囲以来、要塞とお城を除いて、町の大部分は全く修復されていません。お城には、今

⁵⁶ Murad ,1546 - 95.

⁵⁷ Sinan Paşa, ?-1596. 司令官。

⁵⁸ Adolf von Schiwarzenberg (1547-1600) と Count Palffy Nikolaus (1552-1600) の 2 人が活躍した。

⁵⁹ レオポルト 1 世が、ハンガリー独立運動、それに引き続いてプロテスタントを迫害したことについて触れている。

の知事であるリーガル将軍⁶⁰という大変立派な方が住んでいらっしゃいます。将軍はすぐに私たちに会いにいらして、ご自分の馬車でお宅まで私たちを連れて行ってくださいました。そこで、私は将軍の奥様に、あらゆる素晴らしいおもてなしを受けました。ブダはドナウ川の南側、低い丘の上に位置しており、このお城はさらに高い場所にあります。そのため、町全体がとてもよく見渡せました。塀といったものはなく、ものすごい数の小さな家々、いやむしろ小屋がありますが、これは人々が下層階級の町と呼んでいるところだそうです。知事は、1万2千人の軍隊がいるので大丈夫ですよ、と私に言いました。この町は、私の目にはとても奇妙に映りました。何千もの家が、列をなし、くっつき合っただけで並んでいるのは、遠くから見ると、まるで旧式の藁葺きテントに見えます。どれもみな、あばらやと、地下室のような部屋から成り立っていますが、それは夏と冬それぞれの住居のようでした。

ブダは、1562年、スレイマン大帝⁶¹によって最初にオスマン帝国領となりました。そしてすぐ、翌年ボヘミアのフェルディナンド1世がこの地を奪ったのですが、また1529年、駐屯兵たちの裏切りによりスレイマン大帝が取り戻しました。その際、この地はハンガリー国王ジョンに委任統治され、彼の死後は息子に残されました。ところが、息子がまだ小さかったため、フェルディナンドがこの地を再び包囲し、皇太后はスレイマン大帝に助けを求めざるを得ない状況に、追い込まれてしまったのです。スレイマン大帝はやって来て包囲を解きましたが、町にはオスマントルコの軍隊が残ることとなりました。そして、皇太后に宮廷を移すように命じたのです。やむなく皇太后も、1541年、スレイマンに服従したのでした。その後、1542年、ブランデンブルグ使節、1598年のシヴェルツェンベルク伯爵、1602年のラスワーム将軍、1684年の皇帝軍の司令官であったロレーン公爵などに率いられた包囲によって、この町はオスマン帝国にたびたび抵抗しました。1686年、粘り強い抵抗の末ついにこの町をオスマン帝国から勝ち取りましたが、時の知事が殺されてしまいました。ブダを失うことはとても大きなことで、トルコ人はこれを大いに悔やんだといひます。結果、その翌年スルタン・メフメット4世⁶²が退位に追い込まれてしまいます。

私たちは、23日になるまで、アドムとフォドウォルの町を通り抜ける旅に、出かけませんでした。この二つの町は、トルコ人の手にあった際には、かなり重要な町でした。町のすべてが破壊されている、というわけではありませんが、町の中にトルコ風の塔がいくつか残っているのが、当時の名残です。この地方は、木々がうっそうと茂っていて、ほとんど人が訪れるところではありません。ですから、私たちはものすごい数の野鳥を見ました。野鳥たちは、銃におびえることなく、老いて眠りにつくまでここに住んでいるのです。

25日に、私たちはモハチュ⁶³にやって来ました。そして、この近くの野原へ

⁶⁰ Maximilian Ludwig Regal,? -1717.

⁶¹ Süleyman (1494-1566) 在位 1520-66.

⁶² Mehmed (1642-92) 在位 1648 - 87年.

⁶³ ドナウ川沿い、オスマン帝国との大きな戦いがあった場所。1526年8月29日、スレイマン

案内され、若いハンガリー国王が、軍隊と自身の命を失った場所なのだと説明されました。国王は、スレイマン大帝から逃れようとして、溝でおぼれて死んだということです。この戦いは、オスマン帝国がハンガリー中心部へ入ってくる契機となりました。他に私が通り過ぎてきた、それほど目立ったもののない小さな村の名前を一つ一つ挙げるのはやめにしましょう。でも、これだけは言っておきますしょう。私はいつも、暖めてくれる暖房設備と、豊富な雌鹿や野鳥、豚などの肉を得ることができていますが、ハンガリーに住んでいる人々の多くは、それほど楽な暮らしをしていません。それでも、お金こそないものの、森や平原は、生きていくのに必要なものは豊富に与えてくれるようです。ハンガリーの人々は、私たちに必要なものは、たとえどんな立派な馬だろうと、何でも無料で差し出すようにと命じられていました。しかし、夫は、貧しい人々にこのような命令を下して、さらに苦しめようとはしませんでした。むしろ、私たちが人々からいただくものについては、常にかんりの価値を与え、お金を支払ってきました。人々は、予想外の夫の寛大さにひどく驚いた様子でした。たぶん、このような扱いをほとんどされていないからでしょう。そして、私たちが去るときには、贈り物として、何羽もの太ったきじなどをくれたのです。人々の衣服は、とても粗末なもので、太陽の下で乾かされたただの羊の皮でできています。それに似たような種類の帽子、靴を身につけています。ご想像どおり、人々はこんな格好で何冬も越しているのです。ほとんど、お金を得る機会というものもないのです。

26日に、身の回りのものや馬車ごと、私たちは凍ったドナウ川を渡りました。対岸では、ヴェテラー二大将⁶⁴が私たちを出迎えました。大将は大変礼儀正しいやり方で、私たちに、数マイル先にあるご自身のお城で一晩過ごすようにと招待してくださいました。そして、エセックまでの道のりは、きっととても大変な旅になるに違いないとおっしゃられるのです。事実、大将のお話は全くの本当でした。木々がまばらで通りやすいところには、恐ろしい数の狼が群れをなして、大変危険なのです。しかしながら、私たちは、何とか無事に夜遅くエセックに到着しました。そこで、ベオグラードの将軍に急使を送るのに、1日ほど滞在したので、私は1日町を見て回る機会を得ました。エセックは、それほど大きくはないかわりに、美しく作られ、守りも堅固です。トルコ人の支配下にあったときは、とても豊かで人口も多く、貿易の中心地として栄えていました。ドナウ川に流れ込むドラバ川に沿って、できた町です。そこにかかる橋は、世界でも類を見ないものとされてきました。8000歩ほどの距離で、かしの木で作られています。1685年に、レスリー伯爵によって街中が灰と化した際に、この橋も燃えてしまいましたが、またトルコ人によって建てられ、補強されました。ところが、1687年の戦いの際にトルコ人がこの橋を見捨て、今度はデュネウォルト伯爵が皇帝のために所有することとなりました。それ以来、

大帝がハンガリーを破り、その後 1687 年 8 月 12 日ロレーン公爵がオスマン帝国軍を破った。

⁶⁴ Count Veterani (Julius Franz, 1666-1736)

橋はハンガリーを支持するものの1つとして、残っているのです。28日に、私たちは地元の有力者たちが多く住むとても大きな町、ボコヴァを訪れました。この町は、私が前にあなたに説明したのと同じようなやり方で、建てられています。そこで私たちは、地元軍の大佐とお会いしました。氏は、私たちをあちこち連れまわさず、すぐにご自身のお屋敷へ案内してくださいました。そこで会った氏の奥様は、とても快活なハンガリー人女性で、姪御さんと娘さんも非常にかわいらしい若い娘たちでした。氏のお宅は、3つか4つのあばらやを1つにして、出来る限りきれいで便利な様子にした、そんな雰囲気でした。ハンガリー人の女性たちは、オーストリア人たちよりもずっと整った顔立ちをしています。ウィーンにいた美しい方々は、皆この国の出身なのです。女性たちはたいいきれい、格好も整っています。こちらの女性たちの衣装は、私にはとても魅力的に思われました。氏の奥様は、体に合った、クロテンの毛皮のついた真紅のベルベットのガウンをはおり、長いスカートは足先まで垂れていました。袖は腕の形に沿い、まっすぐな形です。コルセットはといえば、前もって、金や真珠、ダイヤモンドのついた、小さな二列の留め金でおさえられているようでした。頭には、帽子をかぶっていましたが、これは片側に垂れ下がる金のふさで縁取られており、クロテンか何かの上等の毛皮がついています。夫妻は、とてもきちんとした食卓を整えてくださいました。そこでの会話も、私にいわせると、非常に礼儀正しく面白いものでした。その後夫妻は、ご親切にも、私たちを途中まで送ってくれたのです。

さらに、29日にペーテルヴァラドに到着すると、私たちは駐屯軍のすべてを統括する司令官に出迎えられました。そして、司令官のお宅の一番良い部屋をあてがわれ、皇帝の命により大変なおもてなしを受けました。オスマン帝国との国境での歓迎会の調整がつくまで、私たちはここで待つこととなります。エセックからの夫の急使が、けさ戻ってきたのです。急使は、将軍のお返事が入った赤の縞子織の入れ物を持っており、ペーテルヴァラドにいる通訳が、その返事を訳しました。それによると、スルタン⁶⁵は夫に対して敬意をもってもてなすことを約束し、オスマン軍の護衛のある場所までおいでいただきたい、というものでした。すぐに、夫は、ペーテルヴァラドとベオグラードの間にあるベツコという小さな村に、また急使をやりました。そうして、私たちはその返事を受け取るまで待っているのです。

大事な妹よ、以上とても珍しいの旅の様子の一部を書きました。あなたがこの退屈な説明にうんざりしたのではないかしら、と私は少し心配です。でも、これは私が通り過ぎた町々の歴史の一部を、あなたにお話したかっただけで、私が読んだ成果を殊更に自慢したかっただけではないのです。これまでも、そして常に、私はこのようなことを避けてきています。特に、あなたがその町の話、私と同じくらい良く知っていると思う場所については。ですが、ハンガリーは、あなたにとって全く新しい世界であると思うのです。そこで、あなた

⁶⁵ Ahmed (1673-1736)、在位 1703-20。時のスルタンである。

がこの地の様子を楽しみつつ読んでくれるかもしれないと、考えました。最近の最も良い文献資料⁶⁶から、書こうと努めたつもりです。ですから、たとえ気に入らなくても、がんばって我慢して読んでくださいね・・・。

この手紙は、すぐにウィーン経由で送らせるという約束になっています。

24. アレクサンダー・ポープ様

1717年2月12日 ベオグラードにて

ペーテルヴァラドから、あなたに長いお手紙を差し上げるつもりでした。本来なら、そこで3日か4日ほど滞在することになっていたからです。ところが、ここベオグラードの将軍が、大変急いで私たちに会おうとなさいました。夫が、私たちにいつ護衛を送ってよこすのかを知りたい、とつかわした急使を、靴を脱ぐ間も与えずに、またすぐ送り返してきたのです。私が手紙を書きたいからといって、旅を止めるわけにはいかないのです。次の日、私たちは駐屯軍の大將と、神聖ローマ帝国軍と地元ハンガリーの人々を合わせたかなりの護衛に守られ、ペーテルヴァラドを出発しました。皇帝は、こうした人々の連隊をお持ちですが、本当のことを言えば、彼らは兵士というよりも、略奪者といったほうが良いかもしれません。彼らに給料は支払われず、自分で武器と馬を調達するようになっています。常備軍にはとても見えず、むしろ放浪のジプシーやたくましい乞食のようです。

さて、ハンガリー中に多くいる、セルビア人について、一言申し上げざるを得ません。セルビアの総大司教はカイロにいます。もともとは、セルビアはギリシャ教会なのです⁶⁷。ところが、人々の詳しい知識がなかったために、セルビアの僧侶たちは、いくつかの新しい説を人々に押し付ける機会を得たのです。僧侶の仲間は神聖なる髪とあごひげを伸ばし、ちょうどインドのヒンズー教徒のような姿をしています。彼らは、一般平信徒たちの持っているお金のすべてを相続し、その代わりに、天国への正式な入国許可証なるものに判を押し、保証しているのです。信徒たちの妻や子供は、家と牛しか受け継ぐことができません。他の数多くの場合は、ギリシャ正教式のやり方に従っているようです。

さて、余談をしていて、カルロヴィッツ平原を通り過ぎた時の話をしていませんでしたね。ご存知のように、ユーージーン王子が、オスマン帝国軍に対して大きな勝利を得た、一番最近の戦いのあった場所です⁶⁸。その名誉ある多くの血が流された日は、まだ最近のことです。そのため、平原にはいまだに、埋葬されていない人や馬、らくだの頭蓋骨や死体が散らばっています。これほど多くの人間の遺体を見て、私は大変恐ろしく思いました。そして、殺人に理由を与え、価値あるものにしてしまう、戦争の不当さについて考えるに至りました。ちっぽけな土地をめぐる競争するほどの欲望が、人間の不条理さを表してい

⁶⁶ Paul Rycaut, *History of the Turks* を参照して書いたものと思われる。

⁶⁷ 1557年、セルビア教会はギリシャ教会から独立した。

⁶⁸ 1699年のカルロヴィッツ条約で、オーストリアがオスマン帝国からペーテルヴァラドの支配権を奪った。

るように思います。たとえ、どれほど立派な理由をつけようとも、その戦争のために、これほど実り豊かな広い大地が、人の住みつくことなく見捨てられているのです。もちろん、戦争は人間の習慣的行為となり、もう避けられないものでしょう。しかし、一般的にいて人間の本質とは対極にある戦争、そのなりたちを説明できる、もっと大きなものはあり得るのでしょうか？私は最近、ホブズ氏⁶⁹の「戦争は自然の状態なのである」という説に傾倒しかけています。でもそれゆえに、私は、もし道理という言葉が常識を意味しているとするれば、(私はそう思っているのですが)人間の性質は不条理ではない、と結論付けたいのです。このような考えに対する、素晴らしい議論はたくさんあることと思います。でも、ここであなたにそのような面倒なお話をするのはやめにして、代わりに私の旅について簡単に記しておきましょう。

ベツコという、ベオグラードとペーテルヴァラドの間にある小さな村で、私たちはイエニチェリ⁷⁰の隊長に出迎えられました。その際、神聖ローマ軍と、それを100人以上上回るオスマントルコ軍がおりました。本当は、將軍はちょうど同じ数ずつ、兵士を送ることを約束されていたのです。おそらく、神聖ローマ兵たちの、恐れをなした様子をご覧になれば、お分かりになるかと思いますが。オスマントルコ軍は、自分たちが100人ほど優勢だからといって、たとえ神聖ローマ軍と一緒にだとしても向かっていくようなことはない、と私はよく聞かされていました。それでも、私は彼らが立ち去るまで、とても居心地の悪い思いをしていました。誓約があるにもかかわらず、何か小競り合いでも起こるかもしれない、と恐れたのです。

その後、私たちはベオグラードへやって来ました。ベオグラードは雪が深く、道のりも大変困難でした。東をドナウ川に、南をサヴァ川に囲まれて、非常によく守られた町で、以前はハンガリーの境界線となっていました。スレイマン大帝が、最初にこの地を押さえたのです。その後、バイエルン選帝侯に率いられた皇帝の軍によって取り戻され、2年間ほど皇帝のものとなりました。さらにまた、オスマン帝国の大宰相の軍が奪い返し⁷¹、その後トルコ人たちは、最大の注意と技術力により、この地を守っています。パシャ、つまり將軍に率いられた、オスマン帝国で最も勇敢なイエニチェリを数多く駐屯させて、より堅固な場所としているのです。この將軍という表現は、もしかしたら適切ではないかもしれませんが。というのは、実際のところ、ここでは大変に権威をもつイエニチェリのほうが、將軍以上に権力をもっているからです。きっとあなたは、同時に以下のような話をすると、それは反乱といえなくもない、とおっしゃられるでしょう。ここからほんの何時間かの距離にある、ペーテルヴァラドの知事の話です。

ペーテルヴァラドの知事に伺ったところによると、ベオグラードの住民も兵

⁶⁹ Thomas Hobbes, *Leviathan*(1609) 無神論とマテリアリズムを論じた著作。

⁷⁰ オスマントルコの歩兵隊。

⁷¹ 1521年、オスマン帝国がベオグラードを初占拠。その後2世紀にわたり、ベオグラードはオーストリア・オスマン帝国間を行き来した。

士も皆、戦争にうんざりしてしまい、2ヶ月前に反乱を起こして、自身の将軍を殺してしまったというのです。なぜなら、将軍は、タタル人が神聖ローマ帝国国境を略奪するのを許すのに、500英ポンドのお金を賄賂として受け取っており、それがついに明るみに出たからでした。私たちは、このような人々の性質を、大変良いものだと思います。ところが、実際ここへ来てみると、知事が間違っただ話をしていたことが分かったのです。さあ、こちらが本当の話です。将軍は、部下のイエニチェリたちが神聖ローマの国境へ侵入しようとするのを引き止めたと言う理由で、イエニチェリの反感を買ってしまったのです。イエニチェリたちは、将軍が敵のスパイであると思い込み、それをアドリアノーブルのアフメッド3世に訴えたそうです。ところが、返答がなかなかこないために、兵士たちは自分たちで騒ぎを起こし、将軍をカーディーとムフティー⁷²の前に引きずり出しました。そして、そこで非常に反抗的なやり方で、裁きを要求したのです。1人の兵は「何故将軍は異教徒を守ったのか」と叫びました。また別の者は「何故将軍は敵にお金を渡したのか」と。人々の目的をすぐに理解した将軍は「君たちは質問をしすぎている」と静かに答えたのです。将軍にはたった1つの命しかなく、その命が答えとならねばなりません。人々は、法の言葉が告げられるのを待たずして、三日月刀(アラビアの刀)を持ち、将軍に襲いかかりました。そして、わずか数分のうちに、将軍をずたずたに切り裂いてしまったのです。現在の将軍は、その人々を罰しようとはしていません。むしろ逆に、その将軍虐殺にかかわった人々を、自分たちの能力を十分発揮できる勇敢な者としてたたえています。そして、駐屯兵たちにお金をやるようにと見せかけたり、小規模のハンガリー遠征をさせ人々をいたずらに苦しめたりしています。この遠征で、イエニチェリたちは哀れな貧しい家々を燃やしています。ご想像どおり、私は、このように傲慢な兵が支配する町で、あまり居心地よく感じられません。本当は、私たちはここに一晚滞在したら、すぐに解放されるだろうと思っていました。ところが、この将軍が、アドリアノーブルから返事が来るまでは、と私たちをここに引き止めているのです。返事が来るのには、1ヶ月近くかかるかも知れないというのに困ったことです。

しばらくの間、私たちは、しかるべき人の持つ、このあたりで最も良い家に滞在しています。かなりの数のイエニチェリが、私たちの護衛をしています。私の唯一の楽しみといえば、私たちをもてなして下さるアフメッド・ベイと話をすることです。このベイという称号は、神聖ローマ帝国でいうところの伯爵というようなものだそうです。そのお父さまも立派な将軍で、アフメット・ベイ自身も最もきちんとした東洋式の教育を受けてきたといえます。その教育により、アラビア語とペルシャ語を完璧に使いこなし、またその筆記においても非常に優れています。人々はアフメッド・ベイを、エフェンディ(アフメッド・ベイ・エフェンディ)と呼んでいます。このような優秀さにより、アフメ

⁷²カーディー(kadı) イスラム法官。地方行政官としての役割も兼ねていた。ムフティー(mufti) はイスラム法の権威者であり、イスラムの観点から裁きを下した。

ッド・ベイは素晴らしい地位に昇りました。そんな中でも、アフメット・ベイはオスマン宮廷における何とも危険な栄誉のすべてよりも、簡素で、静かな、安全な生活を好むという姿勢を保ちつづけてきたのです。アフメッド・ベイは毎晩私たちと夕食を共にされ、大いにワインを飲まれました。おそらく、アフメッド・ベイが私と自由に話を交わすことができ、とても喜んでしている様子を、なかなかご想像できないでしょう。

アフメッド・ベイは、私に数多くのアラビアの詩を説明してくださいました。私の印象では、私たちの詩とは韻律が違って、たいてい交互に韻をふんでおり、非常に音楽的な響きです。詩における愛の表現は、とても情熱的で、生き生きとしています。私は、すっかり詩を気に入ってしまいました。もしここに数ヶ月滞在することになったら、ぜひともアラビア語を学びたいと思っています。また、アフメッド・ベイはあらゆる種類の詩の本でいっぱいの、素晴らしい図書館をお持ちです。そして、私はここで、人生における最も楽しい時間を過ごしています、とおっしゃっていました。私は、自分が大変素晴らしいと思っているペルシア語の物語⁷³を思い起こし、アフメッド・ベイを偉大な学者ともみなせるのでは、と思っています。最初、アフメッド・ベイは私がペルシア語を理解していると思っていました。

私たちは、しばしば、私たちの習慣の違いについて、特に女性たちが閉じ込められている状況について、議論しています。アフメッド・ベイは次のように私に言いました。「女性を閉じ込める、などということに何の利点もありませんよ。ただ、妻が夫をだます時に、それを誰も知らない、という利点がありますかね」。アフメッド・ベイは頭が良く、キリスト教にも深い関心を示し、宮廷人たちよりもずっと礼儀正しい様子です。大変に私を楽しませてくれるのです。また、好奇心から、私たちの召使にアルファベットの文字を教えさせ、今ではアルファベットをきれいに書くこともできます。でも、いくらこのような楽しみがあるからといって、ベオグラードから出たい、という私の望みは完全になくなってはいません。もちろん外の天気はといえば、きっとグリーンランドの気候だってこんなに寒くはないだろう、と思ってしまうほど寒いのです。私たちは常に暖房をつけています。それでも、部屋の窓が内側から凍っているのです。

さて、私がこの手紙を送ることができるかどうかは、神のみぞ知ることです。でも、私の気持ちを解放するためにもと思い、この手紙を書きました。どうぞ私の手紙が届かない、などと私を責めないでくださいね。

⁷³ この頃、フランス・イギリスでアラビア語の物語が流行した。18世紀初頭に、アラビアンナイトのフランス語訳が出たところから流行に火がつく。

25. フランセス・ヘウェット⁷⁴様

1717年4月1日 アドリアノーブルにて

親愛なるヘウェット夫人においては、きっと私が楽しかった文通をやめてしまった愚か者だとお考えでしょうね。しかし、ここに至って、文通を続けるのは、私の力の及ぶところではなくなってしまいました。この8ヶ月というもの、私は上へ下への大忙しで、急ぎの旅をしているか、避けようのない宮廷行事への出席をしているのです。ご存知のように、こういった務めの中には、たいていほとんど楽しみがみつかりません。ところが、私はといえば、旅が大好きです。ですから、楽しみがない、とか、ハンガリーやボヘミア、神聖ローマ帝国全土、さらにヨーロッパじゅうのオスマン帝国領地すべてを通り抜けたことなどについて、文句をいう余地はありません。文句があったとしても、取るに足りないことです。何よりも、皆が無事であったこと。それを私は神に感謝したいのです。私自身や、私の家族たちが疲れきっていたことは仕方がないと思っています。私の幼い坊やなどは、これまでになく元気ですもの。本当にオスマン帝国は、世界で最も素晴らしい場所の1つであると思います。これまでに私の見たものはすべて目新しいものばかりで、まるで毎日オペラの新しい1幕を見ているかのようです。おそらくあなたの興味をひかないであろう場所や、こちらの作法などについていちいち申し上げるのはやめにしましょう。ただ1つ私が望むのは、できるだけ頻繁に、あなたのまわりの世界ではどんなことが起こっているのか私に知らせてほしいということです。(頻繁にというのは、できるだけ定期的に、ということなのですが)この手紙を受け取るまでに、あなたには、私にとっては全く手付かずの、6か月分の出来事があるのです。もしも書いてくださるなら、とてもたくさん話題があることでしょうし、それが人目にさらされようとはありません。(ここにいる私が、あなたの手紙を誰かに見せびらかして自慢するのは、とうてい無理ですから。)そして、手紙を書くことがあなたにとっても楽しいことであればと思うのです。私の願いが受け入れられ、あなたが手紙を書いてくださることを私は心から祈っております。

26. ウェールズ皇太子妃⁷⁵様

1717年4月1日 アドリアノーブルにて

私は、これまで、キリスト教徒たちがギリシャ・ローマ時代に行ったような、大変な旅をしてまいりました。しかし、私はその苦勞をものとも思いません。なぜなら、そのような苦勞のおかげで、こうして陛下に全く未知の土地についてのご説明を差し上げられるのですから。皇帝陛下の使節や、他のイギリス人たちは、ニコポリスへはたいていドナウ川を下って行っていました。今この河は凍っているのです。夫は早く陛下のお役に立ちたいと思っており、その河

⁷⁴ Frances Hewet. メアリーの独身時代の文通相手で、この手紙は本来のトルコ書簡集にはなかった。

⁷⁵ Wilhelmina Caroline of Ansbach. ウェールズ皇太子(後のジョージ2世)妃。

を通過して楽に行けるようになるまで待つて、旅を遅らせるようなことはしたくないと申ししていました。そこで私たちは、森で覆いつくされたセルビアの荒地を横切りました。だいたいこのあたりの土地はとてもやせていますが、人々は大変勤勉な様子でした。ところが、農民たちにたいする圧政があまりにひどく、人々は家や畑を捨てざるを得ないようです。農民はイエニチェリたちの格好のえじきとなっているのです。私たちには、そのイエニチェリが500人ほど、護衛につきました。通り過ぎる村々での、イエニチェリの傲慢な様子を見るにつけ、私は毎日のように涙しそうになりました。

7日間森の中を旅して、ニシュへやって来ました。ここは以前セルビアの中心地だったところで、モラバ川のそばの平原に位置しています。そのため本来は空気がとてもきれいで、土壌も豊かなのですが、今はまったくそうではなさそうです。こちらのワインの質は大変に素晴らしく、人々は地面に穴を掘ってワインを保管しています。街には、保管するほどの場所がないからです。これほど豊かであるという事実は、運良く圧政者の側は、あまり気づいていないようでした。ところで、私はニシュで、また同情を禁じえないところに出くわしました。ベオグラードからここへ来るのに、私たちに20台ほど馬車を提供してくれた人たちが、全くお金も払われずに帰されてしまったのです。馬のうち何頭かはびっこになり、殺されてしまったものもありました。それなのに、その償いもなかったのです。人々は泣きながら兵舎のまわりに集まり、大変悲しげに髪やひげをかきむしりました。しかし、傲慢なイエニチェリたちから、何発かお見舞いされただけで終わりました。私がどれほどこの光景に心を動かされたか、とても陛下にご説明申し上げられないほどです。できることなら、私が自分のお金を、人々に払ってあげたいと心から思いました。でも、そんなことをしても無駄なのです。きっと、イエニチェリは良心のとがめすらなく、人々からそのお金を奪い去ってしまうのですから。

さらにここから山を越えて4日ほど旅し、今度はソフィアにやって来ました。この都市は、イスクル川のそばの美しい平原に位置し、遠くを山々が囲んでいます。これほど美しい風景は、この世と思えないほど素晴らしいところです。この都市自体は、とても大きくまた人口も非常に多いようです。ソフィアには温泉もあり、その医学的な効用で有名です。ソフィアから旅を再開すること4日間、ロドピという雪で覆われた山脈を越え、今度はフィリップポリスという町に着きました。この町は、エプロス川近くの少し高くなっているところにあり、ギリシャ人が住みついています。ここには、未だに古代のキリスト教会が残っていました。僧侶や、裕福なギリシャ人たちが住んでいますが、人々は大変注意深くその豊かさを隠し、貧しいかのように振舞っています。それは不都合なことですが、安全のためにはやむをえないようです。私は、このアドリアノーブルあたりは、世界中で最も素晴らしい場所だと思います。あたりの丘には野生のぶどうの木が生え、ずっと春のような気候で、すべてのものが華やかで豊かに見えるのです。しかし、雪や霜で覆われているイギリスと異なり、一見良さそうなこの気候ですが、実は比べ物になりません。なぜなら、イギリス

に住む私たちは、人々の自由に幸せを感じる素晴らしい王に治められている、という恩恵を受けているからです。私たちの王は、支配者というよりも偉大な父親のように、人々から尊敬を受けられているからです。

ずいぶん話題がそれてしまい、きっと妃殿下もお疲れになられたことと思います。私の手紙が届いて、読んでいてお疲れになったら、どうぞ好きなように短くしていただいて、いらぬ部分があれば暖炉で燃やして下さって結構です。

私は陛下に対して、限りない尊敬の念を持っています……。

27 . . . 夫人⁷⁶へ

1717年4月1日 アドリアノープルにて

親愛なる . . . 夫人、今、私は全く新しい世界に入りました。見るものすべてが新しく、ぜひあなたに手紙を書いてお知らせしようと思ったのです。願わくは、私の手紙の中に何か目新しいものがあることを。当たり前のことばかり書いている、とお叱りを受けることがなければと思います。ですから、私たちの、うんざりするような旅の話はやめにしたいのですが、ソフィアで見たものだけは、省くわけにはいきません。

ソフィアは、オスマン帝国の最も美しい都市のうちの1つで、温泉があることで有名です。人々は、娯楽のため、または健康のために温泉へ行くのです。私は、ぜひ温泉を見たいと思い、ソフィアに一泊することにしました。お忍びで行くつもりでしたので、あえて現地の馬車を雇ったのです。こちらの馬車は、私たちの国の馬車とは全く違っていますが、この国で走るのには大変便利なものです。ここは、気温がとても高いので、窓にガラスをはめ込むと、大変厄介なことになります。そこで、大部分がオランダの馬車のように、丁寧に塗られた木の格子窓がついています。馬車の中は、かごや花束で飾られることが多いようです。また、馬車全体が絹の赤い布で覆われ、たいいてい刺繍や房飾りまでついているので、乗っている人が、外からはほとんど見えなくなってしまうのです。たぶん、貴婦人たちは、退屈しのぎに格子窓のすきまから外を覗き見ていることでしょう。この馬車は、4人乗っても大丈夫な大きさですし、クッションも十分なので、長いこと座っていても問題ありません。

かくいう私もこの覆い付きの馬車に乗り、朝の10時に公衆浴場、ハمامへと向かいました。朝だというのに、そこにはもうたくさんの女性たちが来ていました。ハمامの建物は、窓のない石造りのドーム形ですが、天井に明かり取りの小窓があるので、そこから光は十分に入ってきます。このような部屋が5つほどくっついてハمامを構成しており、一番手前のものが少し小さく、サロンとして機能しています。入り口には、もちろん女性の門番が立っていました。上流階級の女性たちの常として、門番には1クラウンから10シリングくらいを渡しているようで、私も忘れずにこの習慣に従いました。入り口の次の部屋

⁷⁶ R.Halsband による匿名化。おそらくリッチ夫人に宛てたものだと思われる。

は、とても広く、やはり大理石造りです。そして、ぐるりと大理石のソファが置かれていました。この部屋には、4つほど冷たい水が出ているところがあるのですが、水はくぼみに流れ落ち、くぼみにたまった水は、さらに細い溝へと流れていきます。その溝は隣の部屋へと続き、このようにして湯気が隣へ運ばれていくのです。隣の部屋は少し小さめで、同じような大理石のソファがありますが、硫黄の温泉から出る湯気でとても暑く感じました。あまりに暑くて、服を着てはられないほどです。他の二つの部屋も温泉ですが、1つは冷たい水の出る蛇口を備えており、部屋を行ったり来たりしては、自分の好みで体温を調節できるようになっていました。

私は、旅の習慣もあり、乗馬服を着ていました。おそらく、こちらの女性たちの目には、大変奇妙に映ったことと思います。しかし、誰一人として、そのような驚きや、無遠慮な好奇心をあらわにしませんでした。それどころか、とても礼儀正しく、親切に私を迎え入れてくれたのです。私の知る限り、ヨーロッパのどの宮廷でも、女性たちは、見知らぬ外国人にこれほど礼儀正しく振舞ったりしません。この浴場には、きっと200人くらいの女性がいたと思われるのですが、軽蔑の眼差しや嘲笑などは全く見られませんでした。そうした態度は、私たちの集まりで、誰か知らない人が場にふさわしくない服装で現れたときなど、必ず見られるものです。女性たちは、私に繰り返しこう言いました。皆の言った言葉、“Güzelle,pek güzelle”これは、「きれい、とてもきれい」という意味だということです。一番立派そうなソファには、クッションと素晴らしい敷物がしかれ、貴婦人たちが腰をかけていました。もちろん、その後ろには、女奴隷たちが控えています。しかし、人々の間に、身分を示す衣服の違いはなく、皆生まれたままの姿です。つまり、わかりやすい言葉でいうと、全くの裸で、いかなる体の美しさも欠点も、全く隠されていないありさまでした。でも、本当に淫らな笑いを見せるものや、下品なしぐさをする人はいなかったのです。皆、まるでミルトン⁷⁷が聖母マリアを表現した時のような、大変な優雅な様子で動いているのでした。あたかも、グウィド⁷⁸やティツィアーニが描いた女神たちのように美しい女性も、たくさんいます。肌はつやつやと白く輝き、唯一の飾りは、長くふさふさした、美しい髪の毛でした。その巻き毛はゆるやかに肩にかかり、真珠やリボンがその髪に輝いている様子は、まさに美の女神そのものだったです。

ここで、私は今までたびたび考えてきたことが正しかったと感じました。つまり、皆が当たり前のように裸になる状況では、顔はほとんど注目されないのだということです。私が大変に感心したのは、輝くような肌の美しい姿の女性たちでしたが、顔立ちに限って言えば、他の女性たちより劣ることもありました。これほどたくさんの裸の美女が、思い思いに過ごしているのを見たら、き

⁷⁷ John Milton(1490-1579) イギリスの詩人。『失楽園』(1667)を著す。

⁷⁸ Guido Rumi(1575-1643)ボローニャの画家。

っと、ジャーヴェス氏⁷⁹の画才が大いに高まることでしょう。おしゃべりをしている者や、手仕事をしているものがあると思えば、コーヒーやシロップ水を飲んでいる者もいます。多くの者がクッションの上に横になっている傍らで、奴隷娘たち(たいていは17、18のかわいらしい少女たち。)が巧みな指さばきで髪の毛を編んでいるのです。一言で言うならば、これはロンドンのコーヒーハウス⁸⁰の女性版でしょう。ここでは、街中のニュースや、噂話などが語られるのです。女性たちは、週に一度くらい、こうしてハナムへやってきては楽しんでいるようでした。そして、少なくとも4、5時間ほどは時間を過ごしていますが、風邪をひくこともありません。皆、お湯を浴びたら、すぐに涼しい部屋に入ってくのですが、そのことに私は、大変驚きました。

さて、この並み居る美女たちの中で、最も身分の高そうに見えた女性が、私に向かって、そばに来て座るようにと示しました。そして、湯を浴びられるよう、私の服を脱がそうとしたのです。脱ぎたくないことを説明しようとしたのですが、皆はとても熱心に服を脱がせようとしています。ついに私も一計を案じ上着を開け、私のコルセットを見せました。それを見ると、皆納得したようでした。コルセットを自分で取ることができない、と思ったからでしょう。どうやら、私の夫がこんな妙な器具を身に着けさせているのだ、と口々に言っていたようでした。私は、女性たちの礼儀正しさや、美しさに、すっかり魅了されてしまいました。ですから、もっと一緒に過ごすことができたらどんなに良かったでしょう。でも、私たちは、翌朝早くから、また旅を続ける予定でいたのです。そこで私は大急ぎで、ユスティニアヌス⁸¹の教会を見に走ったのでした。ところが、残念なことに、その教会は思っていたよりもぱっと受けませんでした。まるで、石のかたまりか何かのような、不恰好な様子だったからです。

さて、このへんで、お別れを言いましょ。きっと、今回のお手紙では、あなた見たことのないような様子のものがあって、お楽しみいただけたのではないのでしょうか。きっと、どんな旅行記にも、書いていないことだと思うのです。男性旅行者がこういった場所に入るのは、死に等しいことですし、どうしたって旅行記に書き残すことはできないでしょうから。

28. アベ・コンティ⁸²様、

1717年4月1日 アドリアノーブルにて

さて、私はあなたがおっしゃった約束をきちんと守り、こうしてお手紙を書いております。ところが、これから私が申し上げることが、あなたの好奇心を

⁷⁹ Charles Jervas (1675-1739) アイルランドの画家。アレクサンダー・ポープの友人で、1710年にメアリーの肖像画を描いた。

⁸⁰ この頃、ロンドンでは知識人や作家がコーヒーハウスに集まり、創作活動をしたり議論したりしていた。いわゆる情報の発信地であった。

⁸¹ ローマ皇帝ユスティニアヌス(AD527-65)聖ソフィア大聖堂(現アヤ・ソフィア)を建てた。

⁸² Antonio Conti(1677-1749) イタリアの学者。1715年のロンドン訪問中、メアリーと出会う。後に1717-18年にかけて、再びロンドンを訪れた。

満足させるのかどうかは全くわかりません。ただ言えるのは、できる限りあなたのご要望にお答えしたいと言う気持ちで、一生懸命に質問したり、観察したりしているのは確かです。

私たちは、実は、オスマン帝国の人々の礼儀作法や、宗教などには、とても不十分な形でしか関わり合ったことはありません。この地域には、商人などもあまり訪れることもないからですし、商人たちは自分たちの商売にしか関心を示さないでしょう。旅行者はといえば、滞在期間が短すぎるため、人々についての正しい情報を知らせるようなことはできないのです。トルコ人たちはとても高慢で、商人などと親しく話を交わすことはありません。そこで、商人たちはトルコ人についてはわずかな情報を得るにすぎず、しかもたいていそれは間違っています。ちょうど、ロンドンのグリーク・ストリートの小屋に住むフランス難民⁸³がイギリス宮廷の様子を書いてみせるように、ほとんど、正しい様子など伝えることができないのです。

私たちがベオグラードからここまで、陸でたどってきた道のりは、公人が使うような道のりではありませんでした。セルビアの荒れ果てた森は、あの悪名高い盗賊たちの隠れ家ですし、彼らは50人くらいの集団で人々を襲うのです。そこで、私たちは身を守るために、護衛をつける必要があったのでした。そのあたりの村はとても貧しいので、強制的な兵隊の力でもってしか、村から必要なものを得ることができません。実際、イエニチェリは、人々の貧しさに対して、全く哀れみを持っていないようです。見つけた羊や家畜などは、持ち主さえ尋ねずに、皆殺しにしてしまいます。持ち主はといえば、打たれるのを恐れて、反抗しようとしません。生まれたばかりの子羊、卵を産むガチョウや七面鳥、すべてが等しく虐殺されているのです。私は、モリベウスが自分の家畜の群れについての希望に対して、文句を言ったのを聞いたかのように思いました⁸⁴。将軍が旅をしていたら、事態はさらにひどくなります。この抑圧者たちは、農民たちの食べ物を食べ尽くしても満足しません。こうして一行は食べ物を詰め込むと、その後にはひどく傲慢な、いわゆる「歯の捧げ物」が行われます。つまり、肉を食べる栄誉を与えてくれる、そのために使われる、歯を捧げることです。非常に無謀なことのよう思われますが、その通り行われます。そのような行いは、政府の軍隊が墮落していることの表れではないかと思えます。なぜなら、彼らの宗教では、私たちの宗教と同じく、そのような野蛮な行いを全く許してはいませんから。

私は、運良く、3週間ほどベオグラードに滞在し、名高いエフェンディ、つまり学者と共に過ごすことができました。エフェンディたちは、宗教と法律の両方の世界で、高い位についています。実際、この2つは1つにまとめられていて、弁護士と僧侶はほとんど同義語となっているのです。営利的な活動や、

⁸³ 1685年のナントの勅令廃止以来、非カトリック迫害政策が取られ、フランスからイギリスへプロテスタントの難民が押し寄せた。

⁸⁴ ヴェルギリウス著、Eclogueより。

モスクの収入は、この人たちの手の内にあります。大宰相は、たいていの場合、一般の人々の遺産を奪うことができるのですが、このエフェンディたちの土地やお金には、手をつけようとしません。こうしたお金や土地は、横取りされずに、そのままエフェンディたちの子供に受け継がれるのです。ただ、エフェンディたちが宮廷に地位を占めるようになったり、パシャの称号をもらったりすると、こうした地位的特権は失われることとなっています。ですが、実際には、地位や財産を失うような例は、ほとんどありません。あらゆる知識を得て、さらに帝国で一番の財産をもつエフェンディたちが、どれほど力を持っているか、容易にご想像できるかと思います。革命においては、イエニチェリたちが立役者となりますが、実は彼らこそが革命を行う陰の張本人なのです。例えば、エフェンディたちは先のスルタン、ムスタファを退位に追い込みました。その権力が絶大であるのは、皆が良く知っていることで、スルタンすらもエフェンディたちのご機嫌をとるのにご執心なのです。

さて、ずいぶん長々と話題がそれてしまいましたね。私は、そのエフェンディである、アフメッド・ベイと親しく話したことについて、あなたにお伝えしようとしていたのです。アフメッド・ベイのおかげで、私は、人々の宗教や、おそらくキリスト教よりも細かであろう礼儀作法などについて、学ぶ機会を得ることができました。私はアフメッド・ベイに、イングランドの宗教とローマとの違いを説明しました。すると、アフメッド・ベイは、偶像崇拜をせず、また聖母マリアを奉ったりしないキリスト教徒がいることを知り、喜びました。「パンとぶどう酒を、キリストの血と肉に変質させる」というカトリックの教義が特に印象深かったようです。私たちの宗派を集めて比べると同時に、私はこうも確信しています。もしも私たちの友人のクラーク氏⁸⁵がここで伝道することができたなら、きっと、容易にイスラムの普遍性をキリスト教信仰に結びつけることができるでしょう。なぜなら、キリスト教の主張も、アフメッド・ベイのものとはほとんど違いがないからです。また、ウイストン氏⁸⁶なら、ここで大変優秀な使徒となるでしょう。おそらく、あなたがクラーク氏にこんな話をしたら、きっとクラーク氏の熱意がますます大きくなることでしょう。どうぞ、クラーク氏にお伝えください。まずは、学ぶための語学力が必要です、と。

イスラム教もまた、キリスト教のようにさまざまな宗派に分かれています。ですから、その最初の教えは、多くの解釈によって無視されたり、あいまいにぼかされたりしているのです。このような状況を見ると、私は、すぐに謎や目新しさを求める人間の傾向について、考えざるを得ません。カトリックでいうところのルター派、カルビン派などを思い起こさせます。イスラム教の宗派も、お互いに反目し合っています。しかし、エフェンディたちをより良く知ると、最も明らかな説はこうではないかと思うのです。つまり、彼らは、明らかに合

⁸⁵ Samuel Clerk(1675-1729) 形而上学者・道徳学者。 *A Discourse of National Religion* を著す。

⁸⁶ William Wiston(1667-1752) 形而上学者。クラークの友人。

理主義的有神論者と言えます。この説は、伝える側のさまざまな関心に従って創造されていますし、何千もの異なった説がそれぞれの人々に信じられています。エフェンディの中には、神を信じないなどと宣言することによって、自分の賢さを主張するような愚かな人はほとんどいません。(アフメッド・ベイは、一人もいないと言いました。)また、オスマン帝国の歴史について書いたポール・ライコート氏は間違っていると言えます。なぜなら、ライコート氏はたいいていエフェンディたちの教義(英語でいうと「教義」という言葉は、「我々との間の秘密」というふうに訳せます。)を、無神論的と言っているからです。実のところ、彼らは合理主義的な有神論者であり、ではその不信心さがどこから来るかといえば、預言者たちを冗談の種にしたりするところにあります。アフメッド・ベイは、はっきりとそんな態度は取りませんでした。しかし、ある部分では、イスラム教の教えからはずれることにためらいはないようでした。例えば、私たちのように、自由にワインを飲む時など。そこで私は、アフメッド・ベイに、どうしてそのように自由に行動するようになったのか、と尋ねました。するとアフメッド・ベイは、神の創造物はすべて良いものであり、人間が利用できるように作られているからだと答えました。しかしですね、とアフメッド・ベイは続けて言います。「飲酒を禁じるのは、大変に立派な教えです。特に、越えることもある一般の人々にとっては。ですが、預言者は、十分自制心のある者までを規制するおつもりなどないはずです・・・。」実のところ、悪い噂になるのは避けようということで、アフメッド・ベイは公の場では、決してお酒を飲まないとのことでした。エフェンディたちの間で、このような考え方は、よく見られますし、飲む場であるなら、ほとんどの人がお酒を我慢することはできないようです。

アフメッド・ベイは、もし私がアラビア語を理解できたなら、コーランを読むのは、きっと大変面白いだろうとおっしゃってくれました。コーランは、私たちが非難するような無意味なものでは全くなくて、その書かれた言語で読むと、とても純粋な道徳的なものであるのです。以前に私は、偏見を持ったキリスト教徒が、コーランを非難するような話をしているのを聞きました。おそらく私たちが読むコーランの翻訳は、ギリシャ正教の僧侶たちが、悪意を持ってその真意をゆがめ、作ったものから来ているに違いありません。本当に、ギリシャ正教の僧侶ほど無知で、墮落した人間はいません。しかし、私はギリシャ正教の僧侶たちには、あのローマカトリックの大迫害に対するほどの嫌悪を感じませんでした。事実、ギリシャ正教は、法皇を認めないというその理由だけでローマカトリックの側から異教徒と呼ばれ、そのように扱われているのです。

フィリップポリスでは、キリスト教の1宗派であり、パウロ派を名乗る人々に会いました。人々は私に聖使徒パウロと呼ばれる古い教会を見せてくれたのですが、これはローマにある聖ピエトロ教会と同じ様式で建てられたものでした。ローマ人たちもまた、聖パウロを、他の使徒たちに比べて高い地位におくのを忘れなかったようです。

さまざまな宗教の中でも、アルバニア人たちのものが最も特異なように思い

ます。もともとは古代マケドニアの出身で、マケドニアという名前をなくした今でも大変な誇りと忍耐力を持ち続けています。アルバニア軍はオスマン帝国随一の在郷軍で、イエニチェリの一部を占めています。イエニチェリというのは歩兵で、私たちは通り過ぎる町々で、彼らの護衛を受けました。アルバニア人は、自分たちのお金で衣服や武器をまかなっているようです。多くは、白く粗末な、しかし清潔な衣服をまとったたくましい若者たちで、肩にはとても大きな武器をかかえています。まるで重さなど何でもないかのようです。そして、隊長が荒っぽい調子で、歌を歌いだすと、皆それに合わせて歌いだすのです。アルバニア人は、ちょうどキリスト教徒とイスラム教徒の間にいます。どうやら論争などには慣れておらず、キリスト教とイスラム教、どちらが優れているのかは判断できないと言っています。しかし、どちらをも拒否できずに、とても慎重に両方の掟に従っているようです。つまり、金曜日にはモスクへ行き、日曜日には教会へ行くのです。そうして、最後の審判の日は、正しいほうの預言者が我々を助けてくださる、と言いついて言っています。要するに、この世にいるうちには、どちらかに決めることはできないということです。私には、これほど自分たちの判断に控えめな意見をもっている人たちを、見たことがありません。以上、私が見聞きした、さまざまな宗教についての話でした。さて、ローマカトリックについて意見をのべる前に、あなたのお許しを頂きませんでしたね。でも、あなたは大変公平なお方ですし、真実を崇拝なさると同様、ひどく厳格な教会を非難なさることを私は知っています。その点では、私たちは同じ考え方でしたね。

そろそろ、私がこの国の遺跡について、お話するのを期待されていることでしょう。ところが、アドリアノーブルには古代ギリシャの遺跡はほとんど残っていないのです。私たちは、トラヤヌス⁸⁷の門と呼ばれているアーチ型の門を通り過ぎました。この門は、皇帝トラヤヌスがソフィアとフィリップポリスの間の山を抜ける道を閉鎖しようとして作ったものと考えられています。が、私には、むしろ勝利の凱旋門だと思われるのです。(もちろん私が何かそういった碑文を見た、というわけではありませんが。)というのは、もしもその道が閉ざされていたならば、他に軍隊が通行できるような道が多くできたはずだからです。もちろんフランドル伯爵ボードワン1世が、コンスタンティノーブルを勝ち取った時にこの困難な道を越えた、という話もあるので、ゲルマン人たちがこの困難に足止めされたとは考えられません。オスマントルコ軍が行進しやすいようにと、大変な努力でできる限り広い道が作られたのは本当です。アドリアノーブルとベオグラードの間には、でこぼこや水溜りは全くありません。実際のところ、ベオグラードには、厚板でできた頑丈な橋は必要ないのです。このあたりの断崖は、言われていたほどひどくはないように思いました。山々のふもとに、Kiskoi という小さな村があり、私たちはそこに滞在しました

⁸⁷ Marcos Ulpius Trajanus(AD53-117) スペイン出身のローマ皇帝。領土をペルシャ湾まで広めた。

が、ブルガリアの農民たち、つまりキリスト教徒たちが住んでいる村でした。人々の家は、小屋にすぎず、太陽のもとで乾かされた土でできていました。人々は、オスマントルコがやってくる数ヶ月前には、家を捨て、山に入ってしまう。オスマントルコ軍が、家畜を殺すなどして村をひどく破壊してしまうからです。こうやって事前に用心しておくことで、ある程度の豊かさをひっそりと手に入れることができるようです。なぜかといえば、山に入ることで、逆に村中に何でも好きな種をまくことができるからです。人々はたいがい、とても働き者の農夫であるのです。私はここで、何種類かの大変おいしいワインを頂きました。こちらの女性たちは、色とりどりのガラスビーズで飾られた衣服を着ていて、肌の色はやや褐色です。さて、私は今あなたにおもしろそうなことを全部お話ししました。そして、たぶんもっとお話できることと思います。コンスタンティノーブルに着いたら、面白そうなお話を集めてみたいと考えていますので、また私からの便りを受け取ることになるでしょうね…。

29. ブリストル夫人へ

1717年4月1日 アドリアノーブルにて

私は、あなたのお言葉を決して忘れてたりなどはしていません。ですから、この地へ来てまず私が最初にしたのは、あなたがおっしゃったものについて見てみることでした。でも、残念ながらお望んでいたものは、見つけられなかったのです。申し訳ありません。ただ言えるのは、ロンドンとこのあたりのドレスはかなり違うということです。同じようなドレスでも、カフタン⁸⁸やマントが組み合わされているのです。これからコンスタンティノーブルに行った時にも、またいろいろと調べてみたいと思っています。現在の宮廷がおかれている中心の街ですから、何よりも素晴らしいドレスが見られるでしょう。

私がこちらへ来る数日前、スルタンの皇女⁸⁹が結婚したそうです。結婚するとき、トルコの女性たちは贅の限りを尽くします。花嫁はとても豪華な行列で、花婿の家へと案内されていくのです。このスルタンの皇女は、ペーテルヴァラドの戦いで亡くなった前大宰相⁹⁰の妻であった人でしたが、妻といっても契約上だけで、実際には、大宰相と一緒に住むことはなかったようでした。しかし、大宰相の財産の大部分はこの皇女のものとなるのです。大宰相はハレムにいる皇女を訪れることができましたし、国中で一番美しい顔立ちでもあったので、皇女の気持ちをひきつけていました。皇女が、2番目の夫となるもう50歳近いその人⁹¹の顔を見たとき、涙せずにはいらなかったようでした。彼は立派な人ですし、スルタンの側近でもあります。でも、それでは、まだ13歳の少女の目には魅力的には映らなかったのでしょう。

この国の政府は、軍隊と、すべての権力を持つ大宰相の言いなりになり、イ

⁸⁸ 中東風の、丈が長く袖もゆったりしたローブ。

⁸⁹ スルタン・アフメッド3世の娘 Fatma(1704-33)。

⁹⁰ Ali Paşa(1667-1716) 1713 - 16年の間大宰相を務めた。

⁹¹ İbrahim Paşa(1666-1730) チューリップ時代を築いた大宰相。

エニチェリの顔色をうかがっています。私たちのいる世界よりも、服従の程度が大きいようです。州知事は、必ずひざまずいて口をききます。誰かの行動についての噂が、すぐにコーヒー店でばらまかれます。(というのは、あちこちにスパイがいるのです。)悪い噂が飛ぶと、そのコーヒー店は取り壊され、仲間が皆拷問にかけられます。余計な物音、つまり万歳を叫ぶ群衆や、無意味な小冊子、政治に関する議論など全くありません。

自由がひきおこす重い病

ひどい力が及ぶ ただ高貴だというその理由だけで

もちろん罪のない人の名前が呼ばれることもなく！この国で、知事が人々を 3 回も不快にさせるようなことがあれば、知事がスルタンの庇護のもとにいようと、引きずり出されます。人々は彼の手足や頭を切りきざみ、宮殿の門の前に投げ出しておきます。そうして、スルタンはといえば(人々は皆、スルタンに対して、限りない尊敬の意を表します。)自室の中で震え上がっています。もちろん、自分の側近の仇を討とうとしたりはしません。これが、法ではなく意思をもって統治を行う、地球上で最も絶対的な独裁主権者の実態なのです。

私は、心からこう願わずにはいられません。英国議会在、盲目的に服従する公使をオスマン帝国に送り込んでくれることを。そうすれば、最もはっきりした、強い専制的な政府というのを、人々に素直に伝えられるよい機会となります。おそらく、スルタンや人々、宰相たちが実はどんなひどい様子をしているかどうかを判断するのは難しいでしょうが。政治について、私はまだまだ意見を述べることができそうですが、きっとあなたも私以上にいろいろお考えになられていることでしょうね。

昨日、私はフランス大使夫人⁹²と一緒に、スルタンがモスクへお参りするのを見に出かけました。スルタンの前に、頭に白い羽をつけたイエニチェリの一団が護衛として行進してきました。その後にはスイパーヒー(これは騎兵です)が行進し、さらには宮廷の警備兵が続きました。警備兵たちは皆とても体格が良く、色とりどりの素晴らしい衣服を着ていましたので、遠くから見ると、まるで花壇に咲くチューリップのようでした。警備兵の次は、イエニチェリの隊長で、銀色の糸でふちどられた紫色のビロードの服を着ていました。隊長の馬はといえば、これもまた大変きれいに着飾った 2 人の奴隷に引かれています。隊長の隣には、黒人宦官が(おそらくご存知とは思いますが、この人が後宮の女性たちの長です。)おり、その服はといえばクロテンの毛皮と、(権力を示すかのような、背中にモスクワきつねの毛皮がついた緑と濃い黄色のものでした。宦官の黒い顔に、大変よく合って見えたのです。)その毛皮は、おそらくスターリング金貨にしたら、かなり価値があることでしょう。宦官は、数々の宝石で飾られた立派な馬に乗っています。宦官の次には、美しく飾った馬がさらに 6 頭も続きました。宦官の側近のうち、一人は旗棹に金を持ち、もう 1 人は銀の

⁹² Madeleine-Françoise de Gontaut-Biron(1698-1739) 夫 Jean Louis'Usson Marquis of Bonac が 1672 - 1738 年大使となり、1717 年初め頃オスマン帝国へやって来た。

コーヒー入れを捧げ持っていました。もう1人は、宦官が座るための銀の椅子を頭にのせて運んでいました。ここでは一人一人の服装やターバンの違いで身分が表される、という話を延々としたらきっと退屈になってしまいますね。とにかく、何千もの数の人が、それぞれ華やかで美しい様子で歩いてきますので、これほど素晴らしい行進はめったにみられないものだと思います。スルタンは、40歳くらいの立派な顔立ちで、大きな黒い目をした、大変優雅な雰囲気をお持ちの方です。しかし、その優雅さの中にも厳しさを併せ持っています。スルタンは、たまたま、私たちが立っている窓辺のそばで止まりました。そして、おそらく私たちが誰であるかを伝えられたようで、大変お優しい様子で私たちのほうをご覧になりました。そのため、私たちは十分にスルタンを眺めることができましたし、フランス大使夫人も、スルタンが大変に立派な人らしい、という私の意見に同意しました。

そのフランス大使夫人と私は、よく会っています。夫人はまだお若く、もしも堅苦しくうんざりするような儀式や礼儀作法がなかったら、私と夫人とのお付き合いももっと楽しいものとなるように思います。でも、夫人は護衛をつけることに大変満足なご様子です。彼女の護衛は、イエニチェリが20人のほかに、案内役の紳士などとてもたくさんおります。護衛なしに、名誉ある貴婦人という称号に伴う馬車を使わずに、私のもとを訪れるよりは、死んだほうがましだと思ってるかのようなのです。一番私がいらいらするのは、夫人がこのような形で私の元を訪れている限り、私もまた同じ作法にのっとって夫人を訪問しなければならないということです。いずれにせよ、私たちはお互いに親しくなっています。先日も、私たちは、金の屋根なし馬車に乗って街を一回りしました。前には護衛の者たちがつき、後ろの車両には召使の者たちが乗っていました。人々にとっては、これまで見たことのない、またこれから先も見ることもないような光景であったかもしれません。2人の若いキリスト教国の大使夫人が、これまで同時にこの国にいたことはないのですから。おそらく、私たちの行くところ人々が群れをなした、とご想像でしょうが、実際は本当に静かなものでした。もしも人々が私たちをじろじろ見たりしたら、護衛のイエニチェリたちは、法に触れるなどとためらうことなく、その三日月刀で人々を切り捨てたでしょうから。正直なところ、そのイエニチェリにもいくつか良い点があります。仕える相手に対しては、とても忠実で熱心だということです。常に尊敬し、どんなときでも主人のために戦う用意ができています。フィリップポリスで現地のイエニチェリによって護衛を受けていた時、私はこの一面を証明するような、好例を目にしました。たまたま、私はその日の夕食に、鳩をいただきたいと言いました。その言葉を受け、私のイエニチェリのうち1人が、直ちにムフティーのもとへ行き、何ダースか持ってくるようにいつけたのです。その哀れな男は、もう取りに行ったけれども、何も見つからなかったと言いました。私のイエニチェリは、職務に忠実なあまりにひどく怒り、ムフティーを部屋に閉じ込めてしまいました。そして、私の命令に従わないのは、死に値すると言ったのです。しかし、私への尊敬から、そのイエニチェリ自らはムフテ

イーを処罰しようとはしませんでした。そして、大変に厳肅な面持ちで私のもとにやってくると、あの裏切り者をどう処罰いたしましょうか、と尋ねました。お望みならば、首を持ってきます、と言うのです。この一件は、イエニチェリ軍団の絶対的な力をよく表していると思います。イエニチェリたちは皆誓いをたてた兄弟なのです。ですから、お互いの身に起こった事に対しては、たとえカイロだろうとアレppoだろうと、世界中どこであろうとその復讐をするのです。この神に誓った同盟意識のため、イエニチェリは大変に力を持っており、宮廷に仕える者でさえ、イエニチェリにはおべっかをつかっています。アジアでは、裕福な男は皆、自分自身の土地を守る為にも、半ばむりやりにイエニチェリ軍団に入れられるようです。さて、ずいぶん長いこと書きましたので、そろそろ終わりにしたいと思います。こんなに長い退屈な手紙は6ヶ月に1回も受け取れば十分だ、と置いていらっしゃるでしょうね。でも、たまにだからこそ、私はこうして長々と書いたのです。きっとお許しいただけるとは思いますが・・・。

30. マー夫人へ

1717年4月1日 アドリアノーブルにて

大事な妹よ、私は神にこう祈っています。どうかまわりで起こっている出来事を、あなたが常に私に知らせてよこすように、と。なぜって、私のほうも、見たものや、あなたが聞いたがっているようなもの、面白そうなものすべてを見つけ出そうと努めているのですよ。ところがあなたのほうは、街は退屈極まりない様子、といつも繰り返すだけです。確かに、あなたにとっては毎日目新しいことが起こらない街の生活は、単調なものであるかもしれません。でも、私は皆の知らせからいつも2ヶ月くらい遅れているのですから、あなたには飽き飽きしたことで、こちらでは新鮮で、面白いことかもしれないのです。ですから、どうぞもっといろいろなことを書き送ってください。私のほうも、あなたが有難がるような、この地の目新しい話をたくさん書くようにしたいと思います。でも、珍しい話よりも、あなたが今の私の姿を見たら何よりも驚くでしょうね。私は今、トルコ風の服装をしているからです。きっとあなたは、私と同じように、このドレスを気に入ってくれるだろうと思います。近いうちに、ドレスを着た私の絵を送るつもりです。しばらくここにいるうちに、私もすっかりこちらのしきたりが身についたのでしょうか。

まず私のドレスは、一着のズボンから始まります。それはとても長く、足先に届くほどです。私たちのベチコートよりも長く、完璧にきれいに足を隠してくれます。色は薔薇色、薄いダマスク織りで、銀色の花が刺繍されているものです。靴は、金の刺繍が入った、白い子ヤギの皮でできています。さて、上着のほうの説明に移りましょう。上着は、縁を刺繍した、美しい白い絹の薄い織物です。袖は、幅が広く、腕の半分くらいの長さほどに垂れ下がっています。そして、襟元は、ダイヤモンドのボタンで留めるようになっています。でも、胸元がきれいに見えるように工夫されています。次はトルコ語でエンターリと

呼ばれるベスト。四角に近い形で、白と金のダマスク織りです。とても長い袖がつき、濃い金色の飾りがついています。これもまた、ダイヤモンドか真珠のボタンで留めるのです。私のズボンと同じくカフタンも、共布で私の体型に合った形で作られました。床につくほどの長さで、長いまっすぐな袖がついています。その上から、指4本分ほどの幅の帯を締めます。帯はたいてい、ダイヤモンドや他の宝石などで飾られています。それほど高価でない帯は、宝石ではなくて、みごとなサテンの刺繍が施されているのが常なのです。いずれにせよ、留め金はダイヤモンドでなければなりません。ジュッペと呼ばれるのはたっぷりとしたローブで、気候によって脱いだり着たりするものです。多くは美しい錦織りの生地で、イタチやクロテンの毛皮がついています。(私のは、緑と金色の織物です。)袖は、肩のあたりまでです。頭の飾りとしては、帽子を身に着けます。これはトルコ語でカルパックと言われており、冬用としては、ダイヤモンドや真珠が施された美しいベルベット生地と、毛皮で作られています。夏用は、明るくて薄い銀色の布で作られるのです。この帽子はたいてい頭の片側にのせ、金のふさ飾りが垂れ下がるようになります。帽子のまわりには、ダイヤモンドがぐるりと飾り付けてあるか(これは何回か目にしました)美しく刺繍されたハンカチをぶら下げるか、どちらかのようなのです。頭のもう片側には、髪の毛をまっすぐに下ろしますが、女性たちは思い思いに髪の毛を飾ることができます。ある者は花、ある者は鷺の羽など、何でも好きなものをつけるわけです。中でも、今一番流行っているのは、本物の花に見えるような、宝石でできた花々をつけることです。つまり、真珠のつぼみ、さまざまな色のルビーの薔薇、ダイヤモンドのジャスミン、トパーズの水仙などをつけるのです。どれも皆美しく飾られ、細工がなされているので、これほど美しい飾りはないと思われるほどです。後ろに垂れ下がった髪は、ふさに分けられ、真珠やりボンなどで編みこまれます。多くの女性たちは、大変豊かな髪をしているのです。

今まで、私はこれほど美しい髪形を、こんなにたくさん見たことがありませんでした。私は、あるご婦人の髪の毛の巻き毛を数えてみましたが、すべて天然で、101もありました。ここで言えることは、私たちの社会で見られるよりもずっと、美しい女性が多いということです。むしろ、美しくない若い女性を見かけるほうが、珍しいのです。世界中で、一番きれいな顔立ちの人たちがいるのだと思います。彼女たちの多くは、黒くて大きな、美しい目の持ち主なのです。きっと、イングランド宮廷でさえも、これほど多くの美を持たないと思うのです。(もちろん、私はイングランド宮廷こそ、キリスト教世界では第一であると信じているのですが。)こちらの女性たちは、眉毛を上手に形作っています。そして、ギリシャ人とトルコ人には、目の内側、そのまわりをぐるりと黒い線で囲むという習慣があります。遠くから、またはろうそくの火のもとでは、目がさらに黒く見えるのです。たぶんヨーロッパのご婦人たちは、この秘密を知ったら大喜びするのでしょうか、そう簡単に分かる秘密ではありません。また、爪は薔薇色に塗っています。これに関しては、私はどうしても慣れることができませんし、きれいだとは思えませんでした。

女性たちの倫理観であるとか、行動について、私は道化役アルルカンであるが如く、ちょっと皮肉って、次のように言ってみましょう。「あなたのもとでそうあるのと同じように……」⁹³トルコ人女性たちは、まあキリスト教徒でないことを除いては、罪など全く犯していません。だいがこちらのやり方に慣れてきた今、私は改めて女性たちの素晴らしい分別に感心すると共に、これまでイスラムの女性について述べられてきた論説が、どれほどばかばかしいものであったか、ということに気づかされます。トルコの女性たちが、私たち以上に自由であるのは見た目にも明らかです。どんな身分の女性も、通りに出る際には、必ず二枚のモスリンを身に着けなければなりません。布は、目以外の顔を全部隠してくれます。外出用のフェラージュというコートは、体をすっぽりと覆い全部を見えなくするもので、どんな女性もこの布とコートなしで外出はできないのです。袖はまっすぐで、指先まで隠してしまうほどで、私たちの乗馬用コートとは全然違います。(冬は厚手の布で、夏は薄手のものか、もしくは絹でできたものを用います。)ご想像どおり、この服装はうまく身分を隠してくれます。身分の高い貴婦人でも奴隷であっても、たいした違いはありません。そこで、万が一通りで、嫉妬深い夫が妻に出会ったとしても、自分の妻だとは分からないのです。もちろん、どんな男性も通りで女性を追いかけたり、触れようとしたりはしませんから。

こうしていつも姿を隠しているのだから、女性たちは、見つかる危険などなしに、自分の好きなことをすることができるのです。密通のため良く使われる手段としては、ユダヤ人の店で会いましょう、と女性から恋人に知らせを送ることで、このユダヤ人の店というのは、私たちの場合でいう、インド人の店のようなもので、大変に便利で、また悪名高いところですよ。ですから、品物を使わない人でさえ、そこへ来ていくらか雑貨を買うのにお金は惜しまず、店先で品物をひっくり返しています。結果、そのような品物は、たいていそんな人たちの家にあるのです。身分の高い女性たちは、恋人に自分の身分を明かすようなことは、めったにしません。身分をあてるのはとても難しいので、半年以上も関係が続いている女性の名前すら、わからないままです。たぶんあなたのご想像通りに、このように、恋人が秘密をばらすのを心配しなくていいような国では、貞節な妻はとても少ないのです。私たちの国では、とても多くの人々の関係が露呈しますし、その後はとても恐ろしい処罰が待っています。どうやらそんな処罰の話は、こちらのご婦人たちには伝わらなかったようです。さらに、女性たちは、夫の怒りなどあまり気にする必要はありません。なぜなら自分自身が財産を持っていますし、離婚の際には、さらに夫から妻へ支払わねばならないお金もあるのです。そんなこんなで、私から見ると、トルコ人女性たちは国で一番自由なように思えるのです。枢密院や大宰相すら、女性には敬意を払っています。もしも皇帝が処刑された場合などでも、ハレム(もしくは女性たちの住

⁹³ Aphra Behn, *The Emperor of the Moon*(1687)の中に出てくる台詞。「月にも道徳心くらいは存在する。」

んでいる宮殿)の特権は処罰の対象になりません。スルタンの未亡人にそのまま残されることになりません。女性たちは、奴隷の女主人であり、その奴隷たちを夫がどうにかすることはできません。ただ、妻が年老いた時、または二人目の妻を娶った時は、その限りではないということです。確かに、法律では4人の妻を持つことが認められています。でも、身分の高い男性でさえ、そのようなことをしている人はいませんし、それで悩んでいる女性もいません。もしも、そんなことが起こって、夫の心が移ったら、夫は愛人を離れた家に住まわせ、「イギリスにもあるが如く」できる限り頻繁に彼女を訪れるようになります。数多くの身分の高い男の人の中で、私の知る限り、唯一たくさんの女奴隷を持っているのが、デフテルダールと呼ばれる地方財務官です。(つまり、家の中でも主人自身に属する部分では、一度女主人に与えられた奴隷であっても、さらにその主人である男性の意のままに動かせるのです。)彼自身は、自由思想家であると言っていますが、いわゆる道楽者とも言えますね。妻は、同じ家に住んでいるのにも関わらず、彼に会おうとはしません。

さて、このように、人間のしきたりというのは、昔の旅人たちが書いたものと、それほど違いはありません。たぶんもっと面白くするには、私がひねり出した習慣をいくつか書くのがいいのかもしれませんが、やはり真実を書くのが一番良いと思います。最後に、私の大事な妹へ誠実な気持ちで手紙を書いている、ということを繰り返しましょう……。

31. アレクサンダー・ポープ 様

1717年4月1日 アドリアノーブルにて

きっと、この手紙を受け取って、何か新しいことが書いてあるだろうと、期待をお持ちでしょうね。というのは、私はこの数百年というもの、キリスト教徒たちが決してしなかつたような旅をしているのですから。旅の間に、私の身に降りかかった一番の事件は、何と言っても乗っていた船が、エブロス川(ギリシャでいうところのマリーツァ川)でひっくり返りそうになったことでしょう。でも、もしも私が、死後も名前は保たれるという名誉に大変関心を持っていたなら、きっとロマンティックな結末を逃してしまったことを、とても残念に思ったでしょうね。なぜって、オルフェウス⁹⁴がずっと昔に何度も歌を繰り返した、その同じ川で死ぬというのはロマンティックな最期ではないでしょうか？

それからまた その時から エブロスの流れはいつでも
偉大なるエブロスよ 流れゆく川よ
オルフェウスの大理石のような首 漂う頭を なでゆく風
寒さに震える唇は それでも声の限りに 叫んでいる

⁹⁴ ギリシャ神話より。オルフェウスとエウリディケは恋人同士だったが、エウリディケがエブロス川で溺れ死んでしまった。オルフェウスはエウリディケを取り戻しに黄泉の国へ行くが、連れ戻す際に後を振り返ってはいけぬといいういつけを破ったため、彼女を生き返らせることができなかつた。

‘ユウリディケ ああ 可哀相な ユウリディケよ’

途切れ途切れの声で オルフェウスは愛する人を呼ぶ

川の土手は 広い川は ‘ユウリディケ’の声に 包まれる⁹⁵

知性溢れるあなたのことですから、きっとこの詩が、たくさんの詩的な言い回しを持っている、ととっくに感じていたかもしれませんね。そして、こんな重々しい哀歌の調子で、世間に語ってみせたのでしょうか？

我々の魂がみな等しいのなら 我々の運命もまた等しくはないのか？

私は、自分をほめたたえる言葉をいつか聞きたいと、心から思っています。が、皮肉なことに、死こそ私にその機会を与えてくれるのでしょうか。

今、私はエブロス川の土手に建てられたこの家で、手紙を書いています。ちょうど私の寝室にある窓の下を、川は流れています。庭には、ぎっしりと背の高い糸杉の木が並んでいます。その木の枝には、かわいらしいキジバトのつがい何組かいて、朝から晩まで、お互いに何やら優しい言葉をささやき合っています。そんな時、どれほど自然に、私の頭上に小鳥たちの言葉や木々の枝が垂れ下がることでしょうか。このように、一度目に見えた景色が、田園詩を作るすべてのひらめきになるような場所で、その景色がどれほど素晴らしいかきっと分かっていたでしょうね。さて、この地方では、気候はだいぶ夏に近づいてきています。アドリアノーブルのあたりは、そこらじゅう美しい庭となりました。エブロス川の土手には、果物の木々がずらりと並んでいて、木陰では、毎晩のように身分の高いトルコ人たちが、楽しそうにしている様子が見受けられます。人々は、ここで散歩を楽しむわけではありません。散歩は、こちらでは娯楽として数えられないのです。そうではなく、木陰で、パーティーを催して楽しむのです。座ってコーヒーを飲んだりできるように、カーペットを広げています。たいていは美しい声の奴隷がいたり、または何か楽器を弾いたりするのです。歩くごとに、楽しそうな人々の小さな集まりがあって、皆が川の流れる音に耳を傾ける様子を、ご覧になれると思います。このような趣はとても普遍的なものですから、こんな感覚を持たない庭師などきっとどこにもいないでしょう。よく、庭師と、その子供たちが土手に座り、何か土地の楽器を弾いているのを目にします。その楽器は、まるで古代ローマ時代のアシ笛のようで、長さの違う何本かのアシでできています。音はとても簡素ですが、実にやわらかい、きれいな音が出ます。アディソン氏⁹⁶なら、この地で、著書にも書いてあるような実験を試みたかもしれませんね。アディソン氏によると、この国の人々の間では、ギリシャやローマの彫刻が見つからず、さらに、そこで見られる楽器などない、とのことでした。年若い少年たちは、お気に入りの羊に花輪を作ってやっては、楽しそうにしています。私が何度も目にしたのですが、羊たちは花で飾られたりしておとなしく座っており、その周りで少年たち

⁹⁵ ヴェルギリウスのラテン語詩。 *Georgic*.

⁹⁶ Joseph Addison(1672-1719) メアリーの友人であった学者・随筆家・政治家。1699-1719の間旅をして、 *Tatler and Spectator* を書く。

が歌ったり遊んだりしているのです。人々が、本を読まないというのでは、決してありません。でも、こういった遊びは昔ながらのものです。私たちイギリスの田舎の若者が、棒を使って遊んだり、サッカーをしたりするのと同じく、こちらの若者たちにとってもごく自然な遊びなのです。気候が暖かく、穏やかなことで、人々はいろいろな運動をすることができるのですが、あまり運動をするという話は聞きません。普通は、この穏やかな気候がもたらすものは、のんびりした心持ちで、多くの人は働くことを嫌がっているようです。庭師たちは、おそらくオスマン帝国の中で、一番幸せな人種だと言えます。なぜって、街を果物や木々でいっぱいにできますし、なんととっても気楽に生きているように見えますから。たいていはギリシャ人たちが庭師となり、自分たちの庭と、小さな家を持っています。そこでは、妻や娘たちが、街中では許されないような、気楽さの中で暮らしています。つまり、私が言いたいのは、ヴェールをかぶらないで生活しているということです。そんな田舎の娘たちは、とてもきちんとして、かわいらしい様子です。木々の下で、機を織ったりして、時間を過ごしているようです。

もはや、私はテオクリトゥス⁹⁷をロマン派詩人として、認めることができません。なぜなら、テオクリトゥスはただ、自分の国の農民たちがどのように生活しているか、という様子を簡単に述べただけに過ぎません。私が思うに、詩の表現を農民たちに押し付け、今ある姿より良いものにと、演じさせたことからなるのでしょう。また、テオクリトゥスはブリトン人として生まれたのから、その詩イディルには、この地では未だに知られていない、脱穀やバター作りなどの表現が数多くあるのです。その他、雄牛に踏みしだかれたとうもろこし、バター作り（これを思い出すと、私はとても悲しくなります。）も、この地では実は全くみられません。

あなたが翻訳なさったホメロス、この地でとても面白く何度も読んでいます。その中に、以前私があまりよくわからなかった、美についてのいくつかの表現がありました。昔の習慣や、過去に流行し、今も残っている服装などについての部分です。この地では、他のどんな国よりも、そんなふうにならずに昔から残っているものがたくさんあるように思うのです。トルコ人は、先進的な国で、多く重んじられている礼儀作法を、無理やり取り入れようと、骨を折るようなことはありません。そんな現在の習慣をひとつひとつここで取り上げるのは、とても退屈になるのでやめておきます。1つだけ言えることは、こちらでは皇女でも、身分の高い女性たちでも、召使たちにかしずかれ、機織りの前に腰掛けて、ヴェールやローブに刺繍をしたりして時間を過ごすということです。こんな女性たちはとても多く、同じような様子を、ギリシャ神話のアンドロマケやヘレネ⁹⁸に見ることができると思います。メネラオス⁹⁹のベルトの様子は、ま

⁹⁷ Theocritus, (?-BC270) 田園生活を賞賛する Idylls という詩を書く。

⁹⁸ Andromache : トロイ勇士ヘクトルの母。Helene : 「トロイの木馬」の物語のもととなった女性。

⁹⁹ Menelaus, ヘレネの夫であるスパルタ王。ミケーネ王アガメムノンの弟。

さに今地位の高い男性が身に着けているものと同じです。幅の広い金の留め具がつき、美しい刺繍がぐるりと施されているものです。ヘレネが顔を覆っていたという雪のようなヴェールは、今でも流行しているようです。また、私は将官たちがその立派なあごひげをたくわえて、日向ぼっこをしているのを良く見かけました。その光景を見ると、私はいつも、トロイ王プリアム¹⁰⁰と顧問官たちを思い出すのです。

トルコ人の踊りはといえば、ちょうど女神ダイアナがイリ川¹⁰¹で歌にあわせて踊った時のようです。女性たちも、自ら踊り、それに続いて若い少女たちが、その踊りを真似て踊ります。彼女が歌うと、少女たちもそれに合わせてコーラスをするのです。その声はとても華やかで生き生きとしており、でも何か優しい調子を持っています。踊りは、最初に踊る女性によってさまざまですが、でもいつも正確なリズムを刻みます。そして、少なくとも私にいわせると、私たちの踊りよりも、どれもずっと素晴らしいのです。私も時々仲間に入りますが、皆をリードするほど上手にはできません。私が参加できるのはギリシャ風の踊りの時で、トルコ風のものとはまた全然違っていました。

たぶん最初にお話すべきことだったのかもしれませんが、実は、東洋風の作法は、私たちにとって奇妙にも思えるコーランの聖句に大きな影響を受けているのです。コーランの言葉は、通常私たちが聖なる言語と呼んでいるものです。乱暴なトルコ語は、宮廷や教養のある人たちが話しているのとはずいぶん違います。学のある人々は、アラビア語やペルシャ語をずいぶんと混ぜて話すので、まるで何か違う言語のように聞こえるのです。身分の高い人、貴婦人に話し掛ける際に、普段使っている言葉を使うなど、大変失礼にあたるそうです。イギリスの場合だと、皆のいる客間で、ヨークシャーやサマーセットシャー訛りで話すようなものでしょう。この違いの上さらに、皆が高貴な言葉と呼ぶ言葉遣いがあります。これは、詩を作る際などに適していて、ちょうど聖句のような表現になるようでした。きっと、そのような表現の一例をご覧になりたいと思っているでしょうね。そこで、ちょうど良い詩の写しを、お送りして、あなたを満足させられるのではと思います。この詩は現在の権力者イブラヒム・パシャが、契約上の妻、若いスルタンの皇女のために作ったものです。今でもイブラヒム・パシャは、付添い人なしに皇女のもとを訪れることができないのです。もちろん、皇女はとっくに嫁入りをすませているのですが。イブラヒム・パシャは知恵も教養もある人です。でも、上手な詩を書けるかどうか怪しい、とあなたは思うかもしれませんね。イブラヒム・パシャは権力者ですし、国中で一番素晴らしい詩人に書かせることだってできるのですが、そうはしませんでした。ですから、この詩は、最も素晴らしい詩の1つとしてあげることができる、私は思うのです。きっと私の考えに同意してくださると思いますが、その

¹⁰⁰ Priam, トロイ王。トロイが落ちた時殺された。

¹⁰¹ アルカディア(古代ギリシャの桃源郷)にあるとされた川の名前。実際はラユニア国(首都スパルタ)のイリ川。

昔王女に捧げられた、あの旧約聖書に出てくるソロモン王の歌に、とてもよく似ているのです。

アフメッド3世の皇女に捧げられたトルコ語詩

第一連

ナイチンゲールが ぶどうの木々の間を 飛び回り
あちらこちらと 薔薇の花を 探している
私は美しいぶどうの木々を眺めようと 外へ出たのだ
すると あなたの可愛らしさが 私の心を虜にしたのだ
黒くて美しい あなたの瞳
だが まるで野生の鹿のように 私を蔑む

第二連

ずいぶん長いこと あなたを私のものにできないまま
非情なアフメッド王は 私にあの頬を
薔薇の花よりも赤い あの頬を 見せてはくれないのだ
私はあなたの唇を奪いたいとは 思っていない
ただ あなたの可愛らしさが 私の心を虜にしたのだ
黒くて美しい あなたの瞳
だが まるで野生の鹿のように 私を蔑む

第三連

哀れな私は こんな詩を作っては嘆く
あなたの目が 私の心を 突き刺す
ああ いつあなたを私のものにできるのだろうか
もっと長いこと 待たねばならぬのだろうか
あなたの可愛らしさが 私の心を虜にしてしまったのだ
ああ 王女よ 鹿のような目をした 地上の天使
私の思い 叶わぬ私の思い
あなたは私の心を いたずらに苦しめているのか

第四連

私の叫びは 天に届く
私の目は あなたを追い求めている
王女よ 私のほうを向いて その美しさを見せておくれ
私は死の世界へ 旅立たねばならないが
あなたが呼んでくれるならば 戻ってこよう
私の心は硫黄のように熱く 燃え上がるだろう
私の命 私の目に映る光 私の王女よ
地に顔をこすりつけ 私は焼けつくような涙を流す
そして 大声で 叫ぶのだ
あなたは私を哀れと お思いだろうか
私のほうを 向いてはくれないのだろうか

この詩を文字通り訳すのに、私は大変苦労しました。もしも、私に通訳人

がいることをご存知でしたら、まず彼らが詩的な感覚を持っていない、ということをご説明しなければなりません。私の意見では、散文を全然異なるある言語に訳すときは、避けようのない間違いを考慮したとしても、中には大変美しい響きが残るのですが、詩ではそうもいかないのです。「鹿のような目」という、人を蔑むような言葉は、英語ではとても快く響くのですが、実は、私が思うには、この愛する女性の優しさと冷たさを同時にとてもよく表しています。ボロー氏¹⁰²は実に公平に、次のように観察しています。我々は、昔の作家の書いた表現を、音の響きで判断してはいけないというのです。当時の人々にとって非常に素晴らしく思えたものが、同時に今の世の私たちには、低俗であったり、奇妙に思えたりするかもしれないからです。あなたはホメロスを変えてよくご存知でしょうから、きっと同じように作品をご覧になっていることでしょう。他の東洋の詩についても、同様の考えをお持ちだと思います。最初の二連の終わりにある繰り返しは、ちょうどコーラスのような役目をしています。昔から大変好まれた、詩の形式です。第三連では、詩の響きが明らかに違ったものとなっています。趣旨が変わり、彼が最後にはもっと情熱的になったように思われます。人々にとっては、このように自分に語りかけることで、自分を慰めるのは、ごく当たり前のことです。特にこのように、ひどく心を奪われていることがある場合には。それに、私たちのように、何か矛盾するような表現でもって、愛の詩を締めくくるよりは、このほうがずっと心に訴えかけてくると思います。最初の行は、季節を表しています。国中がナイチンゲールでいっぱいになる、季節なのです。ナイチンゲールは、アラビア語の物語（トルコ・ペルシャ語の詩の中で）その薔薇へ愛によってこの地では良く知られています。ちょうど、私たちの間でオヴィッド¹⁰³がよく知られており、イギリスの詩人は「ピロメラ¹⁰⁴が歌う」という出だしで詩を始めるのと、同じようなものです。さて、この詩を、私がもしイギリスの詩の形式に形を変えてしまったら、どんなふうになるでしょうか？

第一連

ピロメラが優しい歌を 歌い始める
夜中 王女を思って胸を焦がし
私は 気ままな歌を聞きに 木立へと
そこには 春よりもずっと美しいあなたが
あなたの大きな 鹿のような目は 無限の喜びを奏で
生き生きと輝き 奔放に動く

第二連

私には天から贈り物が約束されているのに

¹⁰² Nicholas Boileau(1636-1711) 近代フランス文学の基礎を築いた人。代表作は *Art Poétique*(1674)。

¹⁰³ Ovid(BC43-AD11) ローマ詩人。

¹⁰⁴ Philomela, Tereux に犯され、舌を切られるも、後に復讐を遂げてナイチンゲールに変身した。ナイチンゲールというとピロメラが連想される。

ああ非情な王女よ あなたがその喜びを 遅らせているのだ
あなたの可愛らしさは 私の心を突き刺す
だがこの痛みを癒そうと 口づけを奪い取ったりはしない
あの瞳・・・

第三連

あなたの哀れな恋人は 嘆きを詩にする
あなたの美しさが ひどい痛みを 与える
いったいいつ 望んでいる至福が 手に入るのか
ずっと長いこと 待たねばならぬのか
待ちつづけ 生き続けられるのだろうか
ああ 美しい王女よ この上なく美しい乙女
苦しむ私を 哀れとは 思ってくれないか

第四連

天は私を哀れに思い その叫びを聞き届ける
目は光を失ったが 目を閉じることも できないのだ
王女よどうか 私のほうを向いておくれ
あなたの恋人が死ぬ前に
私の女神よ 私を呼び 生き返らせておくれ
私の王女 私の天使 私の心からの願いなのだ
私の胸は 至上の火で 燃えている
あなたの美しさに恋焦がれる 私を哀れとっておくれ

2つ目の詩では、筆者が言いたいのではないかと私が思う部分を、文字通りではなく、自由につなげてみました。彼がぶどうの木の美しさを愛でに外へ出て、彼女の美しさの虜となってしまう、という表現を、私は詩を作る上でのフィクションと受け取りました。つまり、庭で彼女を初めて見かけたとき、そこで彼はちょうど春の美しさを楽しんでいたところだった、というふうに。でも、彼女の目と、鹿との関係を、そこに入れずにはいられなかったのです。私たちの言語にすると、少しこっけいな雰囲気になってしまう、奇抜な表現なのですが。全体を通して、自分が上手に訳し終えたかどうか、全く定かはありません。私たちの英語が、このような激しい情熱を伝えるのに適しているかどうか、よくわからないのです。私たちは、これほど激しい情熱をほとんど感じませんし、英語には、トルコ語でとてもよく使われる、この情感豊かな言葉に対応できるものが不足していますから。

ご覧のように、私は東洋の文化をずいぶんと学んでいるのです。実際、とても熱心に勉強をしています。私の学んだことが、あなたの好奇心を楽しませることができるようにと、願ってやみません。それこそが、勉強の一番の成果となるのですから・・・。

32. サラ・チスウェル様

1717年4月1日 アドリアノーブルにて

親愛なるサラ、私が思うに、あなたはナイメーヘンから8月に出した私の手紙に12月まで返事をくださらなかったでしょう。私が今まで手紙を書かなかったことより、むしろそのことのほうが問題になると思います。私のほうには、手紙を書くに書けなかった、はっきりした理由があるのですから。私はずいぶん長いこと陸路の旅をしてきたのです。でも、旅の終わりは、あなたが想像するほど、ひどいものではありませんでした。私はここでとても安心して暮らしていますし、あなたの言うような、淋しい思いもしていません。多くのギリシヤ人、フランス人、イギリス人、イタリア人の人々が私たちの保護下において、朝から晩まで、私のための集まりを開いてくれています。ほとんどが、とても素晴らしい貴婦人たちです。というのは、このオスマン帝国政府のもとでキリスト教徒が安全に生活するには、大使のもとに寄るしかないのです。キリスト教徒たちがお金持ちであればあるほど、ますます身の危険が大きくなるようです。

あなたが聞いたというひどい天然痘の噂ですが、実際はそれほどではありません。私も、その天然痘という言葉からわいてくる恐ろしい想像を止めよう、とずいぶん骨を折りました。でも、私が聞いたところによると、熱病と大差がないそうです。その証拠に、私たちも一番天然痘がひどく広まっているという2つ3つの町を通りましたが、何ともありませんでした。私たちが泊まった、まさにその隣の家で、2人が天然痘で死んだということでした。幸いなことに、私は何も知らされてはいませんでした。また、私たちの2番目の料理長が、天然痘にかかったのですが、皆、私にはひどい風邪だと信じこませていたのです。いずれにせよ、私たちは、医者や料理長と一緒に残して先に出発しました。昨日、病人もすっかりよくなって私たちに追いついてきたところで、実はコックが天然痘にかかっていた、ということが私に知らされたのです。天然痘から逃れる人はたくさんいますし、空気感染するというものもないのです。この天然痘を、イタリアやフランスが行ったように根こそぎにすることも簡単らしいのですが、人々はあまりそれには関心がないようです。私たちのかかる疫病のように、全く知らない病気になるよりは、天然痘になるほうがましだと思っているのでしょう。

私がこれから天然痘の予防法についてお話したら、きっとあなたもこの国のほうが良いと思うことでしょう。私たちにとっては、致命的な天然痘は、ここではあるものを接種することが発明されて、すっかり無害となっているのです。この接種をするのは、それを職業としている、老婦人たちの集団です。秋になり、だいたい9月くらいになって気温も下がると、人々はあちこち家で、天然痘の接種をしたい人がいないかどうか、お互いに話をするようになります。人々はその目的で集まりを開き、(だいたい15人から16人くらいの人数になります。)そこに件の老婦人たちが、最良の種痘の種が入った小さな貝殻を持ってやって来ます。そうして、どの血管に、接種をしたいかと尋ねます。老婦人は、

すぐに長い針でその血管を切り開き（これは、ちょっとしたかすり傷と同じくらいの痛みしかありません。）次に、その傷を、持ってきた貝殻のかけらで押さえるのです。こうして4つか5つの血管を開け、接種します。ギリシャ人には、額の真ん中の血管と、両方の腕、そして胸に切ると良い、という迷信があるようですが、これには悪い効果しかありません。この接種の際の傷はほとんど跡が残りませんし、迷信など関係なく足や、洋服で隠れる腕の部分などに接種することも可能です。その日は、子供や若い患者たちは、皆一緒に1日を過ごします。そして、8日目までは、だいたい皆元気なのです。それから熱が上がり始め、だいたいの場合2日くらい寝込むこととなります。3日も寝込む人はまれです。できものは、20や30もできることもなく、もちろん跡も残りません。その後8日で、皆接種の前と同じように、また健康に戻れるのです。傷をつけられたところには、熱が上がっている間だけ、痛みがあります。毎年、この接種を受けるのは何千人にもものぼります。フランス大使夫人が面白そうにおっしゃるには、この人たちは、皆楽しみか何かのように、天然痘にかかっている、とのことです。なぜって、皆病気になる、と、いろいろな国から鉱水を取り寄せては飲むからだと言います。もちろん、天然痘で亡くなった、という例など聞いたことはありません。ご覧のように、私も、これが安全な方法ということで、とても嬉しく思っています。ですから、私も、かわいい坊やに種痘をさせるつもりでいます。私は、愛国心から、この素晴らしい種痘法をイギリスに持ち帰って、皆にやってもらえるよう、努力をしようと考えています。もし私が、天然痘に関心を持ち、お金だけにこだわらず世のため人のために尽くしたいという徳のあるお医者さんを知っていたら、きっと今すぐ手紙を書いて、お知らせすることでしょう。しかし、この予防接種は、お医者さんたちにとっては全く有益ではありませんから、天然痘をなくすことを引き受けた勇者には、きっと怒りが向けられると思います。もし、私は生きて帰れたなら、そうしたお医者さんたちと争ってでも、天然痘の接種を広めたい気持ちでいっぱいです。その際には、どうぞあなたの友人の心にある、勇敢な気持ちを思いやってください……。

33. アン・ティスレスウェイト様

1717年4月1日 アドリアノーブルにて

親愛なるティスレスウェイト夫人、私は長い旅の果てに、無事にアドリアノーブルへ到着したことをお知らせします。私が旅の途中、さまざまな問題に出遭ったことを、ここでいちいち述べても、あなたもうんざりなさるでしょうから、やめにしておきましょう。それよりも、この地で初めて目にするものについて、知りたがっていることと思います。もしも、私からの手紙に、何も珍しいことが書かれていなかったり、ロンドンに面白いものを持たずに帰ったりしたら、きっと皆がっかりすることでしょう。さあ、何をお話したらいいのでしょうか？たぶんあなたはらくだなど見たこともないでしょうから、その様子をお話ししたら、面白いかもしれませぬね。私自身も、絵では何度も見たことが

ありましたが、目の前で初めて見たときは、本当に驚きました。おそらく、私の見た絵では、らくだの本当の姿が伝わってくるほど、その特徴がよく表れていなかったのでしょうか。本物を目にして、私は細かく観察をしようと試みましたが、どうやら失敗に終わったような気がします。何せ、らくだの観察をした、前例がないのですから、私もいったいどう表現したらいいのか、わからないのです。私が思うに、らくだは鹿の王様に似ています。足や胴体、首はほとんど鹿と同じような形をしていますし、色もまたとても似ているのです。もちろん、鹿よりもずっと大きいですし、その背といたら、馬よりもっと高いのですが。また、非常に足が速く、ペーテルヴァラドの戦いの際には、早馬よりも早く走って、敗戦の知らせを、真っ先にベオグラードへ届けたのです。ただ、らくだを完璧に飼いなすことは、できないようです。乗り手は、注意深く太い縄でらくだを50頭ずつ結び、先頭のろばにのって、群れを導いていました。とあるキャラバンで、私は300頭ものらくだがいるのを目にしました。らくだは、馬の3倍以上の荷物を運ぶことができますが、その背中にあるこぶのせいで、上手に荷物を載せるのはなかなか難しいように見えました。私には、らくだたちはとても醜い動物のように思われました。頭の形もよくないし、どう見ても胴体と不釣り合いです。重い荷物を運ぶのには、とても適している動物だ、と申し上げておきましょう。また、鋤を引っ張るようにできている動物は、水牛です。水牛も、あなたにはなじみのない動物ですね。水牛は、牛よりも大きくて、不恰好な動物です。頭には短い黒い角があり、角は後ろ側を向いています。人々が言うのには、この角をよく磨いたら大変美しく見えるのだそうです。水牛は皆黒くて体毛は短く、まるで悪魔のようなとても小さくて白っぽい目をしています。田舎の農夫たちは、水牛の尻尾と額を赤く染めています。馬はといえば、畑仕事をするにはこちらでは用いられていませんし、実際適してもいいのです。馬は元気で、格好のいい動物ですが、寒い国に住んでいる動物ほど丈夫ではないと思います。活発な反面穏やかで、走るのが大好きなかわいらしい動物なのです。私にも、ずっと一緒にいたいと思うような、きれいな白い子馬がいます。私の子馬はとても活発で、ずいぶん勇気がないと乗れないかのように、常に跳ね回っているのです。でも、私は今までこの子馬に乗るときほど、自分の思うように馬に乗ったことはありません。私が使っている横鞍は、この地方ではまずお目にかからないもので、皆、まるでアメリカにコロンブスの船が来た時のように不思議そうな目で見ています。この地では、繁殖を意味するということで、ある種類の鳥たちが宗教的に崇められています。鳩はその純潔のため、コウノトリは毎冬メッカへ巡礼するという理由で、崇拝を受けているのです。実のところ、この鳥たちは、オスマン帝国の支配下では一番幸福な者たちと言えるでしょう。皆自分たちの特権を十分承知して、全く恐れなど知らない様子で通りを飛び跳ねていたり、家の軒先にずらりと並んだりしています。誰もが知る、幸せの象徴の鳥たちなのです。野蛮と言われるトルコ人たちですが、この鳥たちさえいれば、その年は火事や疫病などが起こらないと信じているようです。私の寝室にある窓のそばにも、ふと見ると、この幸福を運ぶ鳥たちの

小さな巣ができていました。

寝室の話が出て、思い出しました。トルコの家の様子も、動物や鳥と同じように、あなたには面白い話題なのではないでしょうか。たぶんオスマン帝国について読んだ際に、トルコの建築は世界で一番ひどいものだ、という記述を一度は目にしたことがあると思います。私は、ずいぶんたくさんの建物を目にしましたので、この話題については十分お話することができると思います。トルコ建築はまるでなっていないなどという噂は、実は全くでたらめとも言えます。私たちは今、大宰相¹⁰⁵の持つお屋敷の1つに滞在しています。私が思うに、この地の建物は、とても美しく、また土地柄に大変合っています。確かに、トルコ人たちは、家の外観の美しさにはあまりこだわらないし、また建物はたいがい木でできています。木で出来ているゆえの不便さはありますが、それは人々の趣味の悪さからではなく、ひとえに政府の抑圧のせいなのです。法律によって、どの家も、持ち主が死ぬと全部大宰相のものとなってしまいます。ですから、皆、自分の死後家族が住めるかどうかもわからないような家を、それほどお金をかけて立派にはしないのです。手ごろな家を建て、自分の一生を過ごす分間に合えば、とっているようです。死後一年後にその家が崩れようとも、そんなことは全然かまわないのです。大きさに関わらず、どの家も2つの部分からなり、狭い通路でつながっています。1つのほうは、大きな前庭があり、そのまわりはぐるりと回廊が囲んでいます。私には、この様式はとても美しく見えました。この回廊は、すべての部屋へ通じていますが、部屋は皆大きくて、2段式の窓がついています。多くの場合、1つは色のついたガラスがはめられています。2階建ての家というのはめったにありませんが、二階建ての家の場合は、それぞれの階に回廊があり、30段くらいの幅の広い階段によって上とつながっているのです。この、家の1つ目の部分は、その家の主人のもので、そして、もう1つの部分は、いわゆるハレムと呼ばれる女性たちの場所となっています。(ハレムという名前は、本当はスルタンの宮殿の場合だけに使われるようですが。)ハレムにも、庭を囲む回廊があり、庭のほうに向かって窓がぐるりとついています。そして、主人の部屋と同じようにたくさんの部屋が並んでいます。非常に華やかで、さまざまに飾られています。2段目の窓はとても低くて、ちょうど修道院のように格子がはめてあります。

どの部屋にも、ペルシャ絨毯が敷き詰めてあり、部屋の片側が2フィートほど高くなっています。(私の寝室はといえば、両側がそのように持ち上がっているのですが。)そこがちょうどソファの役目を果たしますので、かなり上等の絨毯が敷かれます。ソファの周りには、家の主人の好みや身分によって、半フィートほどの絹織物で覆った低い椅子が並びます。例として、私の部屋にある椅子の様子をご説明しますと、この椅子は金のふさ飾りのついた、真紅の布張りです。この椅子の周りに、壁を背にして、クッションが2列に置かれてい

¹⁰⁵ Arnavut Halil Paşa(1655-1733) アルバニア人。アリ・パシャの死後 1716-18年の間大宰相を務める。

ます。たいてい1列目は大きめ、2列目は小さめのクッションですが、ここでトルコ人たちはその豪華さを競っています。多くは、錦織りか縹子織りの上に、金の針金細工を施したものです。これほど豪華で、美しく見えるクッションは他にあるでしょうか？このようにゆったりとクッションにもたれ、床に座るのはとても心地よいので、私はもう普通の椅子に座るのに耐えられなくなりそうです。天井の高さは低いのですが、私は特に不便を感じていません。多くの場合、天井は木の格子が金でできているようです。壁にかけるタペストリーなどは、装飾に用いていません。室内は、ヒマラヤスギの木と、銀のくぎで板張りにしてあり、花が飾ってあります。そして、あちこちが折りたたみの扉で開くようになっているので、壁がそのまま飾り棚としても利用できるようです。このようなやり方は、とても実用的ではないでしょうか。窓と窓の間には、香水びんや花かごを置くための、アーチが作られています。室内装飾の中でも、私が一番気に入ったのが、部屋の下手のほうに、大理石の噴水を作らせるという、今の流行です。噴水がいくつかに分かれて湧き、小さな池から池へと流れ落ちていて、その涼しげな様子と水の流れる音は、本当に素敵なのです。身分の高い立派なお屋敷に作られたものは、本当に豪華でした。そして、どの家にも、女性用の浴室があります。浴室は、多くは2つ3つの部屋からなり、大理石やくぼみなどが作られ、水を出す蛇口などが備えてあります。入浴、または水浴びのために必要なものはすべて、そろっているのです。

きっと、私の話は、今まで多くの旅行者たちから聞いた話とはずいぶん違うでしょうから、驚いていることでしょうかね。だいたい、旅行者の多くは、自分も知らないようなことを得意げに話すのが常なのです。また、キリスト教徒が、こちらで上流階級のお宅へ伺うことなど本当に稀なことですし、よほどの場合でなければ、そうした機会はまずありません。もしもどこかのお屋敷や宮殿に招かれたとしても、ハレムなどは、もちろん立ち入り禁止とされますから。そこで、人々はハレムについて語るときに、外から見た様子だけしか伝えられないのでしょうか。ハレム、つまり女性たちの住居は、いつもお屋敷の奥のほうに作られているので、庭と同じで、ただ外から眺めるだけしかできません。おまけに、非常に高い塀で囲まれているのです。庭には、私たちが楽しんでいるような花壇こそありませんが、木陰を作る背の高い木が植えられています。私が思うに、見た目も美しいからでしょう。また、庭の真ん中には、美しいあずまやがあります。普通は庭の中心、つまりあずまやの中にきれいな噴水が作られています。あずまやの部分は庭よりも9、10歩くらい高くなっていて、ぶどうやジャスミン、スイカズラが巻きついて、緑の壁ができています。背の高い木は、このあずまやを囲むように植えられていますし、本当に大変素晴らしいと感じ入るような眺めです。そして、女性たちは、ここで音楽を楽しみ、刺繍などしながら長い時間を過ごします。公園にはやはりあずまやがありますが、家にあるものほど美しくありません。しかし、公園のあずまやでは、人々はコーヒーやシロップ水などを飲んだりして過ごします。このどちらのあずまやも、ある程度長くその景観を保てるように作られているようでした。こちらのモス

クは、どれも精巧な石細工が施されていますし、公共の隊商宿（キャラバンサライ）なども、大変素晴らしい出来栄です。この隊商宿は、大きな四角い建物で、その下側、つまりアーチの下はぐるりと商店になっています。貧しい職人たちなどが、無料で宿泊できる場所でもあります。その横には、モスクがくっついていることが多いようです。隊商宿の中心にあるサロンは、均整の取れた素晴らしい造りで、300人から400人もの人を収容できます。中庭も広々として、それをとり囲む回廊などは、大学の建物を思わせるような雰囲気です。私が思うには、こうした施設は、修道院にお金を寄付するよりもずっと良い慈善事業ではないでしょうか。さあ、どうやらちょっと一気に説明しすぎてしまったようですね。もし今日の話がお気に召さなかったら、どんな話題が良いのか、ぜひお知らせしてください。親愛なるティスレスウエイト夫人、私は、誰よりも他ならぬあなたに手紙を楽しんでもらいたいと思っていますのです……。

34. マー夫人へ

1717年4月18日 アドリアノーブルにて

大事な妹よ、先日、私はあなたや他のイギリスの友人たちに手紙を書き、最後の船便で送りました。これから先、いつまた送る機会を持てるかどうか、全く神のみぞ知ることです。でも、たとえ今書いたものが2ヶ月先も手元にとどまっていたとしても、やはり私は手紙を書かずにいられません。実は、今私の頭は、きのう受けたもてなしのことでいっぱいなので、頭を少し休めるためにも、手紙を書いてその様子をお話したいと思うのです。さて、もう前置きはなしにして、そのおもてなしの話を始めましょう。

私は先日、大宰相の奥様から、お食事のご招待を受けました。今まで、キリスト教徒を招待したことはないようでしたので、私がこの招待を受けたのは大変光栄なことなのです。私は、この地でよく見かけるドレスで出かけたなら、きっと奥様も内心がっかりなさると思いました。おそらく、私に、つまりヨーロッパの女性に関心を持ったからこそ、招待してくれたのでしょうから。そこで、私は、イギリス風のものよりも豪華な、ウィーン風の衣装を着て出かけることにしました。その日、私は、この招待のことで、世間から噂されないように、お忍びで行こうと心に決めたのです。私はトルコの馬車に乗り、お付きの女性と、通訳をしてくれるギリシャ人の女性だけと一緒に、大宰相のお屋敷に向かいました。お屋敷に着くと、門のところで黒人宦官が私たちを出迎えてくれ、大変な敬意を持って、私が馬車から降りるのに手を貸してくれました。そして、私は宦官に案内されて、美しく着飾った女奴隷たちが並んでいる部屋をいくつか通り抜けていきました。すると、一番奥の部屋には、クロテンの毛皮の上着を着た女性がソファーに腰掛けています。その女性こそが大宰相の奥様であり、私の方へ進み出て挨拶し、とても丁寧に、そこにいた6人ほどの女性を紹介してくれました。奥様はとても人の良さそうな女性で、50歳くらいに見えました。実は、私は、大宰相のお屋敷がそれほど豪華ではないのに驚いていました。家具はどれも、控えめで質素なものですし、奴隷の数やその服装に比べると、奥

様自身はあまり高価そうなものを身に着けていないよう見えたからです。私の思いを、きっと彼女は感じ取ったのでしょう。自分はもう若くもないし、ぜいたくなものにそれほどお金も時間もかけられないのだ、と説明しました。むしろ奥様は慈善事業にお金をかけており、時間をかけているのは何かというと、神への祈りなのです。おそらくこの話は本当のことでしょう。なぜって、彼女も、夫である大宰相も、大変に信心深いのですから。大宰相には、妻は1人しかおらず、他の女性には見向きもしません。またさらに珍しいことに、前任者たちの例にはよらず、貢物には手もつけないのです。大宰相は、この点においては、非常に良心的であると思います。夫が用意した贈り物さえも受け取ろうとせず、これはどの大使も着任の際に贈るならわしなのです、と何度も説明してやっと受け取ってもらえたのでした。

食事までの間、奥様は大変に親切に私をもてなしてくれました。食事は、一皿ずつ何度も出され、どれもトルコ流のやり方で、見た目よく盛り付けられていました。きっと、あなたが噂で聞いたというのほど、ひどい料理ではないと思います。私は、ベオグラードで、アフメッド・ベイのお屋敷に3週間ほどいましたので、こちらの料理に関してはよくわかるようになりました。アフメッド・ベイは、私たちに、ご自身のコックに作らせたそれは素晴らしいお料理を出してくれましたから。最初の週は、私たちはその料理に大変喜んでいました。ところが、だんだん私はトルコ料理に飽きて、私のコックが作ったものを何か、出してくれないかしら、と思ったりしたものでした。きっと、それは食習慣の違いだと思うのです。私が思うに、例えば、トルコ料理を初めて食べるインド人に、イギリスのものとどちらがいいか選ばせたら、きっとトルコ料理を選ぶでしょう。トルコ料理はとても香りが強く、何でも十分に火を通してあります。作る際には、とてもたくさんの香辛料を使っています。トルコ料理では、スープは最後に出されるのがならわしのようでした。イギリス料理と同じく、数多くの煮込み料理の種類があるようです。奥様はとても一生懸命に私に料理を勧めてくれましたが、私はそれほどたくさん食べられず残念に思いました。もてなしを締めくくるのは、コーヒーと、香水で、これは大変な尊敬の意を表す、ということです。その後、奥様の指示で、女奴隷たちがギターを鳴らし、手を打って踊りを踊りました。奥様は、私に女奴隷たちの踊りが上手ではなくて申し訳ないと言い、自分もまた踊りを教えることができないのだ、とすまなそうに説明しました。私は丁寧にお礼を言うと、まもなくこのお屋敷を後にしたのです。

私は来た時と同じように案内され、馬車に乗り込みました。当然まっすぐ家へ戻るつもりでいましたら、通訳のギリシャ人の女性が、侍従長の奥様のところも訪ねるようにと私に勧めるのです。侍従長はこの国で第2の地位を占める人で、誰よりも敬われているということでした。大宰相とは名ばかりのようで、実際にはこの侍従長が権力を行使しているようです。私は、大宰相のお屋敷であまり楽しめなかったのもうお屋敷訪問をしたいとは思っていませんでした。しかし、侍従長の奥様の様子があきらかになるにつれ、今度こそ本当に訪

問に満足することができたのです。そこは、大宰相のお屋敷とは何もかも違っていました。ちょうど年老いた敬虔な人と、若く美しい人のようなとても大きな違いがあったのです。侍従長のお屋敷は、大変に美しく豪華でした。門のところ、2人の黒人宦官が私を出迎えると、長い回廊を案内して進んでいきました。そこにはかわいらしい少女たちが2列に並んでいましたが、皆足まで届くほどの長い髪の毛を編み、薄地の銀色の錦織りとダマスク織りの美しい衣装を着ていました。礼儀上立ち止まって眺めることができず、私は非常に残念に思ったのです。しかし、その思いも次の大きな部屋(いえ、むしろ金の壁で囲まれた、あずまやとでも言ったほうがいいかもしれませんね。)を見た時かき消えてしまいました。金の壁のまわりには木が植えてあり、窓からの太陽の光をさえぎって、ちょうどよい日陰を作っています。また木の根元には、ジャズミンとスイカズラが巻きついて、良い香りを放っているのです。さらに、部屋の下手には、白い大理石の泉があって、噴水が小さな池に流れ落ち涼しげな水音が聞こえています。天井は、金のかごからこぼれ落ちそうに垂れ下がる、あらゆる種類の花で飾られていました。

3歩分ほど高くなっているソファーには、ペルシャ絨毯が敷かれていて、刺繍の入った白い繻子のクッションにもたれて、侍従長の奥様が腰掛けていました。足元には、2人の少女が座っていましたが、年上のほうの少女が12歳くらいでしょうか。どちらの子も天使のようにかわいらしく、宝石をたくさんつけ、大変美しい衣装を着ていました。しかし、その少女たちも美しいファトマ(というのが、侍従長の奥様の名前です。)とは比べることさえできませんし、私が今まで会った、イギリスや神聖ローマの美しい女性たちも、皆ファトマの前には消え去ってしまうほどなのです。私は、これほど優雅で美しい女性に会ったことがありませんでした。似ている人ですら、思いつかないほどです。ファトマは立ち上がると、トルコ式のやり方で私に挨拶しました。まず、王室の者以上に風格のある様子で、自分の胸に優しく手をあて、それから私の手に自分の唇をあてるのです。ファトマは私が座るのにクッションを持って来させ、一番名誉があるという場所、角に私を座らせました。正直に言いますと、私は前もってギリシャ人の女性から、ファトマの美しさについてずいぶん聞いてはいました。でも、ファトマがあまりに美しいものですから、しばらくの間話することもできず、ただその顔を見つめてしまったのです。その驚くほど整った顔立ちや、そこはかとなく漂う魅力。均整の取れた体つきに、白い美しい顔がまるで花のようです。そして、言葉では言い表せないほど優しげなその微笑み。そしてまた目と云ったら！黒く大きく憂いを含んだ目で、それがくるくると移り変わる、実に魅力的な表情を生み出しているのです。最初の興奮が収まった後、もう一度ファトマの顔を丁寧に眺めると、多少不釣り合いな部分もあることが分かりました。でも、私が心から思うには、あまりに整いすぎた顔立ちはちっとも魅力的ではない、というあの話は事実でしょう。天は、あのアペリー

ズ¹⁰⁶がその作品の中で試みたという、最も美しい顔以上のものをファトマに与えたのです。それに加えて、ファトマの優雅で上品な振る舞いや、穏やかな様子、華やかな雰囲気などには、まったくぎこちなさやごまかしなどは感じられません。ちょうど、ファトマは最も由緒正しいヨーロッパの玉座から、そのまま運ばれてきたような様子なのです。誰もが、ファトマは王女として生まれてくるべき人に他ならない、と思うでしょうが、実際には私たちが野蛮だという国、オスマン帝国で教育を受けてきた人です。それなのに、イギリスで最も美しい女性ですら、ファトマの前ではかすんでしまうほどなのです。

ファトマは、銀の花飾りのついた、金の繻子織りのカフタンを身にまとっていました。このカフタンは、ファトマの体にぴったりと良くあって胸のあたりを大変美しく見せていました。ちょうど胸のあたりは、ファトマが動くたびに、薄い織物で陰影ができるのです。ファトマのペチコートは薄いピンク色で、ベストは緑と銀色、そしてスリッパは白で、どれも美しく刺繍が施されていました。きれいな腕にはダイヤモンドの腕輪がはめられていて、幅広の帯にもまた、ダイヤモンドが散りばめてありました。髪には、トルコのピンクと銀のハンカチが巻かれ、豊かで美しい髪は巻き毛になって片側に長く垂れ下がっています。その髪にもまた、ダイヤモンドのヘアピンがついていました。こんなふうにかくと、きっと私が大げさに話していると思われるでしょうね。私もどこかで読みましたが、女性は美しいものについて語るとき、いつも喜びのあまり興奮しすぎて語るのだそうです。でも、どうしてそれがいけないことなのか、私には理解しかねます。むしろ、嫉妬心などをもたずに純粹に美をほめたたえることは、とても良いことなのではないでしょうか。偉大な作家たちは、ある有名な絵画や彫刻についてとても熱っぽく語りました。神の創造物は私たちの貧弱な模倣を、はるかに凌いでいますから、それをほめたたえるのは当然であると思うのです。私自身、どんな一流の彫刻を見るよりも、美しいファトマの顔を眺めているほうが、ずっと楽しく感じるのです。ファトマが言うには、足元に腰掛けている2人の少女は、自分の娘だということでした。でも、ファトマがとても若々しく美しいので、私には母親のようにはどうしても見えなかったのです。

ファトマの美しい召使たちがずらりと列をなしている様子は、私には、まるで神話に出てくるニンフたちのように思われました。きっとこれほど美しい光景は、めったに見られるものではないでしょう。ファトマは、女奴隷たちに、踊りを踊るようにと言いました。すぐに、4人がリュートとギターのような楽器を柔らかい音で演奏し始め、それに合わせて歌も歌いだしました。すると、残りの者たちは美しく舞ったのでした。この踊りは、私が今までみた、どんな踊りとも違っていました。これほど芸術的で、感動をもたらすような踊りはなかなかないでしょう。楽器の音はとても柔らかく、それに合わせて、踊りも柔らかく長く続いていきます。踊り手は目をいったん閉じて少し止まり、

¹⁰⁶ Apelles(BC360?-315?) ギリシャの画家。

後ろの方に体を倒したかと思うと、今度はまた優美に体を起こして再び踊り出すのです。私が思うには、世界中で一番厳しいお偉方でさえ、この踊りを見たら必ず何か褒め言葉をかけたくなるのではないのでしょうか？きっと、トルコ人たちには、音楽などないとお思いだったでしょうね。しかし、驚くべきことに、通りで演奏されている音楽しか聞いたことがない一般のトルコ人も、ここにはまともな音楽などないと言っているのです。ちょうど外国人が、イギリスの音楽を、空気法やら、弦・骨による原始的な楽器によるものだ、と考えるしまうようなものでしょう。トルコの音楽は、非常に哀れをさそうような調子だ、と私は思います。実をいうと、私はイタリアの音楽のほうが好きなのですが、きっとトルコの音楽の一部しかまだ知らないのでしょう。歌といえば、私は、ロビンソン夫人¹⁰⁷よりもずっと上手く歌えるギリシャ人の女性と知り合いになりました。彼女は、イタリアの音楽もトルコの音楽もできますが、トルコの音楽のほうが好みの方でした。どうやら、トルコの人々の声は、生まれつき大変美しいというのは本当のようです。ファトマのところでも聞いた歌も、私の耳にはとても気持ちよく響いたのでした。

踊りが終わると、4人の女奴隷がつり香炉を持って部屋へ入ってきて、琥珀やアロエ、その他の香りを部屋にたきました。そして、私のところへひざまずき、銀の受け皿で、素晴らしい陶器の入れ物に入った、コーヒーを差し出しました。美しいファトマは、非常に親切に優しく、私をもてなしてくれたのです。たびたび私を「ギュゼル・スルタヌム、ギュゼル・スルターナ」（私の美しい方、お美しい王女）と呼び、大変に優雅な様子で、私と親しくなりたいのだと言いました。また、私の言語である英語で私をもてなせないことを、とても悲しく思っているのだと話しました。

私がお暇を告げると、二人の召使が、銀のかごにはいった美しい刺繍のハンカチを持ってきました。ファトマは、どうか一番豪華なものを身に着けてほしいと言い、私のお付きの女性と通訳にもそれぞれスカーフを渡したのです。もちろん私はこうしたもてなしを受けたことはありませんでしたが、この時は、まるでマホメットの宮殿で豪華なもてなしを受けたかのような気分になりました。この話を、あなたがどんなふうに取り受けるかは、私には分かりません。でも、私の喜びの一部を、あなたには分かって欲しいと思いますし、大切な妹のあなたと、できる限り楽しいことを共有したいのです・・・。

35. アベ・コンティ様

1717年5月17日 アドリアノーブルにて

私は今、この町、アドリアノーブルを去ろうとしています。ですから、発つ前に、ここで見た物珍しいものについて書かすにはいられません。あなたのために、なかなか苦労しつつも、面白そうな話を集めたのです。せっかく面白い話があるのですから、難しい論文のように、この街は昔 Orestesit とか Oreste

¹⁰⁷ Anastasia Robinson(?-1755) 1714年から1724年頃まで、ロンドンで歌手として活躍。

と呼ばれておりました、など長々と説明するのはやめにしましょう。ちなみに、この街は、ハドリアヌス皇帝¹⁰⁸の名をとって、今はアドリアノーブルという名前になっているのです。そして、この地はオスマン帝国にとっては、最初のヨーロッパ側領土であり、数多くのスルタンが好んで住んだ場所でもありました。父王メフメット4世¹⁰⁹、その息子ムスタファ2世¹¹⁰や、その他皇帝の兄弟たちは、この街を大変に気に入ってしまい、コンスタンティノーブルを捨て、アドリアノーブルに移ってきたのでした。ところがイエニチェリたちにはこれが気に入らなかったようで、スルタンたちに対する反乱が引き起こされ、結果的には退位に追い込まれることとなったのです。それでも、現在のスルタンはこの町がお好きで、宮廷を置きつづけているようです。私には、どうして皆からこの町がそこまで好まれるのかよく分かりません。確かに立地が良く、郊外のほうは大変美しいのですが、街の雰囲気は良くないですし、宮殿もまたその影響でかあまり雰囲気が良くないように思えます。アドリアノーブルの町は、聞いたところによると、周囲が8マイルほどしかないようです。ちょうど、人々にとっては、庭のような感じであるのだと思います。いくつか大きくてきれいな家もありますが、家の建築様式は、概してあまり立派ではありません。今現在は、たくさんの人でごった返している町です。ただ、その多くは宮廷のお付きや軍人たちですから、彼らがいなくなってしまうと、たいして人口の多い町でもないということでした。町が面しているマリーツァ川（昔はエブロス川と言われていましたね。）は、毎年夏になると、水が干上がってしまいます。これもまたアドリアノーブルの欠点の1つです。幸いにも、今の季節はまだ、大変きれいな流れを見ることができました。マリーツァ川には、2つの立派な橋が架かっていて、そこでは市が開かれています。ある日、私はそれを見ようと、トルコ風の衣装で身を隠して、出かけていきました。すると、兵隊たちで大変混みあっていたので、私は多少不安を感じました。でも、兵士は女性に対して無作法な態度など全くとらず、まるで私が身分の高い人であるかのように、敬意を表し、道を空けてくれました。市の長さは半マイルほどで、アーチ型の屋根で覆われ、大変きれいな様子です。そこには、さまざまなものを売る365店あまりが並び、ちょうどロンドンのニュー・エクステンジ¹¹¹と同じような感じでものを売っていました。ただ、ロンドンの市場よりも歩道がずっときれいで、すし、店も、ペンキ塗りがたてであるかのようにぴかぴかして見えます。そこで、暇な人たちがぶらぶらと歩き回ったり、コーヒーやシロップ水を飲んだりして、楽しんでいました。まさに、ロンドンの劇場でオレンジや砂糖菓子が売られているような様子で、人々はコーヒーやシロップ水を売り買いしていたのです。

私の見たところによると、一番裕福な商人たちというのは、皆ユダヤ人のよ

¹⁰⁸ ハドリアヌス皇帝(Aelius Hadrianus,AD117-138)アドリアノーブル発展の祖と言われる。

¹⁰⁹ Mehmed (1642-93), 在位 1648-87。

¹¹⁰ Mustafa (1664-1703), 在位 1695-1703。

¹¹¹ 1666年ロイヤル・エクステンジが火事になり、その後取引の中心はニュー・エクステンジに移された。

うでした。ユダヤ人たちは、この国で、かなりの力を持っているのです。本国人であるトルコ人たち以上の特権を与えられ、自分たちの自由区を形成しています。そこではユダヤの掟が通用しているようです。ユダヤ人は、この国の貿易を一手に引き受けています。結束がとても強く、またトルコ人はあまり熱心に仕事をしないことから、このようになったとも言えると思います。どの有力者も、みな自分のユダヤ人の会計係を雇っています。会計係たちは、有力者たちの秘密を握り、さまざまな商売を行っているのです。裏取引やわいろもなく、会計係の手を経ないで取引される商品もありません。また、ユダヤ人たちは、会計係だけでなく、有力者たちの医者、執事や通訳ともなっているのです。お分かりいただけるでしょうか、どんな小さな利益も見逃さないためにも、ユダヤ人たちの能力はとても有難いのです。また、ユダヤ人自身も、自分たちが国にとって不可欠な存在であることを知っており、どんな大臣が権力を持ったとしてもその保護を受けられると確信しています。イギリス、フランス、イタリアの商人たちも、商売の策略には長けていますが、彼らでさえも、取引をユダヤ人との交渉に委ねなければなりません。ユダヤ人なしで貿易は成り立たないので、ユダヤ人の中で一番身分の低いものでさえ、丁重な扱いを受けるのです。取るに足らないようなユダヤ人に対しても、皆、相当身分の高い人を扱うかのように、気を遣っているのです。ユダヤ人の多くはかなり裕福ですが、公の場には、あまり姿を現さないようにしているようです。最も、ユダヤ人の家自体、たいていとても豪華で大きいのですぐ分かるのですが。この話題は、アリ・パシャのあたりの市場での様子などから思いつきました。アリ・パシャの近くには、チャルシュという1マイルほどの通りがあって、ここにもありとあらゆる種類の店が並んでいますが、すべて輸入品を売っているようでした。通りには板張りの屋根が取り付けられているので、どんな天気であっても、快適に商売ができます。また、この近所にあるベデスタン¹¹²は、太い柱を基盤として作られた建物で、さまざまな馬具を売っています。あたり一面美しく、金や刺繍、宝石できらきらしているので、本当に素晴らしい眺めでした。

さらに、私はこの場所からトルコ馬車に乗ると、軍隊の野営地へと向かいました。数日後には、野営地から軍隊が前線へと出て行くことになっていたのです。その前に野営地の様子を見てみようと思ったのです。スルタンと、お付きの者たちはもう、もうテントに入ってしまったようでした。スルタンのテントは、本当に大変立派でした。有力者たちは、テントよりむしろ小屋を好み、中をたくさんに細かく区切って、それぞれの居室としているようでした。テントはどれも緑色ですが、将軍のものには、それと分かるように、本の旗をつけてあるのですが、それぞれのテントの1番上には、将軍の階級を表す、金色の玉が飾り付けられていました。ご夫人たちは、皆馬車でこの野営地に乗りつけては、熱心にその様子を眺めています。ちょうど、私たちがハイパークに出かけて

¹¹² 屋根付き市場。

様子を見るような感じです¹¹³。しかし、兵士たちが、この戦いを喜んで始めようとはしていないのが容易に見て取れるのです。戦争は、多くの人々に不満をもたらしますが、中でも商人たちは相当に厳しい状況に置かれることになるでしょう。

戦いの前に、大宰相は兵隊たち皆に、それぞれの能力に合わせて贈り物をすることを決めたようでした。その式典を見ようと私は張り切って朝の6時に起き、窓際で待機していたのですが、実際式は8時に始まったのでした。大宰相は、ご自分のお屋敷の窓際に立ち、そこから大通りを練り歩く行列を眺めておられました。行列の先頭は、立派な服を着たエフェンディたちです。豪華に飾られたらくだにまたがり、クッションの上にきれいに据えられたコーランを大声で読みながらの行進でした。カーディーは白い服を着た少年たちに囲まれ、同じようにコーランの一部を口ずさんでいました。さらに、種をまく農夫を表す、緑色の服を着た男の人が続いていきます。その次に、ちょうどケレス¹¹⁴のように、とうもろこしの穂でできた冠をかぶった、麦を刈る人が手にかまを持って歩いていました。また、牛に引かせた台車もあり、そこには小さい風車がかかって、少年たちが忙しく粉引きをしています。水牛の引く車には、2人の少年がおり、1人はパンをこね1人はパン焼き釜でパンを焼いています。少年たちは、両側に集まってきた観衆に小さなお菓子を投げていました。また、その台車の横に、パン屋さんたちが2人ずつ列になって行進していきます。皆とおきの服を着て、ケーキやパン、パイなどお菓子を手に抱えていました。その後ろには2頭の水牛と、顔や洋服を粉で汚した道化師が続き、古くさいこっけいな動きで、人々を楽しませていました。続いて、国中の商人たちが行進します。身分の高い宝石商や、織物商などは美しく飾った馬にまたがり、その行列は、実際の商売の様子をよく表していたと思います。中でも、毛皮商人たちの様子が、私には一番素晴らしく見えました。とても大きな台車にイタチやキツネの毛皮をぐるりと並べていましたが、大変上手に置いているので、まるで生きているかのようなのです。その後、音楽を演奏する人や、踊りをする人が行進しました。おそらく、少なくとも2万人以上の人が出たと思いますし、皆大宰相の命に従って進んでいったのでした。

行列の一番後ろは、大宰相の下で死ぬ名誉を受けたいと思っている人々でした。この光景は、とても野蛮に思えたので、私は最初にちらっと見ただけで、すぐに窓から離れてしまいました。歩いている人々は皆半裸で、腕には矢が突き刺さっていたのです。頭にも矢が突き刺さっていて、顔には血がしたり落ちていました。さらに、何人かは、腕を鋭い刀で切り裂き、近くにいる人まで吹き出した血がかかるようにしていましたが、これは栄光を強く求める気持ちの

¹¹³ 1714年頃、イギリス宮廷において、トーリー派とジャコバイトがハノーファー派を追い出そうとして反乱を企てる好機を狙っていた。当時、その兵士たちは、ロンドンのハイドパークがあたかも野営地であるかのように、寝泊りしていたという。

¹¹⁴ 別名デメテル。ギリシャ・ローマ神話で農業の女神である。

表れだということでした。私が聞いたところによると、ある人たちは愛を深めるためにこの行列に参加するのだそうです。女性たちは皆、この行列のしんがりを見物しようとヴェールをかぶって窓際に座っていますが、自分の恋人が窓辺にやってくると、また新しい矢を1本、彼女の名において突き刺すということでした。それが、彼を恋人として受け入れるという印であり、またこの勇敢な行いに対する賞賛であるのだそうです。行列は延々8時間も続き、私はぐったりと疲れると同時に、大変悲しく思いました。ちなみに、私が行列見物をしていたのは、司令官の未亡人のお宅からでした。彼女は行列の間中、私にコーヒーやシロップ水、お菓子などをもてなして、とても親切にしてくれたのです。

その行列から2日後、私は、セリム1世のモスク¹¹⁵(セリミエ・ジャーミー)を見に出かけました。このモスクは、旅行者たちにとっては、とても興味深いところのようです。私はトルコの衣装を着ていったので、問題なく中に入れてもらえました。でも、きっとそこにいた皆は私が誰であるか気づいたのでしょう、門番がとても熱心にあちこちを案内してくれました。このモスクは、街の中心に位置し、しかも小高くなったところに建てられているので、眺めが大変素晴らしいのです。一番目の前庭には4つの門があり、奥のものには3つあります。そのまわりを、ぐるりとイオニア式の大理石の柱がある回廊が囲んでいるのですが、ぴかぴかに磨かれているので、輝くような色合いです。その回廊の屋根は、いくつかのドーム型になっており、それぞれのドームの上には、金色の玉がつけられています。一番手前にある4つの門の真ん中には、白い大理石でできた美しい泉がありました。さらに、モスクの中へと導く大きな門の前には、緑色の大理石の柱が並ぶ前庭がありました。

モスクには入り口が5つあり、モスク全体が巨大なドーム型をしていました。私はほとんど建築のことは分かりませんので、あえてその様式などについて述べようとは思いません。が、私には、とても均整のとれた形であるように感じられました。天井がとても高く、私がこれまで見たどんな建物よりも高貴な雰囲気がありました。中には、大理石の欄干が取り付けられた、2列になった回廊席が太い柱で支えられています。床は、もちろんペルシャ絨毯が敷き詰められているのです。私が思うに、私たちの教会のように椅子などで座席が分かれていないので、建物全体の形がますます美しく見えるのではないのでしょうか？また、ローマカトリックの教会のように、けばけばしい絵や置物などを置いてまるでおもちゃ屋のようにしてしまい、その美しい大理石の柱(たいてい赤っぽい色や、白い大理石を使っています。)の外観を損ねてしまうようなこともありません。最初、モスクの壁は、まるで色とりどりの小さな花を埋め込んだかのように見えました。私には、どんな石を使って壁が作られたのか分からず近づいてみると、大変美しいイズニックタイル(セラミック)だったのです。また、モスクの真ん中には、とても大きな銀のランプが吊り下げられていました。モスクの中には、大小合わせると、少なくとも2000個のランプがあったと

¹¹⁵ Selimiye Camii(1575) 建築家シナン(Mimar Sinan, 1490-1579)の最高傑作といわれる。

思います。全部明かりを灯した時には、本当に美しく見えるのですが、残念ながら、夜に女性がモスクの中に入ることはできないのです。その大きなランプの下には、金色に輝く説教壇があり、すぐそばには身を清めるための泉がありました。ご存知のように、イスラム教では、身を清めることがとても大切なことの1つなのです。片隅には、大宰相のために、金の格子のついた小さな席が設けられていました。奥には、2段ほど高くなつたちょうど祭壇のような大きなくぼみがあって、金色のしゅす織りの布で覆われていました。その手前には、人の背の高さほどある銀のろうそく立て、中に腰の太さほどの白いろろうそくが置かれています。さて、モスク内部から離れて外側を見ると、一番上が金色に輝いているとても高い4本の塔がそびえています。その上から、イマーム¹¹⁶たちが、人々に祈るようにと呼びかけるのです。私は、ぜひこの上に上ってみたいと思いました。この塔はとてもすばらしく設計されていて、誰もがその様子に驚くと聞いたものですから。塔には、入り口は1つしかないのですが、そこには3つの階段があり、それぞれが塔の異なった階に通じるようになっていそうです。しかも3人のイマームが、お互い顔を合わせることなしに、上ることができるのです。モスクの裏側には、さまざまな店が並ぶ市場があって、貧しい職人たちが、無料で滞在する場所も設けられています。このあたりで、私はイスラム修道僧が祈りを捧げているのを目にしました。彼らは、羊の毛でできた簡素な服を着ていますが、腕はたいていむきだしのままです。頭には、縁のない山高帽のような、やはり羊の毛の帽子を被っていました。私は、このセリミエ・モスク以後、同じ様式で建てられたモスクをいくつか見学しましたが、その壮麗さという点では、どれもセリミエ・モスクとは比べ物になりませんでした。イギリスや神聖ローマ帝国の、どんな教会よりも本当に素晴らしいのです。また、この町のスルタンの宮殿については、あまり大きくは見えませんでした。私が実際に行ったわけではないので、宮殿については、これ以上のことは残念ながらお話できないのです。

ここまで、私は夫の入国手続きやら、スルタンとの謁見について、全くお話していませんね。でも、こうしたことはどの国でも同じように行われますし、ずいぶんあちこちで語られているようなので、繰り返しはよそうと思います。夫が謁見を許された時、スルタンの傍には11歳になる王子¹¹⁷が座っていました。王子はとても利発そうな顔立ちをしていましたが、スルタンにはなれないのではないのでしょうか。なぜって、今のスルタンの兄にあたる、先のスルタン・ムスタファには2人の息子がおり、1人はもう20歳くらいになっています¹¹⁸。2人には、スルタンとなってほしいと願う人々の後押しがあるのです。どうやら今の時代は、とても血なまぐさい人々の欲望が渦巻くものであるようです。

¹¹⁶ imam イスラム教の司祭。

¹¹⁷ 後のアブドゥル・ハミト1世(1774-1789)だと思われる。

¹¹⁸ ムスタファの息子たち；マフムート1世(1696-1754,在位1730-54)、オスマン3世(1699-1757,在位1754-57)もう1人ハサン(1699-1733)がいた。

私に言わせると、みんなとてもせっかちに、終わりへと向かっているようにしか見えないのですが・・・。

コンスタンティノーブルに到着したら、またお手紙を書きますね。

36. アベ・コンティ 様

1717年5月29日 コンスタンティノーブルにて

私たちは、旅の間運良く好天に恵まれ、夏が始まったばかりのその美しい季節の中で、とても素晴らしい自然の光景を目にすることができました。牧場は美しい花や、香りの良い草でいっぱいでしたので、私たちの馬車さえも、そこを通り過ぎた後にはとても良い香りを漂わせていました。大宰相は、この旅のためにと、私たちに30台の荷馬車と、お付きの者たちにも5台の馬車を準備してくださいました。途中で、私たちは数多くの騎兵隊を見かけましたが、どうやらアナトリアのほうから戦争に行くような格好でした。騎兵たちはたいいていテントを持って旅をしています。私だったら、どこへ行こうと、テントよりはどこかの小屋で眠るほうがずっといいと思うのですが。私たちが通り過ぎた村の多くは、どれも特別なところではありませんので、この手紙では全部をあげないつもりです。でも、途中で宿をとった Cholul について、少し触れておきましょう。そこで、私たちはトルコ語でいうところのコナック、つまり小さなお屋敷に滞在しました。もともとは、大宰相が旅に出た時に宿泊するところだということです。私は、大宰相のもとにいる女性たちが滞在する部屋のすべてを、大変興味深く眺めました。女性たちの部屋は、庭の奥、泉があったり木々がうっそうと茂ったりしているところにあります。が、私が一番驚いたのは、その部屋を囲む塀が、鉛筆書きされたトルコの詩の語句で埋め尽くされていたことでした。通訳に頼んで、いくつか訳してもらいますと、中にはとても優れたものもありました。もちろん、英語に訳した時に、ずいぶん詩の本来の良さは損なわれているのだと思いますが。その1つは、英語だと、こんな意味になります。

私たちはこの世へとやって来て しばらく留まり やがては旅立つ

しかし彼は私の心の中に留まっており どこへも行くことはない

その後の私たちの旅は、古くはプロポンティスと呼ばれたマルマラ海沿岸の美しい様子を眺めながら過ぎていきました。次の晩、私たちはシリヴリと呼ばれる、古くからあるきれいな町に宿をとりました。今この町は、とても良い港町として発展しており、立派に整備がされています。町の中には、30ものアーチ型の橋があるそうです。また、ここはギリシャ式の教会があることでも知られています。私は、そこへ行って礼拝をしたいというギリシャ人の女性に、私の馬車を提供することにしました。私もまた、ギリシャ式教会へ行く機会があるなら一緒に行きたいと思ったのです。行って実際に見てみると、教会はずいぶんひどい場所に建てられていて、ローマカトリックの教会以上に、ひどい装飾が施されていました。いくらかのお金を寄付すると、人々は私に聖者の遺体や、聖ルカの描いたものだという聖母マリアの絵などを見せてくれました。

実のところ、この絵が聖ルカの作であるという証拠は、ほとんどないのです。でもこの地の人々の間では、この絵はあの有名なイタリアの聖母子像より、ずっと有名なものなのだそうです。私は、個人的には、ギリシャ人の絵の趣味はかなり良くないと思うのです。何と言っても、いつも金色の地に描くのですから。金色というと美しいのではと思われるかもしれませんが、人々は絵の陰影や均整など、そういったものに注意を払わないで描いているのです。その結果どうなるかは、お分かりですね。このギリシャ教会には、紫色の衣に身を包んだ司祭がいて、私の滞在中に、私自身くらいの大きさの巨大なろうそくを、贈り物として届けてくれました。

その後、ブユック・チェクメジェ、キュチュック・チェクメジェという町に相次いで滞在しましたが、どちらもきれいな町でした。キュチュック・チェクメジェでは、以前はイスラム修道院だったという建物に宿をとりました。ですから、建物の前には、大理石の回廊で囲まれた中庭があり、中央には水場もあったのです。この建物や庭からの眺めは、とても素晴らしいもので、あらゆる修道士たちが、皆ここで隠遁生活を送りたいと望むのだといいます。今、ここは、少年たちを指導している、イスラム学校長のものとなっています。私が彼に、自室を見せて欲しいと頼みますと、驚いたことに、彼は庭にある背の高い系杉の木を指差しました。何とそこは、一番上に彼の寝床があり、少し下には妻と2人の子供が、每晚寝る場所となっていたのです。私は大変面白いと思い、近くまで上ってよく見てみようと思いました。でも50歩ほど上ったところで、そこからまたさらに50歩くらい上らなければいけないことに気がつきました。それに、枝から枝へと、危険を冒して飛び移るように上らねばならなかったので、私は諦めてまた下へ降りてきたのです。

その翌朝、私たちはコンスタンティノープルに到着しました。私はまだ、この町のことをあまりお話できないと思うのです。というのも、着いてからというもの、訪問者を出迎えたりして、町を歩き回ったりする時間がないからです。でも、こうした訪問を受けるのはとても楽しいことです。美しい女性たちが、これまた美しい衣装に身を包んで、次々と現れるのですから。私たちの家は、ペラというところにあります。ペラは、ちょうどロンドンでいうところのウェストミンスターのような場所で、郊外ではありません。各国からの大使は、皆このあたりに住んでいます。私たちの家のある側からは、港や街、宮殿が見え、遠くにはアジア側の丘の姿もあります。全部が一度に見渡せる、世界中でも一番美しい眺めなのではないかと思えるほどです。あるフランスの作家は、コンスタンティノープルはパリの2倍くらいの大きさだ、と書いていました¹¹⁹。夫は、ロンドンよりも大きいのだということを、認めたくはないようですし、正直に言いますと、私もそう思っています。今のところ、それほど人口の多い町のように見えません。実際、この国の墓地を全部あわせた面積が、コンスタ

¹¹⁹Jean Dumont Nouveau, *Voyage au Levant* (1694, 1696 英訳) による。実際はパリのほうが大きい。

ンティノーブルの町全体よりも広いくらいに思えるからです。本当に、何と多くの地がトルコ人の手に落ちたことなのでしょう。時々、私はとても小さな村のまわりに広がる何マイルもの墓地を見ることがありました。小さな村といっても、おそらく昔は大きかったのですが、今はその偉大さを示すものが何も残されていません。ただ、いずれの場所でも、トルコ人たちは記念碑や墓石などを取り除いたりはしないのです。そのうちのいくつかは、とても美しい大理石で、かなり価値のあるもののようです。人々は、そんな石の上に、死者を記念するターバンの彫像をのせます。そのターバンの形が、死者の職業や階級を表しているのです。また、死者の腕を入れるのも、しきたりとのことです。さらに、墓石には、たいいてい金文字で碑文が彫られます。女性のもは一切飾りのない簡素な石ですが、結婚しないで死んだ女性たちのものは、一番上にターバンではなく薔薇の花の飾りが置かれます。ある特別な一家の墓は、柵で区切られ、周りに木などが植えてあります。スルタンや有力者の墓になると、まわりはいつもランプで火が灯されているとのことでした。

人々の宗教、イスラム教についてお話する際、私は次の2つのことを伝え忘れていたようですね。1つは、私が本で読んだことなのですが、大変奇妙で信じがたいことでした。男性が、法にのっとってその妻と離婚した場合、妻が誰か他の男性と一夜を過ごさないことには、妻と復縁することはできないということです。愛する者を取り戻したいがために、この掟に従った者たちも多くあるようでした。もう1つ、とても変な話があります。結婚しないで死んだ女性たちは、死んで永遠の罰を受るということです。この説を支持する理由として、人々は、女性は本来子孫を増やすために存在するのだから、と言います。人々に言わせると、女性は子供を産み育てることによって、その天命をまっとうしているのだそうです。神が、そのようにお望みになっているのです。このような考え方の中では、女性たちはあらゆる公共の場から締め出されますし、何もできなくなってしまいます。女性たちに魂があることを認めようとしない、という野蛮な考え方はもちろん誤りです。もちろん、女性たちは王の位や、高い地位につくことができません。また、男性のために作られた、美しい女性たちがもてなしをするような天国に入りたいとも思わないでしょう。でも、すべての良心的な女性たちが入ることの出来る、幸福な永遠の天国があるのです。ところが、多くの女性たちは罰を受けるという迷信を信じて、神に見捨てられた無益なものになるよりはと、夫の死後 10 日も待たないで再婚したりします。(本来イスラムの女性たちは、4ヶ月プラス10日で再婚できるのですが。) その一方、宗教の奴隷となっていない自由な人たちでさえも、いざ死ぬ時になって慌てて再婚したりするのです。これは、永遠に純潔であることが神に認めてもらふ一番の道だ、という説とはずいぶん異なって見えますね。どちらが理にかなっているのか、その結論は、あなたに委ねることにしたいと思います。

私は、旅の間に、ずいぶんギリシャのメダルコレクションを増やしました。ここには、どんな人の助けにもなってくれる、専門の古美術収集家がいるのです。でも、私が彼らのもとにいて、ギリシャのメダルについて尋ねた時の顔

つきといたら！まるで、年をとって自分自身が古くなるまで、古いメダルなどを捜し求めてはいけないのだ、とでも言いたげな様子でした。ともかく、私はここで、マケドニアの王様のメダルをいくつか手に入れました。中でも、ペルセウス¹²⁰のものはとても素晴らしく、彼の顔の立派ではない部分さえもはっきりと見て取れるのです。また、本物のギリシャ彫刻の頭部も手に入れたのですが、これが誰になぞらえて彫られたものなのか、帰国したら学者に見せようと思っています。おそらく、あなたは古美術にお詳しくないでしょうね。たいていの古美術商は皆ギリシャ人なのですが、あまり美術に関する知識はないようでした。彼らの目的は、ただ売ることだけなのです。アラブやパレスチナにあるカイロ・アレppoなどの都市に、取引をしている人たちがおり、その人たちは、見つけたものみな、古美術商に送ってよこすようです。その多くはがらくたで、最後には、なべやらやかんやらに作り変えられてしまうような物らしいのですが、古美術商たちは良さそうなのを売っては、品物に価値があるのかわからないのかを全く理解しないでかなりのお金を得ています。中でも、商売っ気のある者は、ギリシャの都市を表すメダルを、聖者の像などに仕立て上げるようでした。ある古美術商は、私に、勝利を掲げる女神アテナの図柄のメダルを見せてくれましたが、大変もっともらしくこれは十字架を持つ聖母マリアの像ですよ、と言うのでした。この人は、大きなめのうに刻まれたソクラテス¹²¹の頭部をも差し出し、より価値のあるものだということ示そうと、聖アウグスティヌス¹²²だという称号までも付け加えたのでした。ところで、私は以前から、ミイラの秘薬を注文していました。その品が無事に私の手に渡るのを待っていたのですが、時を同じくしてスウェーデン王¹²³のために作られたとても良いミイラに、不幸な事件が起こってしまいました。王様がミイラに相当の金額をつけたので、トルコ人たちは、王様が何かしかるべき計画でもしているのだと思ったそうです。きっとそのミイラは神の体に違いないので、守らないことにはこの帝国の運命も危ないであろうと思い込んでしまったのです。さらに、ある古い予言を持ち出す者さえ現れました。その予言によると、そのミイラはイエディクレ¹²⁴で罪を犯した者のなれの果ての姿であり、この先もずっとイエディクレに閉じ込めておかねばならないのだ、とのことでした。私はあえてこの騒ぎの時に、自分のミイラに対する好奇心を明らかにしようとは思いませんが、それでも、私の注文品が無事に届くように願っています。今の時点で、私には、この有名な町の素晴らしさを、これ以上お話することはできません。これから周りをよく見て歩いてから、またお手紙を差し上げたいと思います・・・。

¹²⁰ ギリシャ神話より。メドゥーサの首（目が合ったものは皆石になってしまうという。）を取り、アンドロマケの愛を得るのに、首を武器としてライバルたちを倒した。

¹²¹ ソクラテス（BC469-399）古代ギリシャの哲学者。

¹²² 聖アウグスティヌス（BC345-430、初期キリスト教会の指導者。 *City of God* を書いた哲学者でもある。

¹²³ スウェーデン王チャールズ7世（1682-1718）。

¹²⁴ コンスタンティノーブルにある塔。

37. アレクサンダー・ポープ様

1717年6月17日 ベオグラード近郊の村（避暑地）にて

この手紙より先に、前に送った2,3通が無事にお手元に届いているといいのですが。きのうあなたからの、2月3日付けのお手紙を受け取りました。どうやらあなたは私がどこかで死んでしまったのでは、とでも思っていたようですね？ご覧のように、私はまだ生きています。が、本当のことを言うと、現在の私は、自分でもまるで過去の亡霊のように思えるのです。コンスタンティノーブルの町があまりに暑いので、私はやむなくここへ逃げてきました。ここは、まさにあのエリュシオン¹²⁵の世界のような場所です。私は今まさに、森の真ん中にいます。周りはほとんど果物の木で、澄んでいることで有名な清流が豊かに流れ、短い草で覆われた歩道に濃い陰を落とされています。大変芸術的な光景ですが、全く自然が作り出したものなのです。遠くには黒海が見えますし、海からの涼しい風のおかげで、夏の暑さを忘れてしまうほどです。この村には、裕福なキリスト教徒たちが定住しています。夜になると、私の住んでいる家から少し離れた泉の周りに皆が集まり、歌ったり踊ったりして楽しんでいます。女性たちの美しさや衣装の様子を見ると、詩人や画家がよく表現している古代のニンフたちに似ているように見受けられます。さらに、自分が過去の亡霊になったような気分だ、というのは、私が自分の身の周りで起こっている出来事を何も知らないからだと思うのです。時々新しい便りが入ってくるのですが、私はたいして心を動かさずにそうした話を聞いているのです。もちろん、私は友人たちを大変懐かしく思っていますし、有名な作家の言葉をお借りすると、ちょうどこんな感じです。

離れゆく心は なんと不思議なものか
友やしがらみを 後に残し
誰とも会わずに

私自身が、この詩の良い一例だと思います。その一方で、きっとヴェルギリウスも同意見であると信じていますが、どんな状況でも、人間の心には常に情熱が残されているのでしょう。

死すらも その心を奪うことはできない

完璧なエリュシオンを作るのには、どうしたってレテ川¹²⁶が不可欠ですが、私は、それほどレテ川があってほしいとは思っていません。正直に言って、私は時折、美しい自然の中で歌ったり踊ったりするのにうんざりして、煙たい町や、あなたが骨折って暮らしている不調和な世界に行きたい、と願ってしまいます。とりあえず、私は快適な生活をしているのだと自分に言い聞かせて暮らすようにしています。月曜日は子供たちにかかりきり、火曜日は英語を読む日、水曜日はトルコ語の勉強（こうして、私はだいぶトルコ語ができるようになったの

¹²⁵ ギリシャ神話に出てくる、祝福された人たちが死後に住む楽園。

¹²⁶ 黄泉の国（ハデス）にある川で、この川の水を飲むと、すべてを忘れるという。

です。)木曜日は古典、金曜日は書き物をして、土曜日は針仕事、日曜日にはたいていお客があり、音楽を聴いたりして過ごすのです。ロンドンにいた頃の生活は、こんなふうでした。月曜日はセント・ジェームス宮殿の広間にて、火曜日はモーファン夫人¹²⁷のお宅、水曜日はオペラ、木曜日は演劇、金曜日はチェットワインド夫人のお宅、といった具合です。ひたすら同じような噂話を繰り返し聞き、何度もくだらない見世物を眺めることなど、他の人々はいざ知らず、もう私の心をちっとも動かさなくなりました。今ではくだらない話を聞くと、腹は立たずただ哀れに思います。私とそちら側との間の隔たりがあまりに大きいので、どの話も熱を帯びたままここに届かないのでしょうか。また、何か嬉しい話や悲しい話を聞いたときにも、私にその知らせが届く頃にはもういずれにせよ過ぎてしまっているだろう、と思いあまり騒いだりしなくなりました。でも、前にも申し上げたように、友情に対して冷淡になったというわけではありません。私は今でも、あなたやコングリーヴ氏のことを思っていますし、世界中の人にとって私の存在が無になっても、あなた方の記憶の中にだけは留まっていられれば、と心から願っております。

38 . . . 夫人へ¹²⁸

1717年6月17日 ベオグラード近郊の村(避暑地)にて

あなたのお手紙に書かれていた私への願い事、失礼を承知で申し上げますが、あれには思わず笑ってしまいました。あらゆる美德を備えたギリシャ人の奴隷を買ってきてほしい、などとおっしゃるのですから。ギリシャ人は、オスマン帝国の従属者ではありますが、奴隷ではないのです。奴隷として売り買いされているのは、戦争で捕虜になった者や、ロシア・サーカシア¹²⁹・グルジアなどから連れて来られるタタール人が主です。大変貧しく、惨めな様子をしていいますから、たぶんお宅の召使にはふさわしくないでしょう。ペロポネソス半島から連れて来られる奴隷もたくさんいますが、その多くはキリスト教徒から捧げられたものや、ベニスで身請けされた者です。身分の高い人々に仕える美しい奴隷娘たちは、8、9歳の頃に買ってこられて、歌や踊り、刺繍などを丁寧に教え込まれて立派な教養を身に付けているのです。多くはサーカシア地方の者です。こういった奴隷娘を有する主人は、何かよほど悪いことをしたのでもない限り、めったに自分の奴隷を売りません。もしも奴隷娘が大きくなった時に、あまり優れていないことが分かったら、その主人は奴隷を友人に贈ったり、もしくは奴隷を自由にしてやったりするのです。つまり、市場で公然と売られている奴隷たちは、何か悪いことをした奴隷や、よほど能力的に劣っていて使いものにならない奴隷ということです。イングランドでの奴隷についての一般的見解とずいぶん異なっていますから、たぶん訝しく思われるでしょうね。でも、

¹²⁷ Elisabeth Lawrence (? -1725) メアリーがたびたび手紙を送っている、リッチ夫人の母。

¹²⁸ R.Halsband により匿名化されているが、おそらくリッチ夫人に宛てたものと推測される。

¹²⁹ ロシアの黒海沿岸の地方。

これまで私たちが聞いていた話は、全く真実ではないのです。

あなたからのお手紙には、ずいぶんとオスマン帝国への誤解が多いように見受けられました。おそらく、あの有名なデュモン氏¹³⁰の本にある、オスマン帝国の話の影響ではないでしょうか。氏は全くの無知でありながら、堂々とあの本を書き上げたのです。私にとっても、この地で氏の著したレヴァント地方¹³¹への旅日記を読むのはとても楽しいのですが、それは、あまりに事実とかけ離れた実にばかばかしいことが書いてあるからです。だいたい、人々は、必ず会ったこともないような女性たちの話を差し挟みます。そうして自分たちが受け入れてさえもらえなかった、才能ある男性たちについて語り、覗いてみてもいないモスクの話をするのです。トルコ人たちは誇り高く、いくら本国でかなり身分ある外国人でも、自分たちが認めなければ口も利かないようです。相手がとても位の高い人の場合ですらこうなのですから、トルコ人が普通の人々、そのごく一般的な精神についてどんなふうに考えているか、ご想像できるでしょうね。

ところで、メッカの軟膏についてのお話ですが、たぶんあなたに送ることができると思います。ですが、実はこちらでもそれほど簡単に手に入るものではありませんし、お使いすることをお勧めしかねます。私には、なぜこの香油があちこちで褒めそやされているのか、全くわかりません。ロンドンやウィーンにいる私の知り合いの女性たちは、こぞって私に軟膏を送ってくれるように頼んできます。ある日私は、ごく少量の、上質の軟膏を贈り物としていただきました。(少量であっても、非常に価値ある貴重品なのです。)私は大喜びで顔に塗り、素晴らしい効果があるかしらと期待しておりました。すると、翌朝、確かに驚くべき効果が現れたのです。私の顔はひどく膨れ上がり、大変赤くなっていました。このひどい状態は3日間も続き、ご想像できるように、私はかなり意気消沈して過ごしたのです。本当に他にどうしようもない状況だったのですが、さらにひどいことに、夫はずいぶんと私の愚かさをなじりました。ところが、私の顔はその後彫像のようにつるつるになったのです。いえ、それはこちらの女性たちが私に言ったことなのです。彼女たちに言わせると、まるで手術を受けたかのようなのですが、実は私自身は鏡を見てもあまりわかりませんでした。もしも誰かが、この軟膏の話をしていたら、よくよく考えてみなければなりません。世界中の女性たちが、この軟膏を使ってみずみずしく美しい肌になっています。ですが、私に言わせると、もうあんな痛みはたくさんです。私の顔には自然であってほしいと思いますし、時とともに衰えていったとしてもかまいません。ご覧のように、私はこの種の療法をあまり評価していないのです。でも、もしあなたが試してみたいとおっしゃるなら、どうぞお試しください。ただこれだけは覚えておいて下さいね。使って何日間かは、とても宮殿に出かけられるような顔にはならないことを。

¹³⁰ 前出の Jean Dumont のトルコについての本。

¹³¹ 地中海・エーゲ海東部の地方を指す。

この国で、女性たちから信頼を得られるようになるには、私たちが通常行っているように美しくあろうとするのではなく、愛らしい存在になることだそう
です。女性たちは、その魔法を使って、国を手に入れることすらできるような
秘密があるというのです。私は、そんな奇跡のようなことはあまり信じていま
せん。根拠が無いような気がするからです。その点について、昨夜私は、大変
教養の深い、ある女性と大いに議論を戦わせました。彼女は、そういう例を 40
ほどもあげても、私を説得できなかつたので腹を立てていると思います。最後
には奇跡以外では説明がつかないような、ばかばかしい結婚話をいくつか例に
出してきました。ここに至って、私も耐え切れずに、イギリスでは魔法の力な
ど信じていないのだと主張しました。「イギリスはこの地ほど気候も良くない
し、女性たちもそれほど美しくはないのです。ばかげた結婚もありえないし、
男性が女性のために何か愚かなことをするのは、神がかりでもなんでもないの
ですよ！」と。しかし、この私の主張も、彼女を説得できなかつたようでした。
それどころか彼女自身ですら、普段は使うのをためらっているけれども、そん
な魔力を持っていて、いつでもその力を出せるのだと言うのです。そして、重々
しい雰囲気私の顔をじっと見つめました。もちろん何も起こりませんでした。
すると、世間にはごくわずかではあるけれども、この力を避けられる人もい
るのだと言うのでした。事の成り行きに、私がどれほど笑ったことか！でも、
女性たちはだいたいこんなふうなのです。悪魔と取引はしないようですが、愛
を靈感によって導くような性質を持っているのでしょうか。この魔法の力を船便
で母国へ送ることができたら、と私は想像してみました。そうすれば、どれほ
ど早く位を上げることができるでしょうか？果たして女性たちは、その商品に
どれほどの代価を支払うでしょう？

さて、このあたりでお別れを言いましょう。もっと素晴らしく、想像力をか
きたてるような話題で手紙を締めくくられなくて残念です。もしも私が不思議な
魔力を持って帰国したら、あなたはどんなお言葉をかけてくれるでしょうか……。

39 . アン・ティスレスウェイト様

1718 年 1 月 4 日 コンスタンティノーブル・ペラにて

親愛なるティスレスウェイト夫人、送ってくださったお手紙、本当にありが
とうございました。私が手紙を書いている相手の中であなただけが、身近な便
りがどれほど私にとって嬉しいものかをよく分かってくださり、いろいろと身
の回りのことを書き送ってくれているのです。他の皆は、どうせたいした便り
はないし、どうせあなたももう知っているでしょう、という調子で手紙を書い
てくることが多いのです。きっと、彼らは、この国にはまだマホメットの鳩¹³²
がいて、私に起こったことを知らせている、とでも思っているに違いありませ
んね。あなたのご親切に報いるためにも、こちら側の面白い話を伝えたいと思
っているのですが、どんなことがあなたにとって面白いのか、それともこんな

¹³² 鳩は、聖霊のお告げを伝えるものとされていた。

遠くで起こっていることに果たして興味を持ってくださるかしら、などと心配しています。実をいうと、こうして書いていながらも、私の頭は、新しく増える家族の準備のことでいっぱいなのです¹³³。私は、家族が増えるその日を、今か今かと待っているところなのです。おそらく、私のこんな落ち着かない気持ちをご察し下さると思いますが、家族が増えるという喜びが私の緊張を和らげ、穏やかな空気をもたらしてくれます。もしも子供ができなかったなら、この国で私は大変蔑まれる存在となってしまったことでしょう。

きっと、ご存知ないかと思いますが、この国で、結婚して子供ができないということは、私たちの国で結婚前に子供ができてしまうのと同じくらい、不名誉なことなのです。人々の意見によると、女性が子供を産むのをやめたということは、もう年をとって子供ができない、ということになってしまいます。どれほど若々しく見えたとしても、そのように思われてしまいますから、こちらの女性たちは、若さの証拠として、いつも子供を産もうとしています。(若さは、美しいと認められるためには不可欠なものですし、マルタ島騎士¹³⁴から美しさを評価されるのに欠かせないものなのです。女性たちは、自然の力だけでは飽き足らず、子供が産めないという噂になるのを避けようと、ありとあらゆるいんちきな医療に手を出しています。そうして、自分の命を落としたりするのです。大げさではなく、事実、私の知り合いの女性たちは皆、結婚して10年で、12、13人の子供をもうけています。年取った女性になると、25人から30人もの子供を産んだことを大変誇りにして、その数のために多くの尊敬を集めているのです。子供たちと一緒に家でくつろいでいる時など、女性たちは、神のお慈悲で今度は1度に2人の子供が授かりますように、などと言います。私が、どうして一度にたくさん産まれてきてほしいのか、と尋ねますと、疫病で子供の半分くらいは死んでしまうから、と答えるのでした。実際に疫病で死ぬ子供は多いのですが、親たちはあまり気にしていないようです。皆、どれほど子供をたくさんもうけたかを誇りに思い、それで満足するのです。フランス大使夫人なども、私と同様この習慣に従ったようでした。夫人は、まだこちらに来て1年くらいなのに、一度お産の床につき、今またお腹が大きくなっています。子供を身ごもることで、女性たちが何よりも一番嬉しがっているのは、子供を産まないことで受ける忌まわしい中傷から逃れられることでしょう。皆子供が生まれてくる日を楽しみに待ち、生まれて2週間前がたつともう外出をするようになり、美しい宝石と新しい衣装に身を包んで出かけていきます。私の出産の時、この地の良い気候が私の体にうまく働きかけてくれたら、と心から思っています。また、その後も、きちんとしたイギリス人女性らしく振舞えるかどうかを心配しています。火事と疫病、まっとうなイギリス女性であれば、これらのものを恐れて当然ではないでしょうか？実はこの2つは、コンスタンティノーブルではほとんど気にされていません。たいていの家は、1度か2度

¹³³ この同じ月に、メアリーは娘メアリー(後のピュート夫人)を産んだ。

¹³⁴ 十字軍の際に、エルサレム基金によって作られた騎士団。

は火事にあっていますが、それはタンドゥール（炬燵）と呼ばれるこの地独特の暖房のためです。タンドゥールは、煙突のあるストーブとは形が違って、2フィートほどの高さがあり、机のような形をしていますし、机と同じ木でできています。そして、表面を美しいカーペットや布で覆っているのです。タンドゥールの中には、熱い石炭が少し置かれて、その上をすっぽり覆った布の下に人々は足をいれ、暖を取っています。この机で、皆手仕事をしたり本を読んだりして、時にはうとうとと眠りに落ちることもあるでしょう。眠り込んで夢でも見ていたのか、熱い石炭の入った入れ物を蹴飛ばしてしまい、そのせいで、家が火事になってしまうこともよくあるようです。昨日も、このような原因で、500軒ほどの家が燃えたということでした。私は家の持ち主たちを何人か見かけましたが、皆身にふりかかった不幸をまるで気にかけていないかのようでした。荷物を持って小船に乗り込み、海側から自分たちの家が燃える様子を眺めていたのです。あたかも、降りるための梯子がない危険など起こりっこない、という偉大な哲学でも持っているかのような顔つきをして。

ここまで、私があまり賛成しない話題について書いてきましたが、逆に、私がとても嬉しく思っていることに触れたいと思います。それは、この地の気候のことです。ここのお天気は、本当に素晴らしいのです。私は今1月4日に、窓を開け、入ってくる日の光を受けて座っています。きっとイギリスで、あまたは石炭に火をつけて凍えているのではないのでしょうか？そして、私の寝室には、庭から取ってこさせたカーネーションや薔薇、黄色い水仙などが生けてあるのです。他に私が気に入っているのは、トルコの法の数々です。私たちのものよりも、ずっときちんとしていて、良く適用されているように思えるのです。特に、故意に嘘をついた人などの処罰については。（私たちの国では、今現在この罪は勝利をすら意味していますね。真実は神のみぞ知ることです。）この罪を犯した者は、額に熱い鉄の印を押され、嘘をついたということが誰の目にも明らかになります。もしイギリスでこの法が適用されたら、私たちは、どれほど多くの白い額が傷つくのを見なければならぬのでしょうか？いったいどれくらいの紳士たちが、かつらを眉のあたりまで引き下げて被らなければならぬなるでしょう。もっと多くの例をあげたらよいのですが、そろそろ私は産婆さんと呼ばずにやらねばなりません。

40. アベ・コンティ様

1718年2月

あなたからのご親切なお手紙、本当にありがとうございます。私は、できる限りフランス語を使って¹³⁵、あなたからのご質問すべてに答えようとしているので、この紙の大きさに驚かれたかもしれませんね。フランス語は私が完璧に身につけていない言葉ですから、上手に表現できなかつたら、できるだけ短く

¹³⁵ 本来はフランス語で書かれた手紙で、最初トルコ書簡集から外されていた。R.Halsbandによる英語訳。

丁寧に文章を終わりにしたいと思うのです。どうぞ私が慣れない言語で書いている、ということのを頭の片隅に留めておいて下さい。言葉不足から私の考えをうまく表わせず、不適切なまたは無礼な表現になってしまうことがあってもお許しくださいね。もちろん、故意にそんなばかげたことや、退屈なことを書くつもりなどないのです。

このように言い訳しておいたところで、あなたのコーランについてのお考えに、ちょっと触れたいと思います。おそらく、あなたのコーランの知識は、ギリシャ人司祭たち(世界でも最悪の悪党たちです。)が、マホメットの戒律を否定するために自分たちで作り出した、でたらめなものから来ているのではないのでしょうか? 調べたわけではないのですが、人々がコーランを読むのを聞いたギリシャ人司祭たちは、コーランの欠点を見つけ出してしまおうと、それだけでなく伝説や作り話、自分たちの批評までを取り混ぜ、曲解してしまったに思います。結果として、ギリシャ人の伝説とマホメットの物語は、たいして違いがなくなるのです。いずれにも、多数の聖者たちがいて、彼らのお墓では日々奇跡が起こっていると人々は言います。でも、大変信心深いイスラム教徒の日々の生活では、そんなことはありませんし、もちろんギリシャ人司祭たちの精神論など、ほとんど取り入れられてもいないのです。

次のご質問ですが、私はきっぱりとノーということができます。私たちはこれまでずっとそう信じてきましたが、マホメットは女性を天国から締め出している、というのは誤りなのです。今まで、マホメットは紳士ではなく、女性たちを大変野蛮な態度で扱ってきた、と思われていましたね。それどころか、本当は、女性たちに大変素晴らしい天国を約束しているのです。確かに、その天国は夫である男性たちと同じ場所にはないのである、とマホメットは言います。それが、余計に男性たちの気に入らないのかもしれませんが、だからといって天国の魅力が減るわけでもありません。女性たちが、この天国に入るために必要なのは以下のことです。まず、世間から無用のものと思われるような生き方をしないこと。そして、できる限り、小さなイスラム教徒を増やすように努めることです。子供を産まずに死んだ女性や未亡人のままであった女性は、罪があるとみなされて、この天国に入ることができません。マホメットに言わせると、女性は財産や地位などのごたごたには向かないし、戦争をするために生きているのでもないのです。神は、世界を支配したり、革命を起こしたりするために女性をお造りにはなりません。そうではなく、同じように名誉のある、子孫を残すという役目をお与えになったのです。ですから、故意に子供を産み育てることを怠った女性は、神のお与えになった任務を果さず、神に逆らったということになります。ちょうどあなたの国の修道院とは、全く反対のことになってしまうのです。例えば、聖カテリーナや聖テレサ、聖クララなど、記録に残る有名な聖女たち、彼女たちの徳をこのような考え方で裁いてみたら、どうになってしまうのでしょうか? 彼女たちは、神の教えを無視して一生を過ごした、悪名高い人物になってしまうのです。

私たちが大いに信じきっている一般常識に対して、あなたがはたしてどのよ

うに考えているのか、私にはわかりません。でも、これだけは申し上げておきましょう。トルコ人たちは、政治や哲学、恋愛において、私たちが考えているほど無知ではありませんでした。確かに、今キリスト教国で当然のことである、軍隊の規律といったものは、こちらには合わないようです。ずいぶんと平和になれなくなってしまって、怠惰になったのでしょうか。現在の状況と手に入れた無限の富に満足し、あらゆる雑務を憎むようになりました。しかし、何とか立ち直ろうと、科学的なものを取り入れ始めています。エフェンディたち（つまり、有識者たち、ということです）は、まさにその名にふさわしい知識を持っています。彼らは、法皇が絶対であるとも思っていないし、マホメットの靈感も信じていません。率直に、自分たちは有神論者であり、そういった人々を信用していると主張しています。その法についてはあまり口にしません。政治機関において、その考え方は現代的確に適用されているのが見受けられます。実は、エフェンディたちは、最初は政治家ではなくて狂信者ではないか、と思われていたようなのですが。

もし私の勘違いでなければ、前回のお手紙で、ベオグラードでそういったエフェンディのところに宿をとったお話をしたかと思えます。アフメッド・ベイは大変に学があり、面白い話をしてくれる方でした。私たちは1ヶ月ほどお宅に滞在したのですが、アフメッド・ベイはその際ほとんど毎晩私たちと一緒に食事を取り、特にためらうことなくぶどう酒を飲んでいました。私はその話題を持ち出しますと、アフメッド・ベイは笑ってこう言いました。「この世の創造物は、すべて神が人間のためにお造りになったものなのですから、ぶどう酒を飲むことが罪ならば、神はぶどうをお造りにならなかつたでしょう？」と。さらにアフメッド・ベイは続けます。「我々の戒律は、無知な人々がぶどう酒を飲むことを禁じているのです。なぜなら、そういった人々は、適度に飲める自制心を持ち合わせていませんからね。」アフメッド・ベイのような考え方をする人は、私たちの周りにはたくさんいますね。それどころか、宗教論争についての知識すらあるようでした。私は、アフメッド・ベイがトーランド氏¹³⁶はどんな考え方なのか、などと尋ねてきたのには、本当に驚いてしまいました。

大きな便箋も、そろそろ終わりに近づいてきました。最後に、話題を宗教からチューリップへと移しましょう。確か、前のお手紙でチューリップのことについてもお尋ねでした。ここでは、いろいろなものが掛け合わされ、素晴らしいものが作り出されているのです。中でも、私が1番驚かされたのは、あなたも手紙で書いていた生き物における実験です。本当に、毎日のように行われているようです。ペラヤトプハーネ、ガラタなどの郊外には、世界中から集められた、ありとあらゆる人種がいます。あまりにもいろいろな人種が混ざってしまって、とても不思議な様子をした人々すらいるほどです。全くよその血が入っていない、1つの人種からなる家族は見かけられません。例えば、父は

¹³⁶ John Toland(1670-1722)アイルランドの自由思想家。1696年、Christianity Not Mysterious を著し、有神論の矛盾を突いた。

ギリシャ人、母はイタリア人なのに、祖父はフランス人で祖母はアルメニア人、さらにさかのぼるとイギリス人やロシア人、アジア人のなどの祖先を持っている人などがいるのです。

このように混ざり合うことで、想像をはるかにこえた姿の人が生まれてきます。私は、異なった人間の種がいると信じて疑いません。白い肌の人や長い髪をした黒人、小さな目のタタール人や中国人、あごひげのないブラジル人などなど。さらに挙げると、油っぽい黄色い肌のノヴァ・ゼンブリアン¹³⁷などは、本当に異なった特徴を持っています。こんな比較をして許されるのであれば、ちょうどグレイハウンドやマスチフ、スパニエル、ブルドッグ、もしくは私の飼っているダイアナのような犬が、同じ種に属するのにかなり違った様子をしているのと同じような感じなのです。いろいろな種類の犬が掛け合わされたものは、雑種と呼ばれますが、それなら人間も細かく分けていけば、数限りない雑種になるはずです。ここの国には、それを証明するたくさんの例があるのです。しかし、同じ1人の人間が、ギリシャ人の反逆の精神やイタリア人の内気さ、スペイン人の高慢さ、フランス人のおしゃべりな性癖を持ち、しかも時折イギリス人らしく深い考えにとりつかれる、などということはありません。このイギリス人の性癖は、私たちがサクソン人の祖先から受け継いだ、嫌なもの1つと言えるでしょう。

1番私の印象に残った家族は、オランダ人の男性とギリシャ人の女性が結婚しているものでした。もともとオランダ人とギリシャ人は相反する性質を持っていますが、目に見える外見だけ見ても、それが子供たちに混ざり合って表れており、とても不思議な雰囲気でした。子供たちはオランダ人特有の白く、ふっくらと肌に、生き生きとした黒く大きな目をしています。ギリシャ人によく見られるぜいたく好きの雰囲気をもつと同時に、オランダ人風のつつまじやかな様子なのです。なぜかといえば、女の子たちは、足にぴったり合った新しい靴を買わないで、頭を飾り立てる宝石を買い、ぼろぼろの靴をはいて自分の姿を台無しにしているのです。イギリス人女性では、こんなことはあり得ません。私たちにとって、どれほどきちんとした靴を履いているのか示すのはとても大切なことです。もう1つ、イギリスの多くの女性たちはフープ・ペチコートにご執心の様子ですね。まだまだお伝えしたい面白い話があるのですが、そろそろ余白もなくなりそうですし、私のフランス語も限界に近づいているようです。

41. マー夫人へ

1718年3月10日 コンスタンティノーブル・ペラにて

大事な妹よ、この何ヶ月というものの、全くあなたに手紙を書きませんでしたね。そのことで私はずいぶん自分自身を責めました。が、実のところは、あなたがいったいどこにいるのか、私にはわからないのです。去年の4月あなたから

¹³⁷ ロシアの北極海沿岸にある、Nova-Zemblian 島の住民。

短い手紙を受け取って、ちょうどイングランドを離れるところだということを知りましたが、その手紙では行き先は分かりませんでした。あなたがすぐに居所を知らせてよこすというので、今までずっと待っていましたが、どうやら無駄だったようです。私は新聞を読んで、あなたがどうもイングランドに戻ったらしいということを知りました。そこで、私はあなたのロンドンの家へと、試しに手紙を送ってみようと思いついたのです。手紙を全く書かないよりは、手紙を10通書いて、その10通全部なくなったとしても、そのほうがずっとましな気がするのです。それに、どれほど運が悪くても、きっと10通に1通はあなたの手元に届くでしょうから。念のため、私はあなたに書いた手紙の写しを、証としてできる限り自分の手元に残すつもりでいます。私はただ、私の大切な妹であるあなたが旅疲れから癒されるのに、私の手紙が一役買うことができればと思っているのです。

何よりもまず、あなたの姪が生まれたという、素敵なニュースをお知らせしましょう。そう、私は、5週間ほど前に、お産の床に運ばれたのでした。もちろん、これが非常に楽しい話である、などとは言いませんが、こちらでは、お産の話は、イングランドほどつらい話として語られないのが普通です。この国では、お産はまるで軽い風邪か何かのような扱いを受けますが、ロンドンではあたかも百日咳にかかったかのように思われているようですね。ここでは、誰も産後家に1ヶ月も寝ていることはありません。また、私も、イングランドの習慣に従って不必要に長々と床に着きたくもなかったのです。そこで、3週間目の終わりに、私はまたあちこちへの訪問を再開しました。そして訪問を再開してから4日後には、私の家とコンスタンティノーブル市街の間を隔てている湾を渡りさえのです。その訪問先には、私が関心を持つものが実にたくさんありましたので、この手紙ではそれについて話したいと思います。

私は海を渡って、私は先のスルタン・ムスタファ2世の寵妃であったハフサ夫人¹³⁸のもとを訪れました。あなたが知っているかどうか分かりませんが、ムスタファ2世は、現在のスルタンの兄にあたる人です。1703年に廃位され、その数週間後に亡くなったのですが、おそらく毒殺であったのだろうとささやかれています。ハフサ夫人もまた、スルタン・ムスタファの死後すぐに、その宮殿から出るように求められたといえます。そして、並み居るエフェンディたちの中から、自分で新しい夫を選ぶようにと言われたのです。夫人が、この申し出を大喜びで受けたと思うのでしょうか？ところが、全く逆なのです。ハフサ夫人たちのように王妃と呼ばれるほどの女性たちにとって、こんな事態は大変な不名誉であり、屈辱的な行為に他ならないのです。ハフサ夫人は、新しいスルタンの足元にひざまずき、兄の未亡人にこんな侮辱的なことを強いるなら、むしろ短剣で突き刺されたほうがましだと懇願したといえます。そして、夫の死にあたってのつらい悲しみや、オスマン宮廷に5人も皇女をもたらしたことを訴え、どうか救ってほしいと繰り返したのでした。しかし、夫人の産んだ男

¹³⁸Hafise (1685-?) ムスタファ2世妃

の子は皆死んでおり、生まれた皇女も今や1人しか生きておらず、子供のことは全く理由になりませんでした。やむなく、ハフサ夫人は当時州知事であったエブベキル・エフェンディ¹³⁹を選びました。その時エブベキル・ベイは80歳を超えており、それほど年老いた人を選んだのは、新しい夫と寝室に入らない、という決意を表しているかのようでした。もちろん、ハフサ夫人はエブベキル・ベイの妻として呼ばれる名誉を受け、手厚く保護されていますから、夫に対して多大な感謝の念を表しています。また、夫人がまだ10歳の時に、亡きムスタファ2世に夫人を贈ったのは、他にもないエブベキル・ベイなのです。しかし、2人が結婚してもう15年にもなるのに、未だにハフサ夫人は夫を寝室に入れようとはしません。夫人は、キリスト教国でさえあまり見られないほど、亡き夫に貞節を誓い、ただひたすら喪に服しているのです。未亡人になったときは21歳だった夫人ですが、36歳の今まで、こうやって喪に服して過ごしてきたようです。ハフサ夫人のところには、夫人を守り、同時に監視する役目を果す黒人宦官がいません。夫は大変妻に敬意を示しており、自分の部屋で何をしているのか、など問い詰めたりもしないようなのです。私が夫人のお屋敷に到着すると、まず大きな部屋に通されましたが、そこには大変大きなソファが置かれていました。銀色の地に水色のベルベットの布で覆われた白い大理石のソファで、お揃いの布のクッションも並んでいます。ハフサ夫人が来るまで私がここで休んでいられるようにと、私をこの部屋へ通させたようでした。夫人が現れ、私が立ち上がると、夫人は私に頭を下げました。私は、スルタンの寵妃、つまり世界でも最も美しいといわれる女性に会えたことで大変嬉しく思いました。が、本当のことを言えば、アドリアノーブルで会ったファトマのほうが、ハフサ夫人の倍も美しいように感じたのです。もちろん夫人は美しい顔立ちをしていましたが、長年の悲しみによって、その美しさが損なわれてしまったようでした。

ハフサ夫人の衣装は、あなたに話さずにいられないほど、それはそれは豪華なものだったのです。夫人は、カフタンよりももっと袖が長く、下のほうが折ってある、ダラマンと呼ばれる上着を身に付けていました。ご自分の体型にあった紫色の厚い布でできていて、その袖はとても長く、足元まで届くものでした。上着には、ちょうどボタンくらいの大きさの、大変貴重な一級品の真珠がずらりとついていたのです。きっと、私の夫が持っているあの大きな真珠、あれほどは大きくはない、と思うでしょう？でも、本当に巨大な真珠なのです。そして、真珠のボタンに合わせて、あの宮廷用のドレスにつけるような、ダイヤモンドのボタン止めがあるのです。夫人の衣装の全体は、腰のところで、2本の真珠の帯で結ぶようになっていました。もちろん、上着の袖にも、大きなダイヤが縫いつけられています。また、上着の下につけるペチコートは、胸のところでひし形のダイヤモンドで留めてあり、帯はイギリスでいう幅広のリボンのような感じで、全面にダイヤモンドが縫い付けられているのです。アクセ

¹³⁹Ebubekir Bey Effendi (?-1723) 1718年当時外務大臣。

サリーとして、夫人はその首に、膝まで届くほど長い3連のネックレスをかけていました。そのネックレスたるや、中心に、ちょうど七面鳥の卵くらいの大きさをしたエメラルドがあり、その下にもっと大きな真珠、まわりには200個ものエメラルドがつながっているという豪華さ。エメラルドはどれも美しい緑色で、ちょうどクラウン銀貨の半分くらいの大きさ、厚さは銀貨3枚分ほどもあったのです。さらに、一番素晴らしいのは夫人のイヤリングでした。なんと、洋なしのような形をした、ハシバミの実くらいの大きさがあるダイヤモンドなのです。髪飾りとしては、それは素晴らしい真っ白な真珠の髪飾りを4つほどつけていました。少なくとも、どのひとつをとっても、マールボロ公爵夫人¹⁴⁰のネックレスほどの大きさだったと思います。髪飾りは、大きなルビーで作られた2本の薔薇とともに髪に飾られ、ルビーの薔薇もまた、それぞれが20個ほどのダイヤモンドのかけらで縁取ってあったのです。その上、髪をあちこちに、エメラルドとダイヤモンドのヘアピンがきらきらと輝いていました。このような美しい装飾品に加えて、夫人は、その腕にダイヤモンドのブレスレット、指には5つのダイヤモンドの指輪をつけていました。トーマス・ピット¹⁴¹のあの巨大なダイヤモンドを除けば、私が見た最大のダイヤモンドだと言えます。こうしたものの本当の価値を正確に計算できるのは宝石商ですが、私がおよそ、おおまかな価値をつけるとしたら、彼女の衣装は、10万ポンドは下らないのではないかと思います。たぶん、ヨーロッパのどの国の王妃も、これほど価値のある品々を身につけてはいないでしょうし、このハフサ夫人の前では、どれほど豪華なものも色あせてみえてしまうのではないのでしょうか。

食事の席で、ハフサ夫人は私に50皿もの肉料理を出してくれました。料理は、トルコの習慣によって50種類が一皿一皿出されたので、私には少し退屈なやり方のように思えました。しかし、ちょうど彼女の衣装が豪華であるのと同じで、その料理もまた、大変素晴らしいものだったのです。ナイフは全部、柄にダイヤモンドがついた金でした。中でも、あまりに豪華すぎて、私が残念に思ったものがあります。それはナプキンとテーブルクロスでした。どちらも、金の刺繍入りで、薄い絹でできているのです。これほど美しく作られた、まるでスカートのような高価なナプキンを使うのは、大変もったいないような気がしました。もちろん、あなたの想像どおり、この美しいナプキンも、食後には汚れていましたが。食事と共に、こちらではいつも出されるシロップ水が、陶器に入って出されました。その陶器の入れ物も、ふた、お盆も全部ずっしりと重い金なのです。食事が終わると、金のたらいに入った水と、また同じような美しいナプキンが運ばれてきました。私は大変嫌々ながらも、そのナプキンで手を拭きました。最後の締めくくりは、金の受け皿つきの陶器で出される、おいしいコーヒーでした。

¹⁴⁰ Sara Jennings(1660-1744) Marlborough 公爵 John Churchill の妻。アン女王の大変なお気に入りであったという。

¹⁴¹ トーマス・ピット (Thomas Pitt, 1653-1726) 巨大なダイヤモンドの持ち主として有名であった。

ハフサ夫人は大変良いお人柄のようで、とても礼儀正しく、親切に私に話しをしてくれました。私は、ハレムの生活について知るのに、これほど良い機会はないと思いました。普段は、ハレムについてほとんど知ることなどできないからです。彼女が言うには、大臣がハレムの女性にハンカチを投げることでその晩スルタンの元へ行くようにと知らせるという話は、全くのでたらめなのだそうです¹⁴²。そのような場合は、スルタンの意中の女性へ黒人宦官長¹⁴³を送り、その意を伝えるようです。その知らせに、周りの人々は直ちに彼女を祝福し、彼女は入浴して身を清めます。そして、香水をふりかけ、最も美しい衣装に着替えます。夜になると、スルタンは小姓に導かれて彼女の部屋を訪れるのだそうです。私たちが思っていたような、こっそり忍び込むということはないようでした。ハフサ夫人の話によると、以前から私たちが聞いていたとおり、スルタンが寵愛するのはたいてい2番目に位が高い女性、つまり一番年長の皇子の母ではない女性、ということでした。時折、スルタンは、ハレムの女性たち皆を集め、自分の周りにぐるりと立たせて楽しむことがあったようです。ハフサ夫人が言うには、女性たちは皆、スルタンが少しでも愛を表してくれれば、それだけで死ぬほど幸せ感じていたそうです。どこの国の宮廷でも、女性たちは君主をちらりとでも見て、わずかでも微笑みかけてもらう希望を胸に生きており、微笑みをもらえないものたちは寵愛を受ける者を妬む、という図式になっていますね。ですから、私はこのオスマン帝国の宮廷が、他と比べても、言われるほどひどいところのようには思えませんでした。

ハフサ夫人は、スルタンについては涙なしに語れない様子でした。でも、スルタンの話をするのはとてもお好きなようでした。「私の過去の幸せは、」と夫人は言いました。「まるで夢のようでした。でも、世界中で最も素晴らしい人から愛されたことを私は一生忘れないでしょう。私は、スルタンと生涯を共にするために、あらゆる女性の中からたった1人選ばれました。もし私が、娘をこんなにも愛していなかったら、スルタンを1人で逝かせはしなかったでしょう。愛する夫を失った時、娘への愛情だけが私を生かし続けていたのです。私は、1年もの間、全く光を見ないで暮らしました。時間が私の悲しみを和らげてはくれましたが、それでも、今でも週に何日かは、私の愛するスルタンの思い出とともに涙を流して過ごすのです。」夫人の言葉には、嘘などないように思えました。明らかに、夫人は未だに悲しみの中にいるような様子でした。そんな中でも、なんとか私をもてなそうと努めてくれていたのだと思います。

ハフサ夫人は、私を庭へ散歩に誘いました。すると、すぐに彼女の女奴隷が、クロテンの毛がついた薄い絹のガウンを持ってきたのでした。私は夫人について庭に出ましたが、泉以外には、庭にそれほど目をひくものはありませんでした。が、ちょうどこの泉のところから、夫人の部屋が全部見渡せるようになって

¹⁴² ポール・ライコートの本に見える、スルタンが夜を過ごしたいと思う女性に、ハンカチを投げるという逸話。

¹⁴³ Kuslir Aga. ハーレムでの権力者。

ていました。寝室には、洗面所があり、そこには真珠で縁取られた2つの鏡があります。また、部屋には、毛皮の帽子や、宝石がついたヘアピン、美しいクロテンの上着が3つほど見えました。その上着はといえば、どれも、少なくとも1000ドル、たぶん200ポンドほどするのではないかと思われたほどです。これほど高価な品々ですが、わざと目に付くように置かれていたわけではないと思います。どれも本当に無頓着に、ソファの上に投げ出されていたのですから。私がお暇を告げると、夫人はちょうど大宰相の奥様と同じように、私の手に香水をふりかけ、美しい刺繍のハンカチを贈ってくれました。ところで、彼女のもとにいる女奴隷たちは30人以上なのですが、中には7歳にもならない小さな女の子が10人ほどいました。どの子も皆美しく着飾って本当にかわいらしく、私が思うにハフサ夫人は、この子供たちに喜びを見出しているようでした。この年頃のかわいらしい女の子は、スターリング金貨100枚分を下らない値がつけられるのですから、きっとずいぶんお金をかけているのだと思います。どの女の子も、髪には小さな花輪を飾り、長い髪の毛をきれいに編んでいました。衣服は、美しい金糸で縫われたもののように見えました。この子供たちは、ハフサ夫人にひざまずいてコーヒーを差し出したり、入浴の際に水を運んだりしているのです。年長の女奴隷たちにとって、こうした小さな女の子たちの教育もまた、大事な仕事のようなのです。あたかも自分の子供であるかのように丁寧に、刺繍や、礼儀正しい振る舞いを教えたりしているのです。

さて、ここまで読んで、あなたはこの話を、私が作り出した華やかなおとぎ話の世界のことだとも思ったでしょう。そうよ、まるでアラビアンナイトのお話みたいじゃないの、とあなたは言うでしょうね。金の刺繍入りのナプキン、七面鳥ほどの大きさの宝石だなんて！でも、あのアラビアンナイトだって、この国の人を書いた物語なのです。実は、魔法以外は、全部この国の本当の様子を描いたものなのです。さあ、私たちのような旅行者は、大変つらい立場に置かれているようですね。もしも前から語られていたような話を繰り返せば、新しい土地に行っても何も見ていない、とか退屈だ、とか言われます。それに対して、何か新しいことを言えば、おとぎ話のようだと笑われたりするのです。人々は、旅行者の階級の違いや興味、どの国でも20年に一度は起こりえる習慣の変化、などを考慮しないのでしょうか。人々は、ちょうどご近所の人を評価する時のように、いつでも、同じような基準で、実に不公平に旅行者を眺めています。もしも、私が無事帰国できたならどうなるでしょう？私は友人知人たちの価値観を良く知っていますから、しゃべりすぎと非難を受けないように、口を閉ざす覚悟でいます。でも、あなたは私を十分良く知っているでしょうし、私が真面目に真実を話したらたぶん信じてくれると思うのです。もちろん、聞いたこともないような話に驚くことにはなるでしょうね。私が数々の美しいお屋敷に行ったことを話したら、あなたは何て言うのでしょうか。お屋敷にある冬の居室は、色とりどりの真珠や象牙、オリーブの木を組み合わせて飾られていて、まるでこの国からイギリスにも持ちこまれる、あの宝石箱さながらなのです。夏の居室といえば、タイルで覆われ、屋根は金、床は美しいペルシャ

絨毯といった感じです。このようなお屋敷は、もちろん私の想像上の産物ではなく、実際にあるものです。そう、アドリアノーブルで知り合ったあの美しいファトマのお屋敷に他なりません。私は、昨日またファトマのもとを訪れました。私には、ファトマはますます美しく輝いて見えたのです。ファトマは、この上もなく優雅なやり方で、私に手を差し出し、「あなたたちのような、キリスト教徒の女性たちは、」と言い、天使のように美しく微笑みました。「大変移り気だとずいぶん伺っていました。ですから、アドリアノーブルであなたがあれほど私に良くしてくださったのに、またお会いできるとはどうしても思えなかったのです。そのために、今私はあなたに会えて本当に嬉しく思っています。私たちの仲間うちで、私がどんなふうにあなたの話をしているかお聞きになったら、きっとあなたは私を真の友人として、心から認めてくださるでしょうね。」そうしてファトマは、私をソファーに座らせました。その午後、私は、ファトマと話をしながら大変に楽しい時間を過ごしたのでした。

ハフサ夫人は、誰もがトルコ人の女性らしいと感じるような人です。親切にもてなしをしたい気持ちでいっぱいなのですが、そのやり方を知らない、といったどこか不器用な感じです。その様子から、おそらく世間からは遠ざかって暮らしてきたであろうことが、容易にみてとれるのです。それに対して、ファトマには宮廷風の礼儀作法が身につけており、高貴さや優しさが同時に表れています。トルコ語を解せるようになると、ファトマが美しいだけではなく、大変知性豊かであることも分かります。ファトマは外国の慣習にも大変関心を示しており、自分の国のものだけに、閉じこもるようなことはしません。私のお付きのギリシャ人女性も、ファトマにこれまで会ったことがなかったのですが、初めて会った時その美しさに大変驚きました。(もし彼女が私のお付きにならなかったら、きっとファトマに会う機会はなかったらと思うのですが。)そして、私にイタリア語でこう言いました。「ファトマ様は、全くはトルコ人のようではありません！まるでキリスト教徒の女性のように見えます。」ファトマは、彼女が自分のことについて話しているのだと感じ取り、何と言ったのか尋ねました。私は、あまり説明したくありませんでした。というのは、私たちがトルコ風だと言われるとあまり嬉しくないのと同様、ファトマだってキリスト教徒風だと言われたら、喜ばないだろうと思ったのです。しかし、ギリシャ人女性は、ファトマにその言葉をそのまま伝えてしまいました。するとファトマは微笑み、言いました。「そう言われたのは、初めてではありません。私の母は、カミエネツ¹⁴⁴の要塞に連れてこられた、ポーランド人でした。父は、母にはキリスト教徒の愛人がいたに違いない、などと私をよくからかったものです。私が、まるでトルコの女の子のようではなかったものですから。」そこで私は、もしもトルコの女性が皆ファトマのようであったら、男性たちが大騒ぎをするので、公共の場に姿を現せなくなるでしょうと言いました。続けて、もし彼女がロンドンやパリに現れたら、大変な評判になるに違いありません、と言いますと、

¹⁴⁴ Camieniec ,1672年、メフメット4世がおさえたポーランドの要塞。

「それは信じられませんね。」とファトマは穏やかに答えました。「あなたがおっしゃるほど、お国で美しい人が大切にされているのならば、人々はあなたが国を出た時どれほど嘆き悲しんだことでしょうか？」

私がこんなふうに褒め言葉を繰り返したのを読んだら、あなたは私の自惚れだと笑うかもしれませんね。でもそうではなくて、この会話が、ファトマがとても機知に富んだ人であることを示す良い例となるのでは、と思って付け加えたのです。先ほど触れたように、彼女のお屋敷は大変に大きく、美しい立派な家具が備え付けてあります。冬用の居室は金のベルベット、夏用は金で刺繍が施されたインド産キルトが敷き詰めてあるのです。このようなトルコ式の美しい住居は、ちょうどオランダのものと同じく、大変きれいに保たれています。町の中でも小高い部分に建っているので、夏用の居室の窓からは、海と、遠くにアジア大陸の山々を見渡すことができるのです。さあ、気づかないうちに、私の手紙はずいぶん長いものになってしまいましたね。私が真っ赤なうそつきなどではないことが、証明されたら良いのですが、どうでしょうか？ 私たちのことわざに、こんなものがありましたね。「知識はそれ自体重荷にはならないというのは真実であるが、あまりに知りすぎると、おまえ自身が他の人たちのお荷物となる。」

42 . . . 夫人へ¹⁴⁵

1718年3月16日 コンスタンティノーブル・ペラにて

あなたのご希望に添えるようなお話ができることで、今回私は大変嬉しく思っています。でも、お望みのことをするのは、ご想像以上に大変なことであったと付け加えておきましょう。もしも私がこれほど熱心に調べなかったら、きっとこの手紙は言い訳のお手紙となっていたでしょうから。私は、あなたがたとエギリシャ人の奴隷をお望みなら、それを買わねばならないのです。さあ、あなたがちょうどご希望されたような、美しいトルコ語のラブレターを手に入れました。私はこれを小箱に入れて、この手紙と一緒にスミルナ号¹⁴⁶の船長へ手渡すつもりでいます。ラブレターの英語訳は以下の通り¹⁴⁷です。まずあなたが最初に小箱から取り出すのは、小さな真珠であると思います。真珠は、トルコ語ではインジ (İnci) と呼ばれていますが、それがどんな意味なのか、この手紙で分かるのではないのでしょうか？

あなたは美しい真珠

カーネーションのようにほっそりとして

愛らしい薔薇のようなその姿

¹⁴⁵ R.Halsband による匿名化。おそらくリッチ夫人に宛てられたものであると思われる。

¹⁴⁶ Ship Smyrniote、貿易船。1718年2月にスミルナ(現イズミール)入港、その翌月にはコンスタンティノーブルに到着した。

¹⁴⁷ Jack Malcolm 編集による原文では、上記の形式で、トルコ語 - 英語となっている。主にトルコ語の部分を見て日本語に翻訳したが、メアリーが転記したと思われるトルコ語が不十分ではないため、英語部分も参考にした。

私はあなたを長いことずっと愛しているのに
あなたは何も知らないのだ
この情熱にどうか気づいて
私はあなたを愛するあまり 正気を失いそうなほど
どうか希望を与えて
私はあなたを愛するあまり 病に倒れそうなほど
私が死んでも 私はあなたのもの
あなたの微笑み 悲しみすべてを受け止めよう
私はあなたのしもべとなろう
待っていても王子様は現れはしない
でも 私はあなたを大切にしよう
あなたへの愛で 燃え尽きてしまいそうだ
どうか私のほうへ その顔をむけて
私の大切な冠
私の瞳
どうか私のほうへ 私が地に倒れる前に

追伸：どうかすぐにお返事を

見て分かるように、この手紙は全体が詩になっています。そして、ちょうど英語の詩における表現と同じく、大変興味深い詩の言葉が表れていると思います。私が思うに、詩のためには何百万もの言い回しがあるのではないのでしょうか？ここには、詩句として意味をなさない、色や花、草、果物、宝石などの例えは一切でてきません。ですから、きっとあなたにとってはいぶかしく思われるでしょうし、責められてもしょうがないことだと思います。きっとあなたは私に無記名の、苦情のお手紙を送ってくるかもしれませんね。

私がいったいどのくらいトルコ語を学んだか、興味をお持ちではないかと思えます。悲しいことに、私は学ぶ情熱を溢れ持つ者特有の、不運に陥ってしまったようです。遠くに離れていると、外国語のわずかな獲得によって、もともと持っていたものが揺り動かされるのです。早い話、私は英語を忘れそうになっているわけです。私は、1年前のようにらくらくと英語で手紙を書けなくなっていることに気が付きました。どうやら、私は英語の表現を学ばねばならないようです。他の外国語はさておき、まずは自分の母国語を何とかするべきですね。人間の理解力というものは、人間の強さ・力といったものと同様、大変限られているのでしょうか。人間は、ある程度の数の物事を記憶に留めておけますが、1人の人が10ヶ国語を全く完璧に、同じように操ることなどまず不可能です。同じように、1人が1度に10人の敵を相手にしたり、10国をも同時に支配したりするのは、とうてい無理な話なのです。ついには、一つとして得られないことになりかねません。私は今、まさにバベルの塔のような世界に住んでいるのだと思います。ペラでは、人々はトルコ語、ギリシャ語、ヘブライ語、アルメニア語、アラビア語、さらにペルシャ語、ロシア語、スロベニア語、ルーマニア語、ドイツ語、オランダ語、フランス語、英語、イタリア語、ハンガ

リー語などを話しているのです。しかも、私の家では、このうちの 10 もの言葉が、日常使われているのです。私の馬丁はアラブ人、護衛はフランス人・イギリス人・ゲルマン人です。乳母はといえばアルメニア人で、女中はロシア人、その他 6 人くらいギリシャ人のお付きがいます。また、給仕をしてくれるのはイタリア人、当然イエニチェリたちはトルコ人です。私は、日々これほど種々雑多な人々の中で暮らしていますが、このような環境で生まれ育った人には、やはり大きな影響があるようでした。つまり、たくさんの言葉を同時に覚えてしまう一方で、そのどれ 1 つとして満足に読み書きはできない状態なのです。ここには、5 つか 6 つの限られた言葉の範囲で生活している人など、ほとんどいません。私が出会った 3,4 歳の小さな子供ですらも、イタリア語・フランス語・ギリシャ語・トルコ語・ロシア語を話していました。どうやって覚えるかといえば、何人かいる乳母たちの影響のようでした。きっと、あなたにとっては信じられないような話であるかもしれませんが、実際、私にもこの国で 1 番驚いたことの 1 つなのです。私たちの社会で、フランス語やイタリア語を素晴らしく解するという評判を打ち立てている女性たちでさえも、トルコの人々には遠く及ばないように思います。私はといえば、何より英語が 1 番好きですから、私の英語力が日々衰えていくのを黙ってみてはおれません。このへんで、私はあなたにお別れを言いたいのですが、大変悲しいことに、上手な言い回しが浮かんでこないのです。そこで、私は非常に簡単に、この手紙を締めくくりたいと思います。どうぞお元気で。敬具。

43. ウォートレー¹⁴⁸様

1718 年 3 月 23 日 コンスタンティノープルにて
今日、スミルナの港にグレイハウンド号が無事に到着し、新しい便りが本国からやって来ました。また、同じ船便で、大臣やおじから借りた私のお金もやってきたわけです。船長からのメモには、総督の命を受けるのに立ち寄ったカディスで軍艦プレストン号に出会ったことや、早くとも 7 月まではこちらに来ないことなどがありました。あのオランダ人の女¹⁴⁹は、まるで気違い沙汰です。私は彼女のところへ真珠の代金を払うのに、宝石商を送りましたが、彼女はそのお金を受け取ろうとはしなかったのです。おそらく、その真珠が私の持たせたお金以上の価値があるものだから、少ない額など受け取れないということなのでしょう。しかし、けっこうな取引をしているのに、文句を言うなんて実に妙です。彼女は、実はご主人を欺いているわけです。私もこれまで黙っていましたが、彼女があまりにも高慢な態度を取るものですから、ついに言おうと思ったのです。きっと、ご主人も、彼女がお金を無駄な装飾品に使ったことを知って怒っているでしょう。彼女は、あたかも私への親切心で真珠を買ったか

¹⁴⁸ ウォートレーはトルコ大使解任の命を受け取り、帰途へ着く前の挨拶のため、アドリアノープルの宮廷へ滞在していた。

¹⁴⁹ Catherina de Bourg. Jacob Colyer 伯爵 (1657-1725) の妻。

のように、喜んで真珠を贈るかのように見せかけるつもりだったのでしょう。そしてもちろん、真珠を手放す気など最初からなかったわけです。

私たちのかわいい坊やは、先週の火曜日に天然痘の予防接種を受けました。今はもう、活発に遊びまわっていますし、いつも食事を待ちきれないほど元気です。私は、次に生まれてくる子も、この子ほど良い子であったならと祈っているのです。おそらく、この機においての王の寛容なご処置をもうご存知ですね。私が思うに、あなたはもっと公平に、ご自分の力量を主張してもよいと思います。サットン氏であろうと他の国の大使だろうと、誰もあなたの言い分を否定することなどできないのですから¹⁵⁰。

私は、娘に種痘をさせられませんでした。娘付きの乳母が、免疫がないというものですから。

44. ウォートレー様

1718年4月1日 コンスタンティノーブルにて

あなたの坊やは大変元気で、これからもずっとそうであってくれればと私も心から思っています。先日、私のスペイン銀貨を運んできた船が、無事に港に入りました。これについてはレスリエール氏がいろいろと指示してくれましたので、私は、お金の管理を頼むには氏が1番適任なのではないかと思いました。そこで、私の財産を氏の倉庫に保管してもらうかわりに、預り証を送ってくれるように頼んだのです。氏によると、この銀貨は今までにないほど価値が下がっていて、ここでもかなり供給過剰になっているとのことでした。自分の手にすら、1万6千個ものほとんど価値のないこの銀貨が残っているのだ、と。でも、私が思うには、彼の言うことを全部文字通りに受け取ってはいけないのです。ところで、この同じ船便で、ウィリアム氏¹⁵¹の手紙も届きました。その手紙によると、イングランドへ着いたら、私の1600リーヴルを返してくれるというのです。私はこの申し出を受けてよいものか分かりかねるので、私よりもずっと取引等に詳しいあなたの意見が聞きたいのです。ここから関税なしに品物を持ち帰れるのかという私の質問に、あなたはお返事をくれませんでしたね？もし可能なら、私は1ドルを4シリングに換えることができるわけです。いずれにせよ、ウィリアム氏からの申し出の件については、できるだけ早くお返事いただけたらと思います。ウィリアム氏ご自身が、早く返事をするようにと手紙に書いていたものですから。

追伸：返事をお待ちしています。

¹⁵⁰ サットン (Robert Satton, 1667-1737) はウォートレーの前任のトルコ大使 (1701-16)。モントーグー家は、イギリスへの帰途費用として、500ポンドほどもらうこととなっていた。前任者のサットンも同額を受け取ったという。

¹⁵¹ John William (?-1743) トルコ・イギリス間の貿易におけるイギリス側の重要人物。

45. ウォートレー様

1718年4月9日 コンスタンティノーブルにて

私は、2000ドルのお金について、バーカー氏¹⁵²から手紙を受け取りました。例の軍艦よりもよりも早く出発するかどうかというあなたの計画について、私は誰にも漏らしてはいませんが、どうやらアドリアノーブルのほうから何人かには知らせがあったようです。私が他の人から聞かれた時には、夫の仕事については私は関わっておらず全く存じません、と答えておきました。私は父からの手紙も受け取りましたが、父が私たちと仲良く付き合っているのが、はっきりと分かったのです。もしも私の忠告に少しでも耳を貸してくれるなら、どうぞ父に優しい手紙を書いてやってください。たぶん娘が生まれたことが、手紙を書く良い口実になると思いますから、ちょうど私がお産の床にふせている頃の日付をつけて、手紙を書くといいのです。私はもちろん父の性格をよく知っていますが、こうしたちょっとした手紙で父はずいぶんと感心するのです。ところで、今回のこと、私がイギリスに帰れると喜んでいるなどと思わないで下さいね。私は自分自身のことよりも、どうかあなたが受けるショックが少なくすむように、と心から祈っているのです。もちろん私も不安がありますし、体のことで大変な思いをしましたが、努めてそれを隠そうとしてきたのです。運良く、あなたの坊やは大変元気にしています。たとえあなたが尋ねなくても、私は坊やのことを書かすにはいられないのです。

どうぞまたお返事を書いてくださいね。

私が聞いたところによると、アドリアノーブルでフランス大使が行っている交渉は、パレスチナを買うことについてのようです。莫大な金額が用意されたので、もうすぐ大使の手にその地が渡るところだと伺いました。もちろん、大使はこの好機を逃したりはしないでしょう。

2日ほど前、私はレスリエール氏のところに使いをやり、私のスペイン銀貨について尋ねました。すると、氏はずいぶんと私を褒めたたえ、銀貨を預けてしばらく待ってくれば、1ドルあたり4シリングか、4シリング6ペンスをイギリスへ送ってあげようと言うのです。私は、夫に手紙を書いて聞いてみまますから、と答えました。たぶんあなたはこの申し出を受けるのでしょうか、もちろんその前に、もう一度良く考えてみるのも大切かと思えます。あなたは私に旅支度をするように言いましたが、この種のことは何もおっしゃっていませんでしたか？ ことお金に関しては、あなたから特別な指示をいただけたらと思えます。

今私の手元には、私へ差し出された美しい銀めっきの机があります。本当の銀ではありませんが、見たところ違いはありません。もしこのようなものがほしいとお考えでしたら、ここではとても安く買えると伝えておきましょう。

¹⁵² Edward Barker (? -1747) レヴァント株式会社、コンスタンティノーブル事務所の会計係。

46. ブリストル夫人へ

1718年4月10日 コンスタンティノーブルにて

親愛なるブリストル夫人、今日この日に、ついに初めてあなたからのお手紙を受け取ることができました。もちろんあなたがもっと早くお手紙を下さる、と信じていましたが、あなたからの手紙がなくなってしまう不運に見舞われたわけです。コンスタンティノーブルを発つ前に、私はこうして静かに座って、街の様子を意識して正確に伝えようとしています。なぜって、この町については、ずいぶんいろいろな旅行者が、間違っただけを語っているでしょうから。事実、ペラには、周りを見ようとしなくて何年も住み続けている人がたくさんいますし、そういう人に限って街の様子を伝えようとしてみたりするのです。

ペラ、トプハーネ、ガラタの地区には、ずいぶんたくさんのキリスト教徒が住みついています。この3つの地区が一緒になって、大変美しい景色を作り出しているように思います。ちょうど海がこの街を隔てていますが、テムズ川の1番広い部分の半分くらいの幅しかありません。しかし、キリスト教徒は、男性たちですら船乗りたちに出くわしたくないようで（私たちの国の船頭たちより、粗野な人々なのです）、女性たちはそのあたりを歩く時に、ヴェールをかぶらねばなりません。女性たちにとっては面倒なことであるようです。ペラではヴェールをかぶらなければならないのですが、私に言わせると、そうすることによって女性はますます美しく見えるようです。こんな具合で、誰にとっても見に行きづらい場所ですから、私が思うに、フランス大使夫人などはそのあたりを見ることなしに帰国されてしまうのではないのでしょうか。さあ、あなたは、他ならぬこの私がそのあたりへ何度も行ったことを、不思議に思わないのでしょうか？トルコのヴェール、ヤシュマクは、私にとって大変便利で楽なものなのです。もしもこのヴェールがなかったら、私の溢れんばかりの好奇心を満足させるのには、ずいぶんと不便な思いをしなければならなかったでしょう。本当に、この湾を渡る楽しみには、チェルシー川を屋形船で下ることなど比べ物にならないほどなのです。20マイルほど、ボスポラス海峡を渡るその心地よさは、同時にたくさんの美しいものを見せてくれます。アジア側は果物の木々や、小さな村があり、大変きれいな自然の姿を作り出しています。ヨーロッパ側には、7つの丘の上にコンスタンティノーブルの街が広がっています。高さには差があるので、町全体がよりいっそう大きく見えているのだと思います（もちろん、コンスタンティノーブルは世界でも最大の町の1つですが）。町にはきれいな庭や、杉・松の林が見え、宮殿やモスク、公の建物の姿も高さを違えて見えるのです。大変に美しく、均整が取れた姿で、ちょうど芸術家が宝石箱を飾りつけたような、小さな缶やろうそく立て・杯などのぎっしり入った飾り棚、といった感じです。何とも変な言い方だと思いでしょうけれど、私は、この表現が町の様子を1番よく表しているような気がしているのです。

私は、できるだけ、宮殿の様子を見る機会を逃さないようにしてきました。宮殿はちょうど町が海へ突き出た部分にあります。宮殿自体はとても広いのですが、部屋が均等の大きさをしているというわけではなく、背の高い糸杉の木

が並ぶ庭が1番広い空間となっています。庭については、私は他に全くその様子を知りません。宮殿の建物は白い石造りで、鉛の屋根になっており尖塔がそびえ立っています。大変素晴らしい眺めですし、実際、キリスト教国の中でも、これほど立派な宮殿に住む王はいないと思います。中には、6つの広い区画があって、それぞれ木で囲まれており、石造りの回廊がぐるりとついています。中には、衛兵たちの部屋、奴隷用、台所、馬丁用、枢密院の会議の場、そして最後には外部からのお客用の部分があります。女性たちの居室部分には、少なくとも同じ数だけ部屋がありますし、宦官やお付きのものたちの部屋も用意されているのです。

次に、特筆すべきものとして、アヤ・ソフィアがあげられると思います。中を見学するのは、とても難しい建物です。私は、見学のためにカイマカムと呼ばれる地区の知事に3度も使いを送り、お願いしなければなりません。カイマカムは権力のあるエフェンディたちを呼び集め、アヤ・ソフィアの中に入るのは法的に適っているのか、ムフティーに尋ねたりしたようでした。この重要な話合いは3日間も続き、私の願いをずっと主張した結果、やっと受け入れられたわけです。私は、どうしてこのモスクだけに、トルコ人がこれほど神経質になるのか分かりません。他のモスクには、キリスト教徒たちは全く問題なく入ることができるのですから。何せアヤ・ソフィアは1度キリスト教徒たちの崇拜の対象となっていますから、ただ興味で入ったように見せかけたキリスト教徒が、中で祈りを捧げたりするのが心配なのかもしれません。特に、壁のモザイク画は今も目に見えているのですから。モザイク画には傷つけられた跡は、全く見られませんでしたが、ただ時間がたってかすれてきたものもありましたが。トルコ人たちが街中のあらゆる偶像を破壊した、というあちこちでよく言われる噂は、全くのでたらめです。アヤ・ソフィアのドームは直径113フィートだそうです。そのドームを、アーチや太い大理石の柱が支えています。歩くところや階段も、もちろん全部大理石で作られていました。中でも、色とりどりの大理石の柱で支えられた、2列の回廊は大変素晴らしいものでした。天井にはモザイク画が描かれていましたが、一部はずいぶん早い時期にだめになって、剥がれ落ちてしまったようです。その剥がれた一部を、私は頂いてきました。私の目には、ガラスか、宝石の模造品を作るときに使う鉛か何かのように見えました。人々は私に、コンスタンティヌス皇帝のお墓があると教えてくれましたが、そのお墓に人々はずいぶん敬意を表しているようです。これほど素晴らしい建物の説明にしては、かなり退屈な、物足りないものになってしまいましたね。でも、私は建築についてあまりに無知なものですから、詳細にご説明して、何か間違ったことを書いてしまったら大変だと思ったのです。

例えばスルタン・スレイマンのモスク¹⁵³などは、4隅に美しい塔がそびえる、真四角な敷地に建てられています。中央には、立派な大理石の柱に支えられた、形のよい球状のドーム。少し低くなっているドームも同じような柱によって支

¹⁵³ Süleymaniye Camii, 前出の建築家シナン（1550-57）の作

えられており、モスクを取り囲む回廊や歩道は、すべて大理石なのです。1 番大きなドームの下には、大変美しい色をした大理石の泉がありましたが、その色合いたるやあまりにきれいなので、天然の石だとは到底信じられませんでした。中へ入ると、片側には白い大理石の説教壇、もう片側には大宰相のための高くなった席が設けられています。立派な階段や、金の格子が取り付けられた特別席です。モスクの1 番奥は少し高くなっており、たぶん神の名が書かれた祭壇なのだと思います。祭壇の手前には、人間の背の高さほどの大きな2 本のろうそくがありますが、1 本の太さもたいまつ3 本分ほどでした。モスク全体には美しい絨毯が敷き詰められ、たくさんのランプが下がっています。モスクの続く中庭も大変広々として、大理石でできた緑色の泉と回廊に取り囲まれています。庭の両側あわせて28 ものドーム、3 つも台のついた泉があるのです。たぶん、このモスクの描写は、コンスタンティノープルにどのモスクにも当てはまるのではないのでしょうか。基本の形は、どれも同じですし、違いは大きさや装飾に表れているように思いますから。中でも1 番大きいのは、ヴァーリデ・スルタンのモスクのようです。完璧な大理石造りでとても大きく、それでいて私の見たモスクの中で、最も美しく均整の取れた建物でした。また、私たち女性にとっては非常に榮譽あることに、このモスクはある女性¹⁵⁴のために建てられたものです。同じような建物と比べてみても、セント・ポール寺院もこのモスクの側ではかすんでしまうと思います。ちょうど、アトメイダヌ(トルコ語でアト、とは馬を意味しますので、これは馬の広場という場所になります。)の横では、私たちの国の広場を広場と呼べなくなるのと同じでしょう。

アトメイダヌは、ギリシャ時代には、ヒッポドローム¹⁵⁵として機能していました。広場の中央には真ちゅうの柱がそびえ立ち、3 匹の蛇が口をぽっかり開けて巻きついていきます。どうしてこんな奇妙な柱が立てられたのか、私には分かりません。ギリシャ人たちにこの柱の意味を尋ねると、まるで伝説的な答えしか返ってこないのです。柱の表面にも、碑文などが彫られていた形跡もありません。柱は、先端がオベリスクとなっていますが、たぶんこれはエジプトから運ばれてきたものでしょう。象形文字がきれいに残っていますから。私には、とても貴重な古代言葉遊びの好例に思えます。オベリスクは、両側にレリーフが刻まれた四角い台座にのっかり、さらに4 本の真ちゅうの柱に支えられていました。台座の両側に描かれたレリーフのうち、1 つは戦いを表し、1 つは平和を表しているようでした。そして、他の面には、ギリシャ語とラテン語の碑文が刻まれていましたが、私はある一部を書きとめておきましたが、おそらくあなたのご主人が、訳してくださるのではないのでしょうか？もちろん、ご主人へのラブレターなどと誤解なさないで下さいね。この地で、あらゆる彫像がそのまま残っているのを見た私は、残っていないと主張していた作家たちについて、思わず考えてしまいました。おそらく、人々は実際にそのものを見た

¹⁵⁴ Hatice Turhan(1627-82)。İbrahim(1615-48,在位 1640-48)の愛妃。

¹⁵⁵ 古代ローマの競技場。

わけではなく、例えばギリシャ人たちからの報告によって書いていたのでしょう。ギリシャ人たちは、とりわけ敵にとって不名誉になる嘘の発言をする時には常に、不屈の精神で対抗をするのですから。ギリシャ人たちにかかると、コンスタンティノープルにはアヤ・ソフィア以外何も見る価値のあるものはない、ということになってしまうのです。そう、もっと大きなモスクがいくつもあるのにもかかわらず。中でも、スルタン・アフメットのモスク¹⁵⁶は、ちょっと変わっていて、門が真ちゅうでできています。だいたいどのモスクにも、モスクの設立者とその家族を祭る霊廟があり、いつもたくさんのろうそくが点かれています。

市場になっているのははどれも立派な建物で、中央は太い柱で支えられていますが、たくさんの細い通路からなっています。また、驚くほどきれいな様子です。同じ品物を扱う店は、それぞれ決まった通りに固まっています。ちょうどロンドンのニュー・エクステンジと同じような感じですが。ベデスタン、つまり宝石商の店が並ぶあたりは、ダイヤモンドや数々の宝石が輝き、目がくらむほどの美しさでした。織物を扱う店もまたとてもきれいで、人々は商売のために来るのと同時に品物を眺めて楽しんでいようようです。どの店も大変立派な様子で品物もたくさんありますので、たぶん世界一と言えるのではないのでしょうか。おそらく、このへんで私が奴隷の売り買いの様子を書くのでは、とお考えでしょう？もしも私が今までのキリスト教徒のように、奴隷売買はとても恐ろしい光景だったなどと書かなかつたら、私が半分トルコ人になったと思われるでしょうね。たとえそう思われたとしても、私は奴隷を扱う時のトルコ人の人間性に、大いに感心したと正直にお伝えしましょう。トルコ人たちは奴隷をひどく扱うことはありませんし、世界中で行われている強制的な労働のほうが、よっぽどひどいと思います。奴隷のお給金がない、というのは事実ですが、奴隷たちには私たちが召使に払うお給金よりずっと価値のある衣服が、毎年与えられているのです。さあ、あなたはここで反論するでしょうね。男性が、やましい目的で女性を買うのはどうなのですか、と。私の見たところによると、奴隷は公の場できちんと売り買いをされていますので、ヨーロッパの都市のほうがひどい状況だと思います。ここで思い出したのですが、コンスタンティノープルの街についての話で、1つ付け加えたいことがあります。あの有名なアルカディア柱¹⁵⁷は、もう存在していません。私に来る2年前に崩れてしまったようです。目につくような古代の名残はほとんどなく、ただヴァレンス水道橋だけが残っています。この水道橋はとても巨大で、ギリシャ時代以前から残っているのではないかと思ったほどでした。どうやら、トルコ人たちは水道橋を自分たちの作品に見せかけようと、石を削りトルコ語の碑文を彫ったようでしたが、もちろんそんな見せかけなど簡単に見破ることができます。

¹⁵⁶ スルタンアフメット・ジャーミー。別名ブルーモスク。1609-1616年にスルタン・アフメット1世(1603-17)によって建てられた。

¹⁵⁷ ローマのトラヤヌス柱の模倣品。

他の公共の施設としては、キャラバンサライ（隊商宿）と修道院があげられると思います。隊商宿はとても大きくてあちこちに作られています。修道院は数も少なく、あまり立派ではありません。私は好奇心から、ある修道院を見学に出かけました。修道僧たちの信仰の様子は、ちょうどローマの信仰と同じように奇妙なものだったのです。修道僧たちは、結婚を許されていますが、とても変な習慣に従って生きているようです。身に付けるものとしては、荒っぽい白い布切れだけで、素足・素手で生活しているのです。戒律はあまり多くなく、ほとんど唯一の決まりは、毎週火曜日と金曜日に何とも不思議な儀式を行うことのようにです。その日、修道僧たちは大きな部屋に集まります。そして、中央の説教壇でイマームがコーランの聖句を読んでいる間中、手を胸の前に組み合わせ、目は伏せたまま立っています。朗読が終わると、10人くらいの人が悲しげな調子で笛を奏でるのです。その後再び朗読と、聖句についての短い解説があり、皆がまた笛を吹き歌っていますと、修道院長（1人だけ緑色の服を着ています。）が立ち上がり厳粛な様子で踊りだします。修道僧たちは院長のまわりを囲み、笛を吹く者がいる一方で、幅の広い上着を腰のあたりでしっかりと結びつけて踊り出す者もあります。音楽の調子に合わせて早くなったり遅くなったり、まるで流れるように踊るのです。これが1時間も続くのですが、目が回った様子の者など全く見当たりません。最も、代々修道僧の息子として生まれる者もあり、子供の頃からこのようなやり方になれているので、驚くべきことではないのでしょうか。修道僧の間にまじって、6、7歳くらいの子供もおり、他の修道僧と全く同じように踊っていました。儀式の最後に、修道僧たちは声を合わせてこう叫びます。「アッラーは唯一の神であり、ムハンマドはその預言者である！」そして順番に修道院長の手に唇をつけると、引き下がるのです。儀式の間中、大変に厳粛な雰囲気漂っていました。これほど禁欲的な、まじめな人々は他にはいません。修道僧たちは皆いつも目を伏せており、考えに耽っているような様子です。あえて書くことではないかもしれませんが、服従や苦行の様相を呈しているのが、どこか哀れを誘うような感じもしたのです。

この手紙はかなりの長さになってしまいましたね。お読みになったら、あとは火にくべて下さっても結構です。

夫は今コンスタンティノーブルを留守にしておりますが、夫からもあなたによろしくとのこと。私からも、あなたのご主人やハーヴェイ氏¹⁵⁸によろしくお伝えくださいませ。

47. ボナック夫人へ¹⁵⁹

1718年4月

またこうしてあなたにお手紙を差し上げることができて、私は大変嬉しく思

¹⁵⁸ John Hervey(1665-1751)シャーロット女王の執事。 *Memoirs of the Reign of George* を執筆した。

¹⁵⁹ Madame de Bonnac 宛。オリジナルはフランス語で、R.Halsband による英語訳。

っております。今日あなたからのお手紙を受け取り、私は大喜びで、この 10 ヶ月ほどあなたと連絡がとれず不安だったことなど、どこかへ飛んでいってしまいました。

ご存知のように、することがないと人間悪い方向へ進みますから、他にどうしようもなく、私は娘を産みました。そんなことを言うなんて、とあなたは私をお叱りになるかもしれませんが、もしもあなたが私の立場であったなら、きっと 2 人か 3 人子供を産んでいたのでは、と失礼を承知で申し上げます。この国では、若さを証明するため、そしてマルタ島の騎士から認められるためにも子供を産まねばならないのです。最初、私はこんな慣習に腹を立てていましたが、だんだんと人々が私を軽蔑のまなざしで見ていることに気付いたのです。そこで私も仕方なく皆に従い、お産の床についたわけです。そんなこともあって、私は皆と同じように、できるだけ早く母国に帰りたいと願っています。ここに住み続けたら、毎年のようにお産をすることになってしまうでしょうから。フランス大使夫人などは、まさにそんな気持ちになった 1 人と言えるでしょう。彼女は 1 度お産をしましたが、今またお腹が大きいのです。この国の女性たちは、残す子孫の数でしか尊敬を勝ち取ることはできません。今私の夫が何十マイルも離れたところにいることで、私は残る 3 ヶ月を妊娠せず過ごす言い訳をやっと手にしたわけなのです。

毎日のように、私はまた愛する祖国や王様、友人たちに一日も早く会えるようにと祈っています。また、帰る前に、できる限りあちこち見ておこうと思っています。私はこちらの言葉を何とか学んだので、ご夫人たちとも友達付き合いができるようになりました。私は、きっとトルコの女性たちと友情を深めた、最初の外国人であると自負しています。先のスルタンの寵妃であった女性のもとをも訪問しましたので、ハレムについての大変興味深いお話を聞くことができました。彼女曰く、私たちが信じきっているあのハンカチを投げる話は、全くの作り話だということでした。

私はトルコのラブレターを手に入れましたので、あなたにお持ちしようと思っています。大変面白いものなのに、今までどうして他の旅行者が持っていかなかったのか何とも不思議なところですよ。親愛なるボナック夫人、神がすべての喜びをあなたに与えてくれますよう。(トルコ語の言い回しです。)そして、またあなたにお会いできますよう。

48 . . . 伯爵夫人へ¹⁶⁰

1718 年 5 月 コンスタンティノーブル・ペラにて

あなたからのお手紙、受け取ることができて大変嬉しく思っています。私の友人たちが皆元気であるのに安心しましたし、特にコングリーヴ氏は痛風がひどいと聞いていましたので、心配していたのです。今、私はコンスタンティノーブルを去る準備に大忙しです。帰るのは寂しい気がする、などと言ったら、

¹⁶⁰ R.Halsband による匿名化。おそらくブリストル伯爵夫人に宛てたもの。

嘘でしょうとおっしゃられるでしょうね。でも、私はかなりこちらの空気や言葉に慣れてしまったのです。ここでとても気持ちよく暮らせていますし、旅行は大好きなのですが、今回家族も増え、幼い子をかかえての長い旅はやはり不便も多いでしょうから心配です。でも、これまで大変な局面を通り抜けてきたのと同様、今回もできるだけ上手に切り抜けようと努めています。できるなら、楽しみであると思いたいのです。そのためにも、私は毎日ヴェールをかぶって、コンスタンティノープルを散歩して歩いています。発つ前に、いろいろと面白いものを見ておきたいのです。こんなふうに書くと、じゃあ見た面白いもののお話でもするのかしら、とあなたは思うでしょうね。ですが、これまで何度も他の人が書いてきた話をまた繰り返すのは、私には退屈なのです。例えば、こんな調子です。「コンスタンティノープルは昔のビザンチン帝国の首都でした。現在はスキタイ語¹⁶¹を話す人種がこの地を征服しております。街中には5、6千ものモスクがあり、アヤ・ソフィアはもともとユスティニアヌス皇帝が建てたものでして……。」こんな話を何度もしたところで、何になるでしょう？私がこのような歴史の話を書かないのは、知らないからではありません。書こうとすれば書けますし、ノールズ氏¹⁶²やライコート氏の本のページを手繰って、オスマン帝国皇帝の名前を並べることだってできるのです。でも、私は、この国について誰もが書いている、簡単に分かるようなことを敢えてもう一度繰り返して書こうとは思えないのです。

それよりもむしろ、私には女性特有の矛盾の精神が働いているようで、今まで書かれてきたことにおける間違いについて、書きたくてたまりません。例えば、大いに尊敬を集めているヒル氏¹⁶³の主張によると、アヤ・ソフィアで頭痛を和らげる液体を出す柱を見た、ということでした。そんな変なものはもちろん存在しません。氏がエジプトの地下墓地にでも行った時に見たものを、混同しているのだと思うのです。コンスタンティノープルでは、氏は間違いなくそんな奇跡的な療法について聞かなかったはずですが、また、氏や他の著者の方々も皆、トルコの女性たちが家に閉じ込められている状況について嘆いていますが、それも私には滑稽に思えます。なぜって、トルコの女性たちはたぶん世界中で1番自由ですし、面倒なことから逃れ、ただ楽しみを追求する生活をしている唯一の女性たちなのですから。女性たちは、1日を訪問や入浴、新しい衣装などに好きなだけお金を使って、楽しく暮らしているのです。もしも、夫が妻のお金の使い方を問いただしたりしたら、夫の方が間違いだと思われるでしょう。妻の使うお金は、誰からも制限も受けないのが普通なのです。使うお金を稼いでくるのは夫の役目ですし、その特権は、男女のただ性別の違いから生じてくるのです。ここには、まるでこじきではないかと思われるような汚い格好をして、背中に刺繍入りハンカチのかごをしょって売りに来るような

¹⁶¹ 現存しない、イラン語派の言葉。

¹⁶² Richard Knolles (1550-1610); *The History of the Turks*, 1663. Paul Rycout の書いた *The History of the Turks* (1700) はこの本の続きである。

¹⁶³ A. Hill, *A Full and Just Account of the Present State of the Ottoman Empire*, 1705.

男もいますが、その妻はといえば、金の布以外は身につけない、というほど豪華な暮らしをしています。イタチの毛皮を身にまとい、頭には宝石を飾り、といった具合です。そうして、行きたい時に行きたい場所へ出かけていくのです。確かに、女性のための公の場はありませんが、同じように機能しているのが、公衆浴場、ハمامです。もちろんそこには同性しかいませんから。女性たちの1番の社交・娯楽の場として、ハمامがあげられると思います。

3日ほど前、私は街でも1番立派なハمامへ出かけ、そこでトルコ人の花嫁が、皆に祝福されている様子を見てきました。ハمامは、このような儀式の時にも利用されているのです。私は、ヘレネとメネラウスの結婚祝曲¹⁶⁴を思い出しました。同じような伝統が、それ以来ずっと続いているようです。ハمامでは、花嫁の友人や親戚、新しい家族女性ばかりが一堂に会していました。ただ見に来てきた部外者も合わせると、そこには少なくとも200人ほどの女性が集まっていたように思います。結婚している女性たちは、部屋をぐるりと取り囲み、ソファーに腰掛けていました。未婚の若い女性たちは、服を脱ぎ、長い髪と髪を飾る真珠やりボンだけを身につけてその場に現れたのです。そのうちの2人が、入り口のところで花嫁を出迎えたのでした。花嫁は自分の母親と、年老いた親戚に導かれて中へ入ってきました。17歳くらいのとてもかわいらしい少女で、美しい衣装を着、宝石を飾っていました。ところが、今まさに周りの者たちから、生まれたままの姿にされていくのです。2人の少女が、香水の入った銀の入れ物を捧げもって行進を始め、その後には30組ほどが続きました。先頭の少女が結婚歌を歌うと、他の少女たちもそれに合わせて歌います。最後の2人が花嫁を導きなら歩くのですが、花嫁はかわいらしく目を伏せ、謙遜を表します。このように、ハمامの中の部屋を練り歩くのです。どれほど美しい光景であったか、うまく説明することができません。少女たちは皆美しく白い体で、入浴を繰り返しているのです、すべすべと輝くような肌なのです。一通り練り歩くと、花嫁は部屋を囲むように座っている年長の女性たちに挨拶をします。皆花嫁の手に唇をあてて祝福し、贈り物を渡します。宝石を贈る場合もありますし、何か他のこまごまとした美しいもの、ハンカチなどを渡したりもします。花嫁は、贈り物に対して、また相手の手に唇をあてて感謝を表すのでした。

私は、このような儀式を見ることができて、本当に嬉しく思っています。きっと、あなたもトルコの女性たちが私たちと同じように、賢く立派で、いえ自由であると思ってくたさるのではないのでしょうか？醜い欲望（もしそんなものを持っていたら、の話ですが。）を満足させるための機会さえ、得ようと思えば得られるのですが、明るみに出たときには夫にひどく復讐されることになってしまうわけです。ですから、後から無分別さを嘆くような女性はいないと思うのです。2ヶ月くらい前だったでしょうか、私の家からそう遠くないところで、1人の若い女性の遺体が発見されました。女性は血を流し、裸で、布に包まれ

¹⁶⁴ S. Edmund Spenser 作曲の結婚祝曲（1595）

ていましたが、脇腹と胸にナイフで刺した傷があったのです。死後それほどたつておらず、また非常に美しい女性であったので、ペラの男性たちが皆彼女を見に出てきたほどでした。でも、誰も彼女の素性がわからなかったし、顔を見たこともないと言っていました。殺害の犯人についてはあまり調べられず、遺体はこっそりと葬られたようでした。ヨーロッパとは違って、この国では殺人が訴えられることはないのです。亡くなった人の近親者が、復讐をするかどうか問題で、もしもお金で和解するならば(たいていの場合はそうですが)もうその殺人について語られることはありません。オスマン帝国の法におけるこの欠点のために、悲劇的な殺人がしょっちゅう起こってしまうのでは、と危惧されるでしょうが、そんなことはなく、むしろ殺人はほとんど起こらないのです。これは、人々がそれほど残酷ではない証明です。私が思うに、さまざまな点においてトルコ人は野蛮だ、というイメージを私たち自身が勝手に押し付けているのではないのでしょうか？

私は、キリスト教徒の女性で、トルコ人の男性と結婚している人を知っています。彼女は身分も高く、大変素晴らしい女性です。彼女の話はとても珍しいので、私はぜひ伝えたいと思うのですが、できるだけ短く、簡潔にお話しましょう。彼女はスペイン人で、当時スペイン領土であったナポリに住んでいました。ところが、兄に連れられて小型漁船に乗っているときに、トルコ海軍の攻撃にあい捕まってしまったのだそうです。その後の彼女の身に降りかかった事件を、どうやってあなたにお話ししましょう？つまり、何年も前に聖ルクレチア¹⁶⁵に起こったのと同じことが、彼女の身にも起こったわけです。でも、彼女は立派な信仰を持っていましたから、ローマ人のように簡単に自殺などしませんでした。海軍の司令官は、彼女の美しさに感心すると同時に、その苦しみを哀れに思い、まずは彼女の兄と船の乗組員たちを放してやりました。彼らはスペインに取って返すと、数ヵ月後には、4000 スターリング銀貨を妹の身代金にと送ってよこしたのです。トルコ人司令官はお金を受け取り、彼女にもうお前は自由なのだと言いました。ところが、彼女には分別がありましたので、国に帰った時自分がどんな扱いを受けるのか、分かっていました。彼女の信じるカトリックの宗教では、こういう状態の女性に対する1番穏やかな対処は、残りの生涯を修道院に閉じこもって過ごすことであったのです。それに対して、彼女の異教徒の主人は優しく、立派な人で、彼女の望むすべてのものを与えてくれます。そこで、彼女は司令官に、国へ帰れる自由などあなたのもで私が受ける栄誉には比べ物にもなりません、ときっぱりと言いました。そのお金を返さず、私の結婚持参金として受け取ってください、夫となる男性だけに身を任せる喜びを与えてください、と。司令官は大変心を動かされ、彼女が側にいるだけで自分は幸せだから、と身代金を送り返してしまったそうです。そして彼女と結婚しましたが、他の妻は全く娶りませんでした。彼女自身曰く、この決

¹⁶⁵ Lucretia は夫 Tarquinius Collatinus の不在時に Sextus に犯され、苦しんで自殺したという。

断を1度も後悔したことはないとのこと。その後、彼女はコンスタンティノープルでも有数の裕福な未亡人となったのですが、この国では独身でいるわけにはいきませんので、今のご主人と再婚することになったのでした。彼女が、自分を犯した男性と恋に落ちた、などと思わないで下さいね。彼女の言葉を借りれば、彼女はただ自分の名誉を守るために、行動しただけなのです。ただ、彼女の行為が司令官の心を大きく動かししたのは、確かだと思います。トルコの身分の高い男性たちは、たいいていとても寛大なようです。

寛大さについての話は、かなりもっともらしく思われますし、トルコ人は嘘をつくようなこともありません。ここで私は、身分の低い者たちを問題にはしたくないのですが、彼らの大部分が無知であるからです。人徳のある者はほとんどいませんし、キリスト教国以上に嘘の証言が横行していますが、本来厳しく罰せられるべき者も罰を受けることがないのです(たとえ、公の場で目撃されていたとしても、です)。トルコの法律の話、つまりこの国特有のしきたりのことを私はお話したことがあるでしょうか?トルコ人の中では、よく行われる養子縁組の話ですが、ギリシャ人やアルメニア人の中ではあまり見られないようです。人々は、財産が大宰相の手に渡ることを避けたいのですが、友人や遠い親戚に渡せない場合、もしも子供がいなければ貧しい家のかわいらしい子供を連れてきて、カーディーの前に差し出します。そして、その子を相続人にすると宣言するのです。その時から、両親はその子の将来に責任を負うことになり、文書が作成され証人が署名をします。このように、子供は養子縁組されて、相続人となり得るのです。私が見たところによると、ある裕福なギリシャ人が、この手続きのためにこじきの子供を連れていこうとして、こじきの方が子供を手放したくないと抵抗していました。親の持つ本能的な愛情の力は、なんと強いものなのでしょうか!もちろん養父母はたいいてい、とても優しく子供に接するものなのですが。私には、イギリスのあの名前を継ぐというばかげた伝統に比べると、よっぽどまじな習慣のように思えました。小さな子供を幸せに、豊かにしてやるには、とても合理的な方法ではないでしょうか。自分のやり方で子供を育てられますし(トルコ語でいうと、膝の上で育てる、という言い回しになります。)子供もそのうちに親への尊敬の念を持つようになるでしょう。よく知らない人や、何通かの手紙だけの関係の人に財産が渡ったりするより、ずっと良いやり方です。でも、こんなばかげたやり方が、私たちの国ではよく見かけられますね。

ところで、ここでアルメニア人の話をしようと思います。たぶん彼らについてあなたをご存知ないでしょうから、面白い話題となるのではないのでしょうか。アルメニアについての地理的な説明は、詳しくはしませんが、おそらく地図を見ていただければお分かりになると思います。古代の歴史についても、ローマ史の本を見ていただければすぐわかるので、ここでは詳細に述べません。アルメニア人は今現在オスマン帝国の従属の民ですが、商売の才に長け、帝国内にかなりの数となって生活しています。彼らの言うところによると、聖グレゴリ

- 166によって、キリスト教徒に改宗させられたのだそうです。現在では、最も敬虔なキリスト教徒であると思います。彼らの宗派の1番大切な教えは、自分たちの四旬節を守ることであります¹⁶⁷。毎年7ヶ月ほどあり、非常事態を除いては必ず行われています。油は取らず、野菜と硬い質素なパン以外のものに触れたら、もう言い訳は許されないのです。彼らにとって、四旬節の食事とはそのような質素なものなのです。夫の通訳の1人が、アルメニア人なのですが、あまりに質素な食生活を続けたために、体がすっかり弱ってしまいました。夫がいくら命じて、医者になだめすかしても（とにかく食べなければ、死んでしまいますよ、と医者は言いました。）スープをわずかでも飲ませることができませんでした。宗教というよりは、伝統ともいえるこの習慣を除いては、私たちのキリスト教とあまり違いはありません。ただ、彼らは、あのウィストン氏の説¹⁶⁸に傾倒しています。私が思うに、この点はギリシャ正教と、たいして変わらないようです。聖なる魂が、偉大なる父のみからしか生じないのであるから、その子はただ服従せよ、というのは真実であると思います。ところが、アルメニア人は、ライコート氏が書いていたような、聖体変化¹⁶⁹の考え方を、全く持っていません。（私もつい信じてしまったこの説、1679年に私たちの宮廷向けに発表されたようですね。）それどころか、ローマカトリックに対する嫌悪感を抱いているのです。

アルメニア人特有の習慣の中で、飛びぬけて変わっているのが、婚姻についてです。世界中にも、これほど変わった伝統を持つ人々は、他にいないのではないのでしょうか。彼らは大変若いうちに婚約しますが、結婚して3日後まで自分の結婚相手の顔を見てはいけません。花嫁は、帽子を被り、美しい衣装を着て馬車で教会へ連れられていくのですが、その際、足元まで届くほどの赤い絹のヴェールで全身を覆うのです。司祭は花婿の部屋へ赴くと、たとえ花嫁の耳が聞こえなくても、目が見えなくても結婚するつもりであるのかどうか尋ねます。本当にこのようにはっきりと尋ねらるのですが、この質問にイエスと答えることで、ようやく花嫁は花婿の家へ向かうことになるのです。花嫁は両側を友達や両家の親戚などに囲まれ、歌ったり踊ったりしながら、大変にぎやかに進んでいきます。家へ着くと、花嫁はソファーに腰掛けますが、3日が過ぎるまでは、花婿でさえもヴェールを取ってはいけません。あまりにも不思議な話なので、私自身何人ものアルメニア人に繰り返し尋ねてみるまで、とても信じられませんでした。中でも、1人のアルメニア人の若者は、この話をしながら涙を流しました。実は、彼の母親が、このようにして彼の結婚相手を決めてしまったというのです。彼は、言いなりになって結婚などするよりは死んだ方がましだと言いました。彼はすでに、未来の花嫁がちっとも美しくないのを知っ

¹⁶⁶ St. Gregory(AD240-332) 最初にキリスト教に改宗した、アルメニアの王。

¹⁶⁷ 普通四旬節は灰の水曜日（Ash Wednesday）から復活祭（Easter）の前の40日間。日曜以外は肉を食べてはいけないと言われている。

¹⁶⁸ キリストの身体は神のものである、という説。

¹⁶⁹ パンとぶどう酒がキリストの肉と血に変化する、というローマカトリックの考え方。

てしまったのでしょうか。

きっと、私たちの国にこんな習慣がなくてよかった、とお思いでしょうね。この話以上にびっくりするような、手紙の締めくくりにちょうど良い話を、私は今思いつきませんので、このへんで手紙をおしまいにしましょう。もちろん、この話は、誓って本当のことなのです・・・。

49. アベ・コンティ様

1718年5月19日 コンスタンティノーブル・ペラにて

あなたからのお手紙、大喜びで拝見しました。あなたの並々ならぬ質問に、私の心(人間の最も大切な、はかない情熱)も少しは揺り動かされたようです。でも、とてご質問に答えることはできそうにありません。もしも私がユークリッド¹⁷⁰のように数学者であっても、空気と蒸気の観察だけで一時代を終えてしまうくらいの能力しか持たないのですから、あなたのご質問は私の身に余る難しさなのです。

私はこの地に滞在して1年もしないところで、もう帰途につこうとしています。どうやら、放浪するのが私の運命であるようです。あなたも驚いているでしょうが、私自身誰よりもびっくりしているのです。もしかして、あなたは私がオスマン帝国の宮殿の様子をちっとも書いてよこさない、と怠慢さや愚鈍さをお責めになるかもしれませんね。この点については、もしライコート氏の著作を読むのがお好きなら、大宰相やベイレルベイ、オスマントルコ政府、ハレムの宦官たちについての正しい知識が数多く得られることと思います。こういった役職の名前などを一覧にするのは、とてもたやすいことですから。しかし、その他の話に関しては、その真偽は神のみぞ知ることでしょう。私は何も申し上げることはできません。人は、誰でも好きなように自分の意見を書く権利がありますし。人々の生活様式は、時とともに移り変わり、そういったものの一部は、旅行者には見落とされてしまうでしょう。でも、中央政府に関わる部分は、見落とされることもありません。だからよけいに、私は新しいことを語れないのです。同じことが言えるのは、宝庫やイエディクレなどについての話だと思います。モスクに関しては、特に素晴らしいモスクについて、あなたにお話しましたね。そのやり取りの中に関連して、ジェメリ氏¹⁷¹の書いたもの間違いについてぜひここで書いておきたいと思います。(実は、私は他の旅行記作家たちに比べて、ジェメリ氏を一段高く評価しているのですが。)氏のご意見では、カルケドンの遺跡はないということでした。しかし、それは全くの誤りなのです。なぜって、昨日私はその町へ行ったのですから。コンスタンティノーブルとその町を隔てる、とても狭い海峡を渡って。町は、依然として大きく、いくつかモスクも見られました。キリスト教徒たちは、この町を未だにカルケドニアと呼んでいます。トルコ人たちは私が覚えられなかった、何か別の名

¹⁷⁰ Euclid ギリシャの哲学者・教育者。

¹⁷¹ Giovanni Francesco Gemelli Careri(1651-1725),旅行記を著す。

前をつけていました。確か同じ言葉からとった、名前であったと思います¹⁷²。ジェメリ氏がどうしてこんな過ちを犯したかといえ、案内人がよくなかったためと、たぶん滞在期間があまりに短くて、見誤ったことにも気づかなかったからでしょう。他の部分については、ジェメリ氏は真実を語っていますし、私はそれを大いに認めているのです。

ところで、ボスポラス海峡ほど素晴らしい光景はありません。トルコ人たちにとってはお馴染みの光景ですが、皆その海峡沿いに座り、ヨーロッパとアジアが同時に現れる美しい様子を眺めて楽しんでいます。海峡沿いには、何百ものきれいなお屋敷が建てられています。偉大な地位の人間もこの地ではまだ力不足のようで、大変偉大なパシャの相続人ですら、別荘の面倒を見るほどには裕福ではなさそうです。こうした立派なお屋敷も、数年のうちに廃墟と化してしまうのです。昨日、私はペーテルヴァラドで戦死した、先の大宰相のお屋敷を見に言ってきました。そのお屋敷は、現在のスルタンの娘を花嫁として迎えるために建てられたものでしたが、結局2人がそこへ住むことはなかったようです。お屋敷の様子を、できるだけ詳細にお伝えしたいと思うのですが、おそらく私の表現では、その素晴らしさがあまり伝わらないような気がしています。建てられている場所は、海峡の中でも最も眺めのよいところで、お屋敷の後ろ側には緑の小高い丘となっています。広さといったら大変なもので、門番によると、800部屋以上あるということでした。私自身が数えたわけではないので、数がぴったりそうだとは申し上げられませんが、部屋数が多いのは確かです。そして、どの部屋も大理石や金銀細工で素晴らしく飾られ、果物や花を描いたみごとな絵画がかけられていました。窓という窓は、全部イギリス製の最高級のクリスタルガラスなのです。きっと、帝国の富をほしいままにした男が、無駄に贅の限りを尽くした屋敷なのだ、とでも思われるでしょうね？中でも、私が大変に気に入ったのは、浴室でした。2つの浴室があるのですが、同じ造りで、ちょうど対になっているのです。浴槽や台、床は全部白い大理石でできており、天井は金で、壁は全部陶器のタイルなのでした。浴室には、さらに2つの部屋がつながっています。奥の方はソファーとなっていて、部屋の四隅では、天井から水が流れ落ちているのです。水は白い大理石のくぼみからくぼみへと降り注ぎ、水を天井まで送る管で囲まれた広い泉へと流れます。外壁は格子で、ぶどうやすいかずらの木が巻きついているので、まるで緑のつづれ織りのような美しさと同時に、自然な陰影を作り出していました。もっと他の部屋についてもお話すべきなのでしょうが(どの部屋も大変に素晴らしいのです。)オスマントルコの家はどれもひどく不規則な造りなので、説明するのが非常に大変なのです。正面とか別棟と呼び、区分できる建物はなく、複雑な造りをしています。そのため見るのはとても面白いのですが、こうして手紙で説明するのは至難の業でしょう。最後に、スルタンが娘を訪問した際に使われたお部屋の説明を付け加えておきます。そこは、真珠貝を床につかい、エメラルドをかぎ爪

¹⁷² 現在トルコのアジア側に位置する、カドキョイ (Kadıköy) についての記述である。

のように使ったお部屋です。さらに、真珠やオリーブの木、陶器のタイルなどが埋め込まれ、飾り付けられているのです。部屋をとり囲む回廊もとても広く、精巧に作られた石膏の花やガラス細工があり、とても優雅で魅力的な様子です。庭もお屋敷にふさわしい豪華さで、泉やあずまや、散歩道がえもいわれぬ雰囲気を作り上げていました。彫像さえあれば、もっと素晴らしいものになったのではないのでしょうか。

お分かりのように、トルコ人は、私たちが考えていたほど野蛮な人々ではないようです。トルコ人にとっての洗練は、私たちと様子が違うのかもかもしれませんが、トルコ人のほうが素晴らしいような気もします。私が思うに、トルコ人は人生における正しい考え方を持っています。私たちは常に、政治の動向を気にかけてたり、終わりのない科学を学んでみたり、その結果として自分自身の価値を他人に分かってもらうこともできません。その間、トルコ人たちは庭で音楽を楽しみ、おいしいものを食べたりして過ごしているのです。間違いなく、私たちが傾倒しているのは正しい勝利（正しいことが存在するのなら）や、名誉を守ることであり、愚かにもほとんど得られないものを追い求めています。それが手に入るまでに、私たちは何と大きな時間と若さを犠牲にしていることでしょう！人間は、自分が育てた果実を収穫する前に年を取り、死んでいくのです。人生がどれほど短いか、そして人間がどれほど弱いかを考えた時、今この時の楽しさを学ばずして、他にどんな有益な学びがあるというのでしょうか？私は、さらにこの問題を追及しようとは思いません。私はもう十分に語りましたが、後はあなたのお考えに委ねたいと思います。でも、お返事に私をからかうようなことはしないで下さいね。もちろんあなたは、よく愚かな人たちが混ぜて考え勝ちな享楽と悪徳、これらをきちんと分けて考えることができると思いますが。でも、次のように申し上げたら、きっと私をお笑いになるでしょうね。私は、あれほどの知識を持ったアイザック・ニュートンになるよりも、全く無知なエフェンディになりたい、と思っているのです……。

50 . アベ・コンティ様

1718年7月31日 チュニスにて

私は先月の6日にコンスタンティノープルを発ち、初めてお手紙を差し上げられるような港町へ到着しました。私はとにかく早く手紙を書いて、世界中で1番楽しい場所を旅している喜びを、あなたと分かち合いたくてたまらなかったのです。本当に、このあたりは、どこをとっても詩的な雰囲気に満ちているのです。

まるで詩のような旅で 私は胸を熱くする
永遠の島々と 世界にその名を誇る海よ
ミューズたちは 豎琴をかきならし
山々は 歌うように頭をもたげる¹⁷³

¹⁷³ 前出のアディソンの著作 *Letters From Italy*(1703) より。

突然こんな調子になって、ごめんなさいね。お望みなら、この先は普通の散文調で書きましょう。船に乗って出発してから2日後、私たちはガリポリ半島を通り過ぎました。ガリポリは湾に面した大変きれいな町で、トルコ人もヨーロッパの最初の領土として重きを置いています。翌朝5時に、私たちの船はセストスとアバイドスの間にあるヘレスポント、つまり現在でいうダーダルネス海峡に碇を下ろしました。現在セストスとアバイドスの2つのお城は、後ろ側の高く盛り上がった土地にのまれるようにして、本当に小さく残っています。正直なところ、船長が発見して船員たちと話しているのが聞こえてこなければ、きっと私は気づくこともできなかったでしょう。その時私は、あなたもよくご存知の古代の悲劇に思いを馳せていたのです。

泳ぎ疲れた恋人と 待ち疲れた花嫁
ヒーローの愛 そしてリアンダーの死¹⁷⁴

またしても詩！この詩的な景色の連続で、私自身もすっかりその影響を受けてしまったようです。アバイドスの様子は、本当にどこか艶かしい感じです。ところが、そんな雰囲気のお城もオルハン・ガーズィー¹⁷⁵に包囲され、トルコ人に征服されてしまいました。お城には、包囲当時知事の娘がいて、彼女は自分の将来の夫を夢で見たといいます。そんな夢を見るために、はたして結婚式用のお菓子か聖アグネス祭¹⁷⁶のお菓子でも枕に入れて寝たのやら、私にはいっこうにわかりませんけれども。いずれにせよその娘は夢で、包囲している者たちの中に、鹿の姿をした未来の夫を見たわけです。そこで娘は自分の運命に従う覚悟をし、壁越しに紙切れを投げました。紙切れには、自分の身とお城を差し出すことが書かれていました。オルハン・ガーズィーは娘の真意を確かめるためにも、といったん兵を引きあげ、夜中に精鋭部隊を送り込むように命じました。すると、娘は、その中で会ったこともないオルハン・ガーズィーをすぐに見分けたのです。オルハン・ガーズィーは守備兵を蹴散らし、娘の父親を捕らえました。が、娘を自分の妻としました。この町は今アジアにあり、最初に発見したのはアイルランド人です。セストスはヨーロッパ側にあり、かつてはガリポリ半島の中心地でした。私はこのセストスとアバイドスの間に立ち、リアンダーの物語やゼクシス王が船を並べて橋にってしまった話¹⁷⁷などは、実際ありえるのではないかと思いました。なぜって、海峡はとても狭いのです。年若い恋人が泳いで渡ったり、王が軍隊を通らせようとしたりしても、何の不思議もありません。ただ、海の影響を受けやすい場所でもあるのです。ですから

¹⁷⁴ ヒーローはセストスでアフロディーテに仕えており、恋人のリアンダーは毎日向かい側のアバイドスから泳いで会いにきていた。ところがある嵐の夜、ヒーローの塔の灯りが消えていたため、リアンダーは溺れ死んでしまう。ヒーローは嘆き悲しんで、恋人の後を追って自殺したという。

¹⁷⁵ Orhan Gazi (1288-1369).

¹⁷⁶ St. Agnes AD303年に13歳で殉教した少女。1月21日を彼女の祝日としていた。

¹⁷⁷ Xerxes (486?-465BC) ペルシャの王。ペルシャ戦争の時、このようにして橋を作ったという。

恋人は溺れ死に、橋は崩れ落ちたのです。ここから、私たちはイダ山の姿をすっかり眺めることができました。

かつてはヘラがその恋人を愛し
世界を支配する王が 愛に支配された場所

ここからそれほど遠くないところに、あの哀れなヘキュバ¹⁷⁸が埋められている場所もちらりと見えます。さらにそこからちょっと行ったところは、ブユクケミクリ岬と呼ばれているところで、私たちはここに停泊しました。私は、その岬のてっぺんまで登って、トロイ戦争で亡くなったアキレスの埋められている場所を見たいと思いました。また、魂を慰めようとしたアレキサンダーが、その周りを裸で走り回った場所でもあるわけです。そこにはかつて大都市であった名残があり、夫は、あっさりと碑文の書いてあるミネルバ神殿の大理石の石を見つけました¹⁷⁹。私たちが石を船に載せるよう命じると、皆大変興味を持ったようでした。地元のギリシャ人僧侶などは、全く無知でこの石が何なのか分かっていないようでしたが。その教会の入り口には、両側に長さ 10 フィート、幅 5 フィート、厚さ 3 フィートほどの石があります。右側のは大変きれいな白い大理石で、横には典型的な古代のレリーフが彫られていました。1 人の女の人が描かれています。彼女は足台つきの椅子に腰掛けている神のようです。そして神の前には、別の女の人が腕に幼い子供を抱えて涙を流しています。その後にも、同じように子供を抱いた女の人が連なっています。おそらく、古代のお墓の一部であったのですが、はっきりしたことはよく分かりません。左側の石には、立派な碑文が残されていました。ちゃんと読み取ることはできませんし、あまりに古いギリシャ語で夫も正確に訳せないようでした。これがその写しです¹⁸⁰。原文を手に入れられなくて実に残念ですが、私が思うに原文は誰かに売られてしまったのではないのでしょうか。私がそう言うと、船長は「そんな大きな石を運ぶには、それ専用の船がなければ無理ですね。」と言いました。原文の書いてある石碑が残っていたところで、この船では運べないのだそうです。

古代にはとても偉大だったこの町は、今では貧しいギリシャ人の農民が住んでいます。女性たちは短いペチコートを、肩のところから帯で結わえています。上着は白いリネン、靴と靴下はしっかりしたものを身につけているようでした。そして、頭から、肩のあたりまですっぽり覆うモスリンを被ります。私たちの国のサンディーズ氏¹⁸¹は、その本の中で(きっと、あなたもこの種の本はお読みですね。)次のように語っていました。これらの古代の都市は、コン

¹⁷⁸ Hecuba, トロイ王プリアムの妻。悲劇作家エウリピデス(480-406BC)の描いたトロイ戦争の詩より。

¹⁷⁹ ウォートレーがイギリスに持ち帰り、現在ケンブリッジ大学に保存されている。

¹⁸⁰ ここに 11 行ほどのギリシャ語の詩が入っていたが、明らかにメアリーの書いたものとは異なっていたという。

¹⁸¹ George Sandys, *A Relation of a Journey Containing a Description of the Turkish Empire*. 1615.

スタンティヌス皇帝がビザンツ帝国を興す前、掘りどころとしていた場所である、と。私は、この説にはあまり根拠がないと思います。むしろ、もっと古い都市であると思うのです。私たちは、この岬から、イダ山から流れるシモス川と広い谷間を眺めました。シモス川は今シモレス川と呼ばれ、かなり広い川です。谷の方で、狭くて半分は泥でうずまっているスカマンドロス川に合流しています。たぶんこの川も、冬はもっと水があるのでしょう。このあたりは、ホメロスによると神々の地です。そのため川も聖なるスカマンドロスと言われているし、フォンテーヌ¹⁸²がその冒険談の中で、今はなき異教徒の儀式について語っていましたね。この川の流れがシモス川と合流して、一気にダーダルネス海峡へ注ぎ込んでいるのです。

現在のトロイの遺跡は、かつてその遺跡があった、というただの地面にすぎません。私が言われたのは、遺跡のかけらのようなものは、トロイよりもっと後になってからのものだそうです。たぶん、ストラボ¹⁸³も同じように言っていたと思います。それでも、私は古代のメネラオスとパリスの有名な決闘を思いながら、谷間を眺めていました。そこはかつて世界一の都市があった場所であり、最大の帝国の中心地とするには、最もふさわしい高貴な土地であったのでしょう。コンスタンティノープルについても、たびたびこのように言われていますね。確かにコンスタンティノープルは、あちこちからの船を迎えるには大変便利な場所ですが、北風が吹いている間、つまり1年に6ヶ月の間立ち入ることができなかつたりするのです。この岬の北側といえば、トロイ戦争で自殺した勇者が埋葬されているところです。この聖なる場所や川を眺めている時、私の手元にはホメロスの地図があったのですが、その正確さには大変感心しました。ホメロスが山や平野に与えた形容は、今もそのままなのです。私は、まるでドン・キホーテが夢うつつで洞窟に座っているような感じで、数時間をそこで過ごしました。その夜、私たちの船はトロイがあったと言われるあたりまで行き、私たちは涼しいうちに遺跡をよく見ようと思ったので、夜中の2時に起きました。このあたりは、トルコ人が「エスキ・イスタンブル」つまり古いコンスタンティノープルと呼んでいるところです。その理由は、私が思うには、コンスタンティヌスが発展させた町の遺跡があるからではないでしょうか。私たちはろばを雇い（そこへ行くには、ろばしかありません）もう何マイルが奥の方に進みました。そして、古代の壁のまわりをぐるりと一回りしたのです。丘の上と谷間にはお城の残骸があり、崩れ落ちた柱やラテン語の碑文が入った台座が残っていました。そのラテン語の碑文は、こんなふうです¹⁸⁴。この場所の近くに残っていた神殿は、もともとジュリアス・シーザーに捧げられたものではないかと思うのです。サンディーズ氏によればキリスト教会だということですが、私は違うと思いますし、確かにローマ人たちはこのあたりに神殿を建

¹⁸² Jean de la Fontaine, *Le Fleuve Scamandere*.(1664)

¹⁸³ Strabo(63?BC-AD21?) ギリシャの地理学者・歴史家。

¹⁸⁴ ここに 12 行ほどのラテン語碑文が入っていたという。

てたのです。また、きれいな大理石のお墓や、御影石のかけらも散らばっていました。この立派な石は、トルコ人たちが大砲の弾を作るのに使っているの、日々少なくなっているようです。

遺跡を見た日の晩、私たちはテネドス島を通り過ぎました。テネドス島はかつてアポロのものであり、ダフネに求愛した時に自分の特別な領土としたのです。一周たったの 10 マイルほどの島ですが、当時はとても豊かで人口も多かったのでしょう。今は、その素晴らしいワインで有名なところ。テネドス島の中心テネスについては、何も言うべきことはありませんが、次に通り過ぎたミティリーニを思うと、私はレスボス島について語らずにはいられません。ピッタコスが支配し、サッフォーが歌った島ですし、詩人アルシーアスや哲学者のセオフラストゥス、音楽家のアリオンの誕生地としても大変有名ですから。レスボス島は、トルコ人がコンスタンティノープルを征服後も、キリスト教徒の支配下に残った唯一の島でした¹⁸⁵。さて、このへんであなたもよくご存知の、東ローマ帝国の話をする必要があるでしょうか？いずれにせよ、私は船があったという間にレスボス島を通り過ぎ、アイガイア海、つまりエーゲの多島海に進んでいったので残念に思いました。レスボス島の左側にはカイオス島があって、そこはこのあたりの島の中で 1 番豊かで、綿や絹の生産が盛んです。レモンやオレンジの木が島を覆い、聖なる山々の姿も美しいのです。ヴェルギリウスが彼の詩の中であげた、神々の美酒があることでも有名ですね。オスマン帝国中で、1 番質の良い絹織物の産地としても知られています。街の様子も、そこにいる女性たちも皆美しく、女性たちはキリスト教国と同様に顔を見せています。裕福な人々も多いのですが、駐在するトルコ人の嫉妬を買わないように、と用心して富は家の中に隠しているのです。そうは言っても、この地の人々はある程度自由で、土地の豊かさを謳歌しています。

食べて 歌って 踊って 人々の時は過ぎる
花々のように生き生きと お日様のように明るく

もちろん、人々を縛り付けているものもあります。1566 年にオスマン帝国の支配下に入ったのですから、政府の抑圧を受けるようになってそれほど長くはありません。人々にとっては、ジェノヴァに従うのも大宰相に従うのも同じようなものでしょう。もともとギリシャの王が、この島をジェノヴァに売ったのですから。でも、こうした歴史的な背景はもう忘れてしましましょう。手紙に書くには、あまりに無粋な話題ですから。

アンドロス島とギリシャの海峡を通る時、私たちはスウニオン岬を目にしました。そこには、未だにアテネ神殿の柱が建っています。この神々しい姿を見た時、私は神殿の損失を相当悔やみました。この神殿は、ペロポネソス半島のこの間の戦いでトルコ人が破壊してしまうまで、完璧な形でアテネに残ってい

¹⁸⁵ 1453 年にコンスタンティノープルが征服されたが、レスボス島の首都ミティリーニは 1462 年にオスマン帝国支配下に入った。

たのですから¹⁸⁶。この有名なペロポネソス半島の地に立って、私が大変感動したとお思いでしょう？ところが、ただアルファオス川やペネイオス川、イナコス川、エウロタス川を眺めたり、アルカディアの大地やその他神話の舞台となった場所を眺めたり、それだけでした。そして私は、神々や英雄どころではなく、この地には今や略奪者たちが溢れていることを知ったのです。廃墟と化したあたりを旅したら、間違いなく彼らに襲われる危険性があるわけです。でも、私はこれらの古代文明に大きな尊敬を抱いていますし、今だって、あなたにその歴史のすべて（例えば、青銅器文明の中心であったミケーネやコリントの滅亡の話など）を語りたい衝動を抑えているのです。でも、ここではただその地を踏んだという話に留めましょう。私たちの船は、さらにそこからマレア岬のほうへ進みましたが、有名なアポロ神殿は全く残っていませんでした。その夜になって、クレタ島の町イラクリオン（カンディア）が見えてきました。大変山がちな島のように見えたが、私たちはすぐにイダ山の姿を認めることができたのです。私たちの手元にあるヴェルギリウスの著作によると、ここには100ほどの都市があり、有名な物語としては、クレタの迷宮とミノタウロス退治の話ですね。その後、この大いなるゼウスの生まれた場所を、ローマ将軍メテリウス¹⁸⁷が征服します。さらに今は、トルコ人の手に落ちています。私はまさに、このイラクリオン征服の時代に通りがかっており、自分自身にかなり腹を立てました。つまり、その他の島についても同じことなのですが、この旅を3000年ほど前にできたならこれほど面白いことはないだろうと思ったのです。そうしたら、サッフォーとお茶を楽しんだ後に、夕方からはカイオス島にあるホメロスの神殿を見物に出かける、などということができたのですから。そして彫像の美しさを描き、人類の中で最も知的で素晴らしい人々と会話をして……。ああ、もう芸術はこの地から失われてしまったのです！今残るのは、ただ自然の素晴らしさのみです。例えば、夜に、はるか遠くに火をふいているシシリー島エトナ山の姿は大変美しく見えています。その姿を見ていると、私の頭には何千という想像が浮かび上がってくるのです。私は哲学に重きをおいていますので、エンペドキュロス¹⁸⁸があんなことになるなんて考えられませんし、ルクレティウス¹⁸⁹が次のように称えたエンペドキュロスについてのルシアン¹⁹⁰のひどい意見は、どうしたって信じられないのです。

「彼はどうも人間から生まれてきたようには思われぬ。」

私たちは、ホメロスが語っていたシレーンの歌声を聞かずに、渦巻きに飲み込まれたり岩に乗り上げたりせずに¹⁹¹、無事にマルタ島へ到着しました。マル

¹⁸⁶ 1687年のアテネ包囲によって、パルテノン神殿が破壊された。

¹⁸⁷ 50BCにローマ将軍 Metellus Cretcus がクレタ島を制圧。

¹⁸⁸ Empedocles(490?-430?BC) ギリシャの哲学者。エトナ山に飛び込んで自殺したという。

¹⁸⁹ Lucretius(AD49?-55?) ローマの哲学者。

¹⁹⁰ Lucian(AD120?-180?) ギリシャの風刺詩人。

¹⁹¹ メシナ海峡には岩と渦巻きがあり、その間を通り過ぎる船はシレーン（海の妖精）におびき寄せられてしまうという。

夕島は、蜜が豊富であったために、その昔はメリタ島と呼ばれていたのだそうです。島は狭く、岩だらけでした。マルタ島は聖騎士団によって治められていますが、このへんの制海権は小さくなってしまったようです。ここにある要塞は世界中で1番と言えるほど堅固なもので、莫大な経費や人手をかけ、かなり固い岩でできています。マルタ島を出ると、私たちは大変ひどい嵐に襲われました。その8日後、やっとの思いでアフリカ大陸のブラン岬に到着してほっと一安心したのです。私たちの船は、今もそこに停泊しています。

私たちは、ここで、チュニスに定住しているイギリス領事に出迎えられました。私たちは、何日か我が家にお泊りください、という領事の親切に甘えることにしました。私は、このあたりの様子を見てみたいと思っていましたし、中でもカルタゴの遺跡には興味があったのです。夜の9時、私たちは領事の馬車に乗ってお宅へ向けて出かけました。月がきれいに出了た晩でしたので、昼間と同じようによく見えました。この季節、日差しがとてもきついので、夜でなければ旅はできないのです。その気候のため地面はほとんど砂ですが、そこらじゅうにオリーブやいちじく、なつめやしなどが植えてあります。このような木は、簡単に育ちますし、ここで育った実はこの上なくおいしいのです。アフリカのぶどう園やメロン畑は、どれも私たちがウチワサボテンと呼ぶ植物でできた垣根で囲まれていました。この垣根は全くたいしたもので、野生の動物も入り込むことができません。とても背が高く、まるでヘアピンのような長くて鋭い刺を持っている植物だからでしょう。その実は主に農民たちが食糧にしていますが、十分に食べられるものです。ちょうど今、オスマン帝国ではラマザン（断食）の季節です。このあたりの人々もマホメットの教えに従っていますから、日が落ちるまでは断食し、夜は祝宴をしています。私たちは、地元の人たちが木陰で食事をしていたり、独自の音楽に合わせて歌ったり踊ったりしている様子を何度か目にしました。人々は全くの黒人ではなく、白人と黒人の混血です。私には、白黒混血の人々の様子は、かなりひどいものに思われました。人々はほとんど裸で、粗いラシャの布だけを体に巻きつけています。女性たちは、そのむきだしの腕や肩や顔を、花や星などの形をしたいれずみで飾っています。この装飾は、私にはますます不恰好に思われるのですが、人々の間では美しいと考えられているようでした。たぶん、体に刻み付けるのはかなり痛いでしょう。チュニスから6マイルほど離れたところで、私たちはあの有名な古代の水道橋を目にしました。これは、40マイルも遠くにある高い山から、カルタゴへ水を供給していたものです。数多くのアーチが、そのまま残っていました。私たちは2時間ほどそこにいて、丹念に見て回りました。夫が言うには、ローマの水道橋もこれほどは立派ではないそうです。橋を作り上げている石はどれも大きく、きれいに磨かれていますし、それぞれぴったりとかみ合っていました。石と石を接着するセメントすら、ほとんど使われていないようです。それでも、人の手で崩されない限りは、この地にあと1000年はあり続けるでしょう。

日が昇った頃、私たちはチュニスの町に着きました。街には、白くてきれいな石造りの建物が多いのですが、ほとんど庭園はありませんでした。人々の話

によると、トルコ人がチュニスを征服した際、木々を全部台無しにしてしまったのだそうです。それ以来、木は植えられていないようで、乾いた砂だけの様子は見ていてもあまり心地よいものではありません。暑さに加えて日影もないので、気温は耐えられないほど高く上がります。毎日お昼頃、海からの涼しい風が吹いてきてほっと一息つけますが、それがなければ生きていけないでしょう。それに、9月の雨季にまとめて降る雨水を貯水池に貯めておかなければ、水もない状態なのです。街中で見かける女性たちは、皆頭のとっぺんから足の先まで黒いヴェールに覆われています。イスラム教徒以外の血も混ざり、女性たちの多くは大変美しいと言われています。チュニスは、もともと1270年にフランス国王ルイ5世に包囲されましたが、ルイ5世は包囲の最中に熱病で死んでしまいます。その後息子のフィリペ3世とイギリスのヘンリー3世の息子エドワード1世が、素晴らしいやり方で包囲を解きました。それ以来、ずっとアフリカの王に治められていましたが、1534年にスレイマン大帝のもと司令官バルバロスがこの地を奪ったのでした。そして、1535年カール5世が再びチュニスを取り戻すも、1574年セリム2世の時代には、その司令官シナン・パシャの活躍によってオスマン帝国がまた奪い返したのです。それからというもの、この国はオスマン帝国の大宰相に従属する国となりました。大宰相の従属の民となったベイと呼ばれる人がこの地を統治していますが、属国となるのは嫌なようで、めったに貢物などしないそうです。バグダードも今まさにチュニスと同じ状況ですが、大宰相は属国をなくすよりはと、完全統治を失ったことは黙認しているようです。

きのうの早朝(着いてから一晩休んで)、ついに私たちはカルタゴの遺跡を見に出かけました。もうすでに太陽の日差しはとても強く、人々が象の小屋にしていたという地下室を見つけた私は、大喜びで中にもぐりこみました。私には、この部屋が本当に象のために作られたとは、とても思えませんでした。中で、私はずいぶんたくさんの大理石の柱や、斑岩のかけらを見つけたのですから。これほどのものを、無駄に努力してここまで運び込んだりはしないでしょう。美しい大理石の柱が、ただ家畜小屋を飾るためだけに持ってこられたのではないはずです。私が思うには、ここは宮殿の地下の、夏用の住居だったのでしょう。夏の暑い日差しを遮るためには、必要なものです。現在は、地元の人たちが穀物倉庫として利用しています。ここは人々の住むところからあまり離れていないので、私が座っていると女性たちが私を見にやって来ました。お互いの姿を眺めあうのも、なかなか楽しいものです。座っている姿や肌の色、顔の両側に垂れ下がる長くまっすぐな髪、そして顔つきや体つきなどを眺めていると、田舎の人々の様子とそれほど違いはないことに気づきました。それどころか、マントヒヒに似ているような気さえしました。違う人種とはとても思えないし、この地方と何か同盟でも結んでいるのではないかしら、などと考えてしまったのです。私が一休みしていると、人々は私に牛乳やおいしい果物などを持ってきてくれました。それからこの街のとっぺんにある立派な丘へ登り、有名なカルタゴをすべて見下ろしてみました。ちょうどこの地を両側からはさみこむ、

地峡がよく見えたのでした。現在片側は塩湖のようで、どろどろの土が見えています。ストラボによると、カルタゴの街は一周 40 マイルだそうです。ストラボの描いた様子は今はなく、私の見たものはこれだけなのですが、カルタゴの歴史は、私の短い説明を補って余りあるほどよく知られていますね。

ご覧のように、お世辞を送るよりもお言いつけに従ったほうが、あなたも喜んでくれるだろうと思いました。そこで、あなたがお望みのようなものを書いて、あなたの手紙に答えてみたのです。あなたからのお手紙への感謝の気持ちは、最後までとっておきましょう。私たちは明日チュニスを発ち、イタリアやフランスに向けて旅を続けます。どこかの場所であなたにお会いして、あなたに尊敬の念を抱いていることを伝えたいと願っております。

51. マー夫人へ

1718年8月28日 ジェノヴァにて

チュニスから手紙を書くことができず、本当にごめんなさいね。(コンスタンティノーブルを出てから、チュニスだけが手紙を送る唯一の機会だったので。)チュニスはひどく暑く、日の光もあまりに強すぎたので、私はアベ・コンティ宛に一通手紙を書いただけで目が回りそうでした。そこで、他の人に手紙を書くのは諦めたのです。いずれにせよ、あんな野蛮な国の様子を伝えても、あなたにはあまり面白くなかったと思います。今、私はとてもきれいなものに囲まれており、イタリアの美しさにうっとりしています。イタリアでこんなに楽しい思いをしているのだから、イタリアの素晴らしさを褒めなければいけないような、そんな気さえしているのです。ジェノヴァでは、街の中心ピエール・アレーネにあるデーヴナント夫人のお宅に滞在しています¹⁹²。おそらく、これほどよくしてくれている夫人も褒めないとはいけませんね。夫人は大変に気立ての良い人で、そのためにジェノヴァ滞在もより楽しいものになっています。ジェノヴァは美しい湾に面した街で、海からだんだんと丘のようになっています。美しい庭園や立派な建築も多く、海からの眺めもとてもきれいです。とはいっても、私はすっかりコンスタンティノーブルの美しさに慣れてしまっているので、特にジェノヴァを美しいとは感じなかったのですが。ジェノヴァ人は、かつてエーゲ海に浮かぶいくつかの島と、コンスタンティノーブルのガラタ地区を領有していました。オスマン帝国のコンスタンティノーブル征服の際、ジェノヴァはキリスト教国を裏切ったわけですが、その後のジェノヴァの様子を見れば、十分裏切りの罰は受けていると思います。ジェノヴァ人は、島もガラタ地区も失ってしまったのですから。それどころか人々は貧しくなり、フランス人の監視下に置かれるようになってしまいました。ある夜に公使の家を乗り越えたフランス兵たちを撃った、という実につまらない理由で、総督がパリまで謝りに出かけた時以来のことだそうです。この話は、街にずいぶんたくさんいるスペイン人の作り話ではないか、と私は疑っています。もちろん、そんなこ

¹⁹² Frances Bathurst, ジェノヴァ公使 Henry Davenant の妻。

とを誰もはっきりと言ったわけではないのですが。

女性たちはフランスの流行を上手に取り入れ、ただ真似している人たちよりずっと上品に見えます。私は、“cicisbeismo”つまり男性崇拝者を持つという習慣が、だいぶ女性たちの雰囲気に影響しているのではないかと思うのです。あなたはこの習慣について何か聞いたことがあるでしょうか？私の目で見たとところによると、これは地球上のどこにも存在しません。この流行はここジェノヴァから始まり、今やイタリア中に広まっています。イタリアでは、夫の側もそれほど物分かりは悪くないようです。こんなにも定着してしまった習慣に対して、逆らったりするご主人はいないということです。以前、恋愛沙汰を裁くのは議会の役目で、人々は憎しみ合って仲違いし、若い男性たちはお互いののどをかき切って死んだりしていました。しかし、この崇拝者制度ができてから、人々の間には平和や穏やかな気持ちが戻ってきたというわけです。たいていは、ある特別な女性（というのは、もちろん結婚した女性です。若い女性たちは、皆修道院に閉じ込められていますから。）に仕えるのは紳士たちです。女性の馬車の後ろに控えていて、扇子や手袋などを渡したり、何事がささやいたりしているのです。女性が外出する際には、召使の代わりに重々しく馬車を走らせませす。こうして公の場に出て、女性に仕えるのが仕事であるわけです。要するに、好きなようにふるまっている女性に、（時には見返りを求めずに）お金や時間をすべてつぎ込もうとしているのです。ところが、夫のほうは単純で、精神的な友情以上のものがあるとは全く思っていない。むしろ、夫が妻に崇拝者を選ぶことだってあります。でも、もしも女性が気に入った人でなければ（よくそういうことは起こるようです）自分の好きな人と取り替えたりするのです。以前は、美しい人であったら、1人で8人から10人もの崇拝者を持っていました。が、それほど多く持つ時代は終わりました。今や、男性の数も少なく質もよくないとかで、1人の女性が1人の崇拝者で満足しなければなりません。ご覧のように、この街には自由と貴族的な社会があると同時に、一般の人々はフランスの奴隷となっていたのです。古くからいる貴族たちは、2年ほど任務についている現在の総督に対して全く敬意を払いませんし、総督の妻も女性社会においての身分は高くないようです。アンドレア・ドリア¹⁹³（人々にフランスから自由を取り戻した偉大な人です。）の一族が特権を持っている、というのが現実です。議会が贅沢な衣装を制限しようと法令を出し、宝石や豪華な織物を身につけるのを禁じた時にも、この一家だけは好きなように贅沢をすることができました。私は、ドリア公爵のお屋敷の中庭で、この英雄の銅像を眺めて楽しんだのです。

ドリア家のお屋敷の話をしたら、もっと早くお話すべきだったことを思い出しました。こうしたお屋敷は全部、パラディオ¹⁹⁴の設計ですと言うだけでは不十分ですね？ノヴァ・ストラダと呼ばれている通りは、たぶん世界でも有数の

¹⁹³ Andrea Doria(1466-1560) 海軍司令官。1528年、フランス兵を追い出し、街を取り戻した。

¹⁹⁴ Andrea Palladio(1508-80) 建築家。主にローマ風の建築様式で建てた。

素晴らしい建物が並ぶ通りです。中でも、ドゥラッツォの宮殿を挙げましょう。優雅な柱が2列に連なり、ピエール・アレーネや公爵のほかの宮殿と一緒にあって、実に美しい眺めなのです。その完璧な建築様式や、内部の豊かな装飾の様子を見学することもできます。どこをとっても華やかで優雅なのですが、私は有名画家たちの絵画に1番心をひきつけられました。ラファエロやヴェロネーゼ、ティツィアーノ、カラッチェ、ミケランジェロ、そして私がとても気に入ったのはガイドとコレジオの作品でした。私は、恐ろしげな展示物には興味はありませんし、十字架が飾られていればいるほど、醜い様子になると思うのです。私の大好きな画家たちの絵は、自然な光の中に飾られていました。中でも良いと思ったのは、ガイドによる聖ルクレチア¹⁹⁵の絵でした。その顔や胸元の美しさは哀れを誘い、人の心に同じ主題で書かれた詩を呼び起こします。ガイドの描いたクレオパトラの絵も、語られるべきものでしょう。聖ルクレチアの絵にこれほど心を奪われなかったら、もっとよく説明できそうな気がします。セント・ローレンス教会は白と黒の大理石で建てられており、有名なエメラルドの飾り皿が納められているところです。今は、その飾り皿に手を触れることができません。人々によると、シシリー島の王がやってきて、この飾り皿を道に投げつけて叩き割ろうとしたからだそうです。こんな子供じみたことを計画したのは、人々がこの飾り皿を王に売ろうとしなかったからだとか。アヌンシアータ教会もきれいな大理石造りで、柱は赤と白の石でした。また、イエズス会士たちは聖アブローズの銅像を飾り付けていました。正直言って、アヤ・ソフィアを見てしまうと、普通の教会はどれもたいしてよく見えません。せいぜい、教会の名誉のためにと、その名前を書きつけることくらいしかできないのです。でも、私がこれだけたくさんのものを見学して、時間を有効に使っていることをほめてくれるでしょうね？実は、私たちは検疫から出てきて間もないのです。レヴァント地方を旅してきた人は、この検疫から逃れることはできないのですから。でも、私たちの検疫はだいぶ時間も短く、ピエール・アレーネの公舎に行くにもデーヴナント夫人が付き添ってくれました。パラディオの建築物から1マイルも離れていませんでしたし、むしろそのへんを散歩して楽しむことができました。委任されたジェノヴァ人貴族がやってきて、私たちが感染していないか調べただけだったのです。私はもう何日かジェノヴァに滞在することになっていますが、ずっとここにいたら、などと思ってしまうのです。が、恐らく私の運命は、そんな穏やかで静かなものではないでしょうね。

52. マー夫人へ

1718年9月12日 トリノにて

ジェノヴァからトリノへは、立派な道路を通っての2日間の旅でした。トリノでよそ者が見るべきものはもう見学してしまいましたが、あえて説明するほ

¹⁹⁵ St.Lucretia 紀元前510年頃のローマの婦人で、子に暴力をふるわれて自殺した。貞節の鏡とされている。

どの価値あるものはなかったように思います。有名なトリノの経かたびら¹⁹⁶にも、私はたいして尊敬を感じません。教会も宮殿もきれいなのですが、私はあまり関心が持てませんでした。トリノの町自体はきれいで、ポー川に沿った平野に広がっています。ここからあまり遠くないところには、ラ・ヴェネリエやラ・ヴァレンティンといった素晴らしい別荘も見えました。私たちは、ピアッサ・ロイヤルという素晴らしい場所に泊まっています。この建物には、白い石で囲まれたそれは美しい前庭があるのです。トリノに着いてすぐ、私たちは・・公爵の訪問を受けました。この人のことは、あなたもイングランドにいたときからご存知でしょう。公爵は、大変礼儀正しい様子で、私たちをトリノから1マイルほど離れたリヴォリにある宮廷に招きました。私は昨日そこへ出かけ、非常に身分の高い女性である、と女王陛下¹⁹⁷に紹介される名誉を得たのでした。陛下は豪華なご自身のサロンにいらっしゃって、その周りには美しく着飾った貴婦人たちがずらりと並んでいます。でも、その中にお美しいカリグナン王女¹⁹⁸の姿があるのはすぐ分かりました。女王陛下は大変優しく穏やかな様子で私に接して下さり、教養のある方のようにお見受けしました。陛下はご自分に流れるイギリスの血について触れ、イギリスに対しては特別な気持ちを抱いているのだと語りました。私は陛下の親切なお言葉に答えようと、できる限り「陛下」の称号で呼びかけたつもりです。おそらく、この先もずっと「陛下」と呼ばれることはないでしょうから¹⁹⁹。王様は生き生きとした目をしていましたし、ピエモンテ王子²⁰⁰もとても立派な若者です。しかし、王子の目から見ると、こうした宮廷の様子はそれほど面白くないようでした。この地では、仰々しい行進やミサが流行しているのです。恋愛もほめられたものではないようで、私たちのロンドンからの知人・・伯も、とある貴婦人とお付き合いを始めようとした際に、大変不名誉な噂を流されていました。さて、私は明日トリノを出発して、皆の語り草となっている恐るべきアルプスを越えようとしています。もしも私が生きて戻れたら、また手紙を書きましょう。

53. アン・ティスレスウェイト様

1718年9月25日 リヨンにて

リヨンに到着すると同時に、あなたや他の人たちからのお手紙を受け取りました。どれも皆コンスタンティノーブルに宛てられたものでしたが、マルセイユからリヨンに送られてきたのです。商人たちは、私たちが帰途についているのを知っていましたから。

妹がイングランドを発ったというのを聞いて、私はとても驚いています。ということは、トリノから妹に書いた手紙は届かないでしょう。手紙をどこへ送

¹⁹⁶ キリストの体をくるんだという布。

¹⁹⁷ Ann(1669-1766), シシリー王 Victor Amadeus (1666-1732) の妻。

¹⁹⁸ Maria Anna(1690-1766) カール1世の孫娘で、アマデウス2世の養女となった。

¹⁹⁹ シシリーはアラゴン公国の一部となってしまったため。

²⁰⁰ Charles Emmanuel (1701-1730)

ったらよいのやら、妹の身にどうということが起きているのか、私は本人から全く聞かされていないのです。私はといえば、今は寢室に閉じこもっています。17日にリヨンに着いてから、きのうまでずっと寝込んでいました。熱があまりに高く、ついに旅もここで終わるのではないかと思ったほどです。今までの旅の疲れがたまっていたのだとしても、全く不思議はありません。旅の初日、トリノからノヴァーラへ抜けるまでは田舎の景色もきれいで、自然の美しさを楽しみながらの旅でした。翌日、私たちはモンズニ峠を越えなければならず、柳の小枝でできた椅子を棒に固定したものに乗り、山男たちの背に背負われて進むことになったのです。馬車もばらばらにされ、らばの背中に括りつけられてしまいました。万年雪に覆われた壮大な山々の眺め、足元よりもずっと下に広がる雲、ものすごい音で岩場から流れる水……。こんな光景も、あのひどい寒ささえなかったら、もっと楽しんで眺められたと思います。寒さの上に霧雨が降り、雨は私のくるまっていた厚い毛皮にまでしみこみました。峠の麓に着く頃には、私は本当に寒さで死んでしまいそうだったのです。もっとも、麓には、暗くなり始めて2時間もしないうちに着いたのですが、この山の頂上はかなり広く湖まであるのですが、傾斜がきつく滑りやすいので、担ぎ手たちがすいすい登る様子を見ていて驚かされます。だから、私にとっては首の骨を折る心配よりも、病気になる心配のほうが大きかったのです。結局、私の心配は正しかったわけですね。他の峠はどこも馬車が通れますし、牧場やぶどう園などがあって大変実り豊かです。世界で一番良い、といわれる山羊の品種もいます。Aiguebellet が最後の峠で、それを越えるとフランスの国境の町 Point Beauvoisin に入ります。そこから橋を隔てると、サヴォイ公国です。その夜遅くリヨンに着いたのですが、私は自分の体調があまりに悪くて何もできない状態でした。今はもう良い状態に向かっていると思いますし、のどの痛みはまだありますが、それほど長くも続かないでしょう。私は早く外へ出て、この町の珍しいものを見て回りたくてたまりません。そして、早く旅を続けてパリへ行き、そこからあなたへもっと面白い手紙を送りたいと思っています。今はしばらく寝込んだ後で弱っていますし、頭も重たくごちゃごちゃしています。たぶん、小さな宿屋の寢室で、うんざりするほどの薬びんたちに囲まれて閉じこもっていたせいでしょうね。

54. アレクサンダー・ポープ様

1718年9月28日 リヨンにて

あなたからのお手紙を受け取りました。私の帰国を喜んでくださって、ありがとうございます、と申し上げるべきでしょうね。でも、私をひどく悲しませていることに対して喜ぶなんて、と私は機嫌を悪くせざるを得ません。妙なことを言う、とお思いでしょうね。友人たちに会う喜びがない、と言っているではありません。しかし、帰った後見聞きしなければならぬ、何千もの厄介ごとを考えてみるとどうでしょう？例えば訪問を受けたり出かけたり、宮廷に上がったお茶会に行ったり、私は行く先々で質問攻めに合うことになります。

一方で、私は誰に対しても無条件に仕える人間ではありませんから、私の存在は、ロンドンで必ずしも皆を喜ばせるものではないでしょう。ですから、どこか穏やかで静かな生活を送れるようなところがあれば、そこにいたほうが良いと思うのです。この話題についてもっと書いたら、私はますます憂鬱になってしまいますので、ラテン語の碑文でも書いてこの余白を埋めましょう。これから書く碑文は、リヨンの公舎の両側にあった真ちゅうの台に刻まれていたものです。

[30 行のラテン語碑文が書かれていた。]

一つ目の台に書かれているものを書き取るのに、なかなか苦労しましたので、二つ目はそのまま写すことにします。おそらくあなたなら、文字や形式が同じであることがすぐにお分かりになるでしょうね。このように続きます。

[40 行のラテン語碑文が書かれていた。]

私はリヨン司祭の門を見学しませんでした。代わりにローマの水道橋と、聖母マリア教会の裏側にある皇帝の宮殿を見ることができました。この宮殿は、クラウディウス皇帝が生まれ、セヴェルス皇帝が亡くなった場所です²⁰¹。また、セント・ジョン教会の大聖堂は大変美しいゴシック建築で、その大時計はゲルマン人の賞賛するところとなりました。街を歩いていて目につくのは、人間を踏みつけにした前の王様²⁰²の銅像です。このように、かつらを被った立派なフランスの銅像について、私は一言言わずにはいられません。(あまり多くを語るつもりはないのですが。)もし王が、ある 1 つの姿に無知や悪趣味、野蛮さを表そうとしているのなら、その銅像は、英雄になりたがっている 1 人の下男が顔のまわりに巻き毛をたらし、手にこん棒を持った姿に他ならないでしょう。フランス人はこの町の歴史について何冊もの本を書いていますから、私は何も言う必要はありません。この町にはきれいな家が立ち並び、広場も木々がきれいで、そこからはローヌ川とソーヌ川が合流する様子が見えます。

力強いローヌ川の流れは速く

それゆえに 行くべき方向を 見失う²⁰³

私はのどの痛みのために数日間この町に閉じこもっていましたが、それはアルプス山脈の霧雨で風邪をひいたせいです。でも、今は良くなって、町を全部見て回って楽しみました。こちらのお医者さんたちは新しい学説をお持ちで、もしものどの腫れが引く前にお医者にかかるのをやめたりしたら、それこそ熱病にかかってしまうと私を脅かしました。でも、私はのどが腫れてもこうしてリヨンの街を歩き回っているのですから、パリまで旅を続けても大丈夫だと思うのです。そこで、お医者さんや薬、のどの痛みにもかかわらず、明日パリに向けて出発しようと計画しています。リッチ夫人にお会いになったら、お手紙を受け取ったこと、パリからお返事を書くことをお伝えください。きっとリッ

²⁰¹ローマ皇帝 Tiberius Claudius Drusus Nero Germanicus(10BC-AD54)、Lucius Septimus Severus(AD146-211)。

²⁰²ルイ 14 世(1638-1715)

²⁰³ Apocolocyntosis Seneca (4?BC-AD65, ローマストア派の哲学者・政治家) の詩。

チ夫人はパリに1番興味があると思うのです。

55. リッチ夫人へ

1718年10月10日 パリにて

あなたに手紙を差し上げることの喜びを、私はどう表したら良いでしょうか？これほどさまざまな楽しいことのある場所で、こうして手紙を書いていることが1番の証拠ではないでしょうか。私は訪問を受けたり、生き生きとした人々の中でいろいろな話に耳を傾けたりと大忙しです。コンスタンティノーブルで知り合ったフランス大使夫人の立派なご家族は、皆パリにいらっしゃって、私に会いに来てはいろいろと質問攻めにしています。パリの空気は、私の体に良い影響を与えたようです。リヨンからパリまではずいぶん具合が悪かったけれど、今はこの上なく元気なのですから。きっと旅は楽しいものだったろう、とお考えでしょうね。ところが実際は、相当ひどいものだったのです。私は、人間が神のように世界を救うのだ、という態度を取ることほど不幸をもたらすことはないと思います。フランスの田舎の村には、見るべきものはありません。村で新しい早馬を馬車につけていると、村中の人々が物乞いにやって来ます。村人は飢えて痩せ細っていて、ぼろぼろの服を着ていました。自分たちの惨めな状況を説明するのに、言葉などまるで必要ありませんでした。

フォンテーヌブローは、フランス一贅の限りを尽くした場所です。この王の狩猟用宮殿に1500もの部屋があるのを聞いたら、きっとこの国は豊かなのだと思い始めるでしょうね。王室の人々の居住部分はとても広く、金で飾られています。でも、私はこの建築様式や絵画などには、あまり価値があるように感じられませんでした。長い廊下はアンリ4世によって作られたもので、壁に王様の宮殿を全部描いたものがあります。当時流行した様式らしいのですが、今見るととてもちゃちです。お庭は本当に広くて、森や泉がたくさんありました。木々は立派に育ち、池には鯉が飼われていましたが、そのうちの何匹かはもう80年も生きていますということです。先の王は、毎年何ヶ月かをこの宮殿で過ごしたそうです。宮殿には宗教的な碑文の彫られた石もあり、おそらく当時そのような宗教的献身が流行っていたのでしょう。その習慣は、王の死と共に廃れてしまったのだと思います。少なくともパリでは全く見かけませんし、人々は皆、一時の楽しみを大事にしているような気がしました。美しいサンポール教会は今まさに旬の季節です。私も行ってきましたが、イギリスの聖バルトロマイ教会よりずっといいと思いました。周りにはきれいに店が並び、灯りもともされて、本当に見ていても良い眺めです。ただ、私はフランスの道化師には感心しませんでしたし、同じことはオペラについても言えます。イタリアでかつてあったような、ひどい舞台なのです。パリのオペラハウスは、ロンドンのヘイマーケットに比べたら小屋としか思えないし、こちらの劇場も、リンカーン・イン・フィールドほどきれいではありませんでした²⁰⁴。フランス人の名誉のため

²⁰⁴ 1705年完成のヘイマーケットはロンドンのオペラハウス。リンカーン・イン・フィールド

めに言いますと、悲劇だけはイギリスよりもずっと立派です。オールドフィールド夫人²⁰⁵がこちらの女優のラ・デスマーレと張り合うなど、到底考えられません。私はバジャゼ²⁰⁶を見たのですが、大変良い出来でした。イギリスの俳優たちは台詞を言うことしかできませんが、フランスの俳優は実際に感じることができると言います。見ている側も、俳優がとても不幸な様子をしているので、ずっと心を動かされます。特に、不幸だといいいながら、どこかにやにや笑っているような愚かな俳優を見るよりは。ところで、フランスの女性たちの顔について少しお話ししましょう。私はかなり美人と言われる人たちにも会いましたが、あの（どうしたって汚い言葉を使わずにいられません）吐き気がするような、愚かな衣装の数々！その上、恐ろしく不自然に顔を塗りたくり、髪の毛は短くして顔にかかるあたりで巻き毛にしています。その巻き毛を白っぽい粉で固めているので、まるで羊の毛のようなのです。頬には、燃えるように赤い紅をこすりつけています。このように、女性たちはまるで人間とは思えない様子をしていました。そこで私は、女性たちがあの赤い印がつけられた羊たちを見て、こんな流行を作り出したのではないかと思ってしまいました。そんな時、祖国の美しい女性たちを思うと、私の心もだいぶ慰められます。もし誰かにそれを伝える必要があるなら、私はきつとこう書くでしょう。あれほど異様に作りこんだ顔立ちよりも、リッチ夫人のとび色の髪や、生き生きとして自然なお顔のほうがずっと魅力的です、と。

私はこちらでアベ・コンティ氏にお会いしました。氏からもあなたによろしくとのことでした。

56. アン・ティスレスウェイト様

1718年10月16日 パリにて

ご覧のように、パリからあなたに手紙を送るという約束通り、私は今こうしてその手紙を書いています。私はパリで妹に会い、とても驚きました。もちろん大変嬉しかったのは言うまでもありません。妹も、私からの手紙など受け取るはずもなく、私同様会うことなど予想もしていなかったのです。ちょうど作家のスカデリー氏²⁰⁷が表現した如しの再会でした。でも、氏と同じような調子で、私たちがどれほど再会を喜びあったか、どんな様子で、妹は私がコンスタンティノーブルからパリへ来た理由を尋ねたか、などくどくど語らないことにしましょう。もちろん、私も妹にいったい何故パリに来ることになったのか尋ねました。簡単に言うと、お互いにこれまでのことを話したり必要なことを質問し合ったりしてから、一緒にパリを見て回ることに決めたわけです。私たちは、ヴェルサイユ宮殿、トリアノン、マレー、シャクルーなどを訪れました。

も 1714 年にできたばかりの劇場である。

²⁰⁵ Ann Oldfield(1683-1730) イギリスの女優。

²⁰⁶ ラシーヌ(Jean Baptiste Racine, 1639-99. フランスの悲劇詩人)作の悲劇。

²⁰⁷ George de Scudery(1601-90) 劇作家。

私たちは、特別な命によって噴水を出させることができましたので、パリ中のイギリス人が皆一緒に見学に来てしまいました。実のところ、ヴェルサイユ宮殿は、私は美しいというより巨大だとしか感じられませんでした。あれほど均整の取れた立派なイタリア建築を見てしまうと、ずいぶん非対称な建物のように見えるのです。勲章や宝石などが飾られている王様の棚は、本当に豪華なものでした。中でも、ジュリアス・シーザーを称えた大きなめのうの勲章に、私は1番感心しました。私が見た数ある勲章の中でも、相当繊細に彫られているものだと思います。いくつか値打ちのある古代の彫像も見ましたが、ルブラン²⁰⁸の筆による派手でけばけばしい絵が廊下にかけてあり、本当にぞっとするような感じでした。他にも、豪華な部屋や数多くの噴水、劇場、イソップの銅像などさまざまなものがありました。これらについてはフランス人たちがずいぶん詳細な描写をしていましたから、あなたも十分にお読みになったのではないのでしょうか？ トリアノンにはヴェルサイユと同じようで、マレーのほうは少し良く、シャクルーが見た中では1番私の気に入りました。たぶん、宮殿の庭の近くをセーヌ川が流れているからでしょう。もしも、宮殿にある彫像や噴水の数を正確にお知りになりたければ、さっきもお話したような本に書いてあると思います。私たちは、デュック・ダンタン公爵²⁰⁹のお宅で、大変豪華に飾られている王様所有の絵画を見学しました。氏は、陛下がお育ちになるまでの間、預かっているのだそうです。数は多くありませんが、どれも一流のものでした。私はラファエロの大天使の絵がとても良いと思いましたが、そこにはミルトンが表現したような賢者の感情がよく表れていました。たぶん、そろそろチュイルリー庭園のことを話さなければいけませんね。確かにこの庭園は、セーヌ河川敷の散歩道よりもずっと素晴らしく、ロンドンのハイド・パークよりもきれいでした。真夏でも木々がうっそうと茂り、十分な木陰もできます。ルーヴル宮殿で、私たちは摂政と共に王様にお会いする機会を得ました。王様は顔立ちのきれいな立派な若者でしたが、おじい様ほど長く位についていけないのではないかしら、と私は思ったのです²¹⁰。宮廷についてお話していたら、あることを思い出しました。私はこのフランスで、完璧なイギリス人(少なくともグレート・ブリテン人)に出会ってこの上なく嬉しく思いました。つまり、ロー氏²¹¹のことなのですが、ロー氏はフランス人の貴族たちを丁重に扱い、フランス人たちから限らない尊敬と従属の念を抱かれています。かわいそうな人たち！これほどまでにへりくだり、従属している人々の様子を眺めると、私は逆にルイ 14 世の勝利の銅像を思い出します。でも、こんな人々はあまりにも多いので、いちいちご説明してあなたのお時間を奪うのはやめにしましょう。一般的に、パリにはロンドンと同じようないくつかの利点があると思います。例えば通りのきれいさ、夜にきちんと灯りがともされること、家が石造りであ

²⁰⁸ Charles Le Brun(1619-90) フランスの画家。

²⁰⁹ Duc D'antoin, 1716 年から王立美術館の館長を務めていた。

²¹⁰ ルイ 15 世(在位 1715-74)のこと。祖父がルイ 14 世。

²¹¹ John Law(1671-1729) スコットランド人。東インド株式会社関連の監査役。

ること、上流階級の人々の家に美しい庭があることなどです。しかし、私たちの街のほうが2倍は大きいことを、私たちは大いに誇りに思えるでしょう。そう言うてしまうと、もうこれ以上パリについて語ることもありませんね。このへんで手紙をおしまいにしましょう。もし私がここにいる間に何かお使いがあれば、滞在期間も短いので早めにお手紙を下さい。あなたのお言いつけを受けるのは、大変嬉しいことですから。

57. アベ・コンティ様、

1718年10月31日 ドーヴァーにて

私は、あなたのおっしゃった通りに、無事に海を渡ったことをすぐにお知らせできて嬉しく思います。私たちは、今朝ドーヴァーに到着したのですが、きのうの夜は小さな船で一晩中ひどく揺さぶられました。船長は、船があまり頑丈でないと思ったのか、鎖かたびらを取った方がよいと言いましたし、私たちにも危険のあることを知らせてくれました。私たちは小さな漁船を呼びにやりましたが、その船と云ったら、私たちがやっと乗れるようなものだったのです。私たちが乗り込むときには、人々は皆天に祈りを捧げており、これほどひどい光景など想像できないくらい恐ろしい晩でした。もちろん私だって溺れるのは嫌でしたが、そんな中である1人の乗客の苦しみを和らげようと努力したことなど、お話ししたら信じてもらえるでしょうか？彼女は、カレーで知り合ったイギリス人女性でした。私の船室で一緒に旅をしたいと言ったので、船で私と一緒にいたのです。彼女は、お付きの者たちから姿を隠そうと、とても大きくて立派なレースのボンネットを持ってきていました。風が強く吹いて私たちの船が岩にぶつかると、彼女は周りなど見えないかの様子で、地に伏して祈りを捧げていました。嵐がおさまってきた時、彼女は自分のボンネットを気にしながら、私に向かってこう言うのです。「ねえ、ちゃんとしているか見てくださいますか？もしボンネットがなくなってしまうたら・・・ああ、神様！そんなことになったらみんなおしまい！神様、どうか私を哀れと思ってくださいますか。あなたも祈ってちょうだい、ボンネットがどうか無事でありますようにと！」彼女は、ボンネットと自分の命をなくすかもしれないという二重の苦しみにあって、いったいどちらが重要なのか分からなくなったのでしょうか。しかし、その時は面白いどころではなく、私は船室から小さな船に移ったときはほんとに安心さえました。もちろん、小さな船では首の骨を折る危険もあるのですが、私たちを無事にドーヴァーまで運んでくれたのでした。私は祖国を改めて眺めて、やはり祖国をひいき目で見ざるを得ません。そんな見方は、私たちの持ち得ない知識に対する限りない憧れがあると同時に、放浪しないために誰もが与えられている生まれつきのものなのでしょう。私たちが苦勞して手にしているものは、世界のさまざまな場所のそれぞれ相容れない便利さや喜びをごちゃまぜにした、不毛な感情です。母国語で実にたくさんの本を読み、真夜中に勉強をして目を悪くしてしまった私は、時折乳搾りの娘たちをうらやましく思います。彼女たちは余計な疑いなど抱かず、毎日曜日は教会へ通いますね。無駄な教育によっ

て、労働の義務などについて考え込むこともありません。もちろん私ももっと教養を身につけることはできるのですが、結局無知な私であり続けなければならないのです。アジアの一部とアフリカ、ヨーロッパを一回りしてみても思うことですが、こんなイギリス人は幸せです。例えば、ギリシャワインなどマーチ・ビール²¹²ほどおいしくないだろう、アフリカの果物だってこのりんごほど熟れてはいないだろう、イタリアの鶏肉だってロースト・ビーフにはかなわない、とまっているような紳士はこの上なく幸せだと思うのです。つまり、古き良きイングランドの外には、これほど完璧な人生の喜びはありません。私は、この先ずっとこの気持ちを持ちつづけられるよう、神に祈ります。ですから、私はわずかな日の光で満足しなければなりませんし、あのさんさんと降り注ぐコンスタンティノーブルのお日様を忘れてしまわなければいけないのです。

58. アレクサンダー・ポープ様

1718年11月1日 ドーヴァーにて

たった今、あなたが私に送ってくださったお手紙がパリから届きました。おそらく、間もなくあなたやコングリーヴ氏にお会いできることと思います。が、ロンドンへ入る日程や、荷物などのために、ここドーヴァーに留まっているわけなのです。あなたへのお手紙にはお返事を書いたほうがいいのでは、と思い、あいた時間にこうして手紙を書いて楽しんでます。

あなたの送ってくださった詩、大変面白く拝見しました。もしも稲妻が田舎の恋人たち（俗に、ヘイメーカー・干し草を刈る人々、と言われてますね。）の邪魔をしなかったら、二人は永遠に幸福なままでいられたのに、というくだりに表れているあなたのセンス、とても感心しました。ジョン・ヒューとサラ・ドリュウが隣人に比べて立派な人たちであった、と想像する根拠はどこにもないことも分かります²¹³。25歳の大変立派な紳士が18歳の日に焼けた少女に求婚する話など、あり得そうにないと感じてしまいます。もし本当に結婚したなら、周りの教区民の目に縛られたまま生活することになったでしょうね。彼が嵐から彼女を守ろうとするのは、ごく自然に起こる行動だと思います。同じ状況だったら、自分の馬のためだとしてもそんなふうに動くでしょう。私は、彼らの死がその人たちの美德に対する報いだとは思っていません。ご存知のように、たとえ雷から逃れてももっとひどい火事で破壊される村だってあるといって、ユダヤ人たちが咎められました。時間と機会は、どんな人にも与えられるのです。あなたは私に、この恋人たちのお墓の碑文を書いてみてください、とおっしゃいましたね。私は次のように考えましたが、あなたの書いたものほど詩的ではなくて残念です。

ここに眠るは ジョー・ヒューとサラ・ドリュウ
皆は尋ねる いったい誰なのだろうと

²¹² 3月に作られる苦いビール。

²¹³ ポープの送ってきた詩の登場人物。稲妻に打たれて死ぬ。

どうか 聞いておくれよ
哀れな 恋人同士なのだ
次の日曜には 結婚するはずだった
でもごらん こんなことになった
木曜日には 雨が降り 雷が鳴った
か弱い恋人同士は 怯えあがった
積んだ干し草の中に 隠れよう
嵐が去るまで 待っていよう
だが凶暴な嵐は 2人を見つけ出した
(2人の命を取るように 言われていたのだ)
震える2人の命を 捕まえて
2人を死に神に 引き渡す
どれほどつらかったか 神のみぞ知る
打ちひしがれた女と その恋人は
結婚という 鎖を呪うだろう
しかし2人には 平和が訪れた
ポープが2人の詩を 石に刻んだから

正直に言って、あなたの書いてくださったものほど良くはありません。でも、どうか最後の2行分で、この不出来な碑文をお許してくださいね。ご覧のように、あなたが2人に与えた名誉を私は重んじているのです。あなたのようにはなれませんが、ヨーロッパ中の作家から称えられるよりも、あなたのそばにお仕えする愚かな私でいるほうがずっと良いのです。

コングリーヴ氏にも手紙を書くつもりでしたが、氏が私のことを尋ねたら、この手紙を読んであげてください。